

# 京都府遺跡調査報告書

第 6 冊

太 田 遺 跡

1 9 8 6

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

昭和 56 年 4 月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく 6 年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。私たちは、こうした目的に向かって、鋭意努力いたしておりますが、ともすれば牛歩になりがちです。しかし、一步一步地味ながら着実に進んでいきたいと考えています。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、この報告の太田遺跡も国道 9 号バイパス建設工事に伴う事前調査であります。現地調査は、すでに 4 年前に終了しておりますが、9 号バイパス建設に伴う一連の発掘調査事業の一応の区切りの下に、整理し、報告書としてまとめたものであります。

当センターとしては、『京都府遺跡調査報告書』は、遺跡の重要性を理解していただくために、また、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものと位置づけています。この報告書のほか、調査結果を掲載した『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでには、開発関係者はもちろんのこと、京都府教育委員会・各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力と、さらに炎暑の下、熱心に作業に従事していただいた多くの方がたの御協力、御努力があります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和 61 年 12 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 福 山 敏 男

## 例 言

1. 本書は、京都府亀岡市稗田野町太田に所在する太田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 太田遺跡の発掘調査は、国道9号バイパス建設に伴って、建設省近畿地方建設局の依頼を受け、昭和57年5月6日から同年10月30日まで実施した。
3. 発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克、同調査員村尾政人・田代 弘・岡崎研一が担当して行った。
4. 検出遺構図及び出土遺物の整理作業は、発掘調査終了後、国道9号バイパス吉川整理事務所で行い、出土遺物の整理・実測は、主に村尾政人・田代 弘・岡崎研一・村山一弥・石原俊子・田中智子・並河智実が行った。
5. 本書に掲載した写真は、遺構は主に田代 弘・岡崎研一・村尾政人が撮影し、遺物写真は高橋猪之介氏に、空中写真は株式会社アジア航測にそれぞれ委託した。
6. 本書の執筆は、はじめにを水谷寿克が、第1章、第2章、第3章第1節・第3節・第4節、第4章を村尾政人が、第3章第2節を田代 弘が、第4章を伊辻忠司がそれぞれ分担した。編集は、劉 和子・吉井雅代・寺内あゆみの三氏の協力を得て土橋 誠が行った。

# 本文目次

はじめに	1
第1章 遺跡と調査経過	2
第1節 位置と環境	2
第2節 調査方法と基本層序	9
第2章 検出遺構	12
第1節 弥生時代前・中期の遺構	12
第2節 古墳時代の遺構	42
第3章 遺物	43
第1節 土器	43
第2節 石器	109
第3節 木器	156
第4節 その他の遺物	168
第4章 むすび	171
第5章 花粉分析	177

## 挿 図 目 次

第 1 図	調査地位置図	2
第 2 図	亀岡盆地遺跡分布図	3
第 3 図	亀岡盆地の縄文・弥生時代の遺跡分布図	4
第 4 図	調査地区割図	10
第 5 図	調査区土層断面図	11
第 6 図	太田遺跡遺構平面図	13
第 7 図	K地区遺構平面図	15
第 8 図	J地区遺構平面図	17
第 9 図	J地区遺構平面図	18
第 10 図	J地区遺構平面図	19
第 11 図	土壇 SK 01・03・05・06・07・09・21 平面・断面図	24
第 12 図	土壇 SK 02・10・37・43・122・123 平面・断面図	25
第 13 図	土壇 SK 35・38・121・147・150・153 平面・断面図	26
第 14 図	土壇 SK 20・36・129・130・138 平面・断面図	27
第 15 図	土壇 SK 90・100・125・126・140・149・151 平面・断面図	28
第 16 図	土壇 SK 131・134・139・145・250 平面・断面図	29
第 17 図	土壇 SK 107・135・136・148・154・240 平面・断面図	30
第 18 図	土壇 SK 04・08・124・157・160・206 平面・断面図	31
第 19 図	土壇 SK 155・203・204・205 平面・断面図	32
第 20 図	溝 SD 0201 平面図	33
第 21 図	溝 SD 0201 断面図	34
第 22 図	溝 SD 0205 断面図	34
第 23 図	溝 SD 0205・0209 平面図	36
第 24 図	溝 SD 0207 断面図	37
第 25 図	溝 SD 0207・0226 断面図	38
第 26 図	溝 SD 0208 断面図	39
第 27 図	溝 SD 0209 断面図	40
第 28 図	溝 SD 0201・0205・0207・0208 断面図	41
第 29 図	太田遺跡出土土器分類図(1)	43

第 30 図	太田遺跡出土土器分類図(2)……………	44
第 31 図	太田遺跡出土土器分類図(3)……………	47
第 32 図	太田遺跡出土土器分類図(4)……………	48
第 33 図	土塚 SK 204 出土土器……………	53
第 34 図	土塚出土土器拓影 (壺口縁部・体部)……………	54
第 35 図	土塚出土土器拓影 (壺体部, 甕口縁部・体部)……………	55
第 36 図	土塚出土土器 (壺口縁部・体部, 蓋)……………	56
第 37 図	土塚出土土器 (甕口縁部・体部・底部)……………	57
第 38 図	土塚出土土器 (甕口縁部・底部)……………	58
第 39 図	土塚出土土器 (鉢)……………	59
第 40 図	溝 SD 0201 出土土器 (壺, 甕)……………	67
第 41 図	溝 SD 0205 出土土器 (壺, 甕, 蓋)……………	68
第 42 図	溝 SD 0205 出土土器拓影 (壺口縁部・体部, 甕口縁部)……………	69
第 43 図	溝 SD 0207 出土土器 (壺口縁部・体部・底部)……………	70
第 44 図	溝 SD 0207 出土土器 (壺口縁部・体部)……………	71
第 45 図	溝 SD 0207 出土土器 (壺口縁部・体部)……………	72
第 46 図	溝 SD 0207 出土土器 (無頸壺, 蓋)……………	73
第 47 図	溝 SD 0207 出土土器……………	74
第 48 図	溝 SD 0207 出土土器拓影 (壺口縁部)……………	75
第 49 図	溝 SD 0207 出土土器拓影 (壺体部)……………	76
第 50 図	溝 SD 0207 出土土器拓影 (壺体部)……………	77
第 51 図	溝 SD 0207 出土土器拓影 (甕口縁部)……………	78
第 52 図	溝 SD 0207 出土土器 (甕口縁部)……………	79
第 53 図	溝 SD 0207 出土土器 (甕口縁部)……………	80
第 54 図	溝 SD 0207 出土土器 (甕, 鉢)……………	81
第 55 図	溝 SD 0207 出土土器 (甕底部)……………	82
第 56 図	溝 SD 0207 出土土器 (甕口縁部・底部)……………	83
第 57 図	溝 SD 0208 出土土器 (壺口縁部・体部・底部)……………	84
第 58 図	溝 SD 0208 出土土器 (壺口縁部・体部・底部)……………	85
第 59 図	溝 SD 0208 出土土器 (壺口縁部・体部, 鉢口縁部・底部)……………	86
第 60 図	溝 SD 0208 出土土器拓影 (壺口縁部・体部, 甕口縁部)……………	87
第 61 図	溝 SD 0208 出土土器 (甕口縁部, 蓋)……………	88

第 62 図	溝 SD 0209・0210 出土土器拓影 (壺口縁部・体部, 甕口縁部)……………	89
第 63 図	包含層出土土器 (壺口縁部・体部)……………	93
第 64 図	包含層出土土器 (壺口縁部・体部)……………	94
第 65 図	包含層出土土器 (壺口縁部)……………	95
第 66 図	包含層出土土器 (壺体部)……………	96
第 67 図	包含層出土土器 (壺体部)……………	97
第 68 図	包含層出土土器 (壺)……………	98
第 69 図	包含層出土土器 (甕口縁部)……………	99
第 70 図	包含層出土土器 (甕口縁部)……………	100
第 71 図	包含層出土土器 (甕口縁部, 鉢口縁部・底部)……………	101
第 72 図	包含層出土土器 (甕口縁部・底部)……………	102
第 73 図	包含層出土土器 (壺体部, 甕口縁部・体部・把手)……………	103
第 74 図	包含層出土土器 (蓋底部)……………	104
第 75 図	包含層出土土器 (底部)……………	105
第 76 図	縄文土器・土師器……………	107
第 77 図	須恵器……………	108
第 78 図	石鏃実測図……………	110
第 79 図	石錐実測図……………	112
第 80 図	石匙・削器実測図……………	113
第 81 図	楔形石器実測図……………	114
第 82 図	楔形石器の削片他実測図……………	115
第 83 図	未製品実測図……………	116
第 84 図	敲石類実測図……………	117
第 85 図	敲石・陽物状石製品実測図……………	118
第 86 図	石核実測図……………	119
第 87 図	剥片類……………	120
第 88 図	磨製石鏃・磨製石剣実測図……………	122
第 89 図	石庖丁実測図(1)……………	124
第 90 図	石庖丁実測図(2)……………	125
第 91 図	石庖丁・大型石庖丁・石鎌実測図……………	126
第 92 図	石庖丁未製品実測図(1)……………	128
第 93 図	石庖丁未製品実測図(2)……………	129

第 94 図	小型柱状片刃石斧・小型扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・ 挟入柱状片刃石斧・未製品実測図	132
第 95 図	大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(1)	134
第 96 図	大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(2)	135
第 97 図	大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(3)	136
第 98 図	大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(4)	137
第 99 図	大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(5)	138
第 100 図	有溝剥片	139
第 101 図	転用石器	139
第 102 図	不定形な刃器	140
第 103 図	砥石・石皿状石製品実測図(1)	142
第 104 図	石皿状石製品実測図(2)	143
第 105 図	石皿状石製品実測図(3)	144
第 106 図	木器（鋏）	159
第 107 図	木器（鋏・石斧用柄・用途不明木製品）	160
第 108 図	木器（杵）	161
第 109 図	木器（容器・棒状木製品）	162
第 110 図	棒状木製品	163
第 111 図	棒状・板状木製品	164
第 112 図	板状木製品	165
第 113 図	板状木器	166
第 114 図	板状木製品	167
第 115 図	その他の遺物（編物・櫛・玉類等）	170

## 付 表 目 次

付表 1	亀岡盆地遺跡一覧表	5
付表 2	石鋏の長幅比	111
付表 3	石鋏の長さ・重量・形態	111
付表 4	石器観察表	148
付表 5	花粉分析表	181

## 図 版 目 次

- 図版第 1 太田遺跡周辺航空写真（上が南）
- 図版第 2 (1)土坑 SK 01～10・溝 SD 0109 全景（南西から）  
(2)土坑 SK 139～148 全景（西から）
- 図版第 3 (1)土坑 SK 01～10 近景（西から）  
(2)土坑 SK 90・100 近景（南から）
- 図版第 4 (1)土坑 SK 100 遺物出土状況（南から）  
(2)土坑 SK 203・204（南から）
- 図版第 5 (1)土坑 SK 203 遺物出土状況（南から）  
(2)土坑 SK 204（北から）
- 図版第 6 (1)溝 SD 0207・0208 全景（南から）  
(2)溝 SD 0201・0205・0209 全景（南から）
- 図版第 7 (1)溝 SD 0208 遺物出土状況（北から）  
(2)溝 SD 0208 遺物出土状況（西から）
- 図版第 8 (1)溝 SD 0211・0212・0213 全景（北西から）  
(2)足跡検出状況（西から）
- 図版第 9 (1)溝 SD 0207 断面（KP 地区，西から）  
(2)溝 SD 0208 内石庖丁出土状況（北から）
- 図版第 10 弥生土器（壺形土器）
- 図版第 11 弥生土器（蓋・甕・鉢形土器）
- 図版第 12 弥生土器（蓋・甕形土器）
- 図版第 13 弥生土器・口縁部文様（各種）
- 図版第 14 弥生土器・口縁部文様（各種）
- 図版第 15 弥生土器（前期）・突帯文様（各種）
- 図版第 16 弥生土器・頸部文様（各種）
- 図版第 17 弥生土器（前期末～中期初頭）・流水文様（各種）
- 図版第 18 弥生土器（前期末～中期初頭）・櫛描文（各種）
- 図版第 19 弥生土器（甕形土器）
- 図版第 20 縄文・弥生・擬朝鮮系無文土器
- 図版第 21 須恵器（杯身・杯蓋）

- 図版第 22 石器 (石庖丁)
- 図版第 23 石器 (石庖丁未製品)
- 図版第 24 木器 (鋏)
- 図版第 25 木器 (椀・直柄・用途不明木製品)
- 図版第 26 木器 (杵・棒状木製品)
- 図版第 27 木器 (杭・棒状木製品・板状木製品・有頭棒)
- 図版第 28 木器 (板状木製品)
- 図版第 29 花粉の顕微鏡写真(1)
- 図版第 30 花粉の顕微鏡写真(2)
- 図版第 31 花粉の顕微鏡写真(3)
- 図版第 32 花粉の顕微鏡写真(4)

## 太田遺跡発掘調査報告

### はじめに

太田遺跡は、亀岡市篠田野町太田に所在し、亀岡盆地のほぼ中央に位置する。太田遺跡を中心とする盆地部には、碁盤目状の方格地割畦畔が整然と残っており、条里制遺構として古くから知られていた。

太田遺跡の調査は、昭和51年度から始まる国道9号バイパス予定路線帯の事前調査の継続事業の一環として行われたもので、条里制遺構の確認から始めた。

この調査では、亀岡盆地に広がる条里制遺構の検出を目的としたが、南金岐遺跡での弥生時代の方形周溝墓や溝状遺構等の検出などから、条里制下層遺構の有無にも留意し、発掘を実施した。調査の結果、条里制に関する明確な遺構を検出できなかったが、条里制以前のものとして弥生時代の土壇や溝などを検出し、壺・甕等の土器や石器、木器が多量に出土した。

以上の調査をふまえ、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所・京都府教育委員会と協議を行った。その結果、同年7月9日付けで変更契約を締結し、約2,000㎡を弥生時代前期の太田遺跡として調査することに決定した。そこで、当調査研究センターは、周到な準備を行うとともに、調査に伴う組織を次のとおり決定した。

発掘調査総括責任者	栗栖幸雄（事務局長）
発掘調査責任者	堤圭三郎（調査課長）
発掘調査担当者	水谷寿克（主任調査員）
	村尾政人（調査員）
	田代弘（調査員）
	岡崎研一（調査員）
発掘調査事務責任者	白塚弘（総務課長）

なお、調査中及び本書の執筆にあたっては次の人々から御教示を賜った。記して謝意を表したい（敬称略・順不同）。

有光教一、佐原真、都出比呂志、岡内三真、西谷正、高橋護、後藤直、泉拓良、井藤暁子、森田克行、入江文敏、田中光浩、林和廣、森岡秀人、永光尚、宮本徳昭、吾郷信一、横田洋三、豊岡卓之

（水谷寿克）

# 第1章 遺跡と調査経過

## 第1節 位置と環境

### 1 地理的環境

亀岡盆地は、京都府北部から兵庫県西部にまたがる中国山地の東端にあつて、南側で北摂山地と隣接する、いわゆる丹波山地の中に位置する。古くは丹波国に属し、山陰8か国の東端にある。また、丹波山地は、日本海に注ぐ由良川水系と瀬戸内海に注ぐ大堰川、加古川の水系によって開かれる。大堰川は、北西から南東方向に、亀岡盆地のほぼ中央を南へ流れている。この盆地は、標高90～110mに位置する。周囲の山塊は、丹波帯と呼ばれる秩父古生層からなり、砂岩・頁岩などで構成されており、一部に石英閃緑岩・花崗岩類が分布する。亀岡地方は、古生層を基盤とするが、盆地西側では中生代末期に貫入した花崗岩の岩体が分布する構造盆地で、断層を主とする構造運動により形成されている。盆地東端の北西から南東に続く山地と平地の境界は、亀岡断層である。南西に面する直線状の崖では断層が明瞭であるが、調査地の位置する盆地西端ではあまり見られない。地形的には、北西から南東方向に行者山が並び、神前から鹿谷にかけて窪地が見られる。

太田遺跡は、亀岡盆地のほぼ中央に位置し、北寄りの山地部を除いては平地にある。この地は、扇状地で、背後の行者山から大堰川へ注ぐ願常寺川に流れた粘性土層や砂、砂混

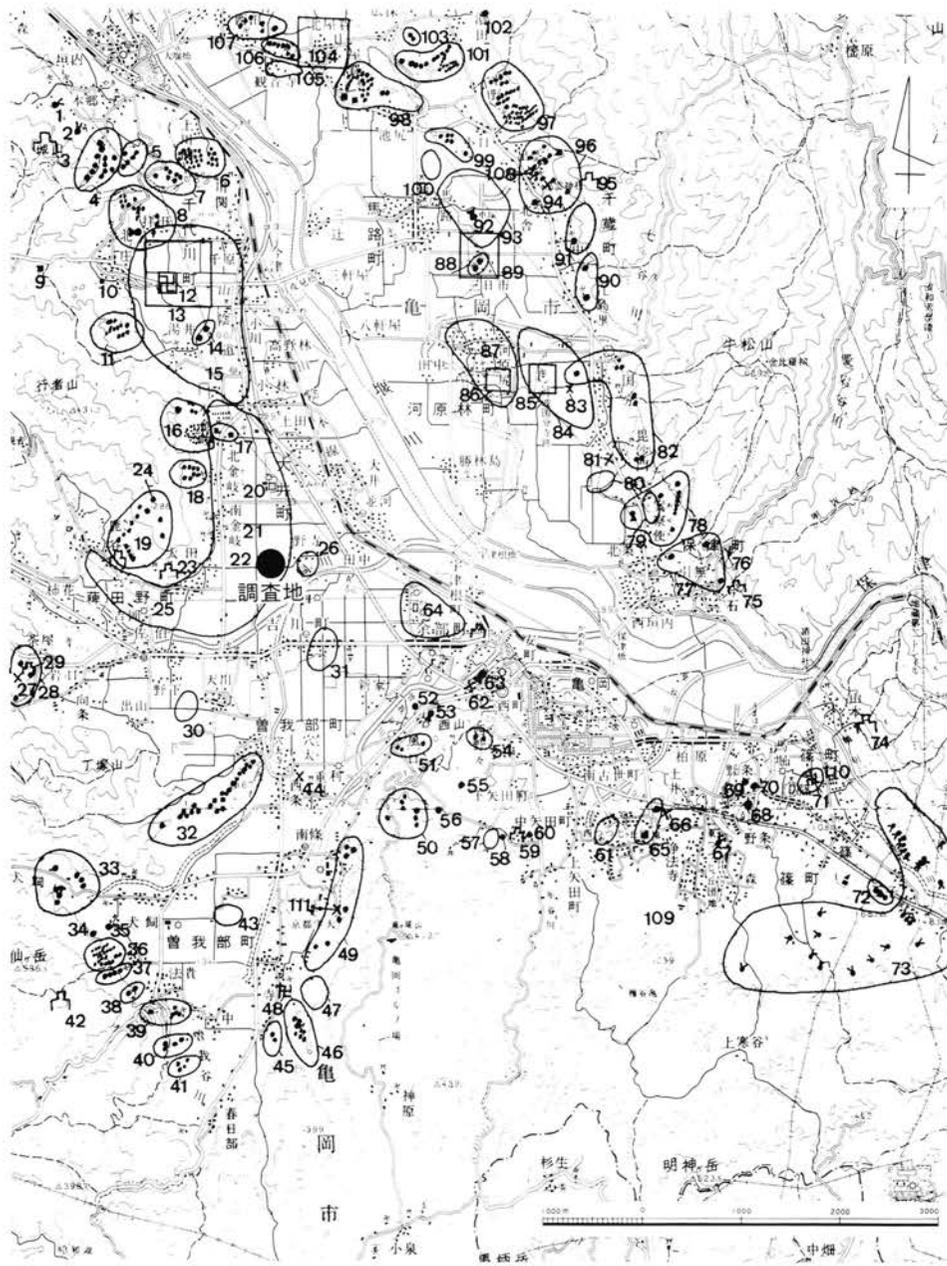


第1図 調査地位置図

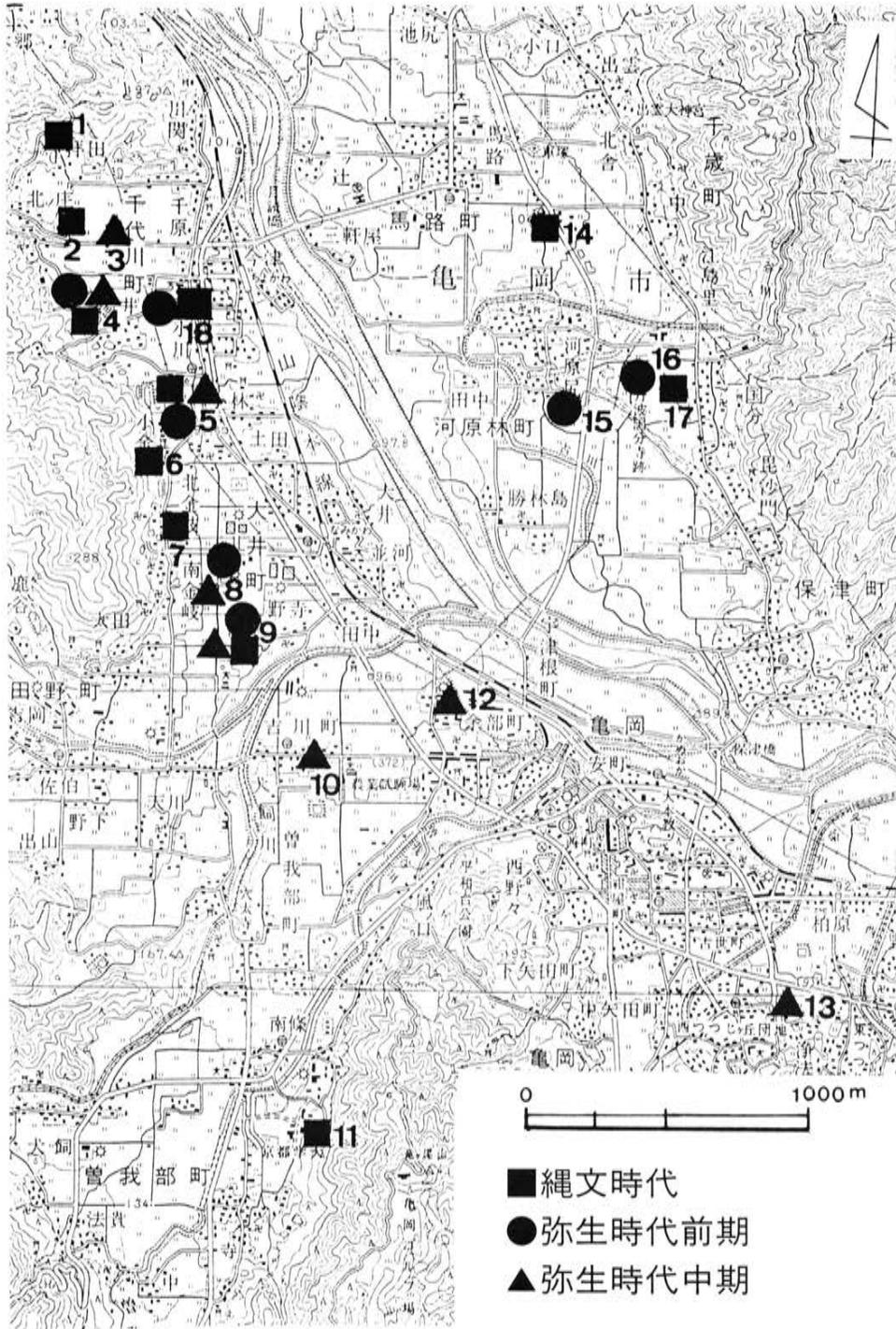
じりシルト及び腐植土が堆積している。また、洪積層は、浸食が進んで小谷が多い。低台地をなす新期洪積層は、数段の段丘地形になっている。調査地もこの扇状地上にあつて、犬飼川・山内川と願常寺川及び行者山から放射状に流れる小河川の浸食で残った舌状微高地上に位置する。

### 2 歴史的環境

亀岡盆地で最も古い時代の遺跡としては、旧石器時代の石器が出土した南条遺跡と篠町西長尾A地点遺跡がある。南条遺跡出土のものは、サヌカイト製のナイフ型石器で、全長約10cm・幅約



第 2 図 亀岡盆地遺跡分布図



第3図 亀岡盆地の縄文・弥生時代の遺跡分布図

付表1 亀岡盆地遺跡一覧表

番号	名称	種類	遺跡の概要	番号	名称	種類	遺跡の概要
1	堂山窯跡	窯跡	平安時代・須恵器	57	医王谷遺跡	散布地	須恵器
2	小谷窯跡	窯跡	平安時代・須恵器	58	医王谷古墳	円墳	須恵器
3	小木城跡	城跡		59	矢田城	城跡	丘陵頂・土塁
4	小谷古墳群	円墳	12基・横穴式石室	60	君塚古墳	円墳?	台地・石材露出
5	内山古墳群	円墳	5基・横穴式石室	61	ツツジヶ丘古墳	円墳?	台地
6	上川関古墳群	円墳	32基・横穴式石室	62	伊達神社遺跡	散布地	土師器
7	大法寺古墳群	円墳	8基・横穴式石室	63	加塚古墳	前方後円墳	台地・全長60m
8	拝田古墳群	前方後円・円墳	16基・横穴式石室	64	余部遺跡	散布地	弥生中期～
9	北ノ庄古墳	方墳		65	浄法寺古墳	円墳	粘土槨木棺
10	矢ノ尾谷遺跡	円墳	中世・土壇	66	浄法寺遺跡	散布地	弥生時代・石器
11	北ノ庄古墳群	円墳	14基・横穴式石室	67	村上神社窯跡	窯跡	須恵器
12	桑寺庵寺跡	寺院	奈良時代	68	柗塚古墳	方墳	平地・埴輪
13	丹波国府跡	官衙		69	野条古墳	前方後円墳	平地・後円部27m
14	丸塚・西丸塚古墳	円墳?	横穴式石室・埴輪	70	瀧ノ花塚古墳	方墳	平地・一辺30m
15	千代川遺跡	散布地	縄文～鎌倉時代	71	観音芝庵寺跡	寺院	台地・礎石
16	小金岐古墳群	円墳	約100基・横穴式石室	72	三ツ塚古墳群	円墳	丘陵頂
17	馬ヶ崎古墳	方墳		73	篠窯跡群	窯跡	奈良～平安時代
18	北金岐古墳群	円墳	8基・横穴式石室	74	山本城跡	城跡	木村駿河守の居城
19	鹿谷古墳群	円墳	13基・横穴式石室	75	保津城跡	城跡	平山城
20	北金岐遺跡	散布地	縄文～鎌倉時代	76	引無窯跡	窯跡	平安時代
21	南金岐遺跡	"	"	77	案察使古墳群	円墳	3基・横穴式石室
22	太田遺跡	"	"	78	案察使古墳群	前方後円・円墳	10基・横穴式石室
23	太田城跡	城跡		79	案察使遺跡	散布地	弥生～古墳
24	東谷遺跡	単独出土地	弥生時代	80	桜久保遺跡	散布地	須恵器
25	鹿谷遺跡	散布地	弥生～鎌倉時代	81	平松遺跡	散布地	台地・須恵器
26	野寺庵寺	寺院		82	国分古墳群	円墳	8基・横穴式石室
27	佐伯遺跡	散布地	平安時代	83	蔵垣内遺跡	散布地	定角式磨製石斧
28	佐伯古墳群	円墳	3基・横穴式石室	84	国分遺跡	散布地	弥生前期～鎌倉
29	丸山城	城跡	山内丹波守の居城	85	丹波国分寺跡	寺院	奈良時代
30	野下遺跡	散布地	中世	86	御上人林庵寺跡	寺院	丹波国分尼寺跡
31	穴川遺跡	土壇・溝	弥生中期～鎌倉	87	御上人林遺跡	散布地	弥生時代～
32	穴太古墳群	前方後円・円墳	23基・横穴式石室	88	三日市古墳群	円墳	平地・径15m
33	大飼古墳群	円墳	8基・横穴式石室	89	三日市庵寺跡	寺院	平地
34	大飼古墳	円墳	1基・横穴式石室	90	中村古墳群	円墳	山腹
35	上条古墳	円墳	平地	91	金光寺古墳群	円墳	山腹
36	法貴古墳	円墳	33基・横穴式石室	92	千歳車塚古墳	前方後円墳	全長80m
37	法貴古墳	円墳	4基・横穴式石室	93	車塚遺跡	散布地	弥生時代～
38	法貴38、39号墳	円墳	2基・横穴式石室	94	出雲神社遺跡	単独出土地	台地・弥生時代～
39	法貴峠古墳群	円墳	5基・横穴式石室	95	御影山城	城跡	内藤氏の居城
40	中古墳群	円墳	4基・横穴式石室	96	出雲古墳群	円墳	10基・横穴式石室
41	春日部古墳群	円墳	4基・横穴式石室	97	平野古墳群	円墳	46基・横穴式石室
42	法貴山城	城跡	酒井三河守の居城	98	坊主塚古墳	方墳	平地・一辺34m
43	金生寺遺跡	散布地	須恵器・土師器	99	稲葉山古墳	円墳	6基・山腹
44	穴太遺跡	散布地	須恵器・土師器	100	時塚遺跡	散布地	弥生中期～
45	与能古墳群	円墳	3基・山腹	101	池尻古墳	円墳	27基・丘陵腹
46	寺村古墳群	円墳	10基・横穴式石室	102	元明院古墳	円墳	山腹・径13m
47	南条古墳群D	円墳	古墳・古墓	103	広保古墳	円墳	2基・山腹
48	与野庵寺	寺院		104	丹波国府跡		
49	南条古墳群A	円墳	古墳・古墓	105	観音寺遺跡	散布地	古墳時代～
50	龍ノ尾古墳群	円墳	7基・横穴式石室	106	池内古墳群	円墳	7基・山腹
51	風ノ口古墳群	円墳	4基・横穴式石室	107	住吉神社古墳群	円墳	6基・丘陵稜
52	狐塚古墳	円墳?	1基・双円墳?	108	出雲窯跡	窯跡	須恵器
53	西山古墳群	前方後円墳	丘陵端	109	浄法寺城	城跡	渡辺美作守の居城
54	安行山古墳群	円墳	2基・横穴式石室	110	観音芝遺跡	散布地	奈良時代～
55	医王谷2号墳	円墳	1基・横穴式石室	111	南条遺跡	散布地	旧石器・縄文時代
56	医王谷3号墳	円墳	1基・横穴式石室				

5 cm・厚さ約4.6 cmを測る。篠町西長尾A地点出土の石器には、サヌカイト製の有舌尖頭器1点・石鏃3点・スクレーパー1点・剥片5点などがある。また、南条遺跡からは、京都学園大学考古学研究会の構内遺跡第3次調査により縄文時代早期の押型文の可能性を持つ土器片が1点と、ほかに条痕文を施した土器片1点・無茎石鏃1点・サヌカイト製スクレーパー1点・剥片2点・花崗岩のタタキ石1点が出土している。

この盆地内には、ほかに三日市遺跡・北金岐遺跡・千代川遺跡・小金岐古墳群下層・拝田古墳群下層など縄文時代後期から晩期の遺物が出土した遺跡がある。

弥生時代の遺跡は、亀岡市内で25か所確認されている。そのうち、主要なものは千代川町と大井町にまたがる千代川遺跡、それに湯川遺跡・大將軍遺跡・高宮遺跡・馬場ヶ崎遺跡・北金岐遺跡・南金岐遺跡・東谷遺跡・太田遺跡・穴川遺跡・余部遺跡などがあり、そのほとんどが弥生時代中期及び後期から古墳時代にかけての遺跡であると考えられている。また、弥生時代前期の遺跡としては、今回調査した太田遺跡と昭和52年に亀岡市教育委員会が行った御上人林廃寺第3次調査地や、国分寺第2次調査地・千代川遺跡第3・5次調査地・北金岐遺跡・南金岐遺跡などがある。これらの遺跡の立地は、亀岡盆地内の標高100 m前後の段丘上に位置するという共通点があり、弥生時代前期の稲作をもたらした人々の定住が推定される。弥生時代中期の遺跡は、畿内第II様式の太田遺跡・穴川遺跡、第III様式の南金岐遺跡・千代川遺跡第3次調査地などと、第III様式から第IV様式の余部遺跡、第IV様式の千代川遺跡第2次・第6次・第7次調査地・穴川遺跡・時塚遺跡などがある。特に、中期の遺跡としては、拠点集落と推定される千代川遺跡第6次・第7次調査地が目される。ここでは、3基の方形周溝墓を検出し、溝内から多量の遺物が出土しているとともに、住居跡や水田跡も確認されている。ほかに後期の遺跡としては、住居跡を検出した北金岐遺跡・千代川遺跡第2次調査地・河原尻遺跡・国分寺3次調査地、溝状遺構を検出した馬場ヶ崎遺跡、水路状の杭列を検出した松熊遺跡がある。また、特殊な遺跡としては、行者山に立地する稗田野町鹿谷の東谷遺跡がある。この遺跡は、標高340 mの山頂に位置し、約2.5 mの巨石を2個と約1 mの石を数個組んであるもので、岩陰から弥生時代後期の壺形土器が完形で出土している。壺の頸部には、ヘラ描きによる山形文が巡り、胴部下半には、径約2 cmの穴を穿っていることから、祭祀用と考えられる。

古墳時代になると、亀岡盆地には千歳車塚古墳をはじめとして、野条古墳・保津車塚古墳・拝田16号墳・西山古墳・加塚古墳・穴太12号墳・案察使古墳などの前方後円墳や、方墳である瀧ノ花塚古墳・柵塚古墳・穴太4・5・9号墳・天神塚古墳・馬場ヶ崎1・2号墳・北ノ庄古墳などが4・5世紀に築かれる。これらの前方後円墳は、千歳車塚古墳の全長80 mを最大に、以下最小の約35 mまでの規模を持つ。また、方墳は、2基が独立し

て平地に築くという例が、丹波地方の特に綾部・福知山・亀岡盆地に特徴的に多い。ほかにこの地方には、4・5世紀代の主要な古墳が数基あるが、いずれも墳丘の形態は不明である。双方中円墳という説のある狐塚古墳や、平地に築かれた墳丘中央に粘土槨・組合式木棺をもった浄法寺古墳、車輪石・石釧・銅鏃・刀剣・のみ・斧頭・鉄板・甕龍鏡などが出土した向山古墳、直刀・勾玉・管玉・小玉・画文帯神獸鏡が出土した三ツ塚(大塚)古墳がある。以上の古墳は、標高150mまでの丘陵変換点及び、丘陵先端に多く築かれている。古墳時代後期になると丘陵上に多い所で100基近くの群集墳が築かれる。大堰川西岸には、拝田古墳群・北ノ庄古墳群・小金岐古墳群・北金岐古墳群・鹿谷古墳群・佐伯古墳群・穴太古墳群・犬飼古墳群・南条古墳群・法貴古墳群がある。東岸では池尻古墳群・小口古墳群・稲葉山古墳群・出雲古墳群・平野古墳群・国分寺古墳群・案察使古墳群などがあり、京都府下において2番目に多い群集墳地帯である。ほとんどの群集墳は、横穴式石室を主体とするものである。特に石材の豊富な行者山一帯には、花崗岩の巨石を利用したものが多い。また、石材が豊富に利用できる利点があるためなのか、特殊な石室構造が目される。まず、石棚のある石室は、小金岐76・77号墳・拝田16号墳・鹿谷古墳にみえる。石室内の分割利用の施設と考えられるものとしては、石障状の施設があるが、これをもつものに、鹿谷古墳と、拝田9号墳・小金岐1号墳がある。拝田9号墳は、石室の西壁に沿って作り付けの石棺状の板石を配している。小金岐1号墳は、石室内床面全体に板材の石を貼り詰め、その上に板石を「T」型に配し、玄室を3つに区画している。また、この古墳は、石室内床面の貼り石及び基底の石材も板状のものを多く利用し、羨道部の配水溝も床面に貼り石をもち、両側壁、天井石にも板状石を多く利用した丁寧な作りである。

古墳時代の集落遺跡については、昭和52年に亀岡市教育委員会が行った御上人林廃寺の調査において住居跡4基を、また、北金岐遺跡で前期の住居跡1基を、後期の住居跡1基をそれぞれ検出している。さらに千代川遺跡第8次調査地においても、後期の住居跡1基を検出している。千代川遺跡第3次調査地では前期の住居跡2基と、それを囲む溝を検出している。住居跡は、方形の竪穴式住居跡で、一辺約4mと一辺約5mのものがある。溝は、幅約3m・深さ約1.5mを測り、住居区の東・南側を区画するものと、北側を区画する幅約10m・深さ約2mのものがある。北側を区画する溝は、規模が大きく、西側から東側へ蛇行していることから自然流路と推定されている。また、この溝内で、前期の遺物と水路と考えられる杭列・横板等を検出しており、水田への水路とも考えられている。

奈良時代の遺跡としては、河原林町にある丹波国分寺や御上人林廃寺、千代川町の国府推定地・篠町観音芝廃寺・曾我部町寺村与能廃寺・千代川町桑寺廃寺などがあげられる。

亀岡盆地の条里制は、条里界線・坪界線の多少のずれが予測されるが、おおよそ東西南

北方向の正方位に通っており、大堰川を越えても大幅なずれがなく連続しているため、一度に施行されたものと考えがちであるが、水田は、徐々に北から南へと拡大されていったのであろう。盆地全域に条里制が施行される以前には、亀岡市矢田町三宅・保津町保津・保津町案察使・篠町一帯にみられる条里制とは方向を異にした古地割の地域がある。また、奈良・平安時代には、篠町の丘陵一帯に須恵器や瓦などを大量生産した窯跡が多数分布している。さらに、口丹波地方は、平安時代以後、平安京に接する所として重要な位置を占めていたことから中世・近世村落や山城跡に関しても注目すべきところである。

(村尾政人)

参考文献

『亀岡市史』上巻 1960

岡崎研一「篠・西長尾A地区作業場跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第13号(叻京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984. 9

京都学園大学考古学研究会『京都学園大学構内遺跡第3次発掘調査報告』1982

樋口隆久『御上人林廃寺第5次発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1980

田代 弘「北金岐遺跡出土の晩期縄文土器」(『京都考古』34号)1985

村尾政人「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(叻京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982. 3

岡崎研一「千代川遺跡第3次」(『京都府埋蔵文化財情報』第8号(叻京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983. 6

森下 衛「千代川遺跡第9次」(『京都府埋蔵文化財情報』第14号(叻京都府埋蔵文化財調査研究センター)1984. 12

安藤信策「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)1979

堤圭三郎「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』京都府教育委員会)1977

## 第2節 調査方法と基本層序

### 1 調査方法

今回の調査地は、厳密に言えば、昭和56年度に実施した南金岐遺跡に続く一部の地区と、太田遺跡である。発掘調査に先立って実施した条里制に関する地籍図の調査及び現地の測量(1/200)は、昭和56年度の調査手順を踏襲した。その結果、調査地には小字好実根・小字根・草田・深町・砂木原・亀ヶ淵に位置することがわかったが、明確に条里制に関する坪付け等と考えられるものはなかった。

現地調査は、条里制に関する畦畔や水路等の溝の断ち割りや、それ以前の遺跡の有無を確認するためのトレンチを設定することから開始した。調査地の割り付けは、道路予定地の中央を基準に75m四方の大地区を設け、その中を3m四方の小地区に区画し、南西隅の基準杭を中心に南北をアルファベット、東西を数字で表わす地区名を付した。

まず、南北方向の26・34ラインの2本のトレンチの上層を重機により除去した上、その下の弥生～鎌倉時代の遺物包含層を人力で掘削した。

その結果、地山(黄褐色粘土)上に約2cmの黒色土(腐植土)が堆積し、その中に遺物が包含されている事実を確認した。

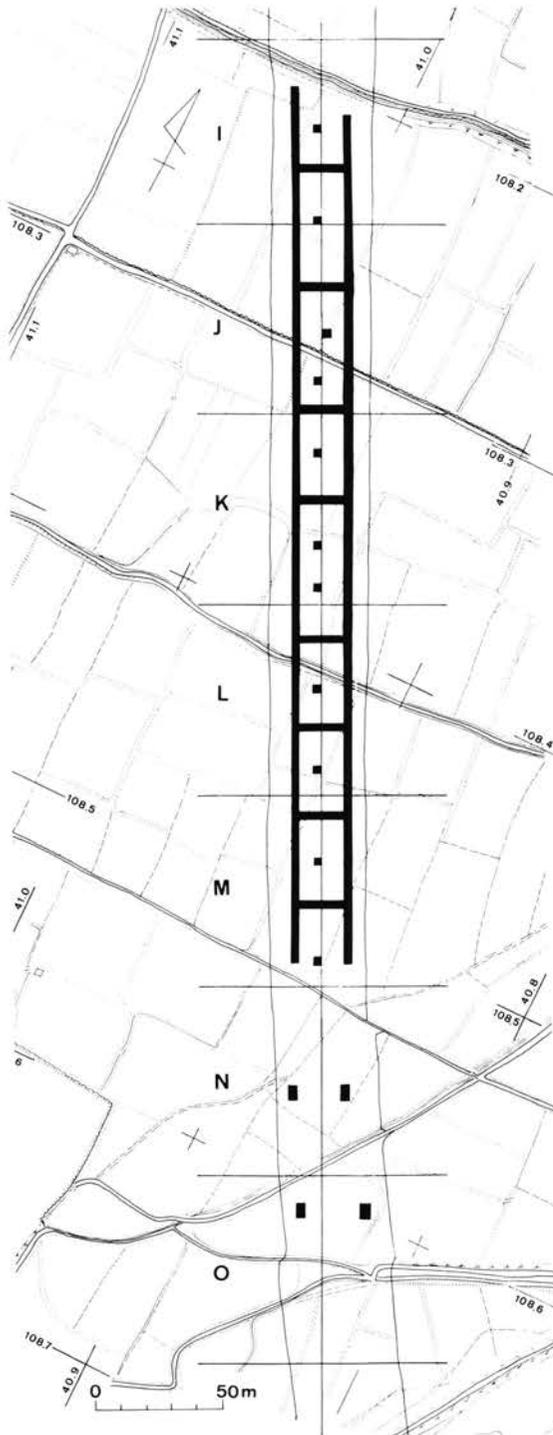
遺構としては、黒色土層の遺物包含層の下の地山面において、溝・土壇・ピット等を検出した。

この遺跡は、弥生～鎌倉時代にかけての複合遺跡であるが、従来の調査で確認されていなかった弥生時代前・中期の遺構・遺物を多数検出した。このような点で、太田遺跡の調査は、大変有意義なものであったと言えよう。

### 2 基本層序

昭和56年度以来、国道9号バイパス建設に伴って大井町から順次発掘調査が本格的に行われ、新たな資料が蓄積されてきた。ただ、昭和56年度は南金岐遺跡において弥生時代後期を中心とする遺構が広範囲に確認されたものの、前期の遺構については確認するまでには至らなかった。しかし、昭和57年度の太田遺跡の調査によって、その確実な資料が増加するに至った。ここでは、南金岐及び太田遺跡の基本層序について、概況を述べておきたい。

現地表は、全体に行者山より北西方向へと低くなっており、さらに放射状に微高地が広がっている。また、微高地間には小河川が谷状地形を形成していたと考えられる。太田遺跡の南北両縁辺は、大堰川に流れ込む河川によって遮られているので、低くなった部分は低湿地帯に、集落部分では段丘になっている。現在は大井町周辺に限らず、盆地全体が水田地帯になっている。



第4図 調査地区割図

この周辺の基盤になっている土層は8層あり、最上位に現在の耕作土層とその床土がある。この層の下位には、第3層の暗灰色土層と第4層の暗茶褐色土層、第5層の黒色土層が堆積している。

暗灰色土層と暗茶褐色土層の面は、中世以降の耕作により幾度か削平が繰り返されたため薄いが、中世の素掘溝や中世以降の建物跡が確認できる。また、暗灰色土層からは、主に土師器・須恵器のほか、鎌倉時代の瓦器・土師皿等が出土する。第4層の暗茶褐色土層の面には古墳時代から奈良・平安時代の遺構や、遺物包含層があり、この層の時期を古墳時代後期以降と判断した。また、暗茶褐色土層から黒色土層に切り込まれた古墳時代の土壇及び溝状遺構を確認しているが、それらの遺構面には浅い砂質土層が含まれていることが多かった。

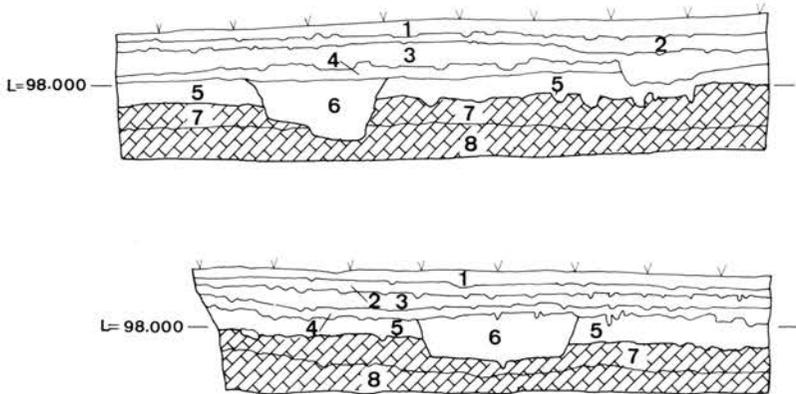
黒色土層は、黒墨土層とも呼ばれる火山灰質土層で、この上位には縄文時代から古墳時代にかけての遺物包含層があるが、下位については、まったくの無遺物層である。この土層を上下に分類すれば、上位を黒色土層Ⅰ、下位を黒色土層Ⅱとなる。黒色土層Ⅰは、黒色土層Ⅱの二次的堆積及び流動的なものを含んでいるため、砂質土的部分もある。黒色土層Ⅱは、第7層の淡黄褐色土層上に堆積した腐植土であり、

粘質性が非常に強い。黒色土層から弥生時代の遺物が多数出土しているため、この土層が弥生時代の生活面と考えられるが、この土層から検出された遺構については不明なものが多い。

これらの黒色土層内における弥生時代の遺構については、黒色土層と遺構の埋土が同質のものであり、また、土坑のような性格の遺構については、短期間に埋められることが多く、単一層となっているため黒色土層と遺構の埋土の違いについての判別はつきにくい。以上のようなことから、この土層内においての遺構の検出は不可能に近いので、さらにその下層の第7層淡黄褐色細砂質土層(地山Ⅰ)・第8層黄褐色粘質土層(地山Ⅱ)に切り込んでいる部分においてだけ検出が可能となる。したがって黒色土層内の、特に下層の黒色土層Ⅱから出土した遺物については、なんらかの遺構との関係が想定されるが、下位の地山Ⅰまで達していない浅い遺構であるため、詳細は不明である。

第7層の淡黄褐色細砂土層(地山Ⅰ)は、地山Ⅱの二次的な堆積によるもので、流動的な細砂質である。第8層の黄褐色粘質土層(地山Ⅱ)は、良質な粘質土であり、部分的に黄褐色から青白色、青灰色の部分もある。(村尾政人)

KV35, 36地区北壁(上)KU37, KV37西壁(下)断面図



- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 灰褐色土層 (耕作土)   | 5 黒色土層Ⅰ (黒墨色土層)  |
| 2 茶褐色土層 (耕作土床土) | 6 黒色土層Ⅱ (遺構内の埋土) |
| 3 暗灰色土層         | 7 淡黄褐色細砂土層 (地山Ⅰ) |
| 4 暗茶褐色土層        | 8 黄褐色粘質土層 (地山Ⅱ)  |

第5図 調査区土層断面図

## 第2章 検出遺構

### 第1節 弥生時代の遺構

太田遺跡において検出した遺構は、全体的に概観するとほとんどが弥生時代前・中期に相当するものである。それらは、大きく分けると弥生時代前期末の土壇群と中期の溝、前～中期のピット群である。

#### 1 土壇(SK)

土壇の総数は46基を数える。ここでは、性格不明の窪みや落ち込み等も土壇として扱った。土壇の平面形態は、以下の円形・楕円形・長方形の3つに分類することができたが、個々の断面形態は異なる。円形・長方形以外のもので不定形を呈するものは楕円形として扱った。時期は、遺物を含まないため不詳なもの以外はすべて弥生時代前期に属すると判断できる。

以下、各土壇について説明する。

#### SK 01(第11図)

JE 31 地区で検出された土壇である。土壇の形状は、北部が調査地区外にのびるため全容はつかめないが、ほぼ南北方向に長い楕円形と考えられる。規模は全長約1.8m・幅約1.15m・深さ約0.15mを測る。断面は、床面が平坦な逆台形状である。床面は、明瞭な段を持つ浅い二段掘りになっている。土壇の埋土は、黒色土層である。床面直上から弥生時代前期の土器片が出土した。

#### SK 02(第12図)

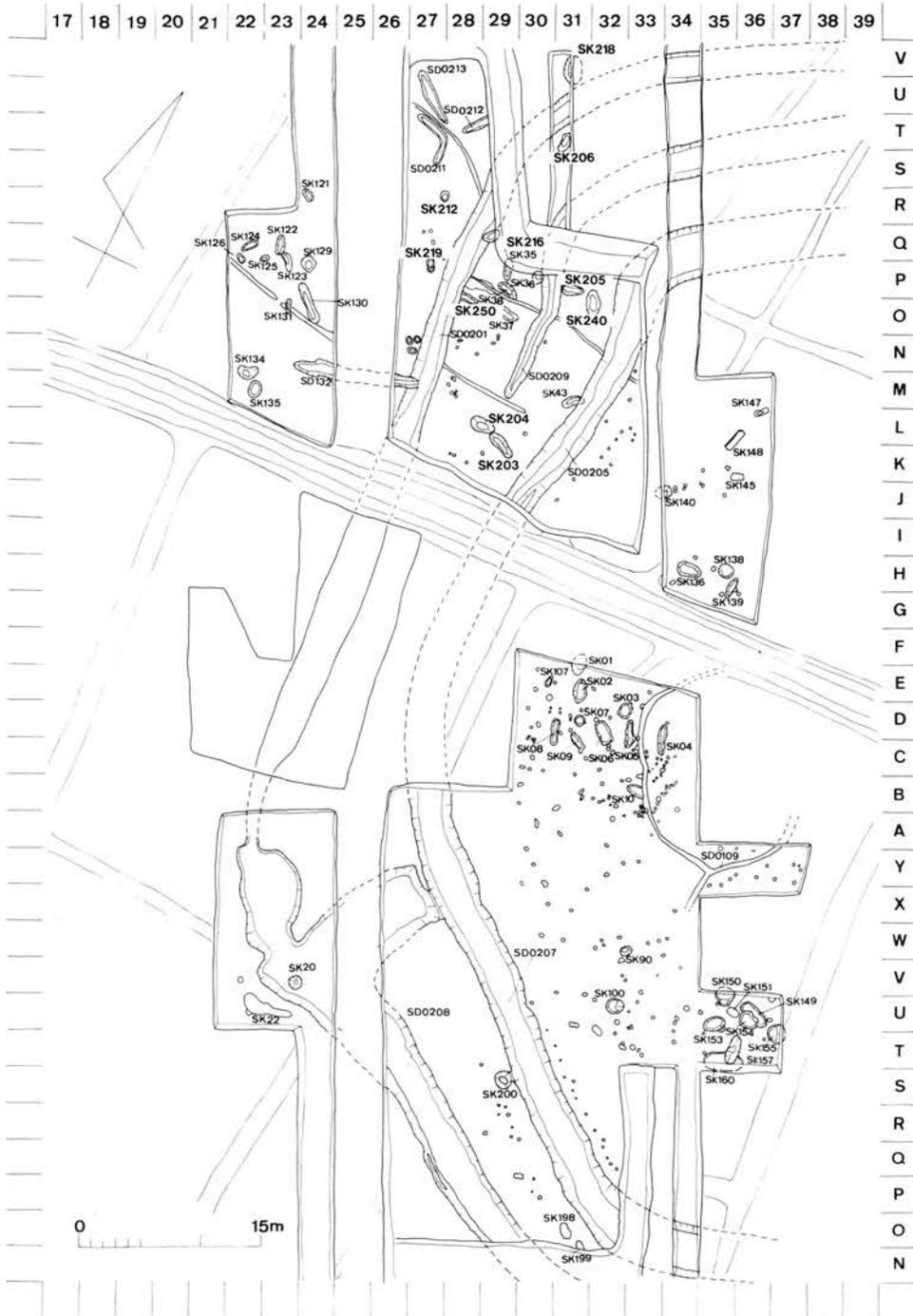
JE 31 地区で検出した土壇である。南側端の一部を失っているが、南北に長い楕円形を呈している。規模は、全長約1.95m・幅約1mを測る。断面形態は、床面が舟底状を呈している。床面の北側端に直径約0.3mの円形小土壇がある。深さは約0.18mを測る二段掘りになっている。土壇の埋土は、遺物包含層と同じ黒色土の単一層である。埋土から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

#### SK 03(第11図)

JD 33 地区で検出した隅丸正方形の土壇であるが、形態分類では円形とした。規模は全長約1m・幅約0.9m・深さ約0.08mを測る。土壇の埋土は、黒色土の単一層である。出土遺物は無く、時期不明である。

#### SK 04(第18図)

JC 33 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、平面形態では楕円形に分類されるが、



第 6 図 太田遺跡遺構平面図

長辺が短辺よりはるかに長く、南辺が直線状を呈する。西辺は、中央が一部二段掘りになっており、東辺は中央より南側に円形状の掘形がある。規模は、全長約 2.2 m・幅約 0.8 m・深さ約 0.15 m を測る。土壇の埋土は、黒色土の単一層である。内部で弥生時代前期の甕片が出土した。

SK 05(第 11 図)

SK 04 とほぼ同じ規模・形状をもつ土壇である。遺物がないため、時期を決定することはむずかしいが、埋土や検出レベル等からみて、SK 04・07・08 と同じく前期末葉に属するものと考えておきたい。

SK 06(第 11 図)

土壇の形状は、長方形を呈する。北西隅と南辺東側に直径約 0.2 m・深さ約 0.2 m の小土壇がある。規模は、全長約 1.9 m・幅約 0.95 m・深さ約 0.25 m を測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁は垂直である。床面には数か所の不定形な小土壇がある。埋土は、黒色土の単一層である。床面の約 5 cm 上から弥生時代前期の壺片が出土した。

SK 07(第 11 図)

円形の土壇である。浅く、底面は凹凸がめだつ。SK 05 と同じように遺物を含んでいないので、時期を決定することができない。埋土や検出レベルから、周辺の土壇群と同じ時期(前期末)につくられたものと考えている。

SK 08(第 18 図)

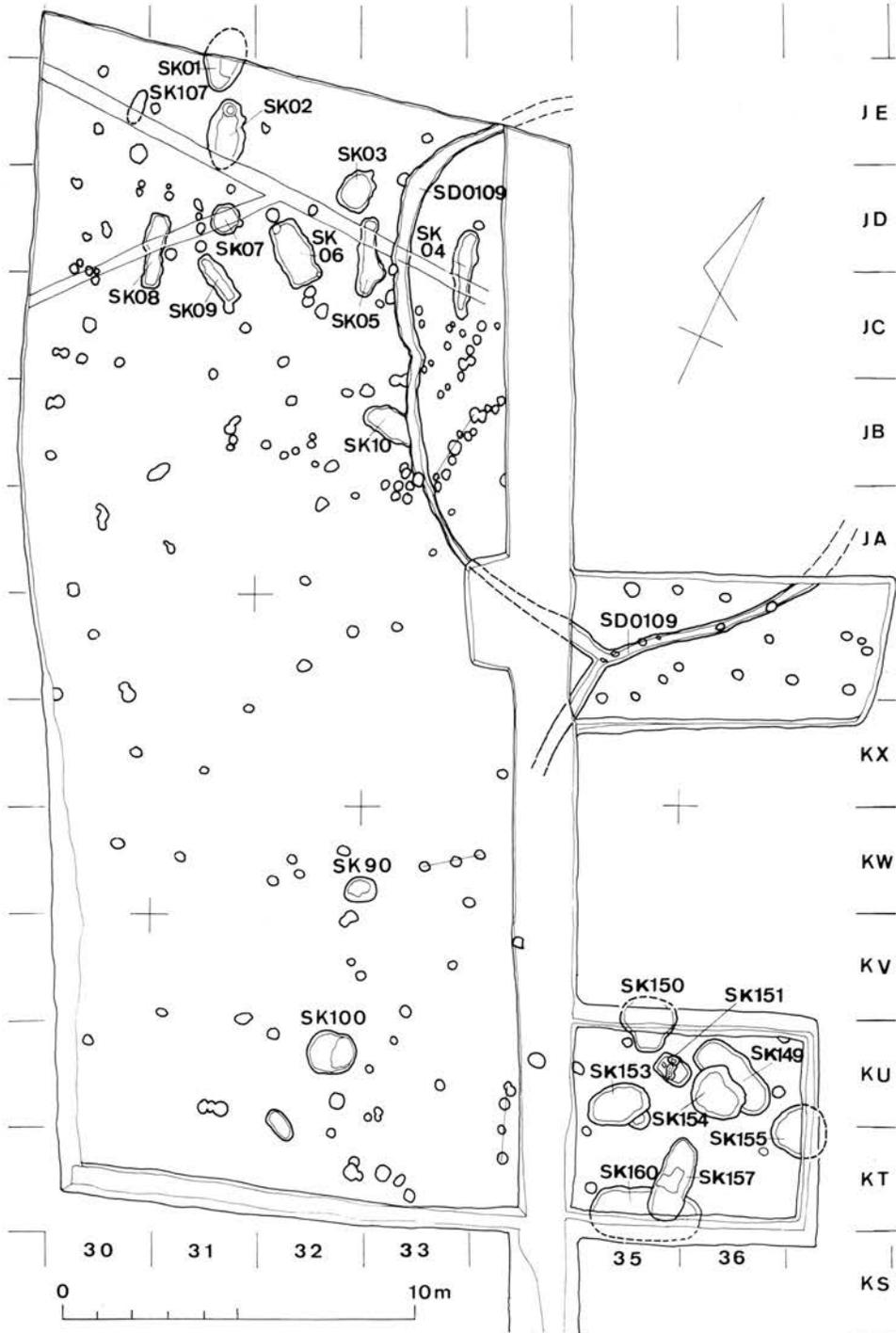
JD 31 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、長い楕円形である。長辺の両端は、直線状に面をもち、長方形に近い。規模は全長約 2.1 m・幅約 0.55 m・深さ約 0.2 m を測る。この床面に不定形な小土壇が 4 か所あるが、断面形態は、おおよそ全体に舟底状を呈している。土壇の埋土は、黒色土の単一層である。遺物としては、床面直上での弥生時代前期の壺片があげられる。

SK 09(第 11 図)

JC 31 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、長い楕円形に分類される。東辺は、二段の掘形になっている。北端は、直線状の辺をなし、東端の隅に直径約 0.05 m・深さ約 0.2 m の小土壇がある。規模は、全長約 1.7 m・幅約 0.6 m・深さ約 0.25 m を測る。壁は垂直で、床面は平坦である。土壇の埋土は、黒色土の単一層であるが、中から弥生時代前期の壺片が出土した。

SK 10(第 12 図)

JB 33 地区から検出された土壇である。土壇の形状は、北側端を溝 SD 0207 によって切られているが、南北に長い楕円形を呈している。規模は、全長約 1.8 m・幅約 0.7 m・深さ



第 7 図 K地区遺構平面図

約0.25 mを測る。断面形態は、床面が平坦で側面が垂直に立ち上がっている。土壇の埋土は、黒色土の単一層で、床面直上で弥生時代前期の甕片が出土した。

SK 20(第14図)

KV 23 地区で検出した円形の小土壇である。規模は、直径約0.5 m・深さ約0.1 mを測る。断面形態は、床面が平坦で、壁が直立している。埋土は、黒褐色土の単一層である。出土遺物はない。

SK 35(第13図)

JD 29 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、北側の端の一部を失っているが、南北に長い楕円形を呈している。規模は、全長約1.75 m・幅約0.65 m・深さ約0.15 mを測る。断面形態は、舟底状を呈している。土壇の埋土は、黒色土の単一層である。

SK 36(第14図)

JP 30 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、東側を溝SD 0209によって切られているだけでなく、北側を約半分近く失っているため、不明であるが、ほぼ円形に近いものであろう。規模は、全長約1 m・幅約0.95 m・深さ約0.3 mを測る。断面形態は、床面が平坦に近い舟底状を呈する。土壇の埋土は、上層が黒褐色土層、下層が黒色土層である。床面の直上で弥生時代前期の完形の鉢が出土した。

SK 37(第12図)

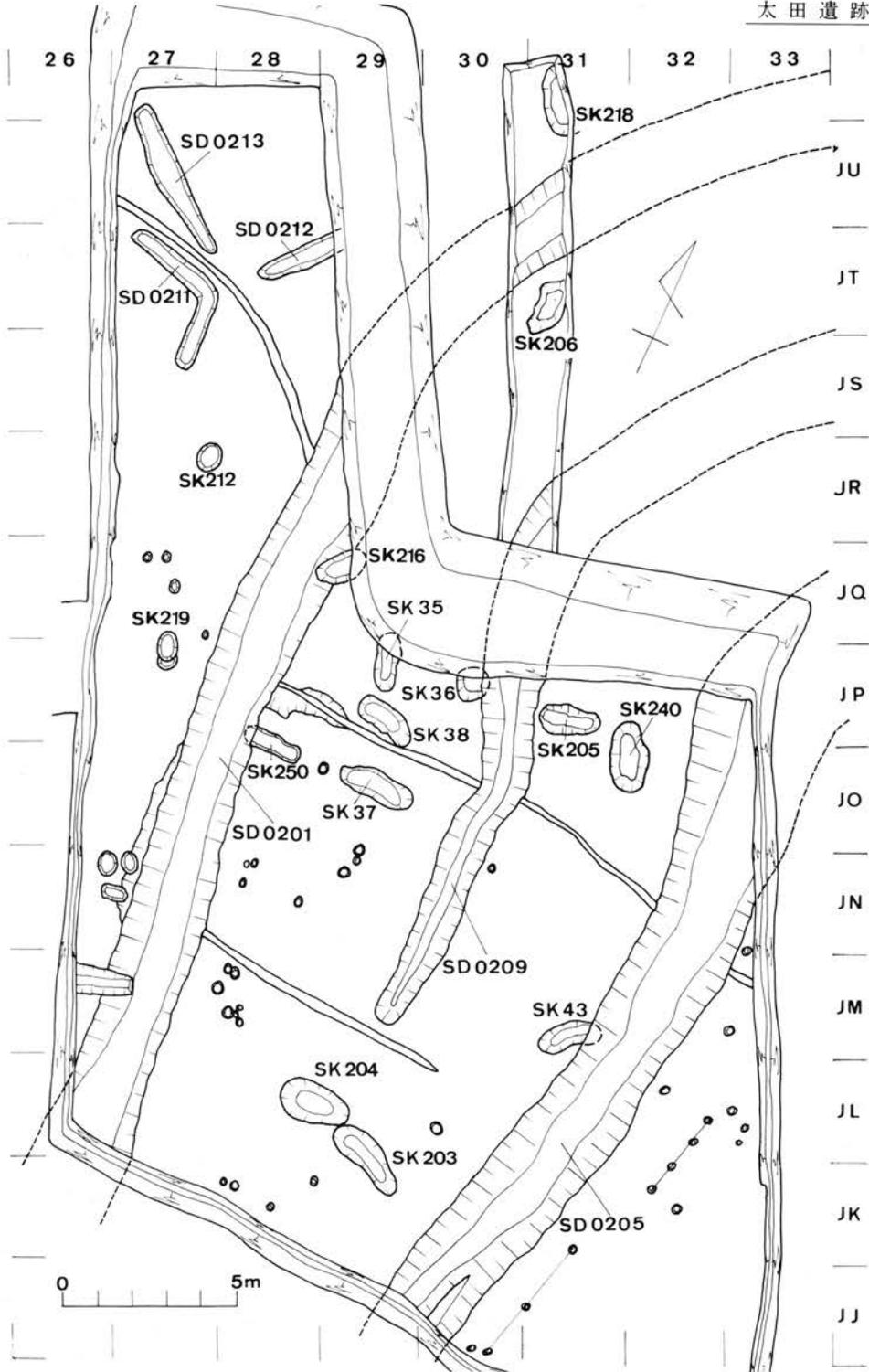
JO 29 地区で検出した土壇である。土壇の形状は南北に長い楕円形を呈する。長辺が「く」の字状にわずかに屈曲している。規模は、全長約2.35 m・幅約0.8 m・深さ約0.25 mを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。出土遺物は、床面直上から床面より約0.1 mまでの間に集中しており、弥生時代前期の壺・甕片が数点出土した。

SK 38(第13図)

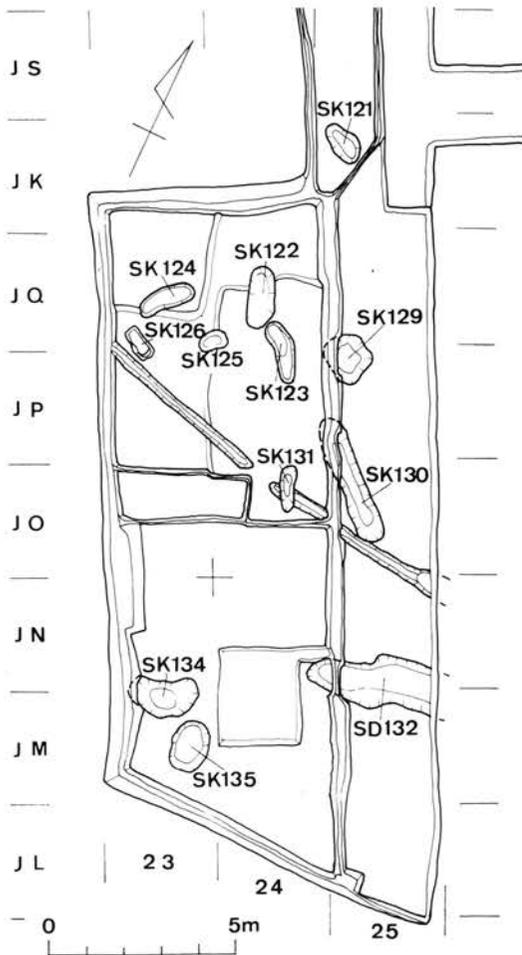
JP 20 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、東西方向に長い楕円形を呈する。規模は、全長約1.65 m・幅約0.6 m・深さ約0.25 mを測る。断面形態は、舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。出土遺物は、床面から約0.1 m上に集中しており、弥生時代前期の壺と甕が出土した。

SK 43(第12図)

JM 31 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、南側端の一部を溝SD 0205によって切られているが、南北に長い楕円形を呈している。長辺は、わずかに「く」の字状に屈曲している。規模は、全長約1.85 m・幅約0.9 m・深さ約0.3 mを測る。断面形態は舟底状を呈している。土壇の埋土は黒色土の単一層である。中から弥生時代前期の壺の小片が出



第 8 図 J 地区遺構平面図



第9図 J地区遺構平面図

土した。  
 SK 90(第15図)  
 KW 33 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、小形の円形を呈する。規模は、直径約0.5 m・深さ約0.2 mを測る。東側と南側の一部が二段掘りになっている。床面は平坦で、埋土は黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の壺片が出土した。

SK 100(第15図)

KV 32 地区で検出した円形の土壇である。規模は、直径約1.05 m・深さ約0.15 mを測る。断面形態は、東側が二段掘りになっており、さらに部分的に深くなっている。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の甕片と赤漆を塗り固めた縦櫛、約0.5 cm大の骨片が出土している。

SK 107(第17図)

JE 31 地区で検出した比較的小さな土壇である。土壇の形状は、南東方向に長辺を持つ楕円形を呈する。規模は、全長約1.1 m・幅約0.7 m・深さ約0.15 mを測る。断面は、ほぼ垂直な壁を有する箱形状を呈する。土壇の埋土は、黒色土の単一層である。弥生時代前期の壺片が床面から出土した。

SK 122(第12図)

JQ 24 地区で検出した土壇である。形状は、南北方向に長辺をもつ楕円形土壇である。わずかに長辺の主軸が東側へ「く」の字状に屈曲している。規模は、全長約1.75 m・幅約0.8 m・深さ約0.35 mを測る。二段掘りになっており、北側が一段高い。深い部分については、床面が舟底状を呈しているが、一段高い北側ではほぼ平坦である。埋土は、上層が黒色土層で下層が黒褐色土層である。上段の床面直上から弥生時代前期の甕片が出土した。

SK 123(第12図)

JP 24 地区で検出した土壇である。形状は、南北に長辺をもつ楕円形を呈する。規模は、

全長約1.65 m・幅約0.6 m・深さ約0.35 mを測る。二段掘りになっており、南側が一段深くなっている。床面は、両者とも平坦である。埋土は、黒色土層である。浅い床面と一段深い床面直上から弥生時代前期の壺片が出土した。

## SK 124(第 18 図)

JQ 23 地区で検出した土坑である。土坑の形状は、南北に細長い楕円形を呈する。規模は、全長約1.5 m・幅約0.5 m・深さ約0.2 mを測る。東壁が二段掘りになっており、ほぼ直立した壁をもっているが、全体に舟底状を呈している。埋土は、黒色土層である。土坑の中位から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 125(第 15 図)

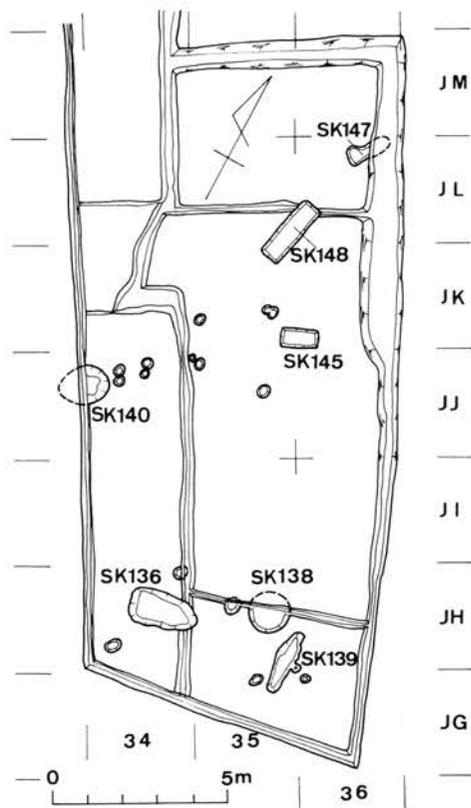
JQ 23 地区で検出した土坑である。土坑は、東西方向に長辺をもつ楕円形を呈する。規模は、全長約1.35 m・幅約1.15 m・深さ約0.15 mを測る。床面は平坦で、壁が垂直に近く立ち上がる逆台形の断面である。土坑の埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の甕片が出土した。

## SK 126(第 15 図)

JQ 23 地区で検出した土坑である。形状は、東西に細長い楕円形を呈するが、東側の短辺が直線状になっており、長方形に近い。規模は、全長約1.3 m・幅約0.55 m・深さ約0.25 mを測る。断面は、全体にはほぼ舟底状を呈するが、東側の短辺が二段掘りになっている。埋土は、黒色土の単一層である。土坑の床面近くから弥生時代前期の壺片が出土した。

## SK 129(第 14 図)

JP 25 地区で検出した土坑である。形状は、ほぼ円形を呈するが、一部北側を欠いている。規模は、直径約1.3 m・深さ約0.25 mを測る。緩やかに立ち上がる壁を有する。床面には、小さな土坑状の落ち込みがある。埋土は黒色土の単一層である。土坑内の中位から



第 10 図 J 地区遺構平面図

弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 130(第14図)

JO 25 地区で検出した土壇で、今回調査した中で最も大きいものである。形状は、東西に細長い楕円形を呈する。規模は、全長約 2.8 m・深さ約 0.35 m を測る。断面は、東西辺が舟底状を呈し、西側一部が二段掘りになっている。南北辺の壁は、やや直立している。埋土は、黒色土の単一層である。土壇内の中位から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 131(第16図)

KO 24 地区で検出した土壇である。形状は、南北に細長い楕円形を呈する。規模は、全長約 1.25 m・幅約 0.4 m・深さ約 0.15 m を測る。断面は、舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 134(第16図)

JM 24 地区で検出した土壇である。形状は、東西に細長い楕円形を呈する。長辺の主軸は、「く」の字状に屈曲している。規模は、全長約 1.9 m・幅約 0.9 m・深さ約 0.5 m を測る。断面は、東西辺が舟底状を呈するが、南西辺は、それよりわずかに直立した壁をもつ。埋土は、黒色土の単一層である。土壇内の東側床面から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 135(第17図)

JM 23 地区で検出した土壇である。形状は、東辺と南辺がわずかに直線状を呈しているが、全体にはほぼ円形である。規模は、直径約 1.15 m・深さ約 0.15 m を測る。東側の一部が浅い二段掘りになって、緩やかに立ち上がった壁をもつ。床面は、全体に平坦である。埋土は、黒色土の単一層で、床面から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 136(第17図)

JH 34 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、南北に長辺を持つ楕円形を呈する。規模は、全長約 1.35 m・幅約 0.85 m・深さ約 0.2 m を測る。緩やかな壁と平坦な床面を有している。埋土は、黒色土の単一層である。ほぼ中位から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 138(第14図)

JH 35 地区で検出した土壇で、形状は、北側の半分を欠いているが、ほぼ円形を呈する。規模は、直径約 1.3 m・深さ約 0.25 m を測る。ほぼ直立に立ち上がる壁と平坦な床面をもつ。床面には小さな土壇状の落ち込みがある。埋土は、黒色土の単一層である。床面から約 5 cm 上で弥生時代前期の壺・甕片が集中して出土した。

SK 139(第16図)

JH 35 地区で検出した土壇である。形状は、南北に細長い楕円形を呈する。規模は、全長約 1.7 m・幅約 0.5 m・深さ約 0.15 m を測る。断面は、床面がほぼ平坦を呈する舟底状のものである。床面には数か所の小土壇状落ち込みがある。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の壺片が出土した。

## SK 140(第 15 図)

JJ 34 地区で検出したほぼ円形の土壇である。直径約 1 m・深さ約 0.35 m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から中位にかけて弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 145(第 16 図)

JK 36 地区で検出した土壇である。形状は、南北に長辺をもつ長方形を呈するものである。規模は、全長約 1.75 m・幅約 0.85 m・深さ約 0.2 m を測る。壁はほぼ直立に立ち上がり、ほぼ平坦な床面に小土壇状の落ち込みが多数ある。埋土は、黒色土の単一層である。埋土の上位から弥生時代前期の壺片が出土した。

## SK 147(第 13 図)

JL 36 地区で検出した土壇である。形状は、北側の一部を欠いているため全容は不明であるが、南北方向に長辺をもつ楕円形を呈すると考えられる。規模は、全長約 1.3 m・幅約 1.1 m・深さ約 0.25 m を測る。壁は、ほぼ直立し、平坦な床面を有する。埋土は、黒色土の単一層である。土壇の南側の中位で、集中して弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 148(第 17 図)

JL 36 地区で検出した土壇である。形状は、南北に細長い長方形を呈する。全長約 2 m・幅約 0.6 m・深さ約 0.25 m の規模を有する。壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦であるものの、床面には不定形の小土壇が数か所ある。埋土は、黒色土の単一層である。土壇の南側の床面直上で弥生時代前期の壺片が出土した。この遺物は、位置及び破片の状態から被葬者の枕に使用されていた可能性が高い。

## SK 149(第 15 図)

KU 36 地区で検出した土壇である。形状は、北西から南東方向に長辺をもつ楕円形を呈する。規模は、全長約 2.55 m・幅約 1.15 m・深さ約 0.30 m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は、ほぼ平坦である。土壇の中央を南北方向に土壇 SD 154 によって切られている。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の甕・壺片が出土した。

## SK 150(第 13 図)

KV 35 地区で検出した土壇である。形状は、半分以上を欠いているため不明な部分は多いが、ほぼ円形を呈する。規模は、直径約 1.5 m・深さ約 0.30 m を測る。壁は直立し、床

面は平坦である。床面には、不定形な小土壇が数か所ある。土壇の埋土は黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の壺片が出土した。

SK 151(第15図)

小形の楕円形土壇である。遺物がないので、帰属時期は断定できない。SK 150・151・153・154・155・157・160と同レベルにあり、埋土の状況もよく似ているところから、これらの土壇と同時期(前期末)に造られたものと考えている。

SK 153(第13図)

KU 35 地区で検出した土壇である。北側に小土壇を切った状態で東西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、全長約1.55m・幅約1.3m・深さ約0.25mを測る。壁は、ほぼ垂直気味に立ち上がり、床面は、平坦である。床面には不定形な小土壇がある。埋土は黒色土の単一層である。床面直上で弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 154(第17図)

KU 36 地区で検出した土壇である。形状は、東辺が直線状に近いが、円形に分類される。規模は、直径約1.55m・深さ約0.25mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。床面には、不定形な小土壇が数か所ある。埋土は、黒色土の単一層である。遺物は、床面直上に弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 155(第19図)

KU 36 地区で検出したほぼ円形の土壇である。規模は、直径約1.6m・深さ約0.3mを測る。壁面はほぼ直立し、床面は平坦である。埋土は、黒色土の単一層である。弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 157(第18図)

KT 36 地区で検出した土壇である。形状は、南北方向に長辺をもつ楕円形を呈する。土壇の南側は、土壇 SK 160 を切っている。規模は、全長約2.15m・幅約1.05m・深さ約0.16mを測る。壁は、ほぼ直立気味に立ち上がり、床面には不定形な小土壇が多い。埋土は、黒色土の単一層である。南側の床面直上から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 160(第18図)

KT 35 地区で検出した土壇である。形状は、東西方向に長辺をもつ楕円形を呈する。また、土壇 SK 157 によって切られている。規模は、全長3.15m・幅約1.5m・深さ約0.9mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

SK 203(第19図)

JK 29 地区で検出した土壇である。形状は、南北方向に長軸をもつ細長い楕円形の土壇で

ある。規模は、全長約 2.35 m・幅約 1.25 m・深さ約 0.58 mを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、床面も北側に中心をもつ舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。西側の床面直上で集中して弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 204(第 19 図)

JL 28 地区で検出した土壇である。形状は、東西方向に主軸をもつ楕円形を呈する。規模は、全長約 2.18 m・幅約 1.43 m・深さ約 0.6 mを測る。壁面は、緩やかに立ち上がり、床面は、丸い舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。土壇の西側で弥生時代前期の壺・甕片が合わせ口状になっていたものが、西から東へ転倒した状態で出土した。

## SK 205(第 19 図)

JP 31 地区で検出した土壇である。形状は、東西に主軸をもつ楕円形を呈する。規模は、全長約 1.6 m・幅約 0.75 m・深さ約 0.40 mを測る。壁が直立気味に立ち上がる舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。床面直上で弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 206(第 18 図)

JT 31 地区で検出した土壇である。形状は、東西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は全長約 1.9 m・幅約 1 m・深さ約 0.5 mを測る。北辺の壁が直立に立ち上がるほかは、すべて緩やかに立ち上がる舟底状を呈している。埋土は、黒褐色土の単一層である。土壇の中心で集中して弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 216

楕円形の土壇である。SD 0201 によって遺構の一部が壊されていた。このような例は、SK 250 や SK 43 などにもみられ、溝と土壇の成立時期を考える上で参考になる。

SK 216 は、遺物は含んでいないため帰属時期は明らかにできないが、遺構の状況からみて先の土壇と同時期に属するものと考えたい。

## SK 218

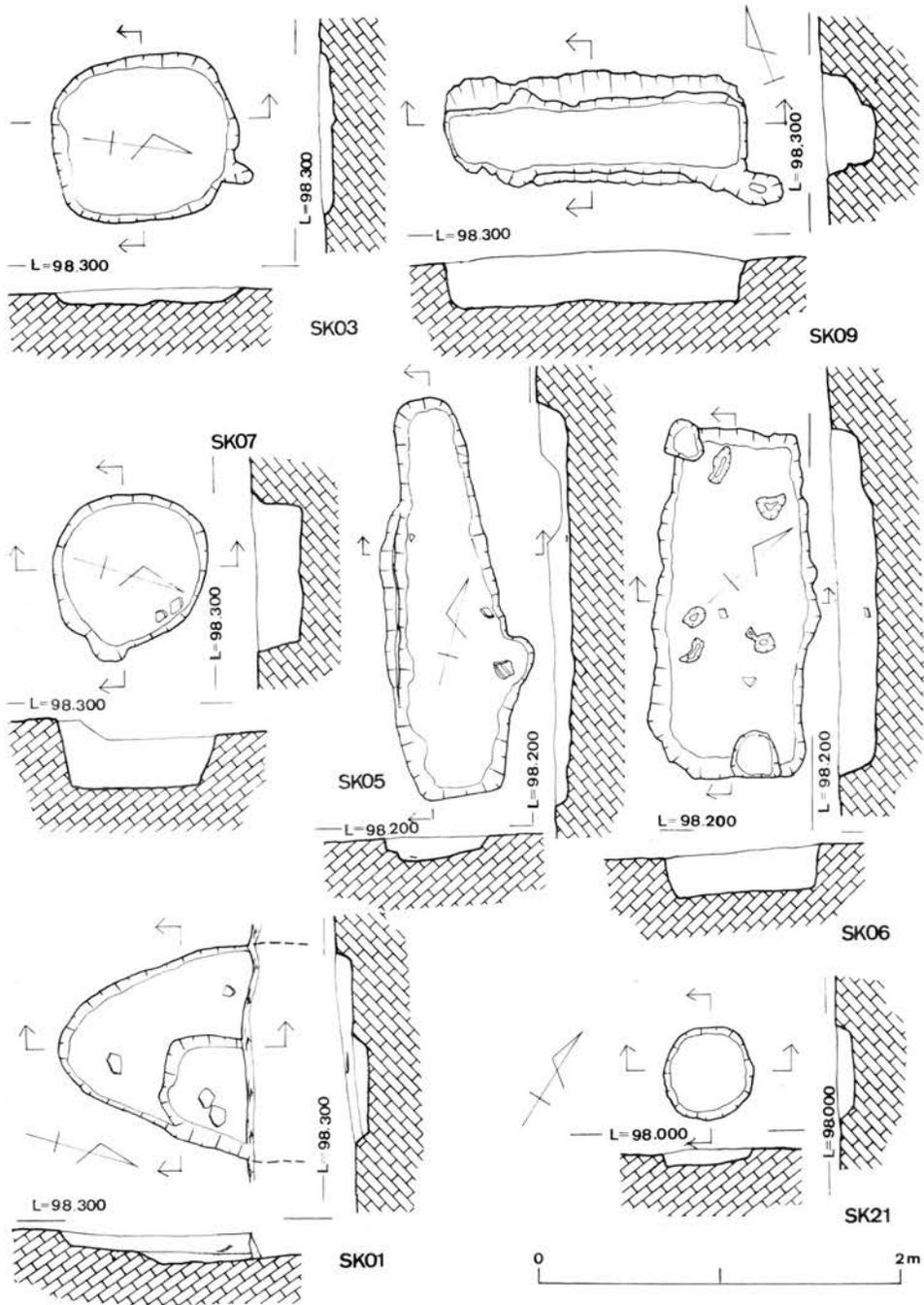
楕円形の土壇である。遺構の一部を確認した。検出レベルや埋土の状況からみて、他の弥生時代前期の土壇と同様の性格が考えられる。

## SK 240(第 17 図)

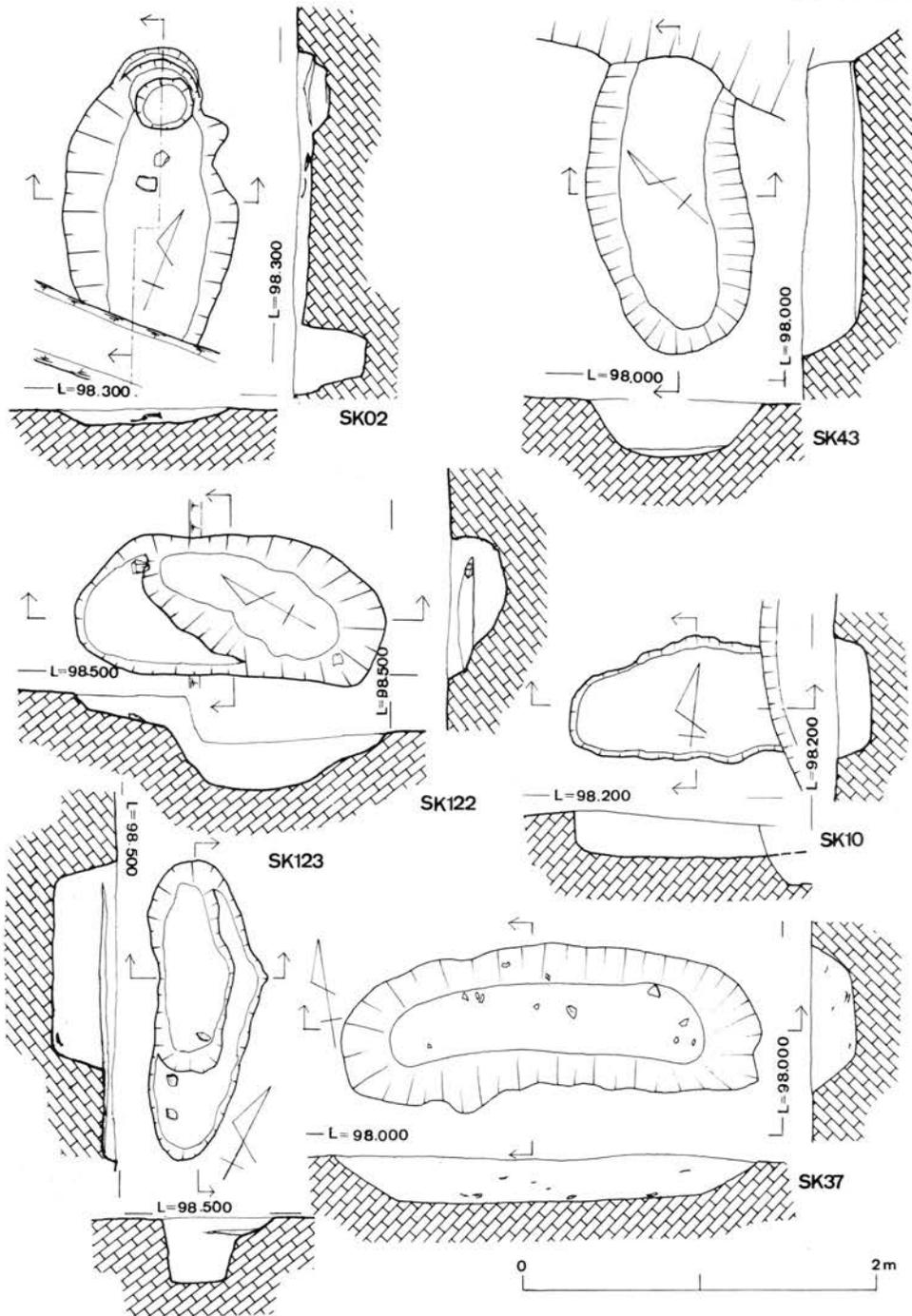
JO 32 地区で検出した土壇である。土壇の形状は、東西に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、全長約 1.85 m・幅約 1.05 m・深さ約 0.30 mを測る。床面は、緩やかに立ち上がる壁をもち、舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。土壇の中央と西側で集中して弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

## SK 250(第 16 図)

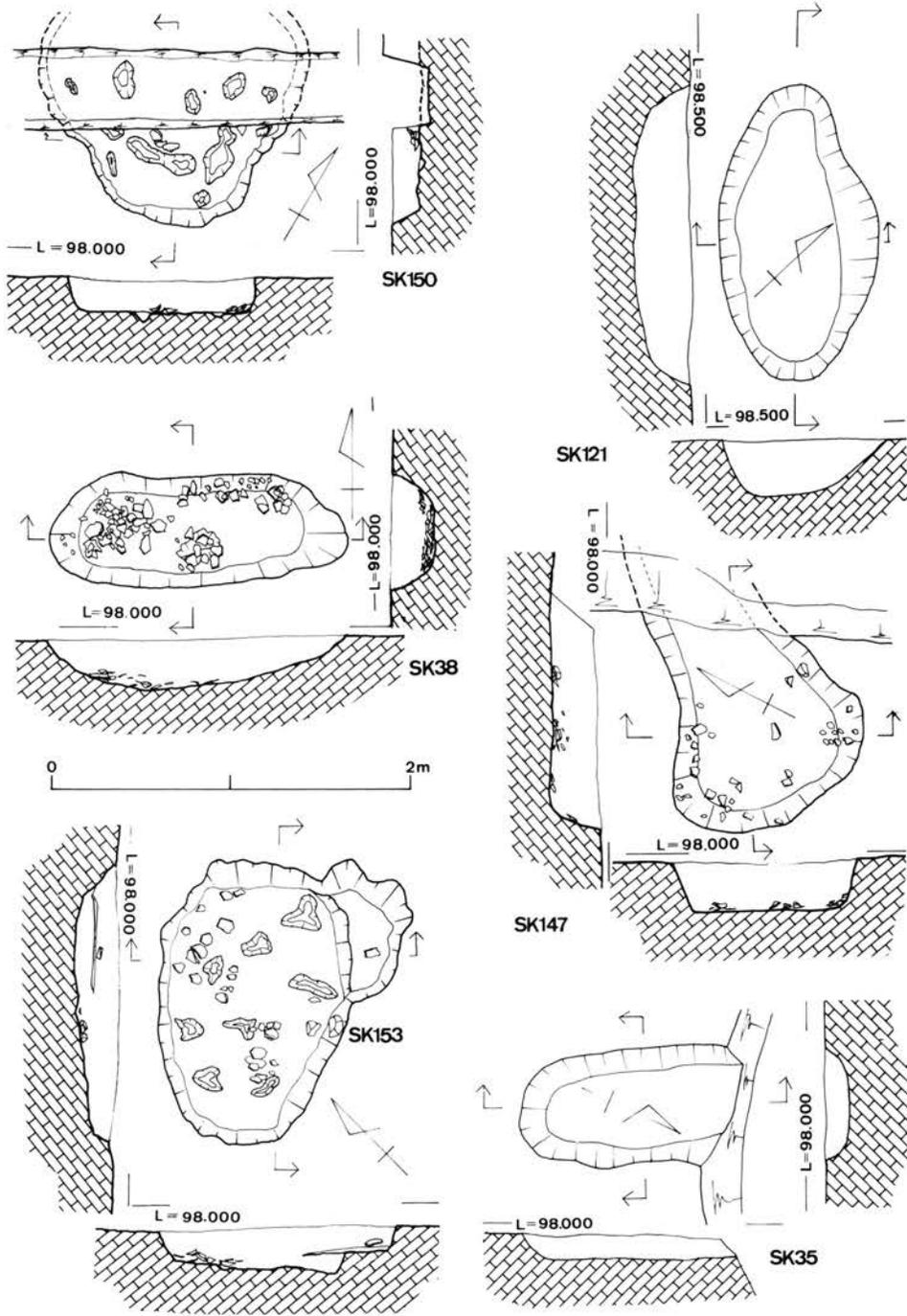
JO 28 地区で検出した土壇である。形状は、東西方向に細長い楕円形を呈する。短辺は、



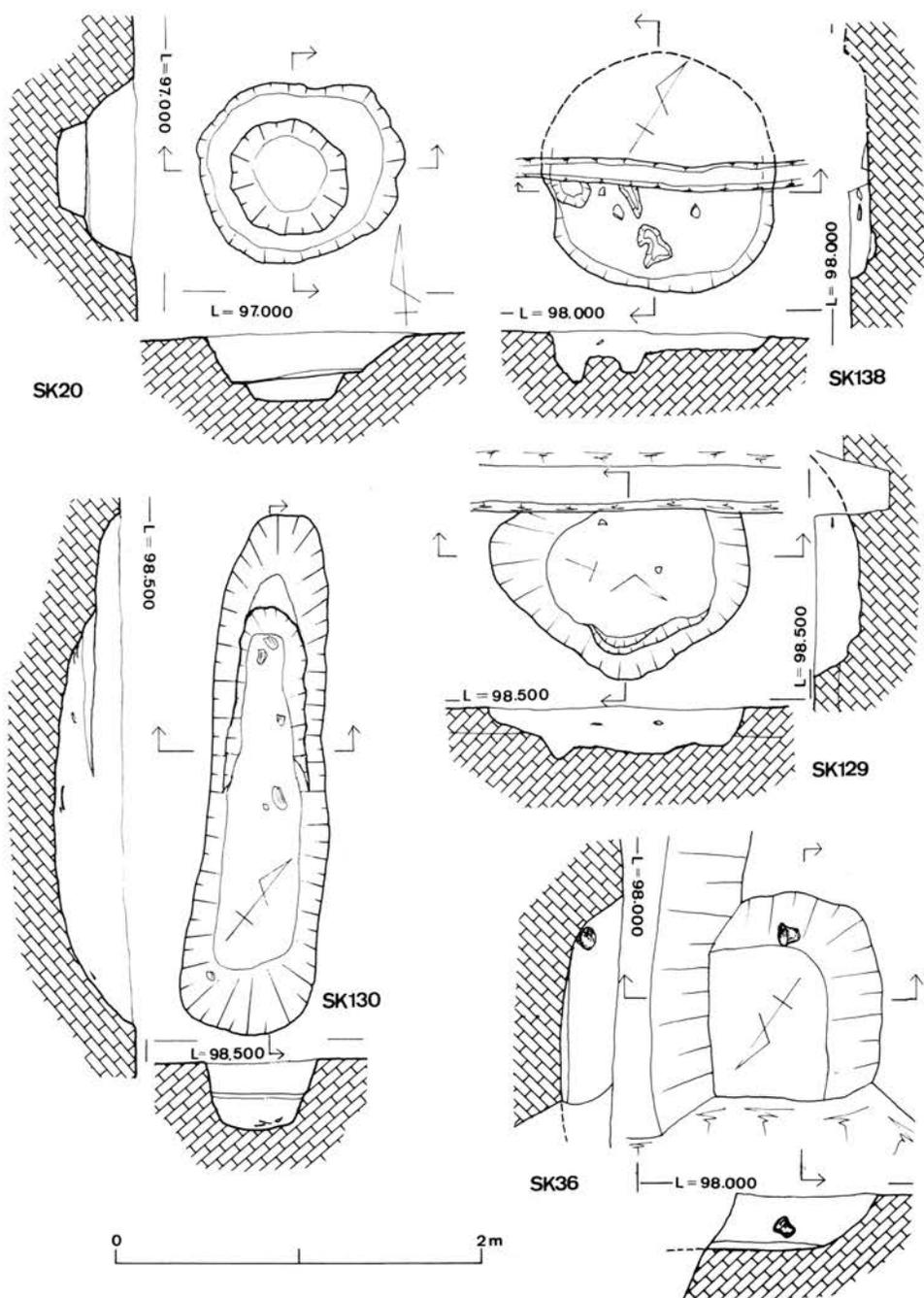
第 11 図 土塚 SK 01・03・05・06・07・09・21 平面・断面図



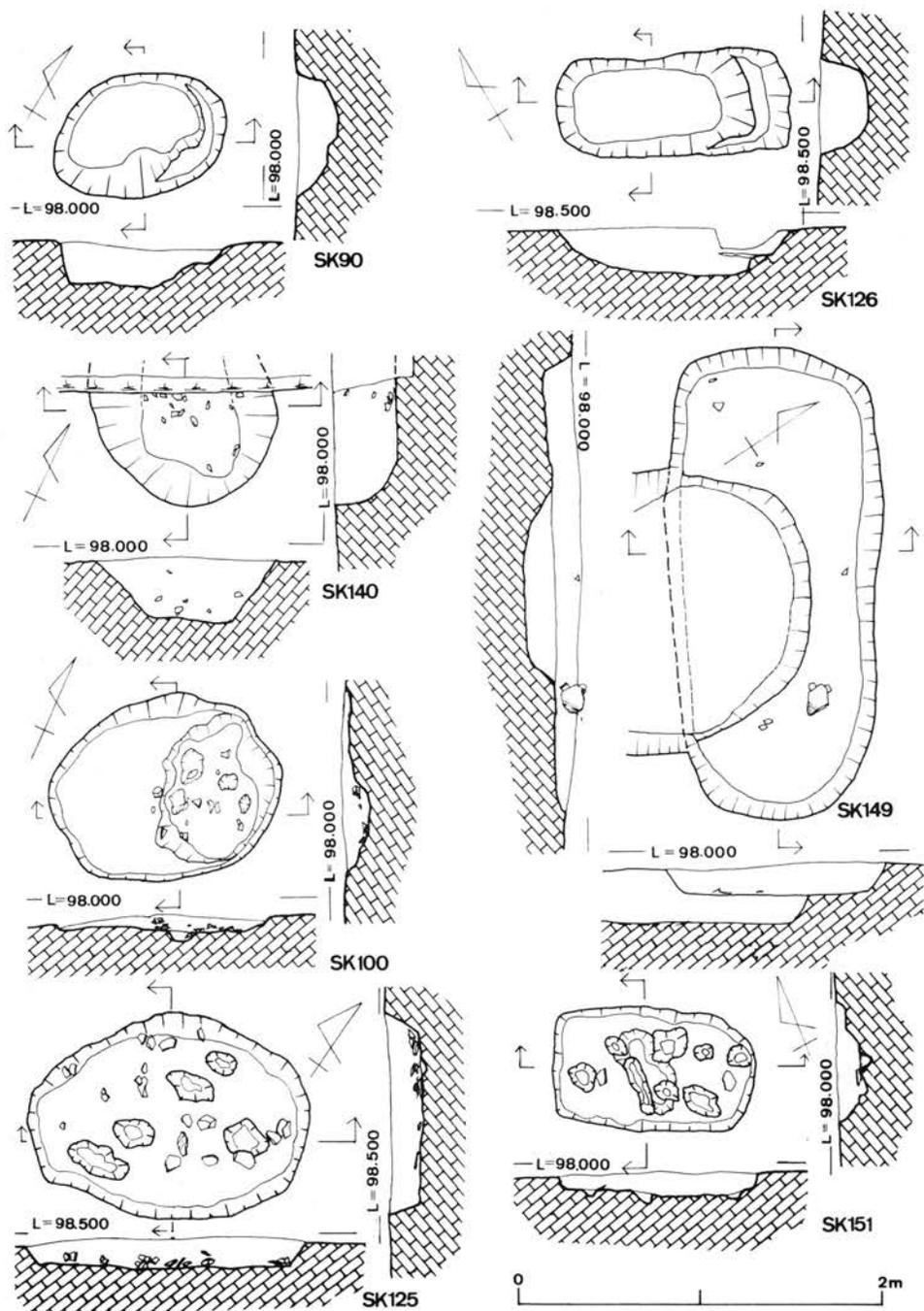
第 12 図 土壇 SK 02・10・37・43・122・123 平面・断面図



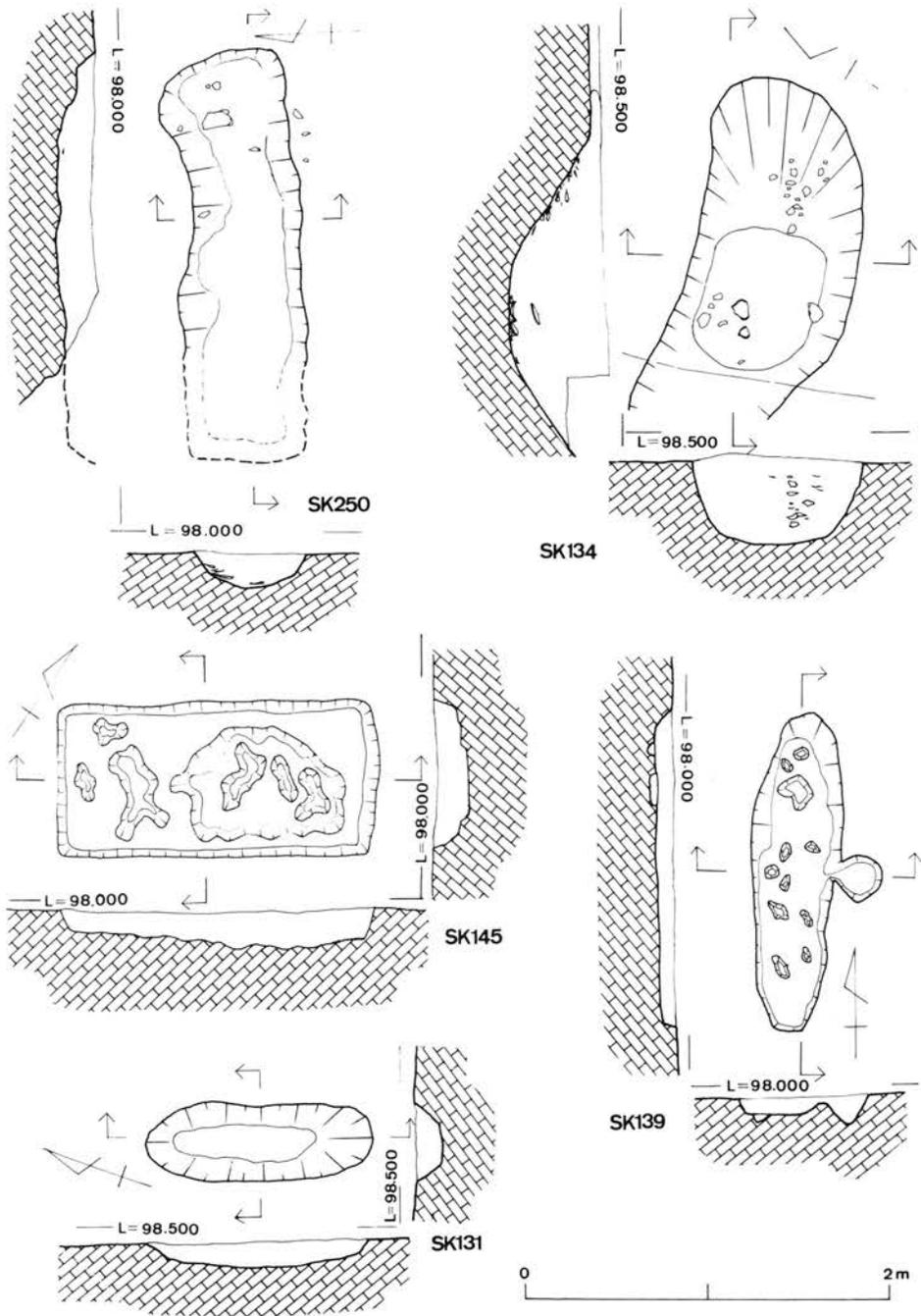
第 13 図 土坑 SK 35・38・121・147・150・153 平面・断面図



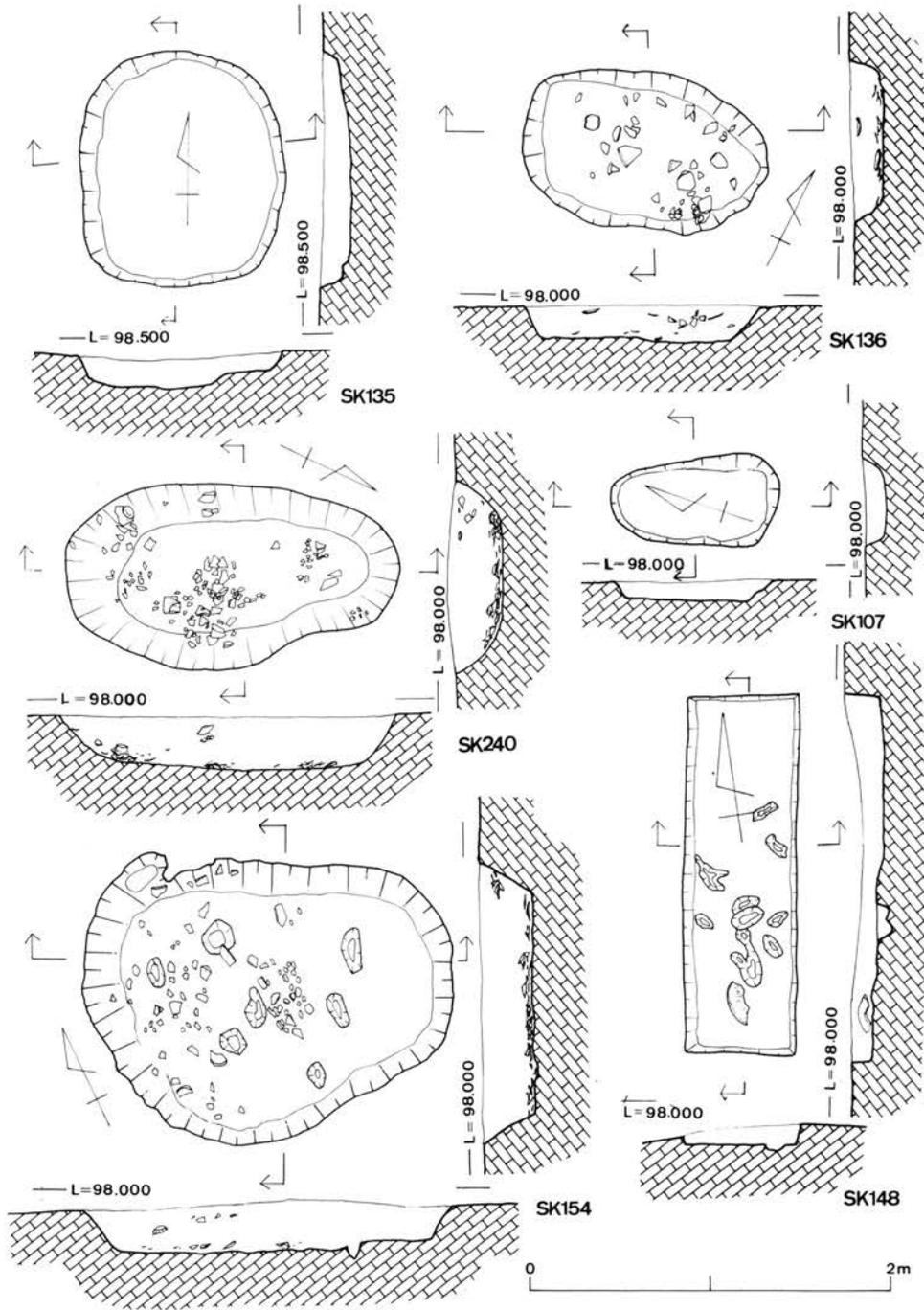
第 14 図 土壇 SK 20・36・129・130・138 平面・断面図



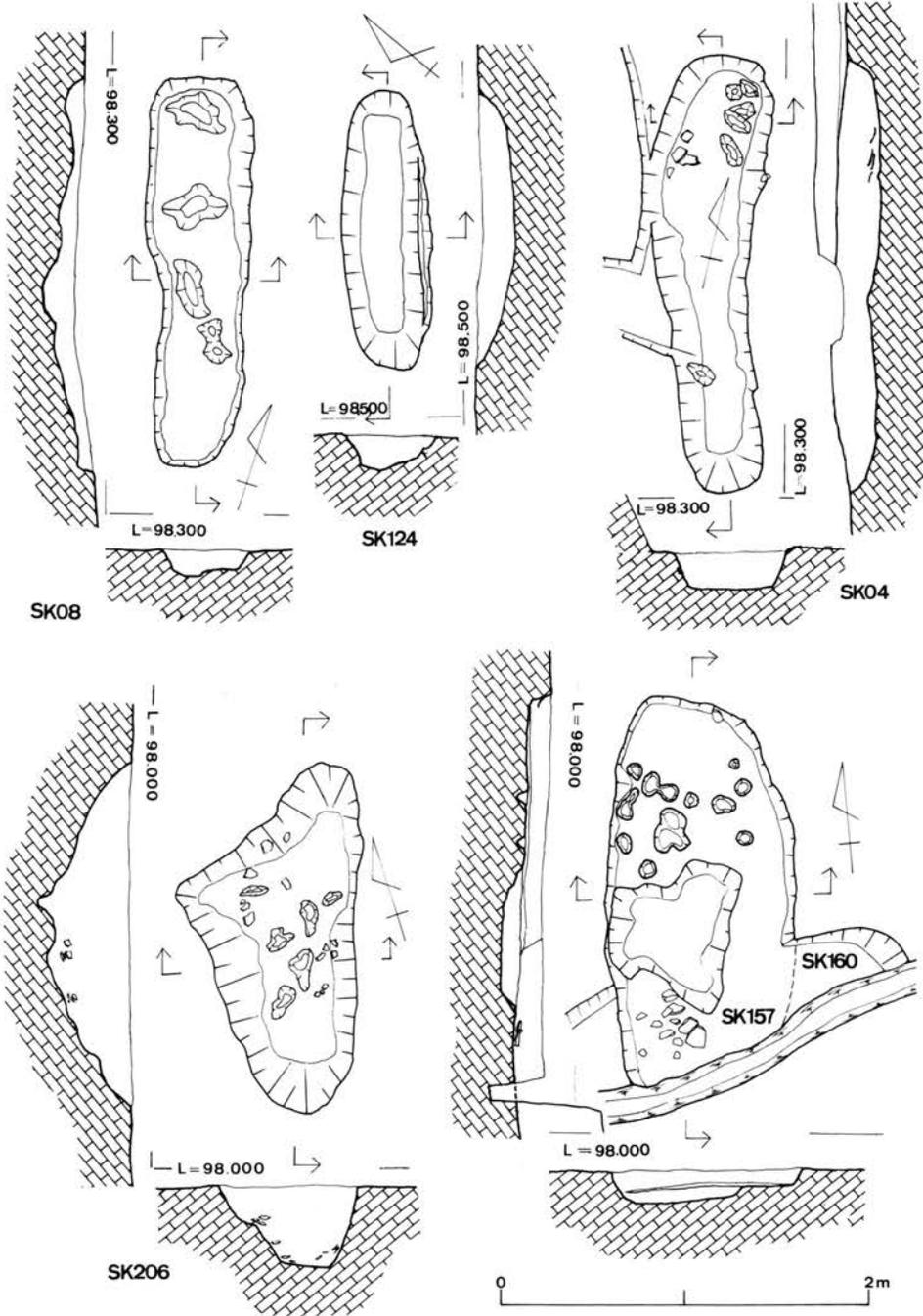
第 15 図 土壇 SK 90・100・125・126・140・149・151 平面・断面図



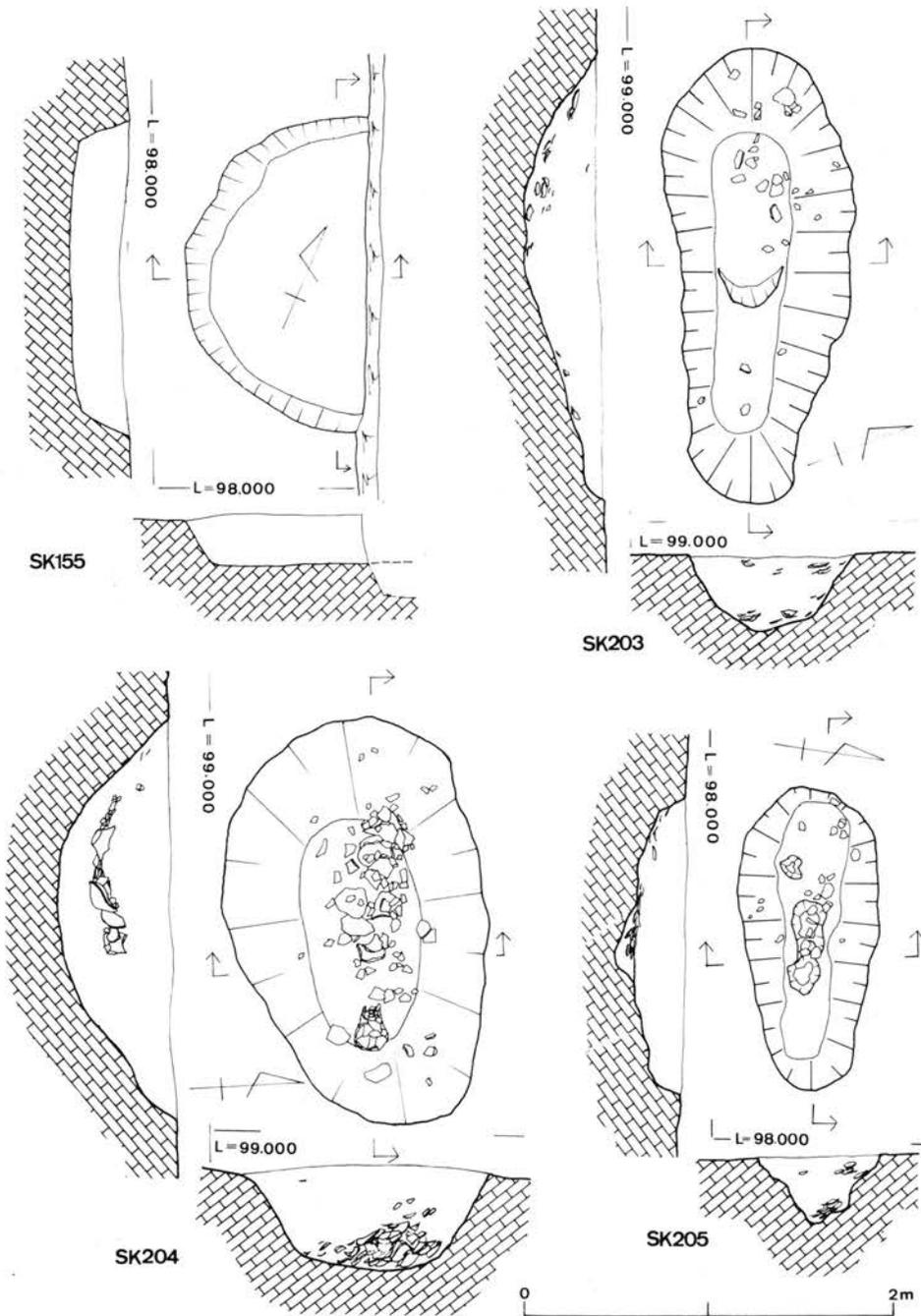
第 16 図 土壇 SK 131・134・139・145・250 平面・断面図



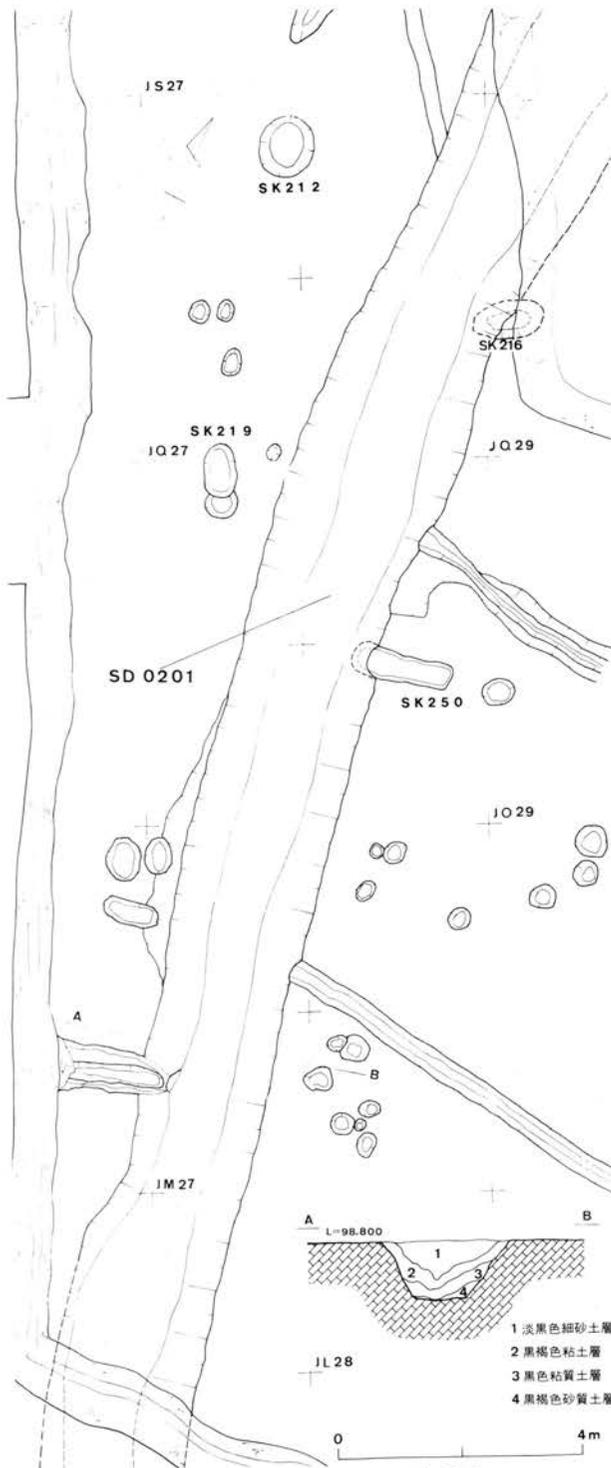
第 17 図 土塚 SK107・135・136・148・154・240 平面・断面図



第 18 図 土坑 SK 04・08・124・157・160・206 平面・断面図



第 19 図 土壇 SK 155・203・204・205 平面・断面図



第 20 図 溝 SD 0201 平面図

両者とも直線状を呈するので、長方形に近い。規模は、全長約 2.25 m・幅約 0.25 m・深さ約 0.25 m を測る。緩やかに立ち上がる壁をもつ舟底状を呈する。埋土は、黒色土の単一層である。西側の床面直上から弥生時代前期の壺・甕片が出土した。

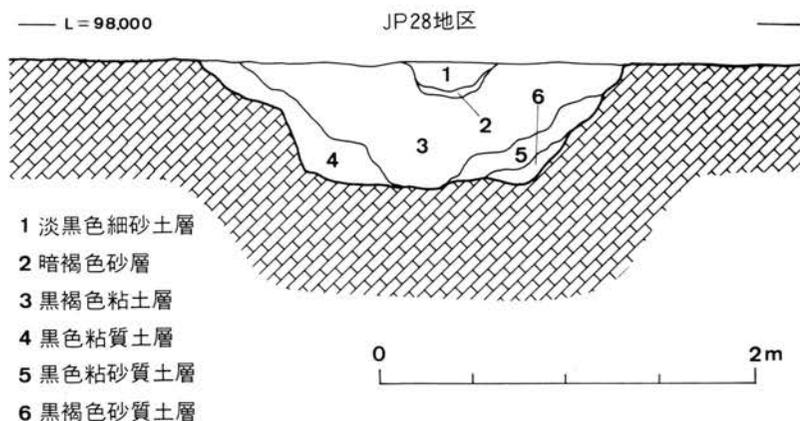
その他の土坑

SK 38・SK 22・SK 198・SK 199 は、掘形がはっきりせず、形態も不定形である。遺物がないため帰属時期が明らかでなく、性格も不明である。埋葬に伴う土坑であるとか貯蔵穴などのように一定の目的で掘られたものではなく、もっとネガティブな性格をもつものと考えている。

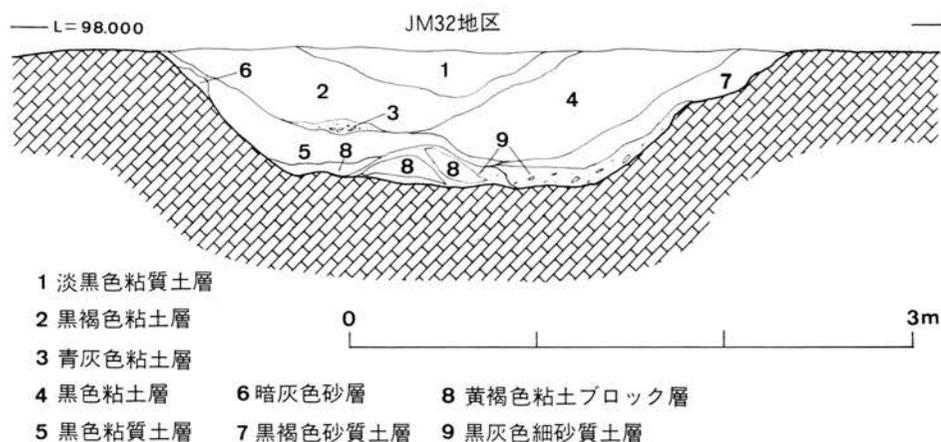
## 2 溝(SD)

溝は、約 11 条を検出したが、このうち特に注目される溝 SD 0201・SD 0205・SD 0207・SD 0208・SD 0209 について概要を述べる。

SD 0201 と SD 0208、SD 0205 と SD 0207 は、同一の溝で、南北方向に半円形を描いている。また、SD 0209 は、SD 0201 と SD 0205 の中間に位置し、北東へ同様の円



第 21 図 溝 SD 0201 断面図



第 22 図 溝 SD 0205 断面図

形を描いている。これらの溝は、約 20～30 m の長さを確認したが、溝は東側へ延びていくものと考えられ、楕円形もしくは馬蹄形を呈する環濠と考えられる。

SD 0201 (第 6・20 図)

調査地の北西部 JL 26 地区から JS 28 地区にかけて南北方向に走る溝である。28～31 地区にかけて大きく東へ振りながら円弧を描いて流れている。JO 27 地区では溝の西肩が二段掘りになっており、他の所と比べて広がっている。JL～JS 地区までの検出長は約 22 m を測る。溝幅は、2.3 m 前後を、深さは、約 0.7 m をそれぞれ測る。断面は逆台形を呈する。

溝の土層は、大きく分けると、溝を切り込んだ茶褐色粘土層(地山)と溝の埋土である黒色粘土層からなる。しかし、これを詳しく分けるならば、上から淡黒色細砂土層・暗褐色

砂層・黒褐色粘土層・黒色粘質土層・黒色粘砂質土層・黒褐色砂質土層となっている。地山は、黄褐色粘質土層Ⅰと黄褐色細砂質土層Ⅱからなり、その上位に黒色粘質土層が堆積している。黒色粘質土層は上位と下位に分類できるが、明確には区分できない。上位の黒色土層は、わずかに赤褐色及び明るい色調を呈し、細砂質土層に近い。また、下位の黒色土層は、強い粘質であることから、長期間にわたって機能したことが窺われる。

この溝は、上位の黒色土層から黄褐色粘質土層(地山Ⅰ)を掘りぬき、深いところでは下位の黄褐色細砂質土層(地山Ⅱ)まで達している。上位の黒色土層から溝は掘り込まれているが、溝の肩に相当する部分の確認が不可能であったため、地山Ⅰの黄褐色粘質土層から切り込まれた部分についてのみ検出した。溝内の堆積層序について、断面観察から次の事柄が判明した。

溝内の最下層である黒褐色砂質土層は、溝肩部が崩れて流れ込み堆積したものと考えられる。また、黒色粘質土層と黒色粘砂質土層も同様の流れ込みによる堆積である。一度、この段階において溝の再掘が行われ、その後、黒褐色粘質土層の急激な流れ込みによって、この溝の機能は失われ、放棄されたようである。また、この溝が放棄されてからも淡黒色細砂土層が堆積しているが、この土層が流れ込む以前に流水による堆積(暗褐色砂層)のあったことが窺われる。

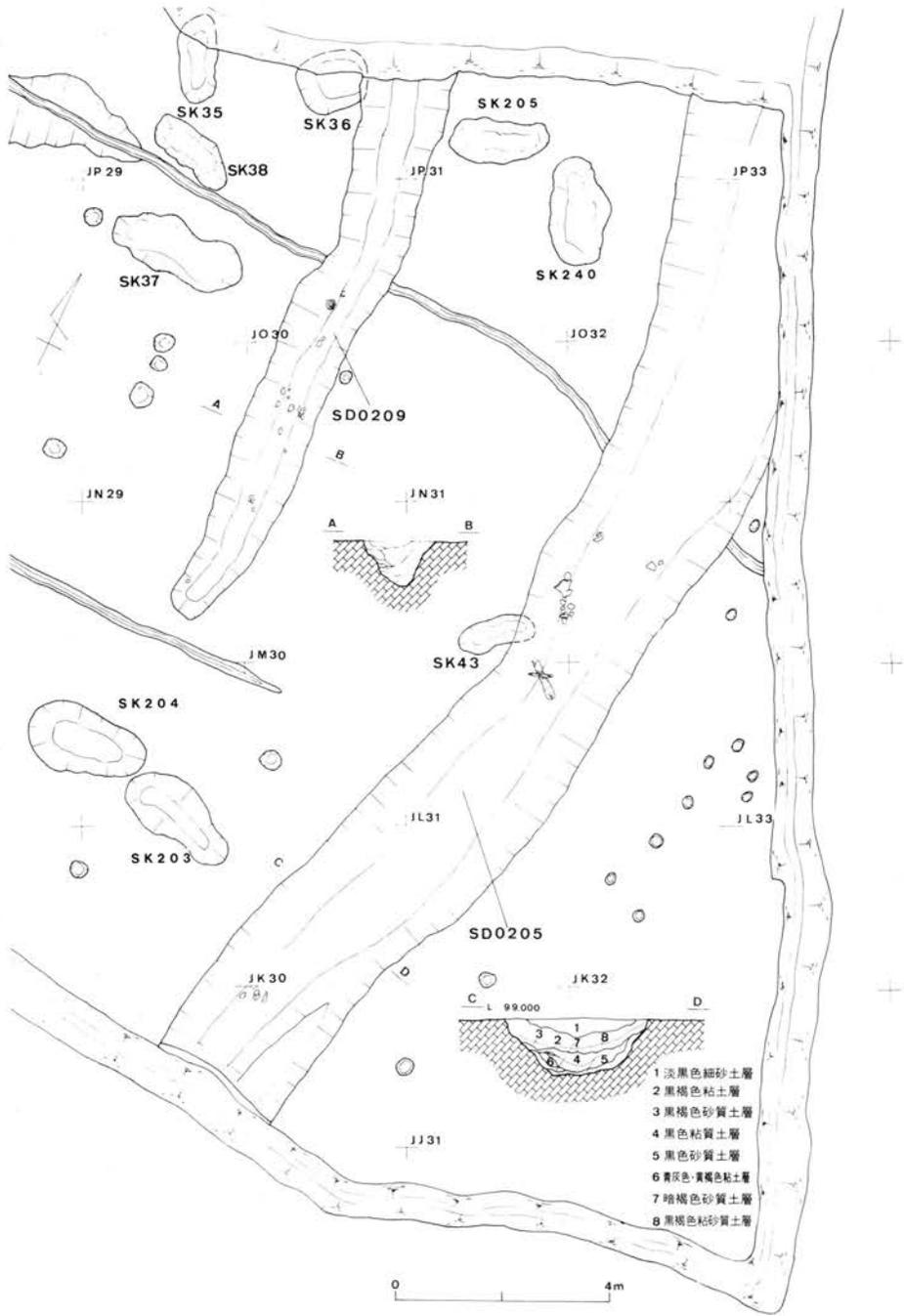
この出土遺物は非常に少なく、第3層の黒褐色粘質土層内より第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式にかけての弥生時代の土器片と石器が出土した。

#### SD 0205(第6・22 図)

調査地の北東部 JJ 29 地区から JP 33 地区にかけて南北方向に走る溝である。南側に続く地点としては JL 29 地区の東西方向トレンチで確認されている。北側 34 地区ラインで確認できるため、32~34 地区で大きく東方向へ振りながら円弧を描いていたことがわかる。溝の方向及び形態は、溝 SD 0201 とほぼ同様であるが、この溝の方が若干幅広い。

溝の規模は、検出長約 0.2 m・幅約 0.75 m を測る。断面は、逆台形を呈する。溝内の層序は、上から淡黒色粘質土層・黒褐色粘土層・青灰色粘土層・黒色粘土層・黒色粘質土層・暗灰色砂層・黒褐色砂質土層・黄褐色粘土ブロック層・黒灰色細砂質土層となっている。地山は、黄褐色粘質土層(地山Ⅰ)と黄褐色粘質土(地山Ⅱ)からなっている。溝内の第1層である淡黒色粘質土層と第2層の黒褐色土層は明瞭に区分できないが、上位がわずかに赤褐色を呈している。溝の肩部は、前項で述べたとおり、溝内の埋土と地山面上位の堆積土である黒色土層が同一であるため不明である。溝内の層序からは、次の事柄が明らかになった。

溝内の最下層である第9層黒灰色細砂質土層は、東側から崩れ込んだ流れ込み堆積土層



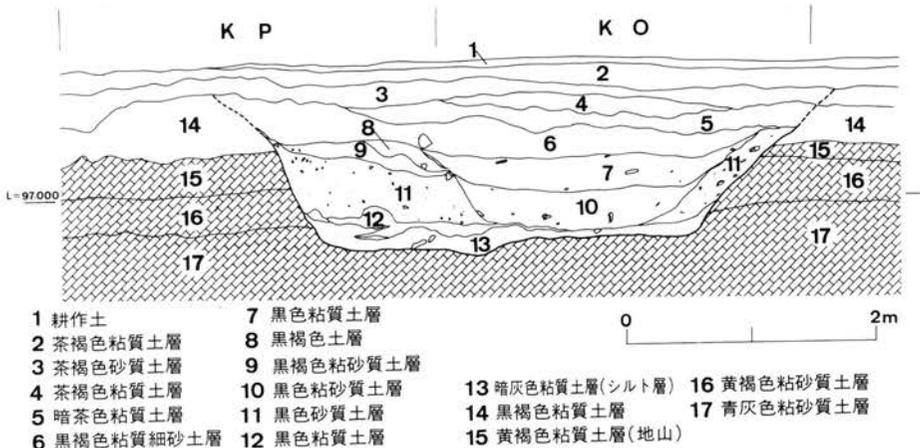
第 23 図 溝 SD 0205・0209 平面図

である。この土層内には、地山 I の黄褐色粘質土層がブロックで西側から流れこんでいるため、当初、地山 I・II の掘削をした際には、排土は西側に盛られたと思われる。やがて第 5 層の黒色粘質土層の大きな堆積により溝の機能は半減したため、再度、溝を掘り直している。第 4 層の黒色粘土層と第 2 層の黒褐色粘土層とは若干の色調の違いがあるだけで区別がつきにくい、第 3 層の青灰色粘土層の間層があるため 2 段階の厚い堆積が短期間にあったことが判明する。第 3 層は、第 8 層と同質の地山 I・II に相当する土層で、これらも溝の西側に盛られていたものが崩落・流入したものであろう。

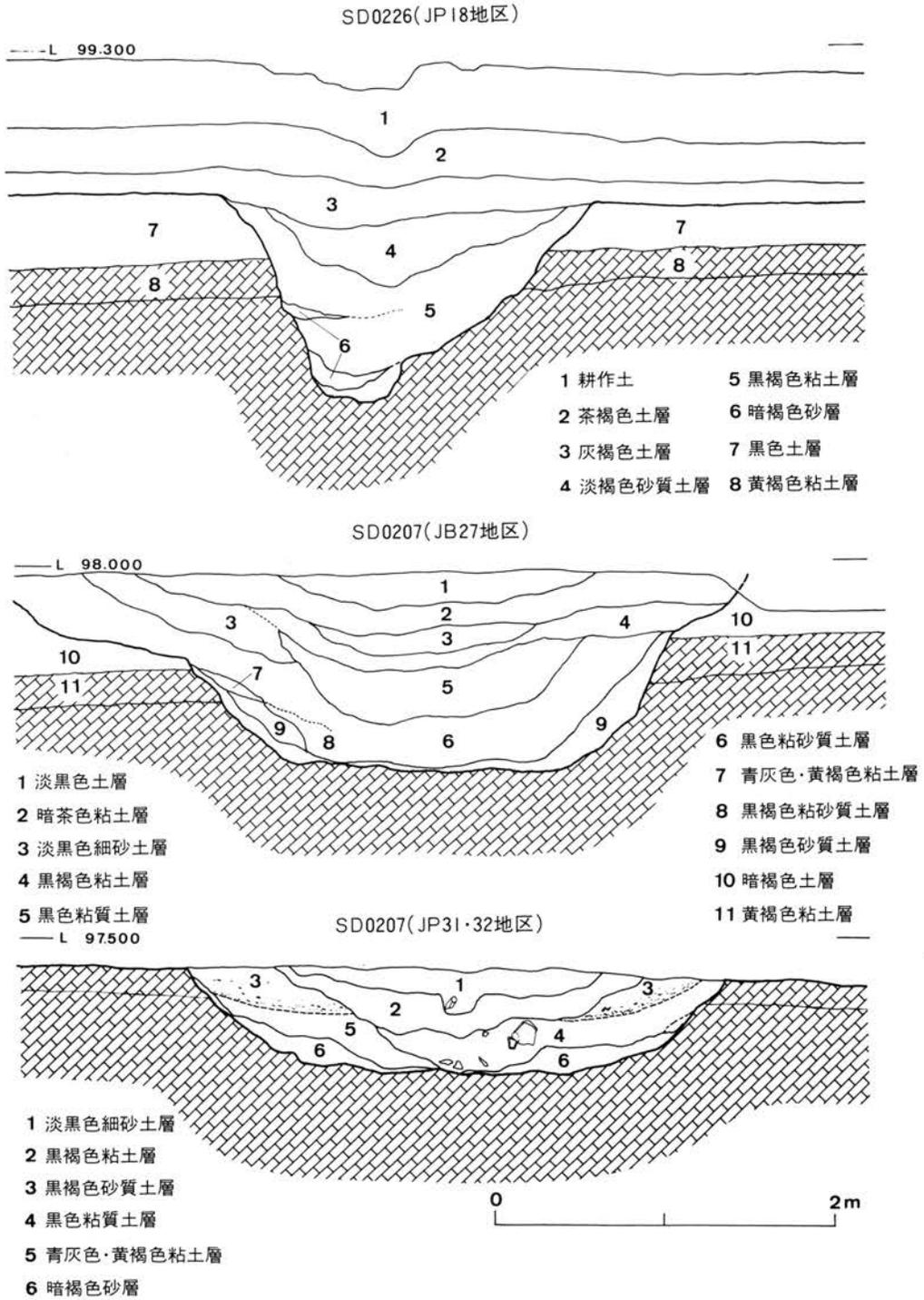
SD 0207(第 6・24・25 図)

調査地の南側中央に JB 27 地区から KO 32 地区にかけて、北西から南東方向に走る溝である。南東方向の続きは KO 地区で大きく曲がり、真東方向に走っている。また、北西方向の続きは JO 地区周辺で東へわずかに振りながら溝 SD 0205 につながる。規模は検出長で約 40 m を測る。溝幅は、約 4 m・深さ約 1 m を測り、断面は、逆台形状を呈する。この溝には西側の溝 SD 0208 につながる溝がある。性格は不明である。溝内の土層観察によると、明らかに同時に機能していた事が窺われる。規模は、南北辺が約 5 m・東西辺が約 8 m・深さ約 1 m を測る。

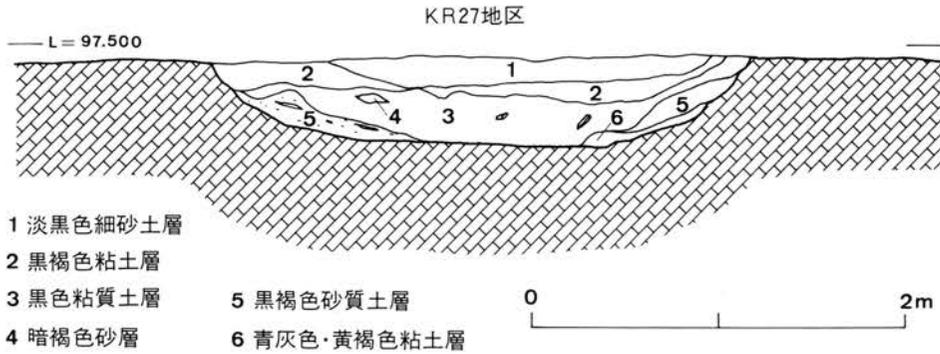
溝 SD 0207 の土層は、ほぼ黒色粘質土層と黒色砂質土層、地山のブロック土層に大きく分けられる。最下層の第 13 層である暗灰色粘質土層(シルト層)が第一次堆積によるものであるが、第 11 層の黒色砂質土層の堆積によりこの溝の機能が半減したため、再度この土層を掘り下げている。その後、この溝は第 10・7 層の黒色粘砂質土層と第 5・6 層の黒褐色粘質細砂土層、暗茶色粘質土層によって短期間に埋められている。やがて最終的には第 3 層の茶褐色砂質土層の厚い堆積によって埋まっている。この溝内でもっとも多量に遺物を包含



第 24 図 溝 SD 0207 断面図



第 25 図 溝 SD 0207・0226 断面図



第 26 図 溝 SD 0208 断面図

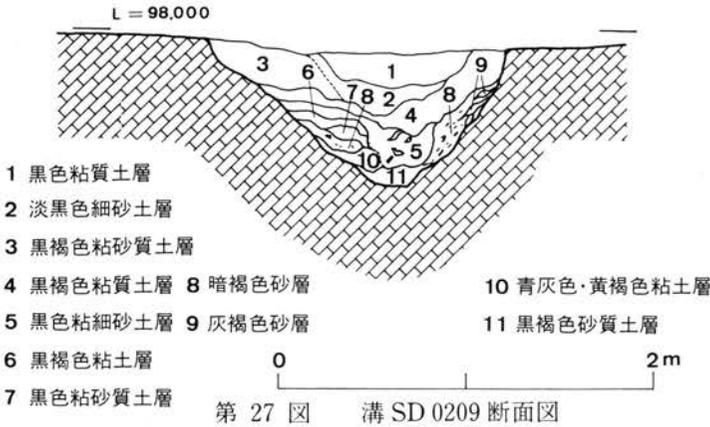
していたのは第 7・10 層内である。時期は弥生時代前期末から中期初頭である。

#### SD 0208(第 6・26 図)

調査地の南西部 JA 24 地区から KN 30 地区にかけての北西から南東方向に走る溝である。溝の南側に続く部分については、34 ラインのトレンチで溝と考えられる部分が確認されているため、溝 SD 0207 と同一方向の真東方向に走るものと考えられる。また、北側の続きについては JB から JJ 地区で溝の続きを確認している。これより、この溝は溝 SD 0201 と続くことが明らかである。規模は、検出長で約 40 m を、溝幅は約 3 m・深さ約 0.5 m を測る。断面は、逆台形状を呈する。平面形態は、前項で述べたとおり、KU~KW 地区にかけて溝幅が広くなり、溝 SD 0207 と一部がつながる形をとる。また、JA~KW 地区に関しては、溝幅が JA 地区では非常に狭くなっている。溝のもっとも広い部分については約 6 m を測るのに対して、もっとも狭いところでは約 1 m にすぎない。

溝の埋土は、黒色粘土層と黒色粘質砂層の大きく 2 種類からなる。層序は、上から淡黒色細砂土層、黒褐色粘土層、黒色粘土層、暗褐色砂層、黒褐色砂質土層、青灰色・黄褐色粘土層となっている。この溝は、黒色粘土層から地山 I・II まで掘削されているが、上面の溝の肩に相当する部分が他の溝と同様に検出が不可能であった。溝の上面には他の溝よりも大量の砂が堆積しており、これの流出によって完全に機能がなくなったことが窺われる。

溝の最下層である第 6 層の青灰色・黄褐色粘土層は地山 I・II に相当する土層のブロックである。この土層は溝の東側から一方的に崩落・流入したものであるが、西側から流入した痕跡はあまり見られない。第 5 層の黒褐色砂質土層は、第 6 層とほぼ同時期に溝肩部近くの崩落による流入と考えられる。第 3 層の黒色粘質土層は、第 2 層の黒褐色粘土層とあまり土質及び色調に差はない。第 3 層内にはブロック状の第 4 層暗褐色砂層が含まれている。また、溝内にはもっとも多量の遺物を含んでいた。時期は、弥生時代前期末から中



期初頭である。第1層は、中央付近に堆積した黒色細砂土層である。この溝が最終的に機能しなくなった時の流れ込み土層である。この土層の上位には、他の溝よりも厚い砂層と堆積がある。特に、KY

~KT 地区については、短期間に西側から砂層が流入したため完全に溝は埋まっている。また、この地区の溝の第1層で多量の足跡を検出することができた。足跡は約100か所あり、第1層の淡黒色細砂土層に切り込まれているもので、上位の砂層が流入していた。

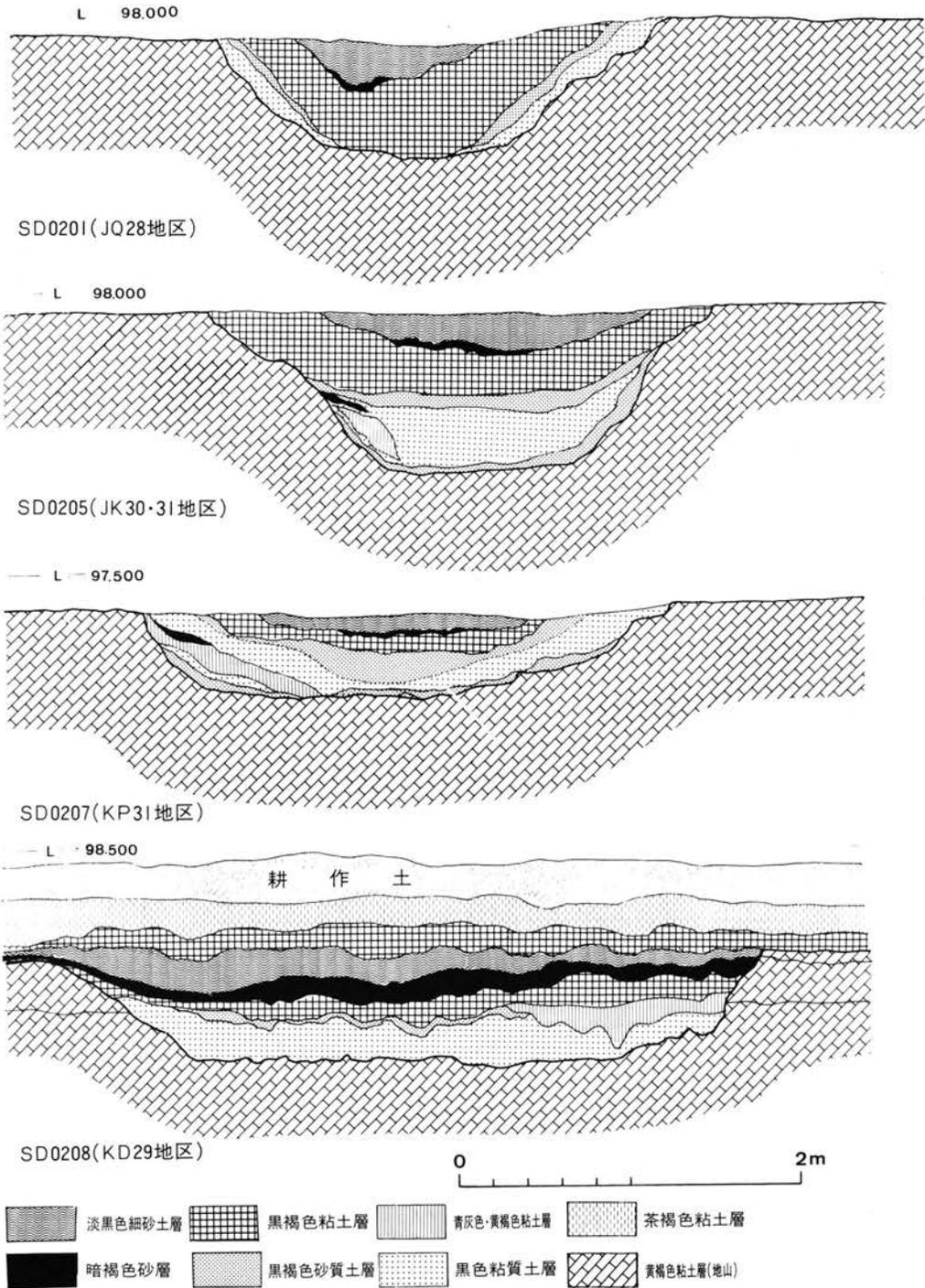
SD 0209(第6・27図)

調査地の北側中央部 JM 29 地区から JP 30 地区にかけて南北方向に走る溝である。この溝は西側に走る溝 SD 0201 と東側に走る SD 0205 の中間に位置し、同一方向に走る。溝の南側は JM 29 地区において消滅しているが、北側は両側の溝と同様で、JR 31 地区周辺を基点に大きく東方向へ弧を描きながら走っている。溝は他に比べ細く深い。規模は JM 地区から JP 地区までの長さ約 10 m を測る。溝幅は約 1.6 m ・深さ約 0.7 m を測る。断面は V 字形を呈する。溝内の層序は、上から黒色土層の粘質なものや砂質的なものが交互になっている。黒色土層間には地山 I ・ II と砂層のブロックや薄い堆積層がみられる。溝内の最下層である黒褐色砂質土層は、ほぼ水平に近い堆積状況を呈している。第 10 層の青灰色・黄褐色粘土層は、地山 I ・ II のブロック層である。西側からの一方的な崩落・流入であろう。東側からの流入が見られないところから、溝を掘削した排土は、西側に盛られていたことがわかる。第 8 ・ 9 層の堆積と第 6 ・ 7 層の堆積の跡に再度溝が掘られている。その埋土内には砂層の薄いブロック層が幾層かみられる。第 5 層から第 1 層までの堆積は、短期のものと思われる。第 5 層より上位は色調や土質にあまり変化がなく、明瞭な区分ができない。

この溝からの出土遺物は非常に少なく、第 5 層内から若干の第 I 様式から第 II 様式の弥生時代の土器片と石器が出土したにすぎない。

SD 132(第6図)

調査地の北西部 JM 24 地区から JM 26 地区にかけて東西に走る溝である。溝の東側は溝 SD 0201 の JM 26 地区から直角に伸び、JM 24 地区で消滅している。断面は、JM 25 地区にお



第 28 図 溝 SD 0201・0205・0207・0208 断面図

いて逆台形及びV字形を呈しているが、溝SD地区0201との接点においてはV字形を呈している。

溝内は、黒褐色粘土層の単一層である。溝は、地山Iの黄褐色粘質土層を深く掘り込んでいる。この溝からは、弥生時代前期末から中期初頭の土器片が多数出土した。

#### 溝SD 0109

調査地の東中央部JE 34地区からKX 35地区にかけて楕円形状を呈する細い溝である。JE 34地区から南側に楕円形を描きながらJA 37地区に走っている。また、KY 35地区において円形を描いていて分岐した溝が南側に一条走る。

この溝は、KX 34地区の南側で消滅する。楕円形の溝の北に走る部分については、JE 34・KY 37地区の状況から楕円形を呈するものと考えられる。楕円形と考えた場合の短径は、約14 m・長径約17 mを測る。溝幅は、約0.4 mを測る。断面はU字形を呈する。

溝の土層は、黒褐色土の単一層である。溝は、地山Iの黄褐色粘土層を切り込んでおり、弥生時代前期・中期の遺構と同じである。この遺構の位置は、今回調査を行ったところでは、もっとも高所にあり、大きく削平を受けていた。この溝からは、KY 35・36地区で後期後半の弥生式土器片が少量出土した。  
(村尾政人)

## 第2節 古墳時代の遺構

太田遺跡においては、古墳時代の遺構が非常に少なく、明確に判断できるものはない。遺物についても、この時代のものはKV～JD地区とJM～JS地区に集中して若干出土しているが、遺構に伴うものは少ない。

#### 土壇SK 212

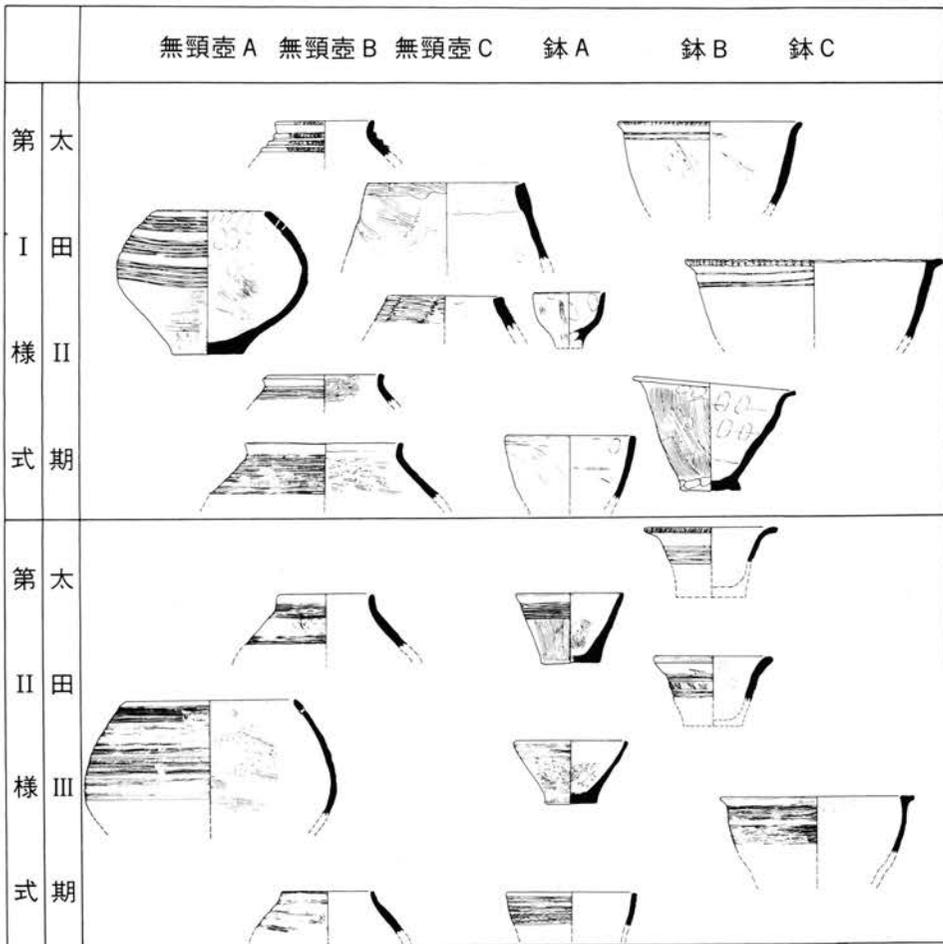
JR 27地区で検出された小形の土壇である。形状は、南北方向に長い楕円形を呈する。規模は、全長約0.8 m・幅約0.5 m・深さ約0.85 mを測る。断面は、床面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土層の単一層である。土壇の上には古墳時代の土師質の甗が、土壇を覆いかぶせた状態で出土した。甗は、約4つに割られて土壇の蓋に転用されていた。  
(村尾政人)

### 第3章 遺物

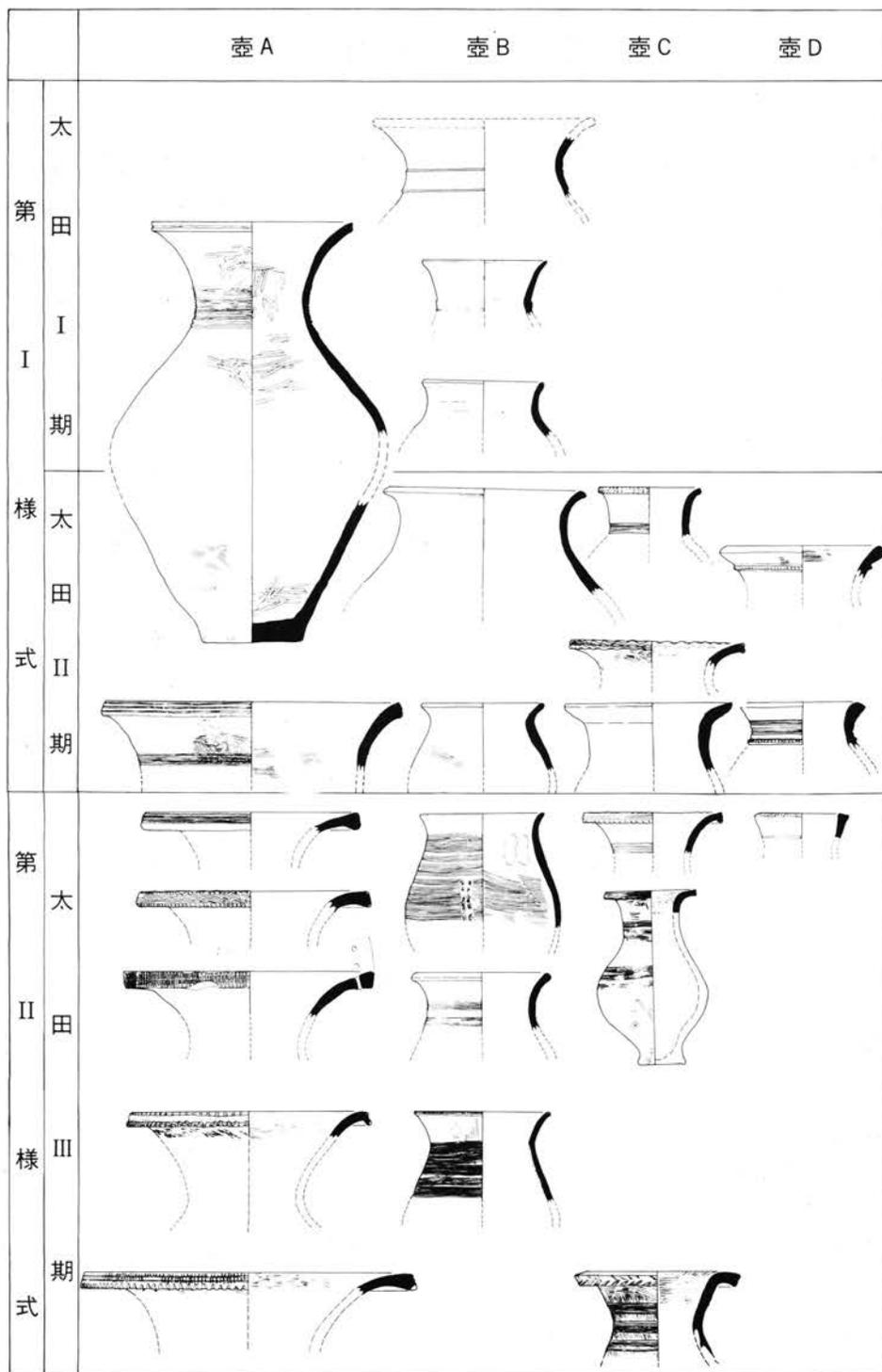
太田遺跡で出土した遺物は、土器類・石器類・木器類・玉類などに分けられる。これらの遺物には、縄文時代晩期から鎌倉時代に至るものもあるが、主に弥生時代前・中期のものである。出土地点としては、上層の遺物包含層からと溝内の遺構から出土したものが多。特に溝 SD 0207・SD 0208 出土の土器・木器・石器や、弥生時代前期の土壇群内から出土した土器・石器はそれぞれの時期を決める良好な資料である。

#### 第1節 土器

出土遺物の約90パーセントは、弥生時代前・中期の土器・石器・木器である。特に、弥



第 29 図 太田遺跡出土土器分類図(1)



第 30 図 太田遺跡出土土器分類図(2)

生土器は他の遺物に比べて遥かに量が多い。

### 1 縄文土器(第76図)

縄文土器は、遺物包含層と溝SD 0207から3点出土した。縄文時代後期の磨消縄文の土器(1)、縄文晩期の口縁端部下に刻み目突帯文をめぐらしたもの(2・3)がある。1は、上半に横方向の3条の沈線と下半に横方向の $2 + \alpha$ 条の沈線をめぐらし、その間に縄文を施している。上下の沈線外は縄文が磨消されている。2・3は口縁部がほぼ直立する深鉢である。口縁部よりやや下がったところに1条の突帯をめぐらし、「四」字状の刻み目を施している。

### 2 弥生土器

弥生土器については、出土数が多いものの、完形品が少ないため、精密な形態分類を行うことは困難であった。したがって今回出土した弥生土器については小片を含めて、口縁部及び体部の特徴によって器種分類を行った。

#### A. 型式分類

##### ①第I様式土器

##### (1) 壺形土器

壺A 太く長い頸部から口縁部が大きく開くいわゆる広口壺である。口縁端部の形状は肥厚せずそのままおわるもの(A<sub>1</sub>)とわずかに肥厚して端部に面をもち、ヘラ描直線文をほどこすもの(A<sub>2</sub>)に分類できる。

壺B 短く開く口縁部をもつ。口縁端部は、肥厚せずにそのまま丸くおさめて、文様をもたない。

壺C ほぼ直立した長い頸部をもち、短く開く口縁部をもつ。口縁端部の形状は、肥厚せずにそのままおわるもの(C<sub>1</sub>)とわずかに端部に面をもち、文様帯をもつもの(C<sub>2</sub>)とがある。

無頸壺A 球形に近い体部を呈する。口縁部は、体部からそのまま至り、屈曲しない。口縁端部は、丸くおさめる。

無頸壺B 短い立ち上がりの口縁部を有し、口縁端部は面をもち、直立したままおさめている。

##### (2) 鉢形土器

鉢A 椀形の深い体部に、直立した口縁部をもつものである。

鉢B 口縁部がゆるやかに外反し、全体に小形から中形のものが多い。

鉢C 口縁端部に粘土紐を貼り付けて、上端面が平坦な逆L字状を呈するものである。口縁端部には刻み目をもつものともたないものがある。

(3) 甕形土器

甕A 口縁部が外反し、倒鐘形を呈するものである。口径と器高が17cmに満たない小形のものが多く。

甕B 口縁部が外反し、倒鐘形を呈するものである。全体に甕Aよりやや大きく、甕Aに比べて体部が丸味をおびている。

甕C 口縁部がゆるやかに外反し、頸部に貼付突帯をめぐらすものである。

甕D 口縁端部に粘土紐を貼り付けて、上端面が平坦な逆L字形を呈しているものである。口縁端部に刻み目をもつものもたないものがある。

甕E 口縁端部外面に粘土紐を貼り付けたものである。体部は小形のものが多く、大形のものはない。

(4) 蓋形土器

蓋A 円盤状の蓋形土器である。周縁部の相対する位置に2個一組の紐孔が穿たれている。

蓋B 笠状を呈する蓋形土器である。つまみ部の中心部が平坦なものと同凹んでいるものがある。

(5) 高杯

杯部から直直ぎみに外反する体部と、小さくて深く広い脚部をもつものである。

②第II様式土器

(1) 壺形土器

壺A 太く長い頸部から口縁部が大きく開くいわゆる広口壺である。口縁端部の形状は、肥厚せずにそのままおわるもの(A<sub>1</sub>)と肥厚した口縁端部に文様を施すもの(A<sub>2</sub>)がある。

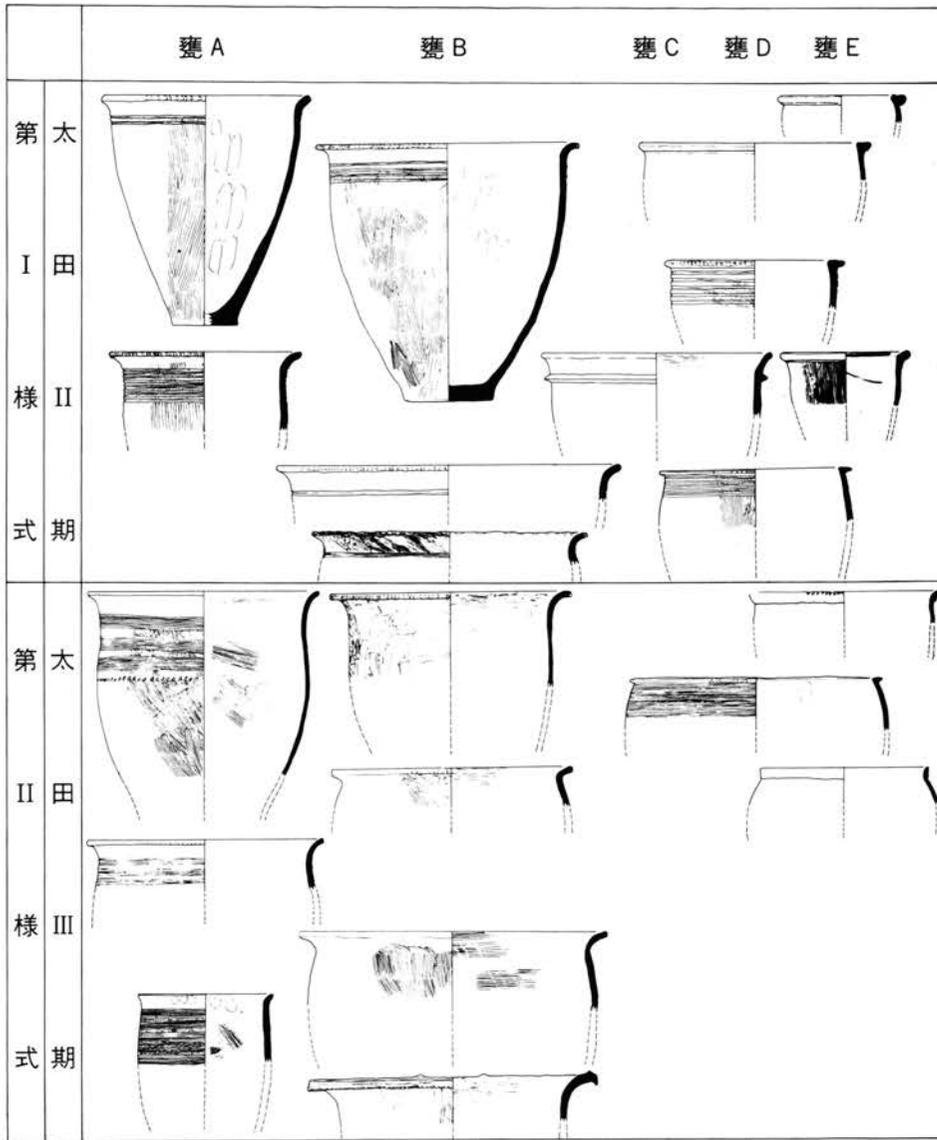
壺B ほぼ直立した長い頸部をもち、短く開く口縁部をもつ。口縁端部は、肥厚せずにそのままおさめる。

壺C ほぼ直立した長い頸部をもち、短く開く口縁部をもつ。口縁端部に面をもち、文様を施している。壺Aの小形に類する。

壺D 口縁部が短く上方へ突出ぎみのものである。直立ぎみの口縁部は、器壁が厚く、頸部と体部が明瞭な違いを呈し、体部は大きく裾広がりのものであったと考えられる。口縁端部は、厚く、面をもつ。

無頸壺A 球形に近い体部をもち、頸部の立ち上がりがなく、体部からそのまま口縁部にいたる。口縁端部をまるくおさめる。

無頸壺B 球形に近い体部と、短い立ち上がりの口縁部を有する。口縁端部は、面をもち、直立したままおさめている。



第 31 図 太田遺跡出土土器分類図(3)

無頸壺C 内傾する口縁部をもち、体部は、そろばん玉状を呈するものである。口縁部は器壁が厚く、端部には面をもっている。

(2) 鉢形土器

鉢A 直線的な口縁部をもつものである。体部は、底部から直線状ないしやや内湾ぎみに丸みをもって口縁部にいたっている。

鉢B 外反する短い口縁部を備えているものである。体部は、丸みをもち、突出ぎみの底部をもっている。

鉢C 口縁端部に粘土紐を貼り付けて、上端面が平坦な逆L字形を呈するものである。

(3) 甕形土器

甕A 口縁部がゆるやかに外反するもので、倒鐘形を呈するものである。体部に櫛描文を施している。

甕B 口縁部を強く折り曲げるものや著しく外反するものである。口縁端部には面をもつものがある。体部内外面に粗いハケを施している。

甕C 口縁部がゆるやかに外反し、頸部に貼付突帯をめぐらすものである。

甕D 口縁端部に粘土紐を貼り付けて、上端面が平坦な逆L字状を呈するものである。

甕E 口縁端部外面に粘土紐を貼り付けたものである。体部が小形のものが多い。

(4) 蓋形土器

蓋A 円板状の蓋形土器である。中央部近くの相対する位置に2個一組の紐孔が穿たれている。

蓋B 口縁部に向かって大きく開く笠形の蓋形土器である。つまみ部の中心部が平坦なものや凹んでいるものがある。

B. 各遺構出土の弥生土器

		蓋 A	蓋 B	高杯
第 I 田 様 式 期	太			
	田			
第 II 田 様 式 期	太			
	田			
第 III 田 様 式 期	太			
	田			

第 32 図 太田遺跡出土土器分類図(4)

①土壇(SK)

(1) SK 01

土壇 SK 01 からは壺の体部片(第 34 図 24)が 1 点だけ出土した。体部上半に貼付突帯を 1 条と下半にヘラ描き沈線を 5 + α 条めぐらせている。

(2) SK 06

土壇 SK 06 からは、弥生時代前期の小片が多く出土した。器形の判断できるものは、第 39 図 106 の鉢Bである。口縁部が外反する小型の鉢である。

(3) SK 08

土壇 SK 08 からは弥生時代前期の甕片と第 34 図 25 の壺体部片がある。体部上半から頸部にかけての部分で、

2条の貼付突帯と突帯間に2条のへら描き沈線をめぐらせている。

(4) SK 38

土壇 SK 38 からは第 34 図 7 の壺と第 36 図 62 の壺 A が出土した。7 は、短く外反する口縁部を有し、頸部に削り出し突帯をめぐらすものである。62 は、大きく外反する壺 A の口縁部である。口縁端部に面をもち、中央に1条のへら描き沈線と、上下に板の小口による綾杉の刻みを施している。

(5) SK 100

土壇 SK 100 からは、壺 A (第 37 図 73・82) が出土した。第 34 図の 8 は、壺の頸部である。頸部中央に幅広い削り出し突帯とへら描き沈線を  $3 + \alpha$  条めぐらせている。73 は、わずかに外反する甕の口縁部である。口縁端部に刻み目を施している。82 は、頸部に2条のへら描き沈線をめぐらせ、口縁端部に刻み目を施している。

(6) SK 130

土壇 SK 130 からは、弥生時代前期の壺(第 34 図 20, 第 35 図 40)と甕(第 37 図 77)が出土した。20 は、壺体部の上半である。  $7 + \alpha$  条のへら描き沈線をめぐらせている。40 は、壺体部である。貼付突帯をめぐらせた上に、大きな刻み目を施している。77 は、甕 B の口縁部である。口縁端部に刻み目を施しているほかに、頸部にへら描き沈線をめぐらせている。

(7) SK 132

土壇 SK 132 からは、弥生時代前期の壺(第 34 図 13・29, 第 35 図 34・43・53)・甕(第 38 図 89)・鉢(第 39 図 112)が出土した。13 は、壺 A の口縁部である。口縁端部にへら描き沈線を1条巡らせ、上下に刻み目を施している。29 は、壺の肩部である。  $7 + \alpha$  条のへら描き沈線をめぐらせ、沈線間に竹管文を施している。112 は鉢の口縁部である。口縁部直下に  $4 + \alpha$  条のへら描き沈線をめぐらせている。

(8) SK 134

土壇 SK 134 からは、甕(第 37 図 80)と鉢 C (第 39 図 11)が出土した。80 は口縁端部に刻み目を施し、頸部に  $5 + \alpha$  条のへら描き沈線をめぐらせている。114 は逆 L 字状の口縁部である。

(9) SK 135

土壇 SK 135 からは、壺片(第 35 図 37)が出土した。壺の頸部から肩部にかけての位置に円弧を描く貼付突帯が2条めぐっている。

(10) SK 136

土壇 SK 136 からは、壺(第 34 図 19, 第 35 図 33, 第 36 図 69)・甕(第 35 図 47・48・54・55, 第 37 図 75・83, 第 38 図 86)が出土した。19・33 は壺の体部で、へら描き沈線と貼付

突帯をめぐらす。69は壺の体部で、体部の最大径にヘラ描き沈線を15条めぐらせている。47は、口縁部がわずかに外反する甕である。口縁端部に刻み目を施し、頸部に7条のヘラ描き沈線をめぐらせている。48は、大きく外反する甕の口縁部である。口縁端部に上下2列の刻み目を施している。54・55・83は、甕Dの口縁部である。逆L字状の口縁端部には刻み目を施すもの(54・83)と施さないもの(55)がある。83は、頸部に6条のヘラ描き沈線をめぐらせている。75は、甕Bの口縁部である。口縁端部に刻み目を施し、頸部に7条のヘラ描き沈線を施している。

(11) SK 139

土壇 SK 139 からは、鉢B(第38図90)が出土した。大きく外反する口縁部である。

(12) SK 142

土壇 SK 142 からは壺(第35図30)が出土した。これは壺の体部で $2 + \alpha$ 条の貼付突帯をめぐらせるものである。突帯は細いもので、刻み目を施している。

(13) SK 143

土壇 SK 143 からは甕(第35図49)が出土した。49は口縁端部に刻み目と頸部にはヘラ描き沈線をめぐらせている。

(14) SK 145

ここからは、弥生時代前期の壺A(第36図63)が出土した。これは、大きく外反した口縁部である。口縁端部には、中央に1条のヘラ描き沈線と上下端に刻み目を施している。

(15) SK 147

土壇 SK 147 からは、壺B(第36図59)と甕A(第38図94)が出土した。59は、口縁端部外面に粘土紐を貼り付け、刻み目を施している。94は、頸部にヘラ描き沈線を巡らせている。

(16) SK 148

土壇 SK 148 からは、壺D(第36図60)と鉢A(第39図111)が出土した。60は短く外反する厚い口縁部で、頸部に1条の貼付突帯をめぐらす。111は、ほぼ直立する鉢の口縁部と思われる。

(17) SK 149

土壇 SK 149 からは壺A(第34図14, 第36図61・64・66)・壺B(第36図67)・壺(第34図11・16・18・22・26, 第35図31・32・35・38・39・44)・無頸壺C(第36図68)・甕A(第37図74, 第38図92・93)・甕B(第37図78)・甕(第36図46, 第35図50・51・56・57, 第39図113)・鉢(第39図105)が出土した。14・61・66は、壺Aの口縁部である。口縁端部に面をもち、ヘラ描き沈線を施す。11・31・32・35・38・39・44は、壺の体部に貼

付突帯文を数条巡らせるものである。16・18・22・26は、壺の体部にへら描き沈線を数条施しているものである。67は、口縁端部と頸部に竹管文を施すものである。68は、器壁が厚い無頸壺である。口縁端部に面をもち、体部外面に粗い条痕文を施している。46・50・52・56・57・74・78・92・93は、甕の口縁部である。頸部に数条のへら描き沈線を巡らせている。口縁端部に刻み目をもつものと(46・51・74・78・113)ともたないもの(92・93)がある。105は、大型で無文の鉢である。

## (18) SK 150

土坑 SK 150 からは壺A(第34図10)・壺体部(第34図27, 第35図41)が出土した。10は、 $3 + \alpha$  条の貼付突帯を巡らせる壺の頸部である。27は、 $6 + \alpha$  条のへら描き沈線を施す壺体部である。41は、 $1 + \alpha$  条の細い貼付突帯を巡らせる壺の体部である。

## (19) SK 153

土坑 SK 153 からは、壺(第34図12・15・23・28)・甕B(第37図76・81)・鉢C(第39図115)が出土した。12は、 $12 + \alpha$  条の大きな突起を有する貼付突帯のある壺の頸部である。15・28は、へら描き沈線を数条施した壺の体部である。76は、頸部に3条のへら描き沈線と口縁端部に刻み目を施した甕である。81は、頸部に $7 + \alpha$  条のへら描き沈線と口縁端部に刻み目を施した甕である。115は、口縁部が逆L字状を呈する大型の鉢である。

## (20) SK 154

土坑 SK 154 からは壺(第35図42, 第36図65)・鉢(第39図109)が出土した。42は、壺の頸部に細い貼付突帯文を巡らせている。65は、口縁端部に刻み目を施したものである。109は、無文の鉢の破片である。

## (21) SK 155

土坑 SK 155 からは、口縁端部に刻み目を施した甕B(第38図88)がある。

## (22) SK 157

土坑 SK 157 からは壺(第35図36)が出土した。これは、壺の頸部下半に貼付突帯を $3 + \alpha$  条巡らせたものである。

## (23) SK 160

土坑 SK 160 からは、壺(第36図70)と鉢B(第39図110)が出土した。70は、球形に大きく張る壺の体部である。体部上半にはへら描き沈線を巡らせている。110は、大型の無文の鉢Bである。

## (24) SK 202

土坑 SK 202 からは、口縁端部に面をもつ無文の甕B(第38図91)が出土した。

## (25) SK 203

土坑 SK 203 からは、壺(第 34 図 9)が出土した。これは、頸部に幅広い削り出し突帯をもつ壺 A である。

(26) SK 204

土坑 SK 204 からの出土遺物は、第 I 様式の壺と甕が合口状になった状態で出土したものと、ほかに壺の破片が数点あった。破片は、土坑の上部に散乱していたが、合口状になっていた壺と甕は、土坑の西側に中位から下位にかけて集中していた。

(27) SK 205

土坑 SK 205 からは、壺 B(第 36 図 58)と甕(第 35 図 45, 第 38 図 87)・蓋(第 36 図 72)が出土した。58 は、直立ぎみに立ち上がる壺の口縁部である。45 は、頸部に 1 条のへら描き沈線を巡らせ、口縁部に刻み目を施す甕である。87 は、直立ぎみのあまり外反しない甕 A の口縁部である。口縁端部には刻み目を施している。72 は、小型の壺用蓋である。口縁端部には、面をもち、体部に孔を穿っている。

(28) SK 240

土坑 SK 240 からは、壺 A(第 33 図 2・3)・壺 B(第 33 図 4, 第 37 図 79, 第 38 図 95・96)・底部(第 33 図 5・6)が出土した。1 は、直立ぎみの壺の口縁部である。2 は、大きく外反する壺の口縁部である。口縁端部に面をもち、中央に 1 条のへら描き沈線と上下端に刻み目を施している。3 は、大型で長胴の壺 A である。大きく外反する口縁部を有し、頸部に 14 条と口縁端部に 1 条のへら描き沈線を巡らせる。96 は、大型の口縁部である。口縁端部に面をもち、頸部に耳状の把手をもっている。79 は、頸部に 6 条のへら描き沈線を巡らせ、口縁端部に面をもつ甕である。

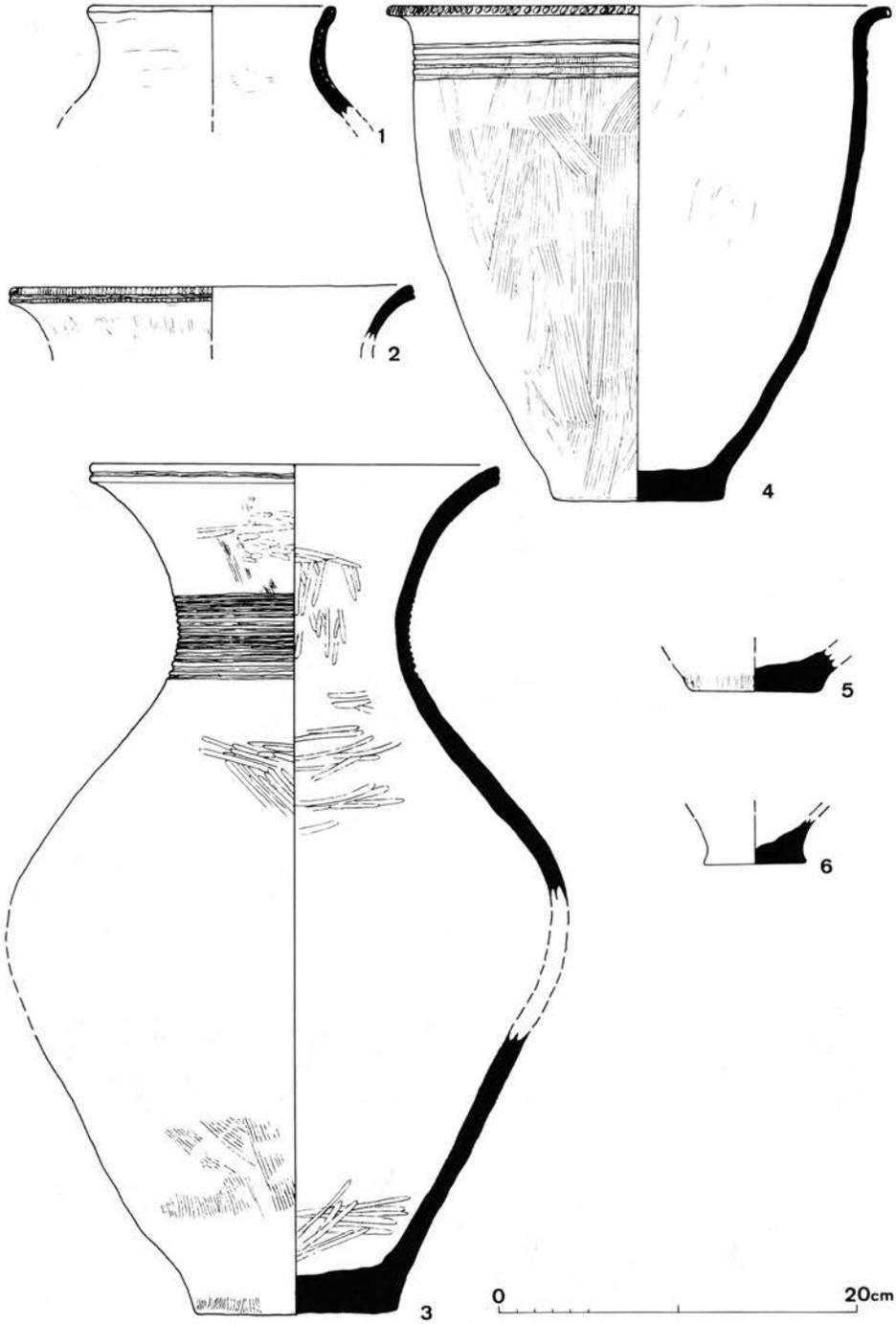
(29) SK 250

土坑 SK 250 からは、鉢 B(第 39 図 108)が出土した。108 は、口縁端部に面をもつ無文の鉢である。底部は、わずかに下半が広がり、器壁が厚い。調整は、外面に立てハケ、内面に指圧痕を残している。

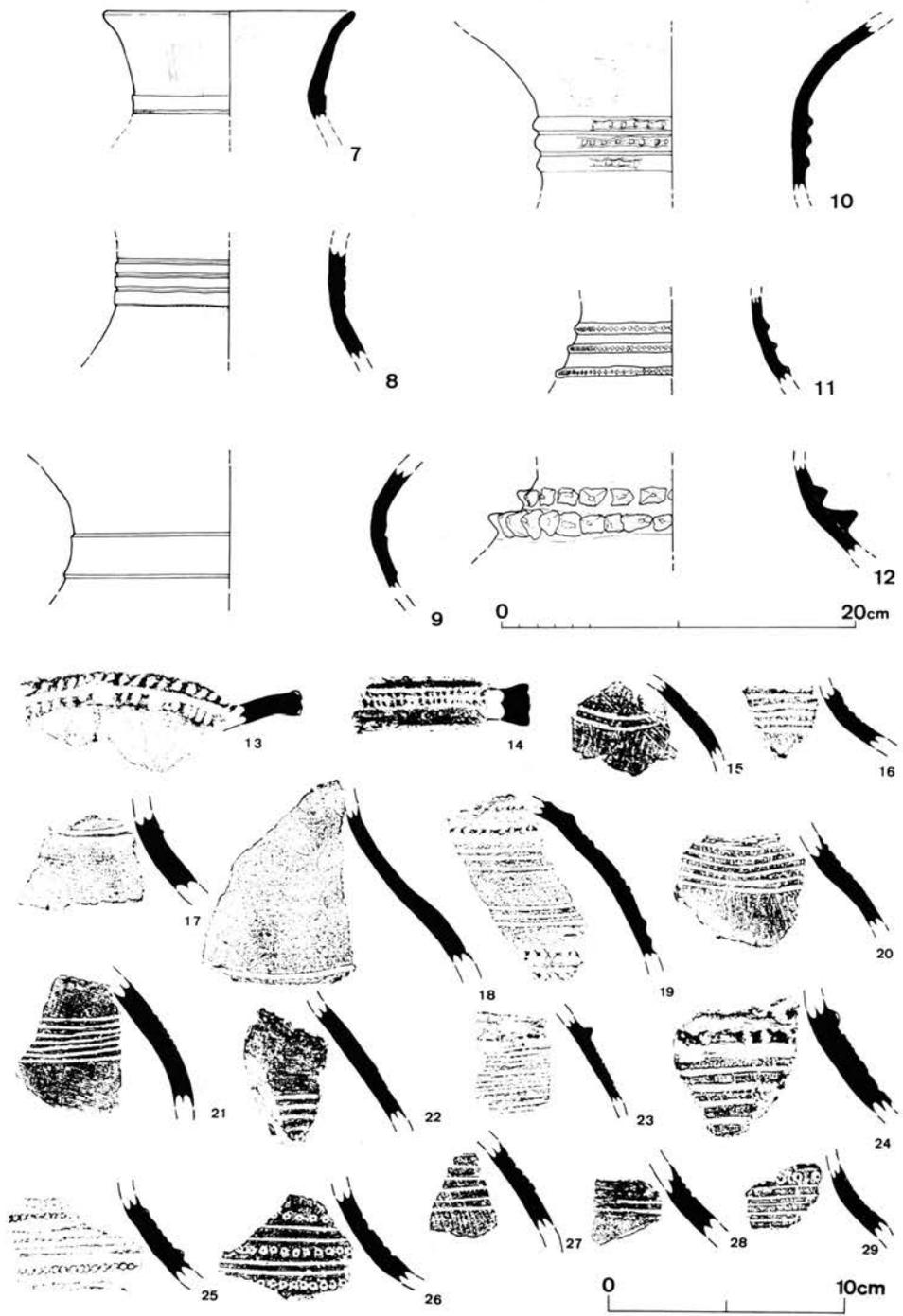
②溝(SD)

(1) SD 0201(第 40 図)

溝 SD 0201 からは、壺 A(第 40 図 2)・壺 B(同 1)・壺(同 5・6・7)・無頸壺 B(同 3)・無頸壺 C(同 4)・甕 B(同 8・9・10・12)・甕 D(同 11・13)・底部(同 14~18)が出土した。2 は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部に刻み目を施している。1 は、小型の壺 B である。体部に 4 条一組の櫛描沈線を巡らせている。5・6 は、壺の頸部である。細い貼付突帯文を巡らせている。7 は、球形をした壺の体部である。3 条一組の櫛描直線文帯を下半に巡らせ、一部ナデ消した後にへら描きによる円弧を施し、流水文を描いてい



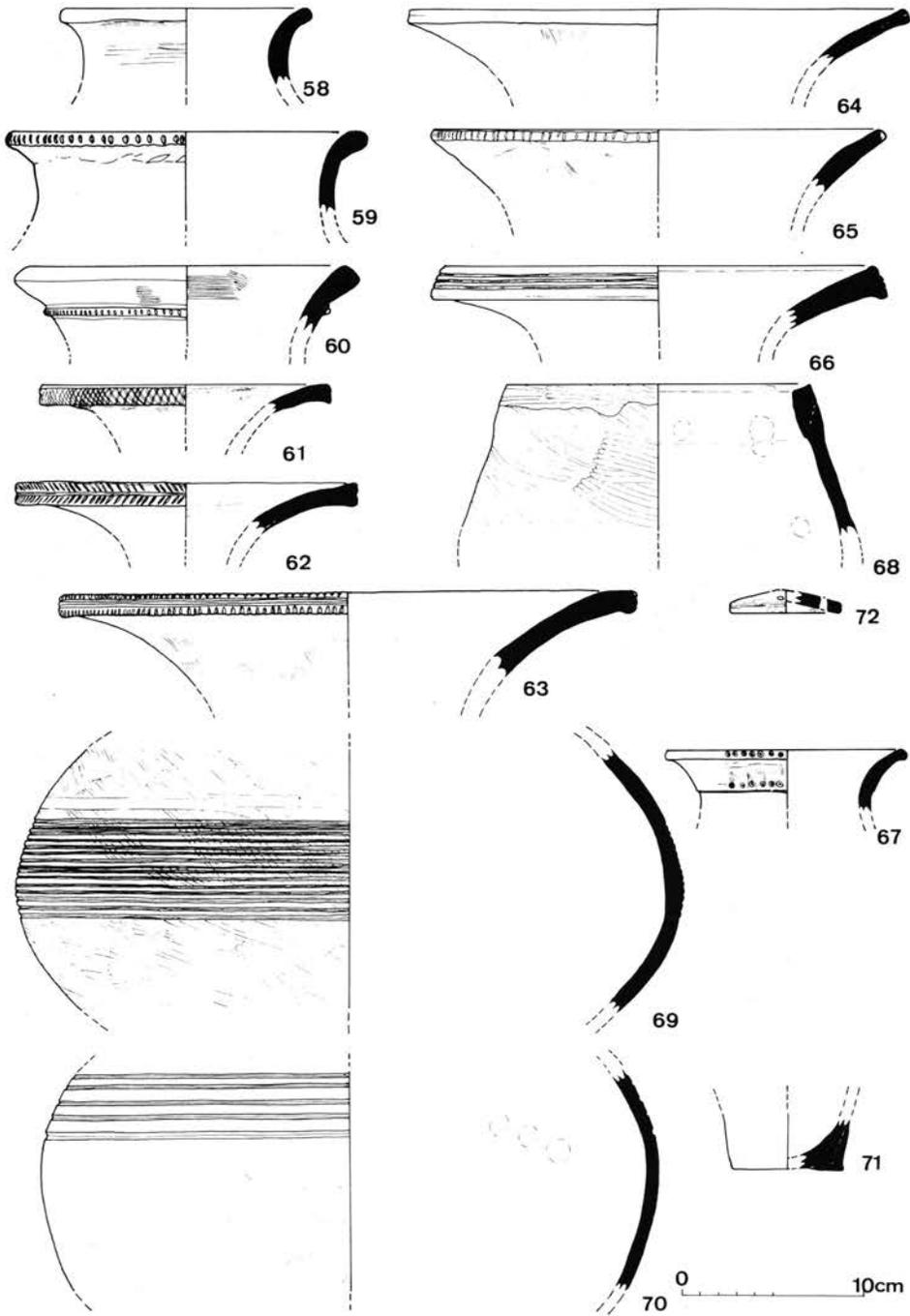
第 33 図 土塚 SK 204 出土土器



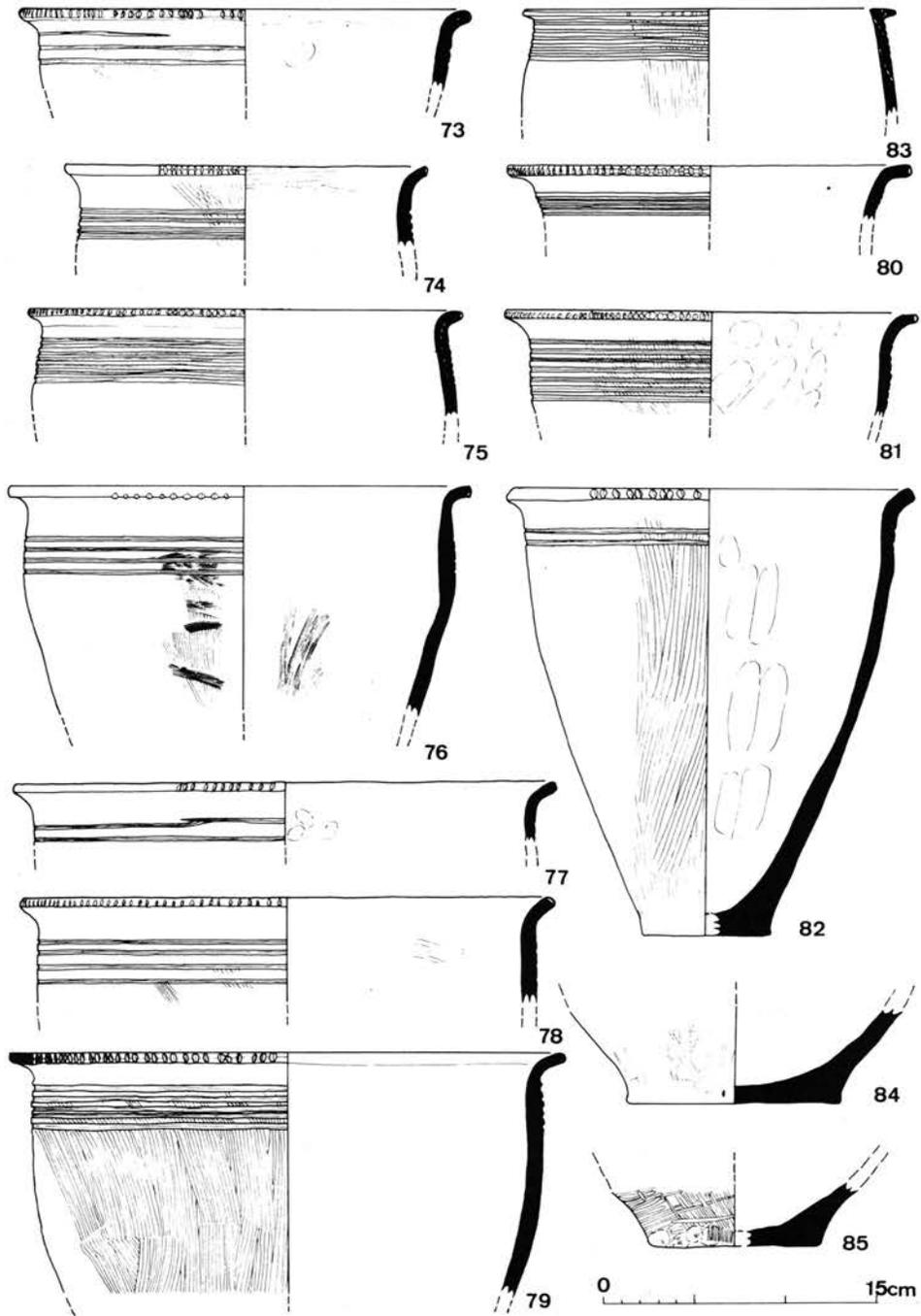
第 34 図 土坑出土土器拓影（壺口縁部・体部）



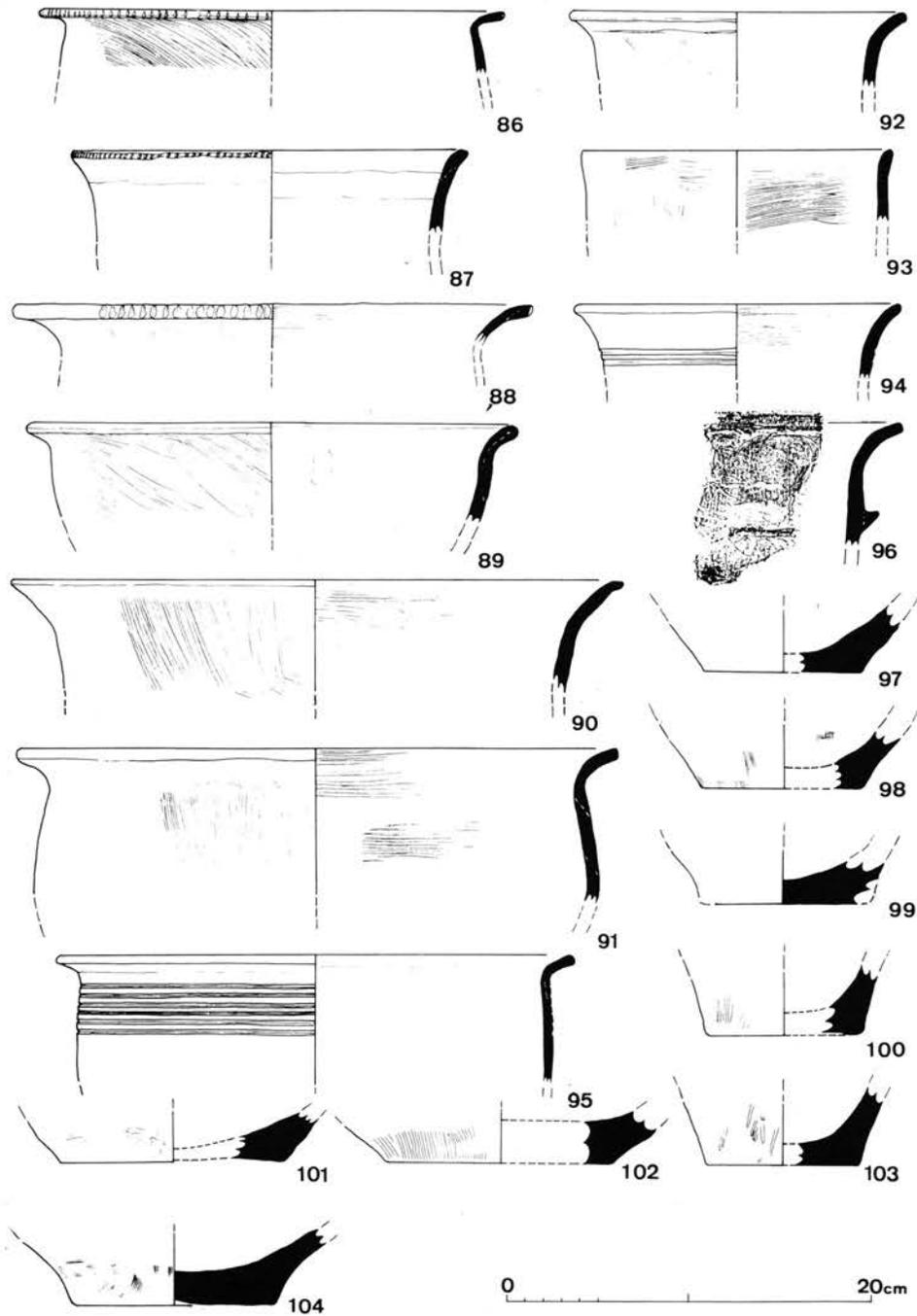
第 35 図 土坑出土土器拓影 (壺体部, 甕口縁部・体部)



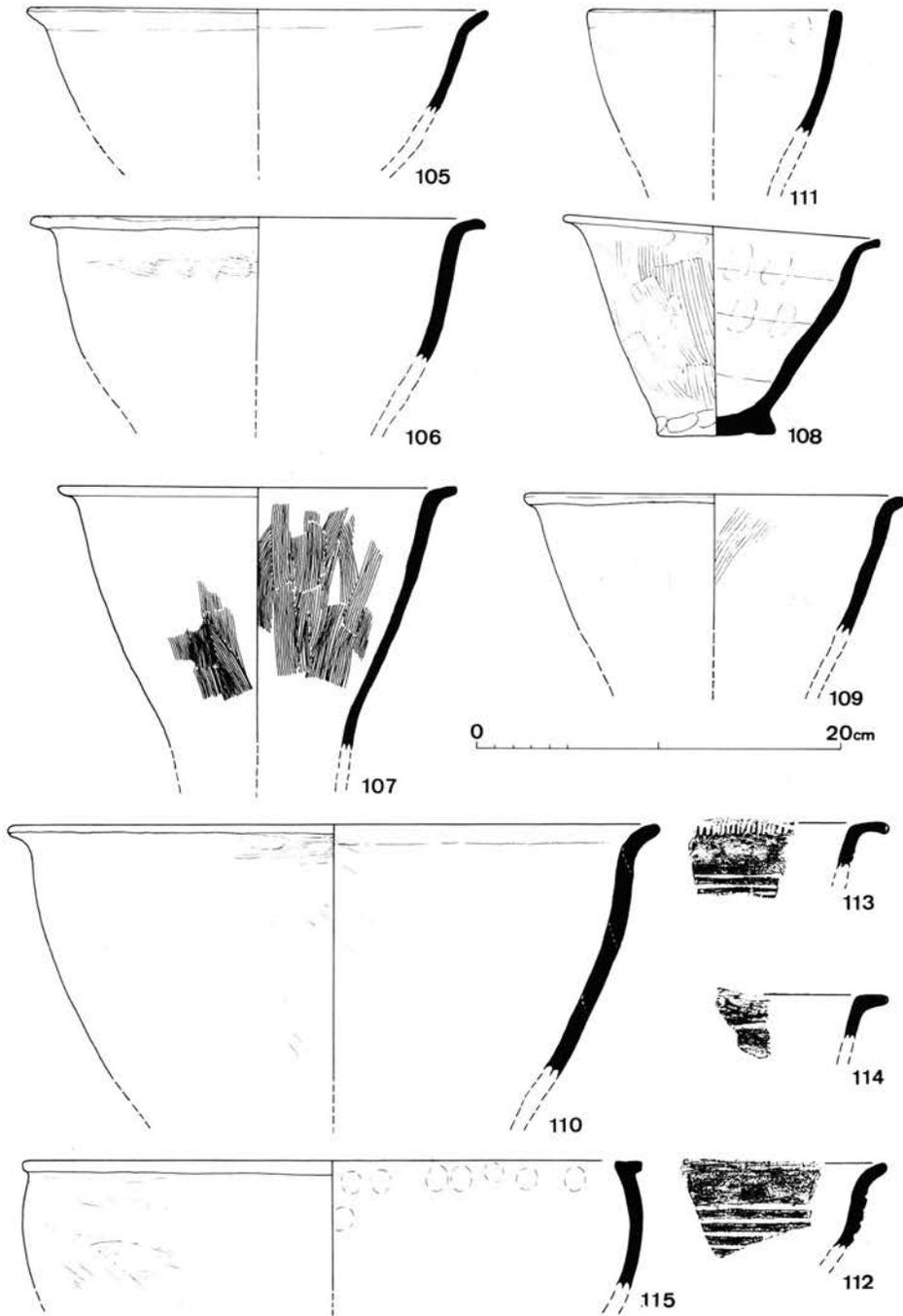
第 36 図 土坑出土土器（壺口縁部・体部，蓋）



第 37 図 土壇出土土器 (甕口縁部・体部・底部)



第 38 図 土壇出土土器（甕口縁部・底部）



第 39 図 土坑出土土器 (鉢)

る。流水文帯の間は櫛先による2条の列点文を施している。3は、口縁部がわずかに直立した無頸壺Bである。体部には貼付突帯文を巡らせ、口縁端部と貼付突帯文には刻み目を施している。4は、口縁端部に面をもつ器壁の厚い無頸壺Cである。外面に粗いハケ目を施している。8は、頸部にへら描き沈線を巡らせ、口縁端部に刻み目を施している。9は、口縁端部に面をもつ無文の甕である。10は、外面に粗いハケ、内面に横ハケを施している。口縁端部には、刻み目を施している。12は、大型の甕の口縁部である。口縁端部に面をもち、上下両端に刻み目を施している。11は、頸部に16条のへら描き沈線を巡らせている。口縁部は、外面に粘土紐を貼り付けた逆L字状を呈するものである。上端は、水平な面を呈している。13は、頸部にへら描き沈線を巡らせ、口縁外面に粘土帯を貼り付けた逆L字状口縁を呈する。口縁端部には刻み目を施している。14・16・17は、壺の底であり、15・18は甕の底部である。

(2) SD 0205(第41・42図)

溝SD 0205からは、壺A(2・3・5・16・17)・壺C(4)・壺(6・18~32)・甕A(8・9)・甕B(7・10)・甕D(11・36~38)・甕C(39)・甕(33~35)・蓋(1)・底部(13~15)が出土した。

2・3は、大きく外反する口縁部である。この内3は、口縁端部にへら描き沈線が1条巡る。5・16・17は、大きく外反した口縁部である。5は、口縁端部に面をもち、へら描き沈線を3条巡らせ、刻み目を施している。16は、口縁端部の上端にへら描き沈線を1条巡らせ、刻み目を施している。下端は、小さな竹管文を2列施している。17は口縁端部に面をもち、面の上下端に刻み目を施している。4は、直立ぎみに立ち上がる壺Cの口縁部である。頸部に数条の櫛描文を巡らせ、口縁端部に1条のへら描き沈線をめぐらせたあと刻み目を施している。6は、大きく張った壺の肩部である。上半に4+ $\alpha$ 条、中央に4条、下半に貼付突帯を巡らせ、刻み目を施している。18も、壺の頸部である。幅広い削り出し突帯文が1条巡る。19は、壺の頸部に1条の削り出し突帯がめぐり、中央にへら描き沈線を施している。

20は、壺の口縁部内面に貼付突帯を巡らせるものである。21も壺の頸部である。2+ $\alpha$ 条の貼付突帯とその下半にへら描き沈線を巡らせる。22は、口縁部内面に突出ぎみの貼付突帯を1条巡らせている。23は、壺体部上半である。へら描き沈線を7条巡らせ、その間に櫛描による山形文と竹管文を施している。25は、壺の体部上半である。中央に5条一組の櫛描の波状文を巡らせ、その下半に5条一組の櫛描による流水文を巡らせている。上半には、5条一組の櫛描直線文を2帯と波状文を巡らせている。26も、壺体部上半である。4条一組の櫛描流水文とその上下に櫛描文を巡らせている。27は、3条のへら描きによ

て山形状の円弧を描いている。後期に属するものである。上層部分での混在か。28は、4条一組の櫛描により波状文と直線文を巡らせている。また29は、5条一組の櫛描直線文と波状文を交互に巡らせている。30は、器壁の厚い壺の体部である。4条一組の櫛描直線文2帯と縦方向の櫛描文を2帯施し、山形文を描いている。31は、4条一組の櫛描直線文を巡らせ、下半にはその上から4条一組の斜格子文を施している。32は、ヘラ描きの細い沈線を巡らせている。

12は、大型の鉢Bである。口縁端部に小さな刻み目を施している。一方8・9は、口縁端部に面をもち、刻み目を施す甕Aである。10は、口縁端部が欠損しているが、外面縦方向・内面横方向の粗いハケを施した甕Bである。11は、頸部に5条のヘラ描き沈線を巡らせ、口縁端部外面に粘土紐を貼り付けた逆L字状の口縁部を呈する甕Dである。また36・38は、無文の逆L字状口縁部を呈する。37も、頸部に5 +  $\alpha$  条のヘラ描き沈線を巡らせ、口縁端部に小さな刻み目を施す逆L字状口縁の甕Dである。

39は、頸部に貼付突帯を巡らせ、突帯と逆L字状口縁端部に刻み目を施している。33は、口縁端部には、大きな刻み目を施し、口縁部内面上半に5条一組の櫛描沈線を巡らせている。35は、直立した口縁部上端に面をもつ甕である。外面上半には耳状把手をもっている。13・14・15は壺等の底部である。器壁が厚く大型のもの(14・15)と小型のもの(13)がある。

### (3) SD 0207(第43~56図)

溝SD 0207からは、畿内第I・II様式の土器が多量に出土した。分類では壺A(1・4・16~22・33~43)・壺B(2・3・5・9・30・32・44)・壺C(23)・壺D(31)・無頸壺B(24・25・60・61)・無頸壺C(97)・鉢A(10・222~224)・鉢B(189・191・219~221)・甕A(185・187・192・196~198・201・214~216・225~229)・甕B(181~184・186・188・190・193~195・199・200・202~209・213・240~248)・甕C(212)・甕D(164~167・179・180・210・211)・甕E(162・217・218)・蓋A(57・58)・蓋B(49~56・116)・高杯(59)が出土した。

16は、口縁端部に面をもち、2条のヘラ描き沈線を巡らせ、下端に小さな刻み目を施している。17は、口縁端部を丸くおさめ、大きな刻み目を施している。18は、口縁端部がわずかに厚くなり、面をもっている。2条のヘラ描き沈線を巡らせ、小さな刻み目を上下に3段に施している。また19~21は、いずれも口縁端部に面をもち、ヘラ描き沈線を巡らせ、刻み目を施している。38は、口縁端部に面をもち、端面に櫛描直線文と上下端に刻み目を施している。口縁部内面には9条一組の櫛描文が2帯巡っている。39は、口縁端部が垂下し、端部にわずかの凹みをもっている。上下端に刻み目を施しているのに対し、40は、口縁端部がわずかに肥厚し、端面に中央と下端に刻み目を施している。さらに41も、

口縁端部が下方に肥厚し、端面には2条のへら描き沈線を巡らせ、中央に細い刻み目と下端に大きな刻み目を施している。42は、口縁部が垂下した状態で拡張し、面をもつ。端面中央には2条の細いへら描き沈線を巡らせ、細かい刻み目を施している。43は、口縁端部が上方につまみ上げられた状態の受口状を呈する。上端には、大きな刻み目を施している。

2・3・5・8・9は、短く外反する無文の壺Bの口縁部であるのに対し、6は、頸部に2条以上のへら描き沈線を巡らせているし、7は、口縁端部に面をもち、口縁部内部に小さな刺突文を施している。一方30は、短く外反する口縁部であって、口縁端部はわずかに肥厚し、面をもっている。頸部と口縁端部に数条の櫛描文を巡らせている。口縁部に紐孔をもっている。32は、頸部に数条の櫛描文を巡らせ、口縁端部に面をもち、小さな刺突文を施している。44は、頸部から垂直ぎみな「く」の字状に外反する壺である。頸部には櫛描直線文と波状文を巡らせ、口縁端部には刻み目を施している。23は、直立ぎみに外反する壺Cの口縁部である。頸部にへら描き沈線を数条と口縁端部に1条めぐらせ、口縁端部上下に刻み目を施している。31は、直立ぎみに外反した壺Dの口縁部である。口縁端部が肥厚し、端面中央に2条のへら描き沈線と上下端に刻み目を施している。61は、球形の体部を呈し、口縁部が内傾した無頸壺Bの破片で、体部にそれぞれ数条の櫛描文を10帯巡らせる。上部から2帯目と3帯目には、一部流水文状の文様を施している。24・25は、口縁部が体部から直立した無頸壺Bである。体部にはへら描き沈線が数条巡らされている。口縁端部は面をもっている。60も、体部から直立した口縁部をもった無頸壺である。体部には一部流水文状を呈する4条の櫛描文帯が巡っている。

222・223は、底部から口縁部まで直立した小型の鉢Aである。222は、頸部に8条の櫛描文帯を巡らせているのに対し、223は頸部に4条一組の櫛描直線文帯を3帯巡らせている。特に223の口縁端部は面をもっている。224は、体部がやや内傾しながら口縁部にいたる。体部には4条一組の櫛描直線文帯が $8 + \alpha$ 帯巡っている。

189は、口縁部が外反した鉢Bである。体部に3条一組の櫛描文帯を $4 + \alpha$ 帯巡らせ、口縁部には刻み目を施している。219は、口縁部が大きく外反した無文の鉢であり、220～221は、体部が深く、口縁部が外反した鉢である。口縁端部に面をもち、刻み目を施している。

185は、口縁部が大きく外反した甕の口縁部である。口縁端部に面をもち、刻み目を施している。187は、口縁部がわずかに外反した甕である。体部にへら描き沈線による流水文が施されている。192は、小型の甕である。頸部に8条以上のへら描き沈線を巡らせている。196は、体部がわずかに張り、やや外反した口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめた無文の甕である。197は体部がわずかに張り、口縁部が「く」の字状に外反している。口縁端部に面をもち、器壁は全体に薄い。体部外面には粗い縦方向のハケを施している。201は、口縁

部が大きく外反した無文の甕である。口縁端部を丸くおさめている。214は、口縁部がわずかに外反した甕である。口縁端部に刻み目を施している。215は、口縁部が外反した無文の甕で、口縁端部を丸くおさめている。216は、口縁部がわずかに外反した甕である。口縁端部に面をもち、刻み目を施している。225は、口縁端部がわずかに外反した小型の甕である。体部から頸部にかけて数条の櫛描沈線文帯が5帯以上巡っている。上帯から4帯目は波状文であるが、ほかは直線文である。226は、口縁端部に1条の凹状の面を施している。頸部に7条一組の櫛描文が数帯巡っている。227は、頸部が大きく屈曲した甕である。口縁端部を丸くおさめ、小さな刻み目を施し、頸部に4条一組の櫛描文を3帯巡らせている。228は、口縁端部に面をもっている。頸部に11条一組の櫛描文を3帯とその下位にへら先による刺突の列点文が施されている。229は、鉢状に体部から大きく外反している。口縁端部に小さな刻み目を、頸部に5条一組の櫛描文を3帯巡らせている。

181は、口縁端部下端に小さな刻み目を施し、頸部に $3 + \alpha$ 条のへら描き沈線を巡らせている。182は、口縁端部にわずかに面をもち、小さな刻み目を施している。頸部に7条のへら描き沈線を巡らせている。183は、口縁部がわずかに外反した甕である。口縁端部に小さな刻み目を施し、頸部に3条のへら描き沈線を巡らせている。184は、口縁部が「く」の字状に曲がり、口縁端部に面をもっている。口縁端部下端に小さな刻み目を施し、頸部に6条のへら描き沈線を巡らせている。186は、口縁端部に刻み目を施し、頸部に5条のへら描き沈線を巡らせている。188は、頸部から大きく外反した甕の口縁部である。口縁端部に面をもち刻み目を施している。頸部にはへら描き沈線が巡っている。190は、「く」の字状に外反している甕の口縁部である。口縁端部には面をもち大きな刻み目を施している。頸部にはへら描き沈線を巡らせている。193は、頸部から大きく外反した大型の甕の口縁部である。口縁端部を丸くおさめ小さな刻み目を施している。頸部には11条のへら描き沈線が巡っている。195は、わずかに張った胴部から「く」の字状に外反した甕の口縁部である。口縁部に面をもち、刻み目を施している。頸部には4条のへら描き沈線が巡る。199は、直立ぎみの口縁部で、口縁端部を丸くおさめた無文の甕である。200は、口縁部がわずかに曲折した甕の口縁部である。口縁端部に面をもっている。202は、わずかに張った体部から曲折した口縁部で、口縁端部を丸くおさめている。無文である。

240は、端部が巻き込むように外反した口縁部である。口縁端部上端に刻み目を施し、体部外面に粗い縦方向のハケ目を施し、内面には同様の横方向のハケ目を施している。

241は、大きく外反した甕の口縁部である。口縁端部に面をもっている。242は、端部がわずかに巻き込むように外反した甕の口縁部である。体部外面に粗い縦方向のハケ目を施している。243は、少し張った体部から大きくくびれた頸部を呈する甕である。体部外面は

縦方向の、内面は横方向のハケ目を施している。244は、体部から大きく外反した甕の口縁部である。口縁端部に面をもち、体部外面に縦方向の、内面に横方向のハケ目を施している。245は、端部を巻き込むように外反した甕の口縁部である。口縁端部下端に刻み目を施し、体部外面に縦方向の、内面に横方向のハケ目を施している。246は、口縁部が大きく外反した甕である。口縁端部に粗いハケ目を、内面に横方向の粗いハケ目を施している。247は、口縁部が直立ぎみに外反した大型の甕である。口縁端部に面をもち、小さな刻み目を施している。248は、口縁部が大きく外反した甕である。口縁部は、器壁が厚く、端部が垂下し、面をもっている。口縁端部は粗いハケによる横方向の調整があり、垂下した端部には刻み目を施している。体部外面には縦方向の、内面には横方向の粗いハケ目を施している。口縁部内面には数個の突起が認められる。

212は、口縁部がわずかに外反した甕である。頸部に貼付突帯を1条巡らせ、口縁部に面をもっている。164は、口縁部が曲折した逆L字状口縁を呈するものである。口縁端部に面をもち、大きな刻み目を施している。頸部には $3 + \alpha$ 条のヘラ描き沈線を巡らせている。179は、口縁端部外面に粘土紐を貼り付けた逆L字状を呈する口縁部である。口縁端部には刻み目を施し、頸部には3条以上のヘラ描き沈線が巡っている。180は、直立した体部上位に「T」字形に粘土紐を貼り付けて、突出した口縁端部をもつ。口縁部内面は、内傾した状態でつまみあげている。頸部に5条のヘラ描き沈線文を施している。210は、口縁端部外面に粘土紐を貼り付けて上端を水平にしている。口縁端部は、丸くおさめている。211は、口縁部が大きく外反し、端部外面に粘土紐を貼り付けている。口縁端部は丸くおさめて大きな刻み目を施している。

162・217は、体部から直立する口縁部である。口縁端部外面に薄い粘土紐を貼り付けている。217は、口縁端部に刻み目を施している。218は口縁部が外反している端部外面に薄い粘土紐を貼り付けている。口縁端部上端に小さな刻み目を施している。ほかに甕の口縁部の破片(153~174)がある。

57は、円板状の薄い蓋である。両端に2か所の穴を穿っている。58は、円板状の小型で薄い蓋である。中心よりに2か所の突起状のつまみをもっている。上面には、数条の櫛描きによる直線文と波状文が巡っている。49~56は、傘状を呈する蓋のつまみ部分である。上部のつまみが水平なもの(49・54)と凹んでいるもの(50~56)がある。59は、器壁の薄い小型の高杯である。杯部と脚部は内湾している。

#### (4) SD 0208(第57~61図)

溝 SD 0208 からは畿内第 I・II 様式の土器が多量に出土した。分類では壺 A (1~3・5~7・9~13・18・37・50~55)・壺 B (4・36・38)・壺 C (8)・壺 D (19)・無頸壺 A (20)・

鉢A(44・56)・鉢B(82)・鉢C(89)・甕A(76・85)・甕B(77~81・83・84・86~88)・甕C(72)・甕D(73~75)・蓋B(90)が出土した。

1~3は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部に面をもつもの(1・2)と丸くおさめるもの(3)がある。5~7は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部に面をもち、へら描き沈線を1条巡らせ、へらによる刻みを施したもの(6・9・11・12)や、2条巡らせへらによる刻みを施したもの(5)や3条巡らせたもの(7)がある。10は、大きく外反した口縁部で、口縁端部に外傾した面をもっている。端面には5条一組の櫛による直線文と下位にへらによる刻み目を施している。13は、大きく外反した大型壺の口縁部である。器壁はわずかに口縁端部が厚く端部に面をもっている。端面には3条のへら描き沈線が、また頸部に4条以上のへら描き沈線が巡っている。18は、大きく外反した大型壺の口縁部である。器壁は口縁端部が頸部よりわずかに厚い。口縁端部は面をもち、3条のへら描き沈線を巡らせたあと沈線間に綾杉状のへらによる刻み目を施している。口縁部内面には3条一組の細い貼付突帯文を有し、それらの下位には三角形の列点文を巡らせている。さらに、貼付突帯間及び口縁端部に突起列点文を巡らせ、2個一組の小さな穴が数か所に穿たれている。37は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部に面をもち2条のへら描き沈線を巡らせて、その上下端に大きなへら描きによる刻みを施している。50~52・54は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部に面をもち、1条のへら描き沈線を巡らせたあと大きな刻みを施している。53は、口縁端部がわずかに垂下し、面をもったものである。口縁端部上端に1条の沈線を巡らせている。垂下した端部には大きな刻みと、中間にへらによる左下りの刻みを施している。36は、短く外反した小型の壺の口縁部である。頸部に4条一組の櫛描文を巡らせている。38は、短く外反した壺の口縁部である。口縁端部は丸くおさめ頸部に10条一組の櫛描文を巡らせている。

8は頸部がやや長い直立ぎみのものである。口縁端部に面をもち5条一組の櫛描文を巡らせて上端に刻みを施している。頸部には5条一組の櫛描文を巡らせている。

19は、大きく張った体部をもち、口縁部外面に粘土紐を貼り付けて端部を上方につまみあげたものである。上端には面をもっている。つまみ上げた口縁端部には小さな刻みを施している。頸部にはへら描き沈線を巡らせている。

20は、球形の体部を呈する無頸壺である。口縁端部は丸くおさめている。体部にはへら描きの5条一組の沈線が3帯巡り、口縁部には2個一組の穴を穿っている。

44は、体部から直立した鉢の口縁部である。口縁端部に面をもっている。体部外面には4条一組の櫛描による直線文と波状文を巡らせている。56は体部から直立した杯の口縁部である。口縁端部に面をもち、外面に櫛描による5条一組の流水文と波状文を巡らせてい

る。

82は、口縁部がわずかに外反した鉢である。口縁端部に刻み目を施し、頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らせている。

89は、口縁端部外面に粘土紐を貼り付けた逆L字状を呈する口縁部をもつ鉢である。口縁部の上面には5条一組の櫛描文を巡らせている。体部には多くの櫛描直線文を巡らせている。

76は、大きく外反した甕の口縁部である。口縁端部に面をもち頸部に1条あるいはそれ以上のヘラ描き沈線を巡らせている。85は、口縁部が巻き込むように外反した甕である。口縁端部は無文で丸くおさめている。

77・78は、わずかに口縁部が外反した無文の甕である。口縁端部に面をもっている。79は、口縁端部を丸くおさめた上に刻み目を施した甕である。80は、わずかに張った体部と外に大きく曲折した口縁部をもつ甕である。口縁端部は丸くおさめている。81は、口縁端部に面をもち、刺突状の刻み目を施したものである。83は、口縁部が巻き込むように外反した甕の口縁部である。口縁端部には刻み目を施し、数か所に押圧の刻みを施している。84は、口縁部がわずかに外反した甕である。口縁端部に面をもち、外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケ目を施している。86は、口縁部が大きく外反した甕である。口縁端部を丸くおさめ、横方向のハケの調整を施している。体部外面は、縦方向の粗いハケ目を、内面は横方向のハケ目を施している。87は、大きく外反した甕である。口縁端部は丸くおさめて小さな刻み目を施している。体部外面は、縦方向の、内面は横方向の粗いハケ目を施している。88は、口縁部が大きく外反した大型の甕である。口縁端部は面をもち上下端に刻み目を施し、数か所に押圧痕をもっている。体部内面には、粗い横方向のハケ目を施している。

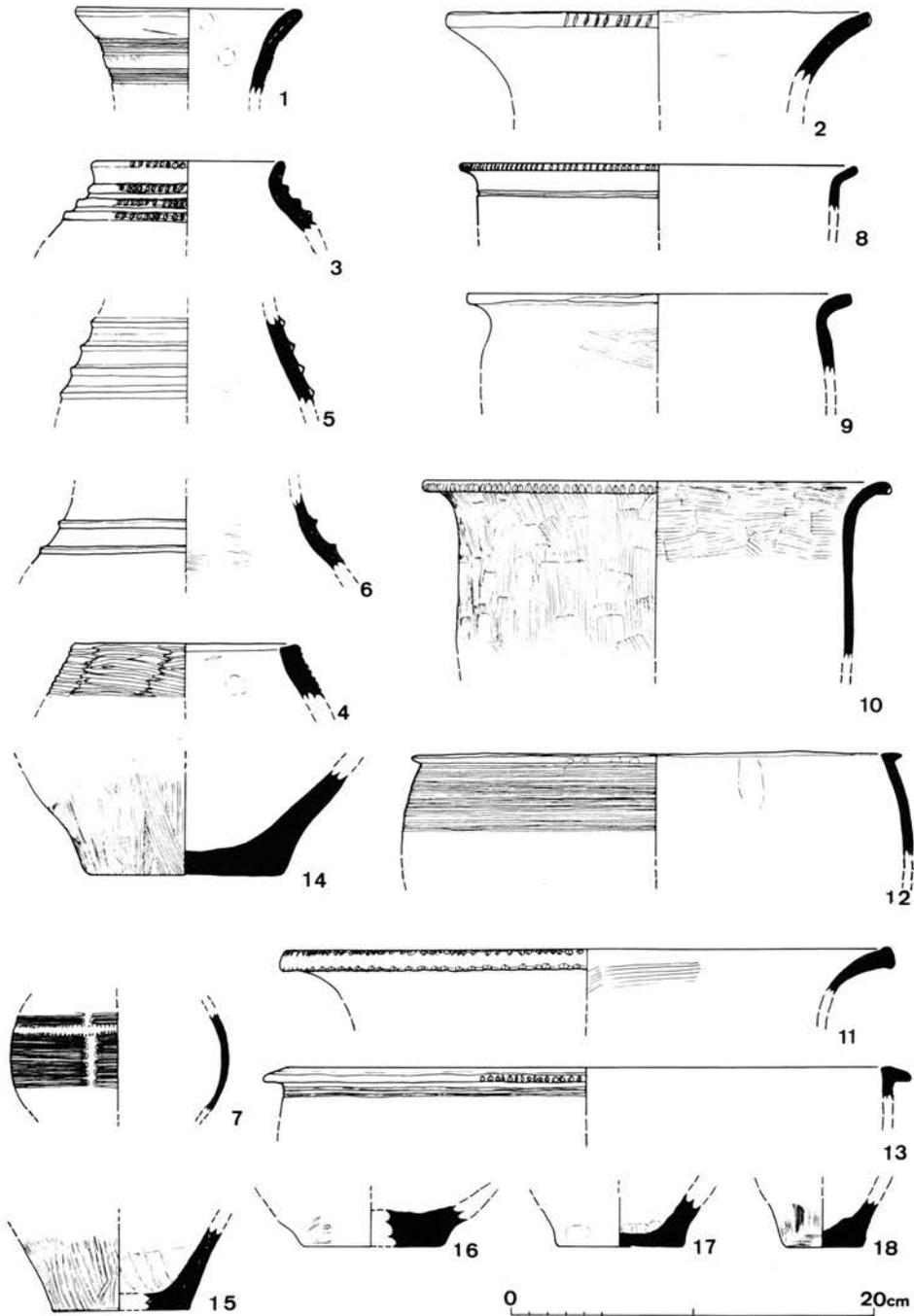
74は、口縁部外面に粘土紐を貼り付けて上端が凹んでいる。口縁端部は刻み目を施している。頸部には4条のヘラ描き沈線を巡らせている。75は、口縁部外面に粘土紐を貼り付けて上端を水平にしている。口縁端部は薄くつまみ出している。頸部に櫛描直線文を巡らせている。

72は、直立した口縁部をもつ甕である。頸部に1条の細い貼付突帯を巡らせている。口縁端部は面をもっている。

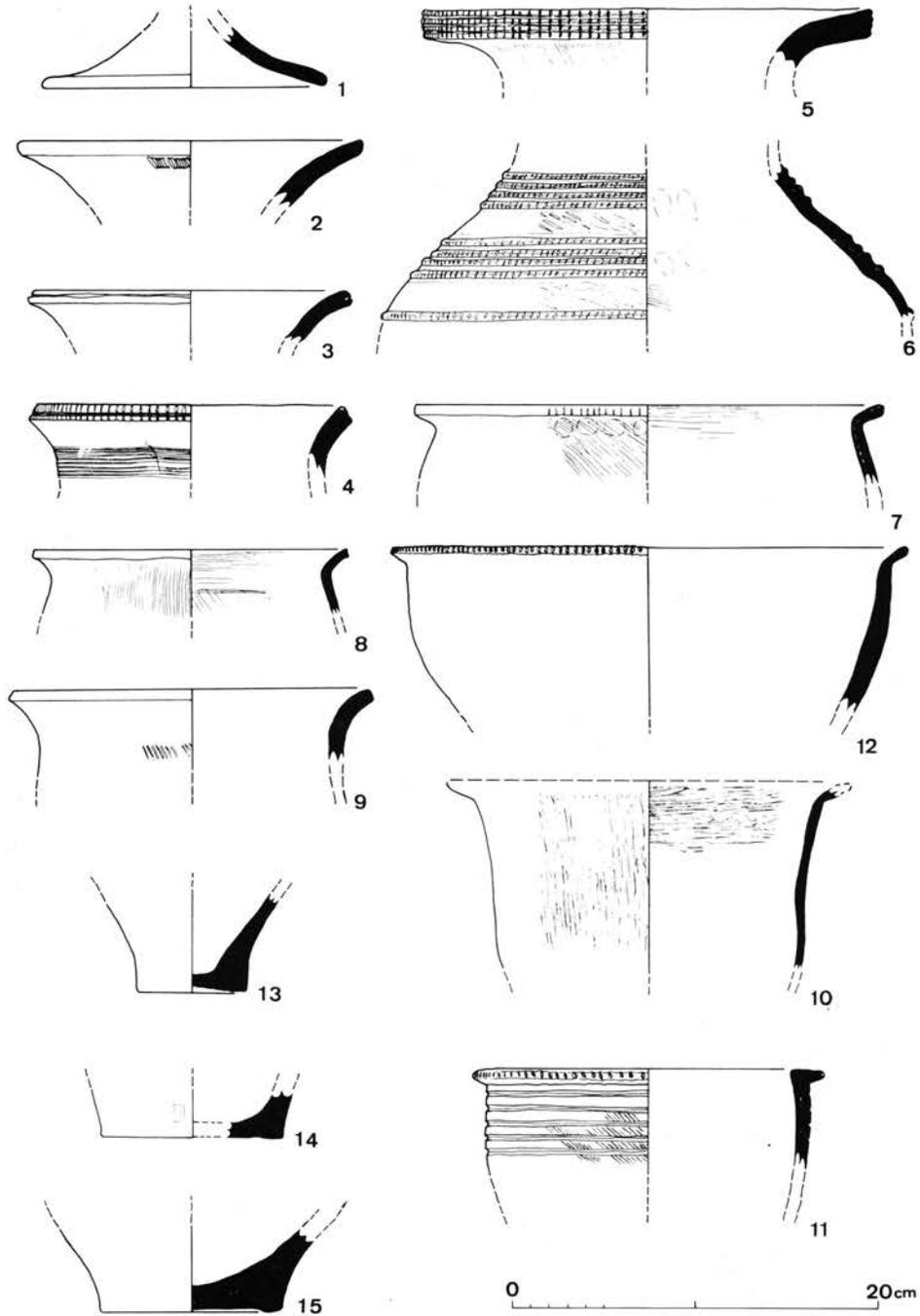
(5) SD 0209(第62図)

溝SD 0209からは、畿内第I・II様式の土器が出土した。分類では壺A(1)・甕(2・3)・甕D(4)・壺体部(5～8)が出土した。

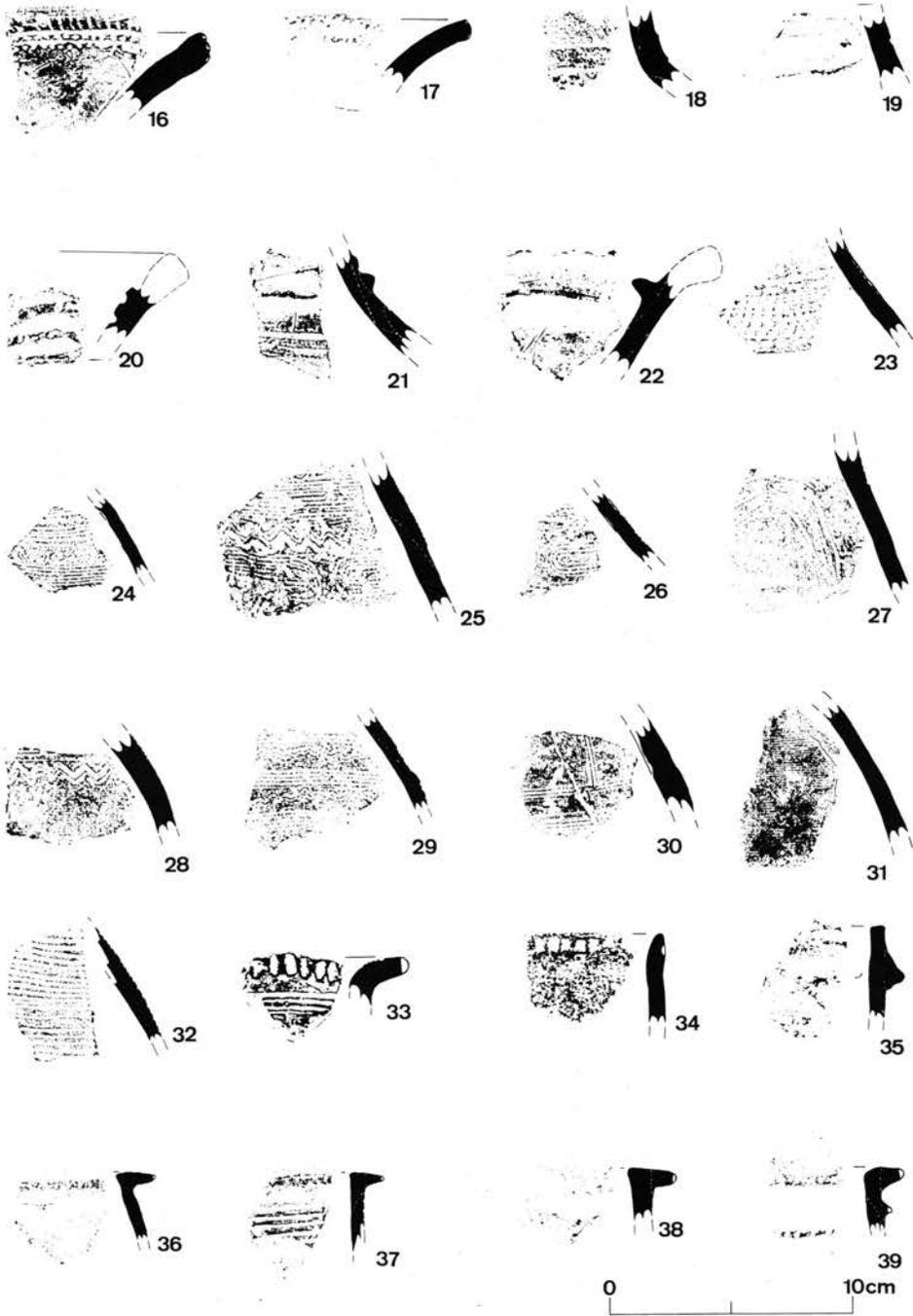
1は、大きく外反した壺の口縁部で、口縁端部に面をもち、中央に1条のヘラ描き沈線



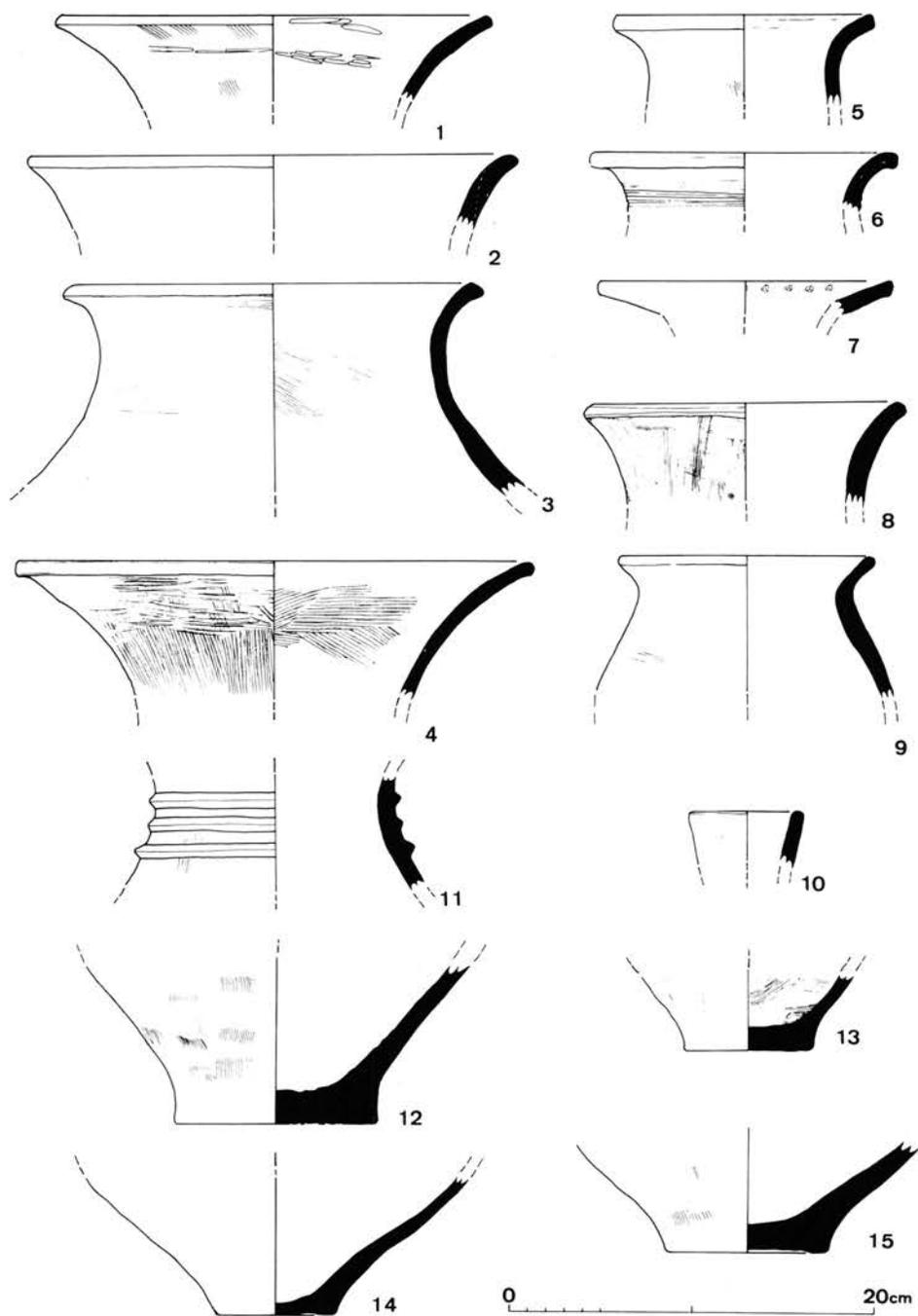
第 40 図 溝 SD 0201 出土土器 (壺, 甕)



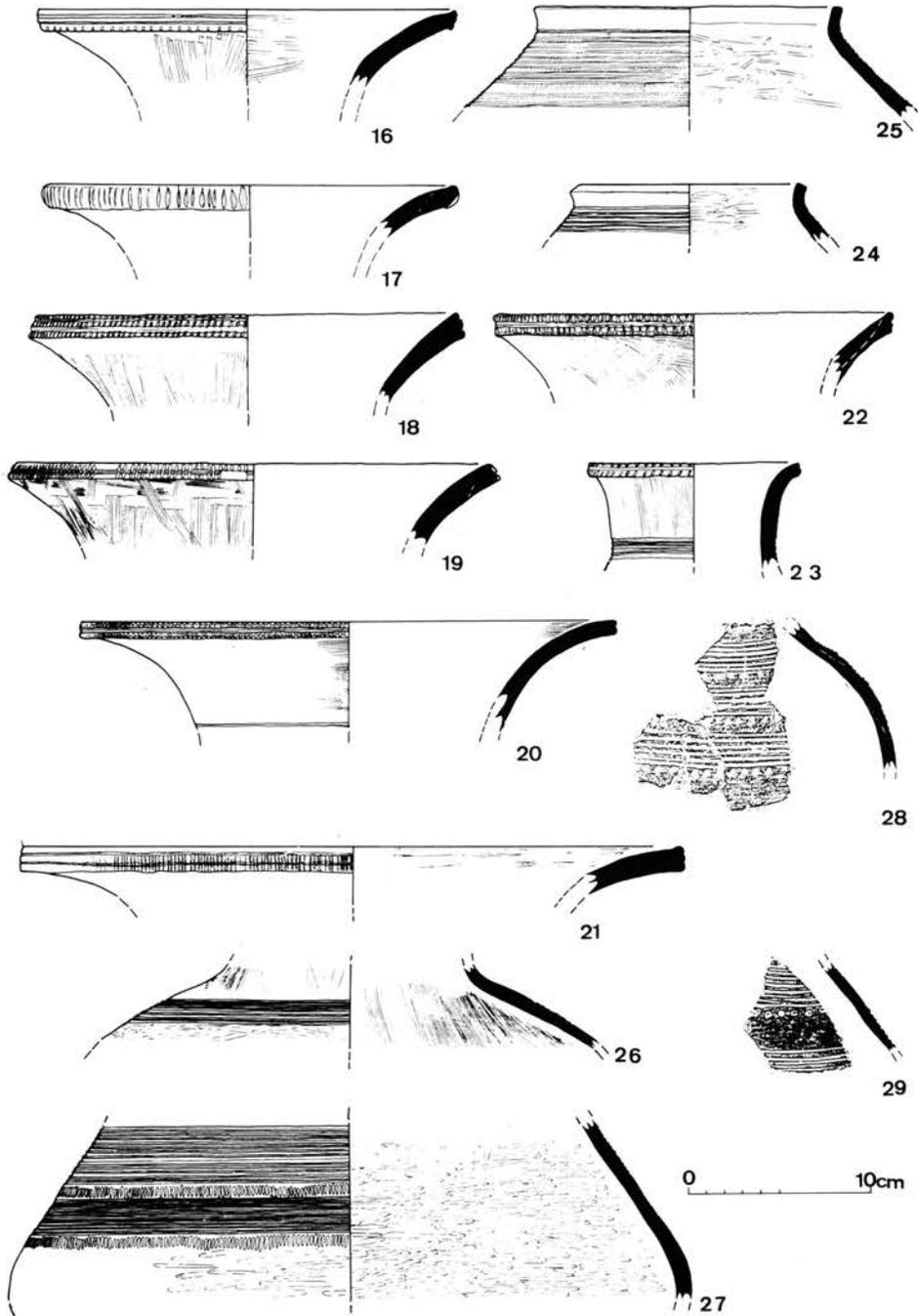
第 41 図 溝 SD 0205 出土土器 (壺, 甕, 蓋)



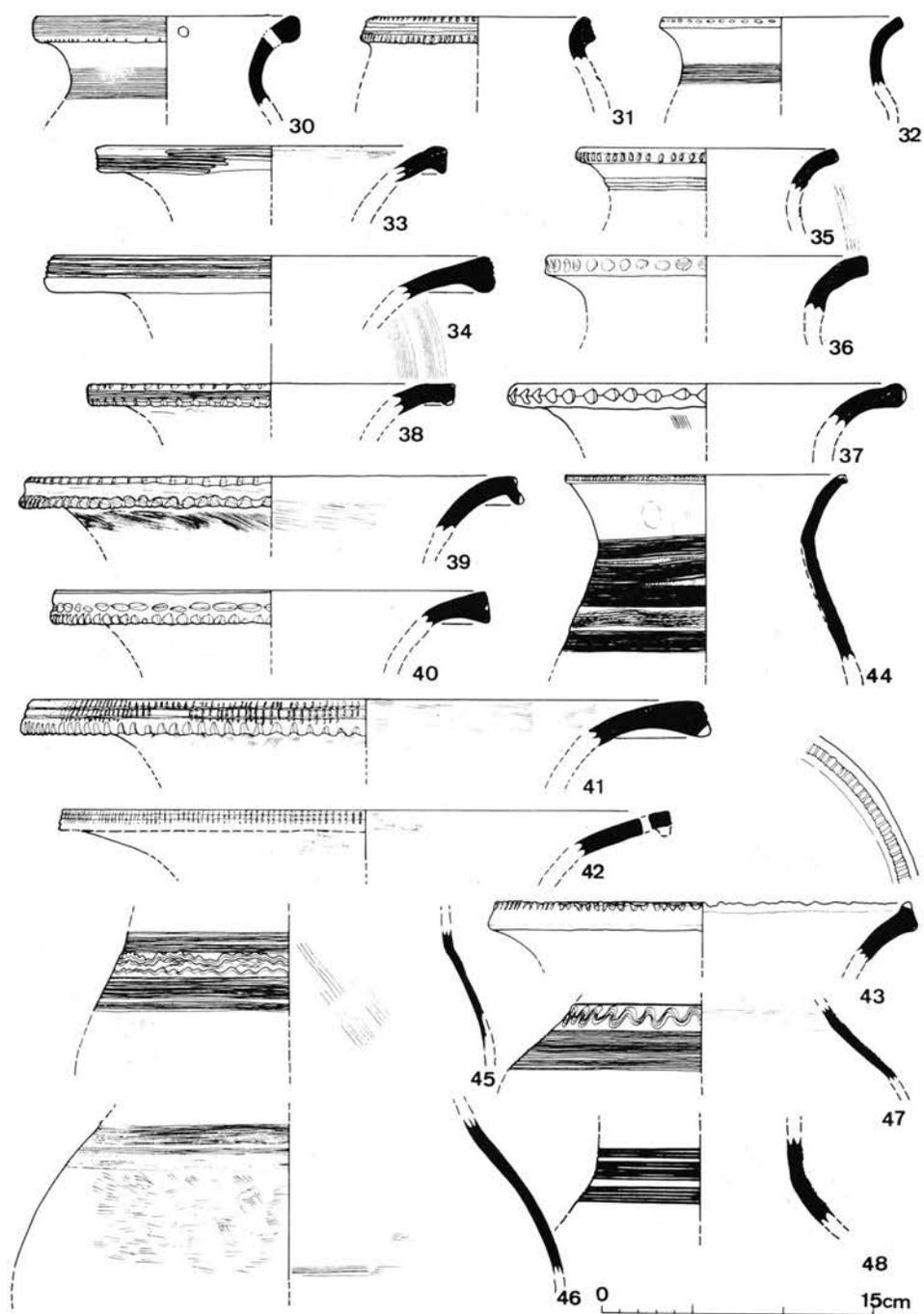
第 42 図 溝 SD 0205 出土土器拓影 (壺口縁部・体部, 甕口縁部)



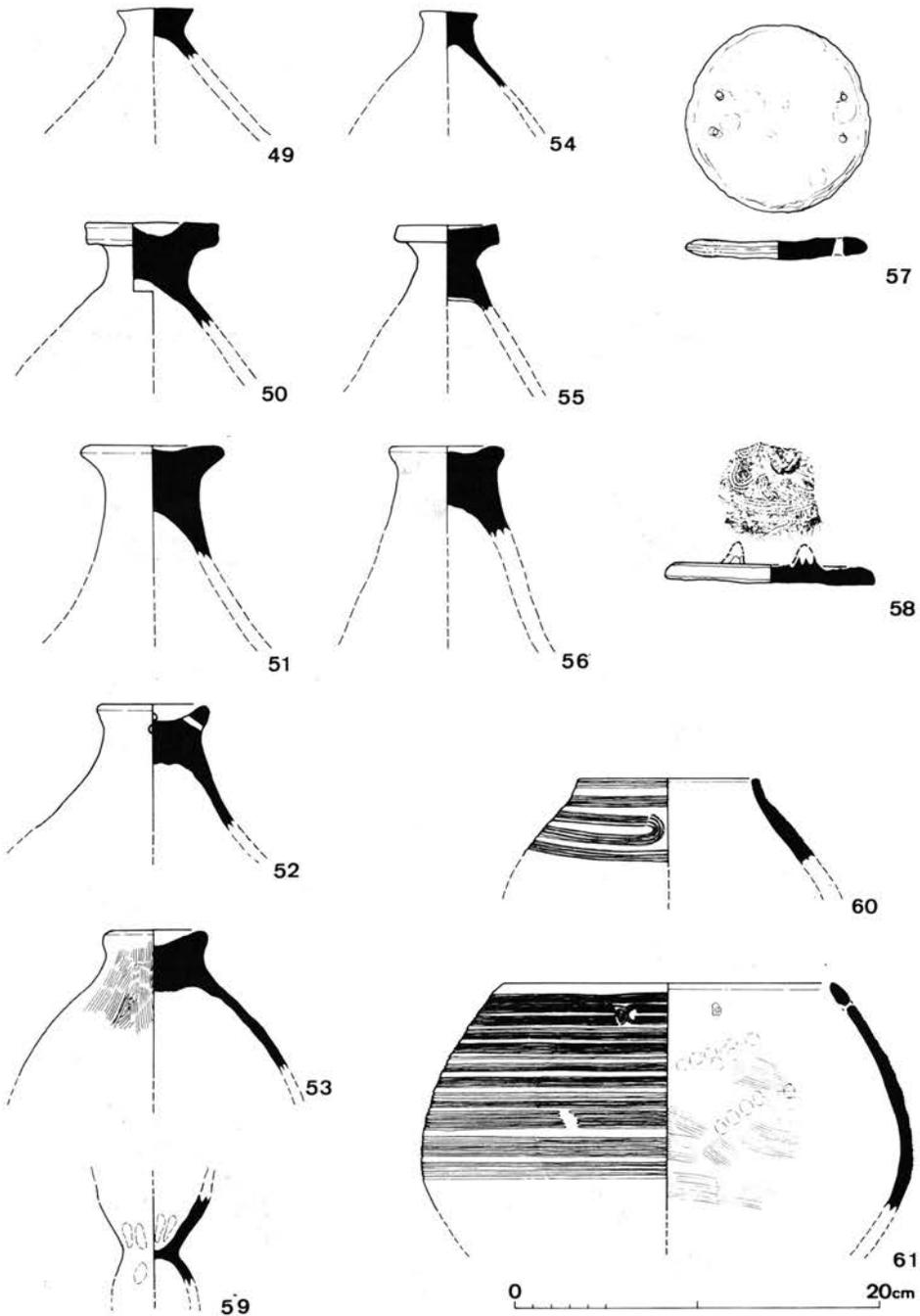
第 43 図 溝 SD 0207 出土土器 (壺口縁部・体部・底部)



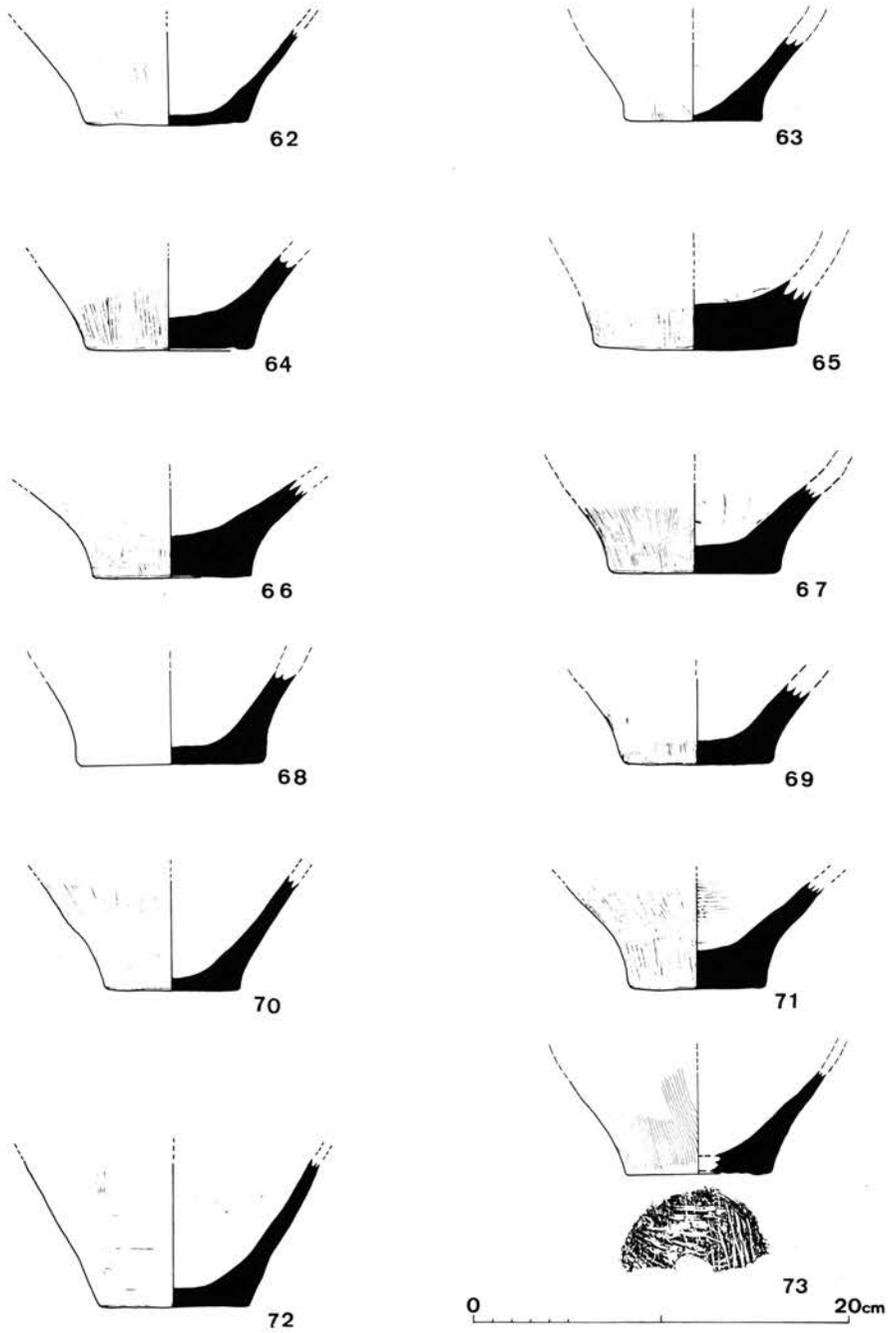
第 44 図 溝 SD 0207 出土土器 (壺口縁部・体部)



第 45 図 溝 SD 0207 出土土器 (壺口縁部・体部)



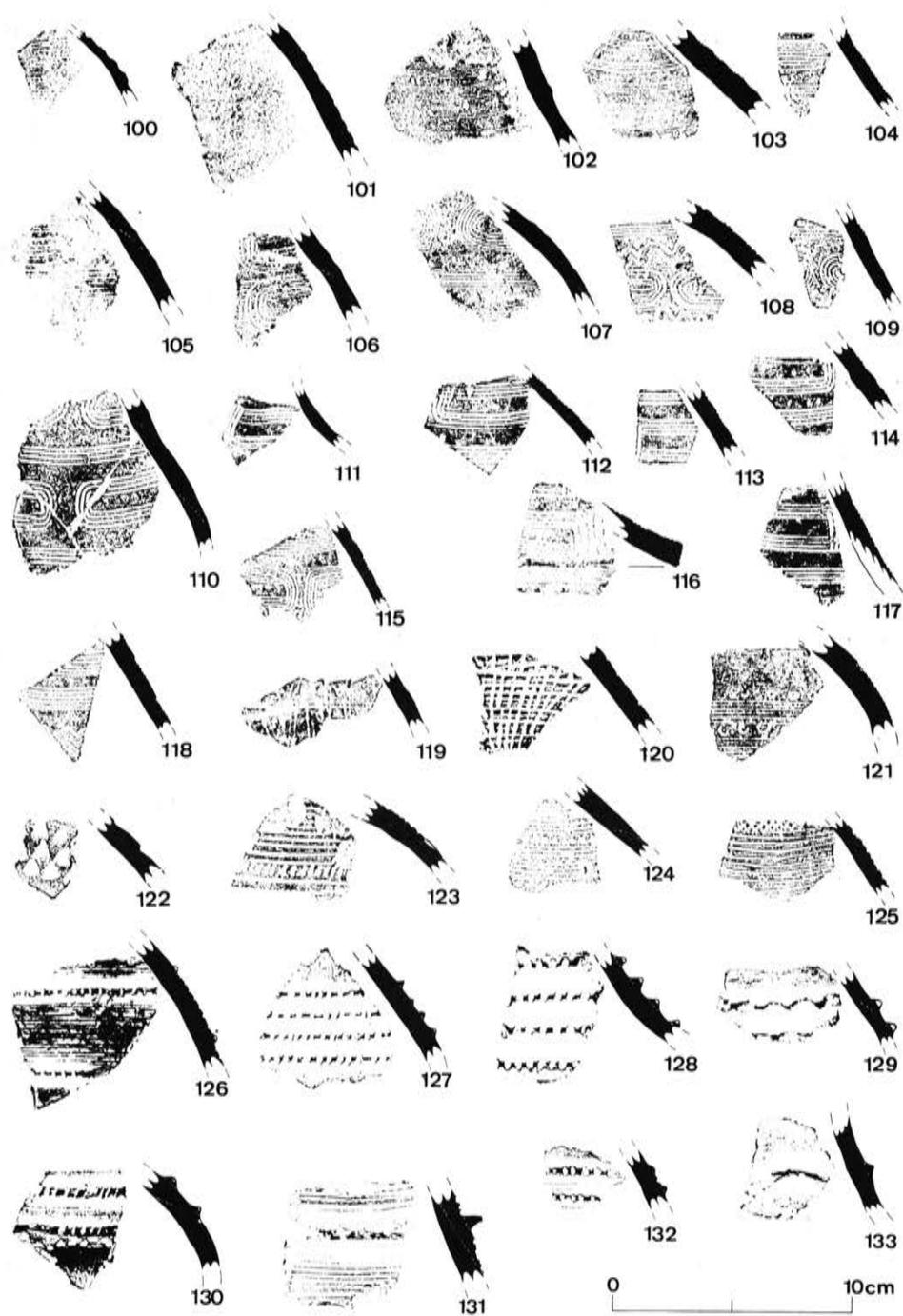
第 46 図 溝 SD 0207 出土土器 (無頸壺, 蓋)



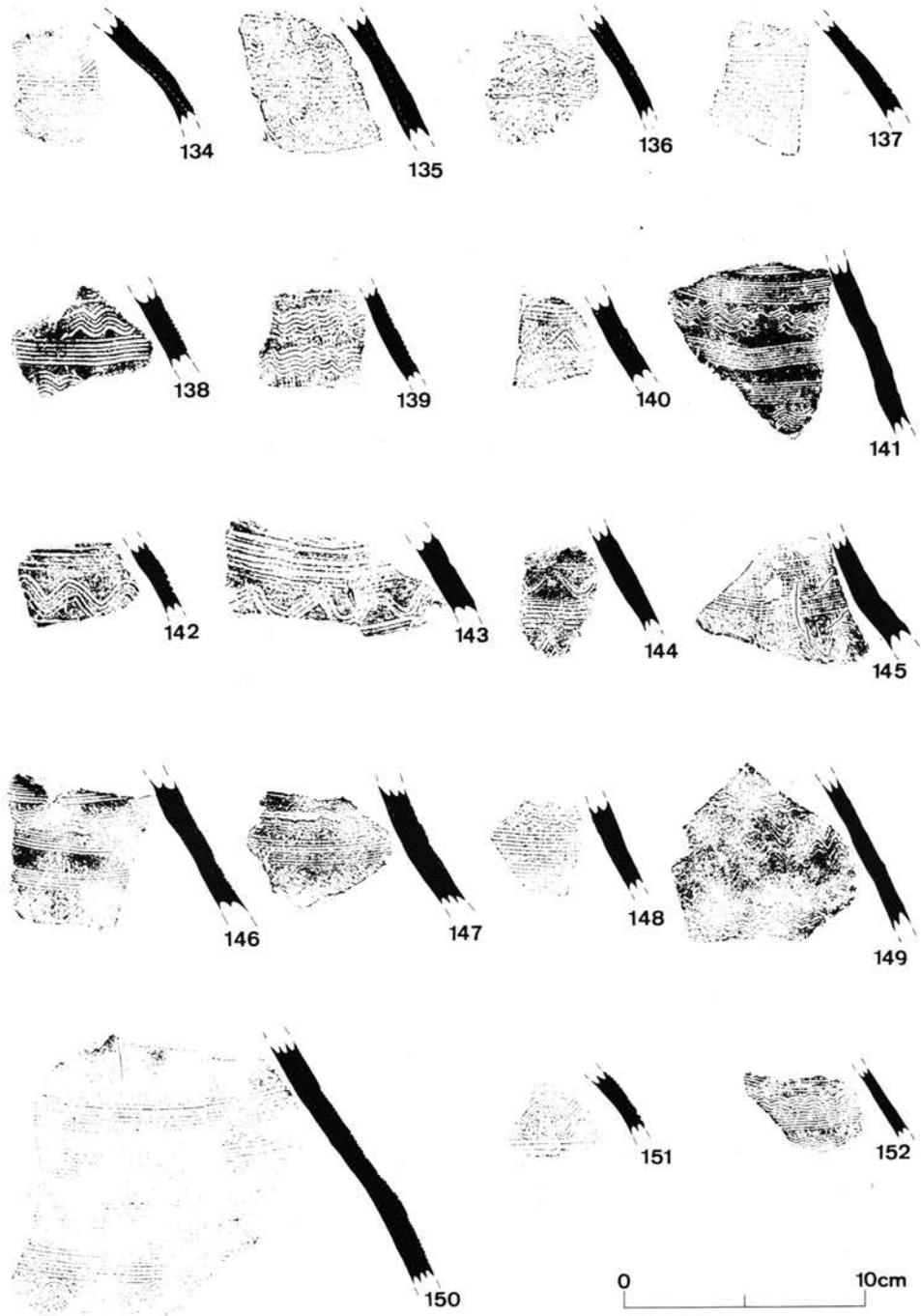
第 47 図 溝 SD 0207 出土土器



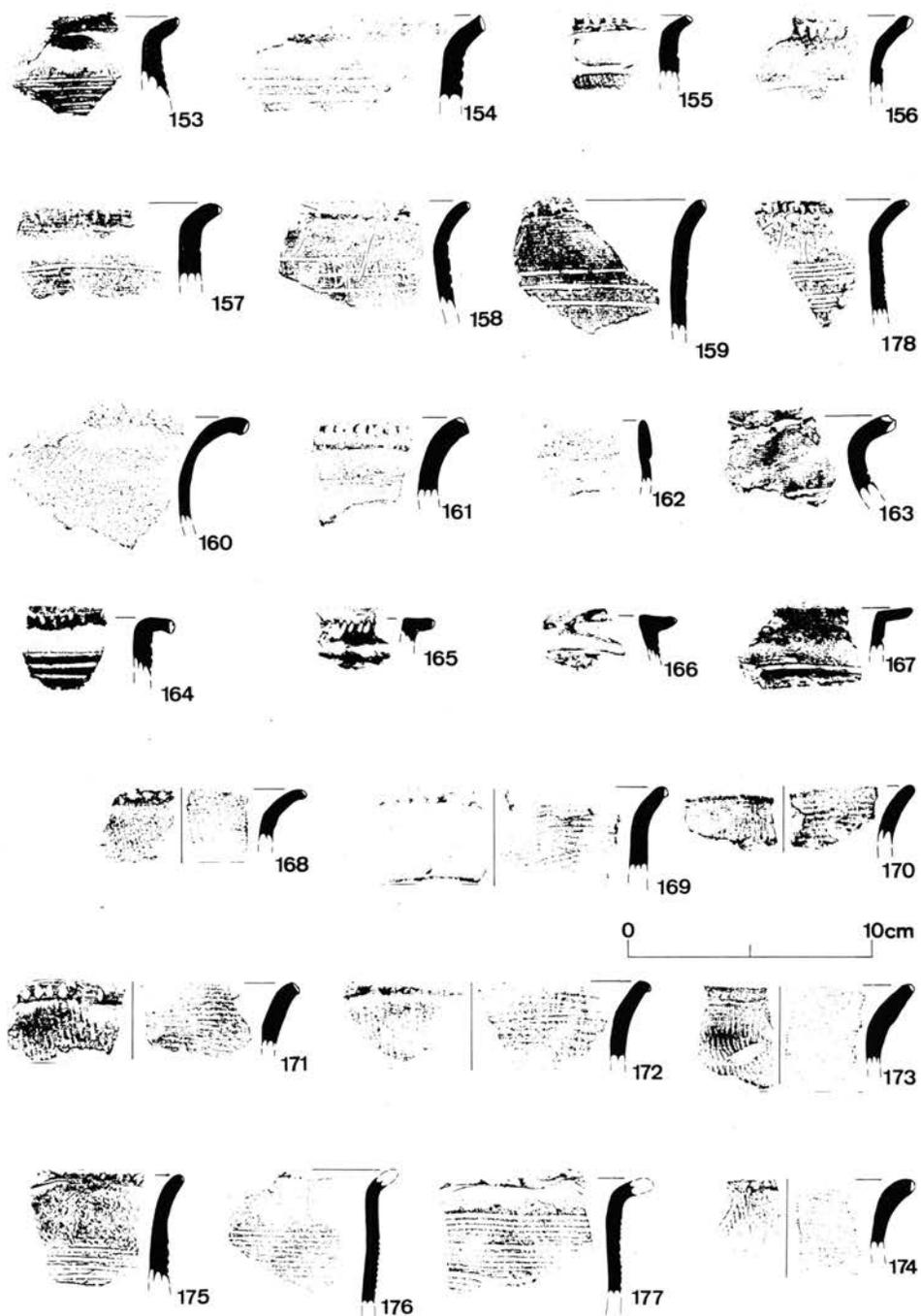
第 48 図 溝 SD 0207 出土土器拓影 (壺口縁部)



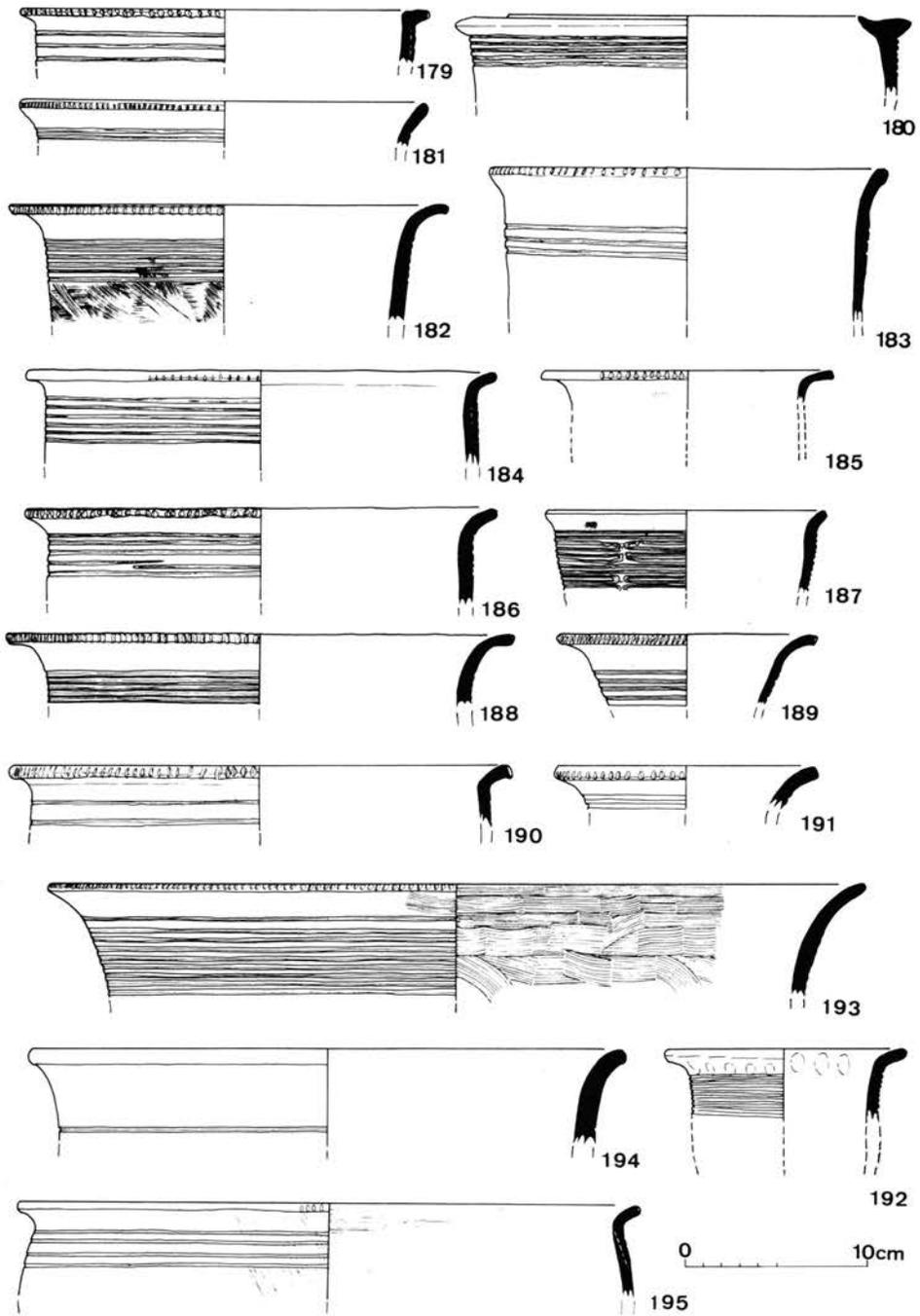
第 49 図 溝 SD 0207 出土土器拓影（壺体部）



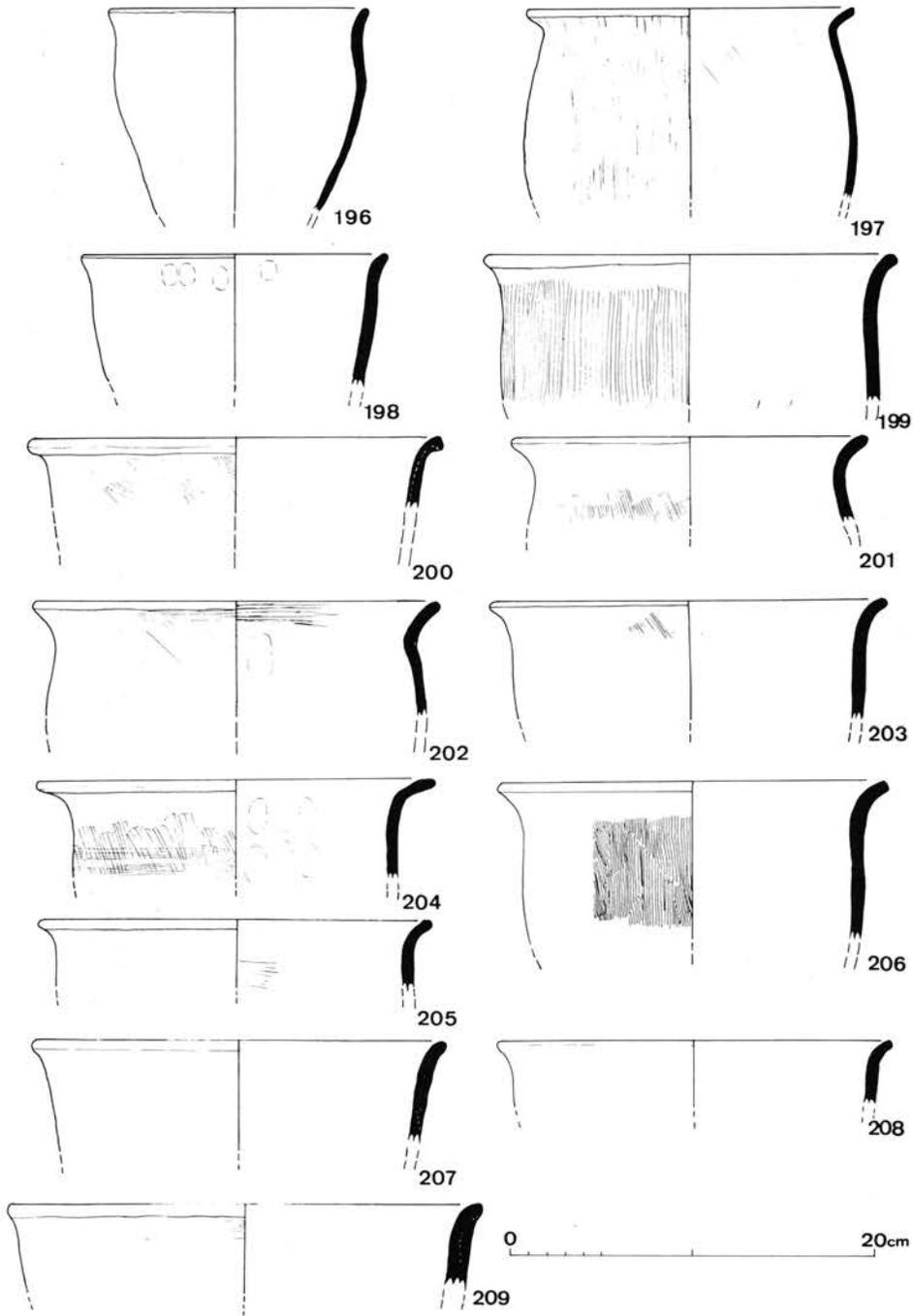
第 50 図 溝 SD 0207 出土土器拓影 (壺体部)



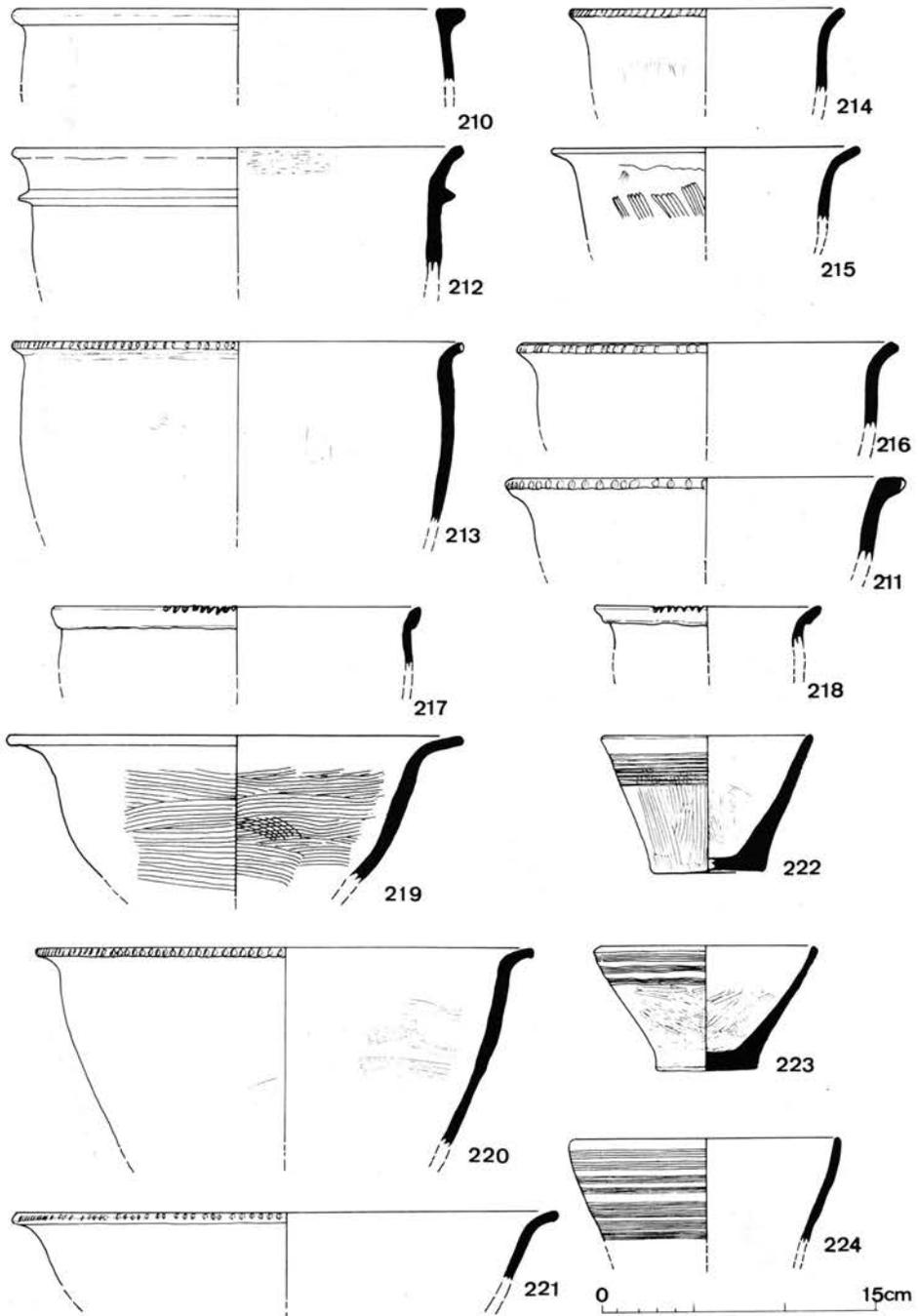
第 51 図 溝 SD 0207 出土土器拓影 (甕口縁部)



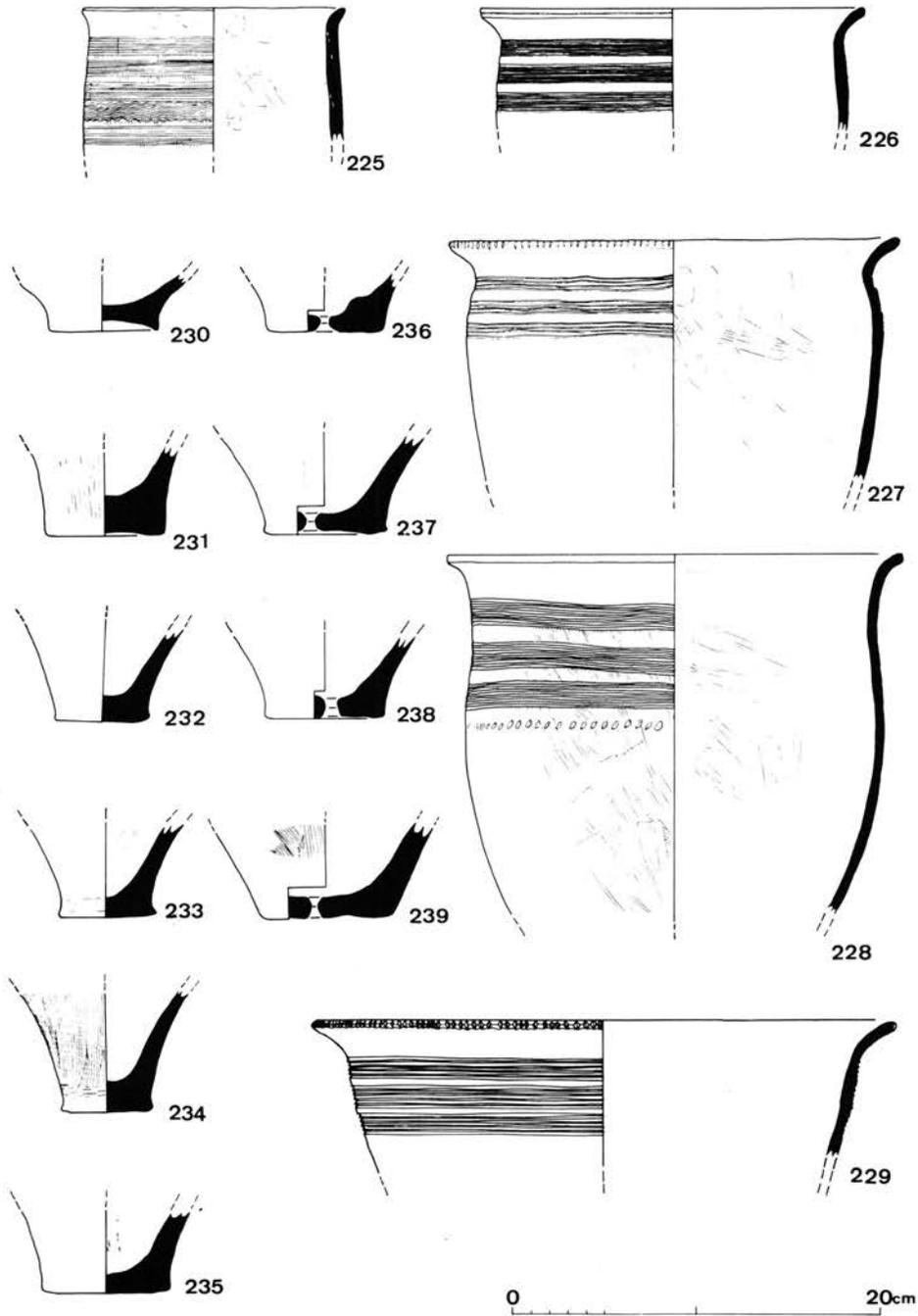
第 52 図 溝 SD 0207 出土土器 (甕口縁部)



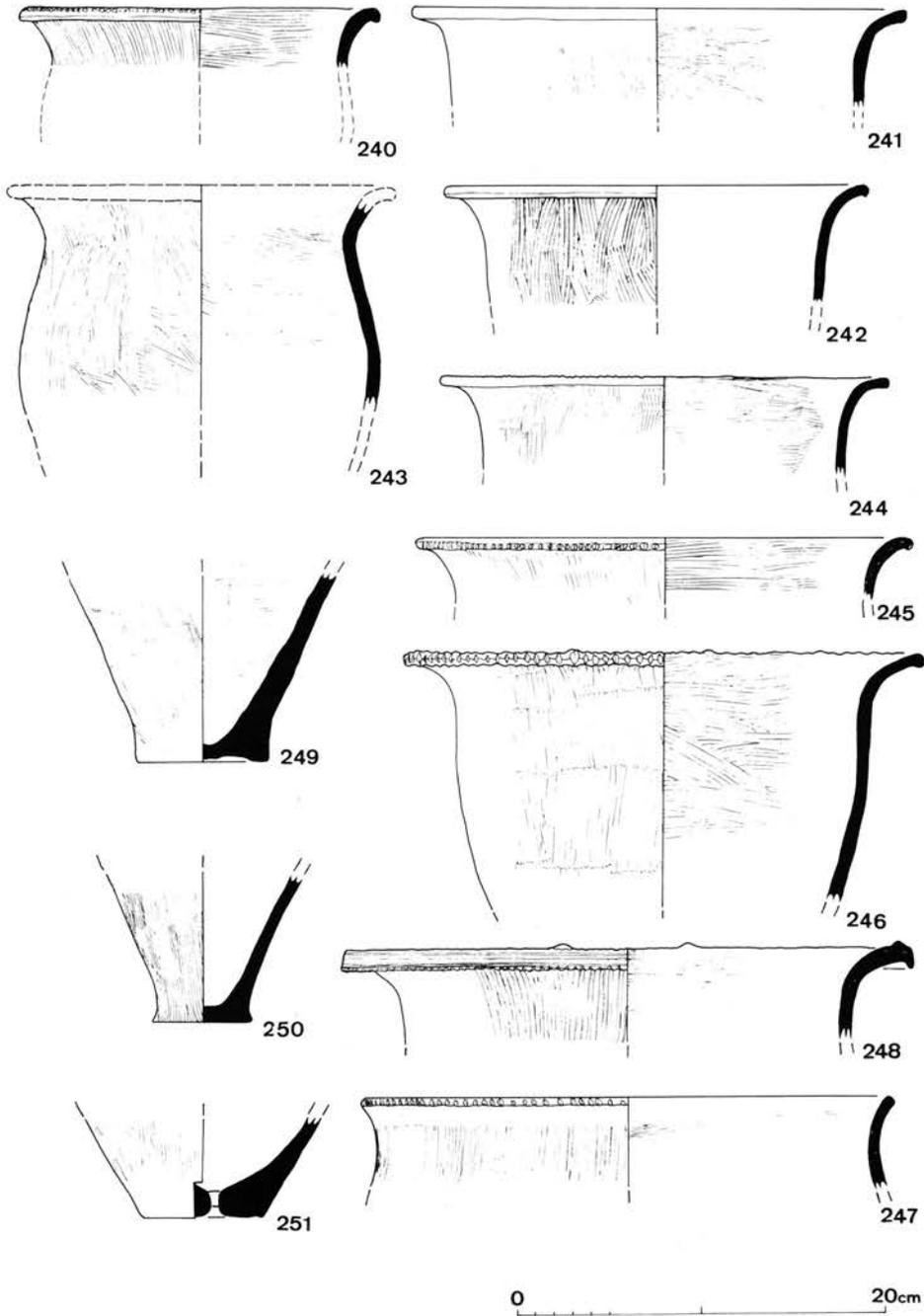
第 53 図 溝 SD 0207 出土土器 (甕口縁部)



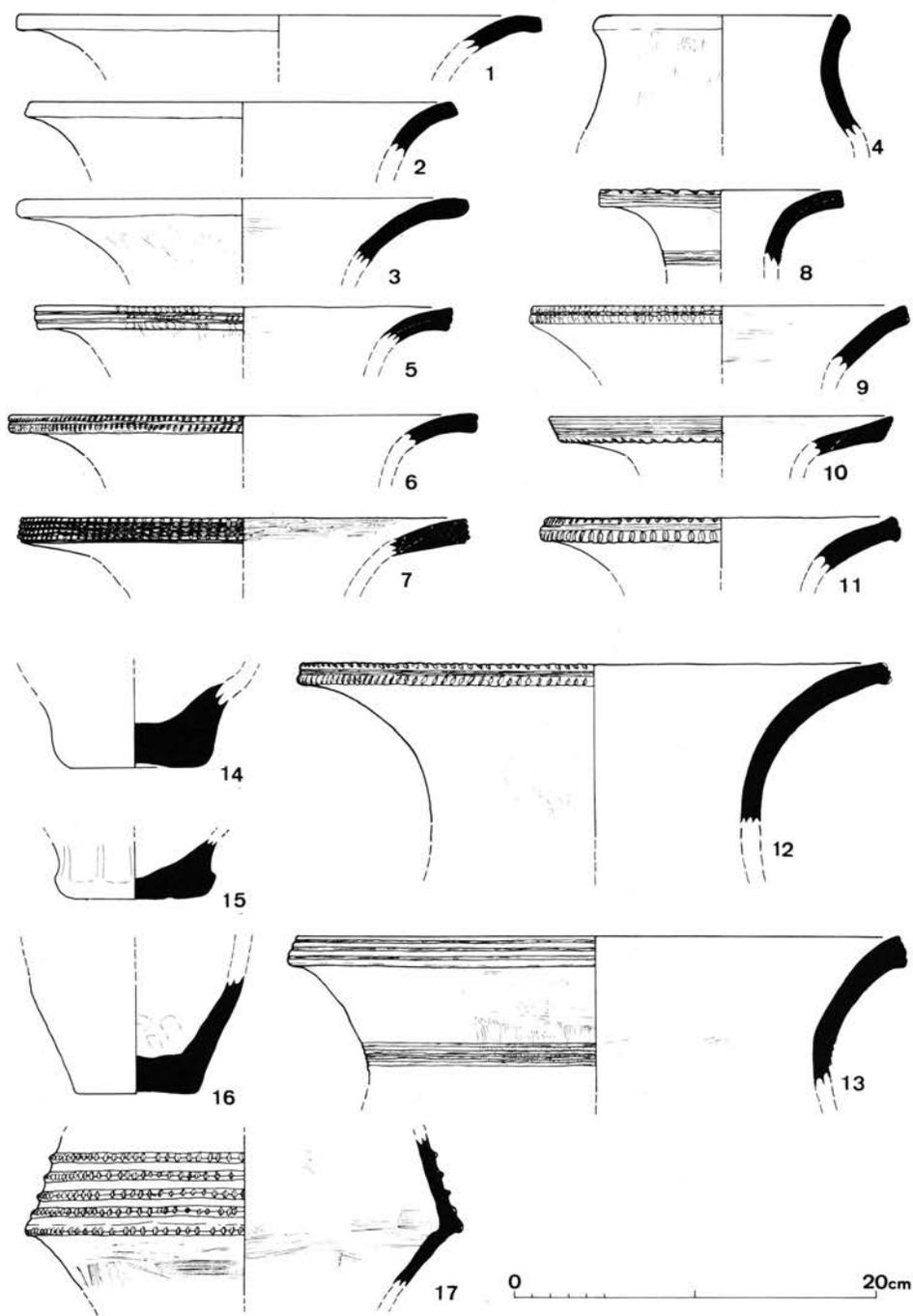
第 54 図 溝 SD 0207 出土土器 (甕, 鉢)



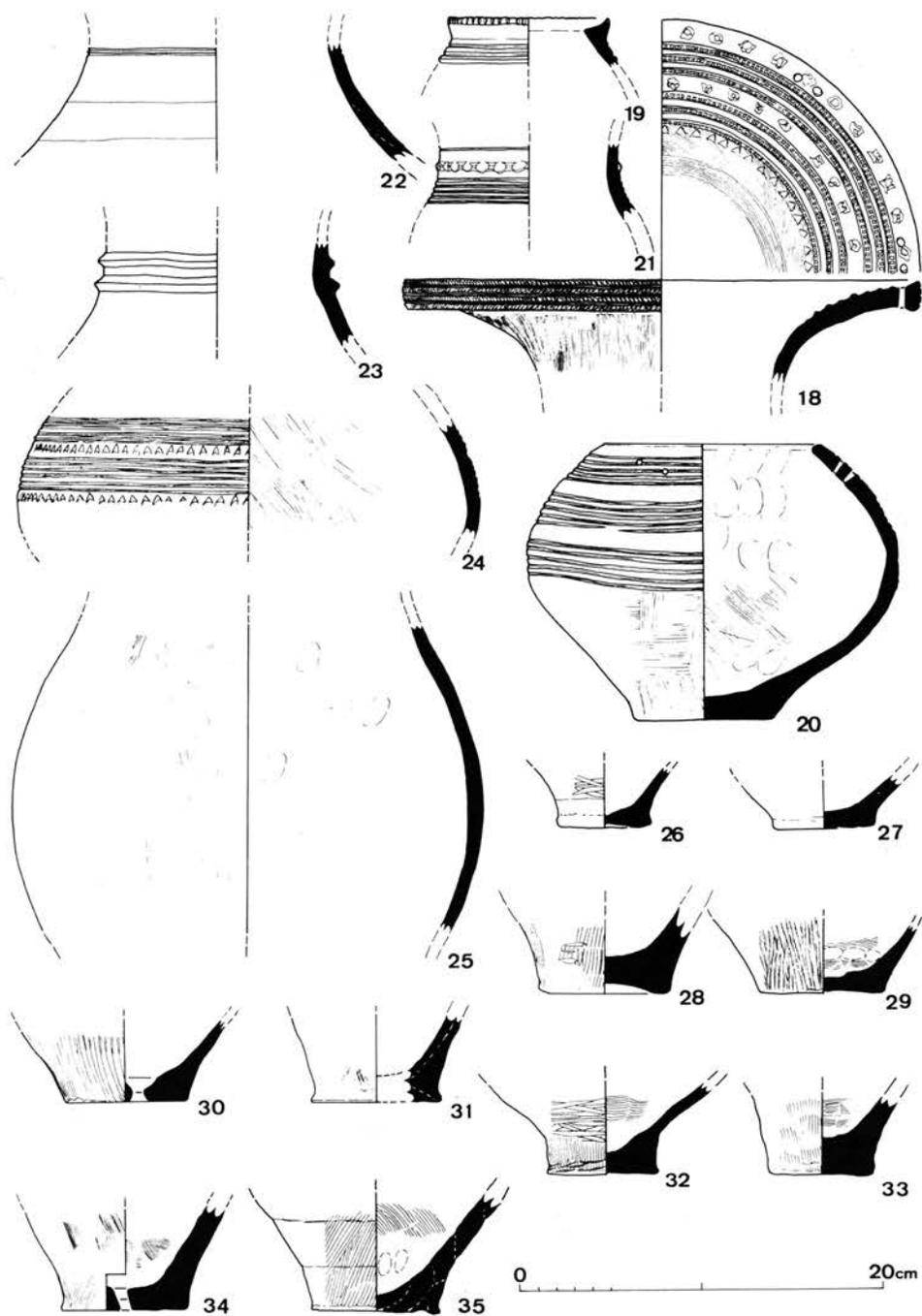
第 55 図 溝 SD 0207 出土土器 (甕底部)



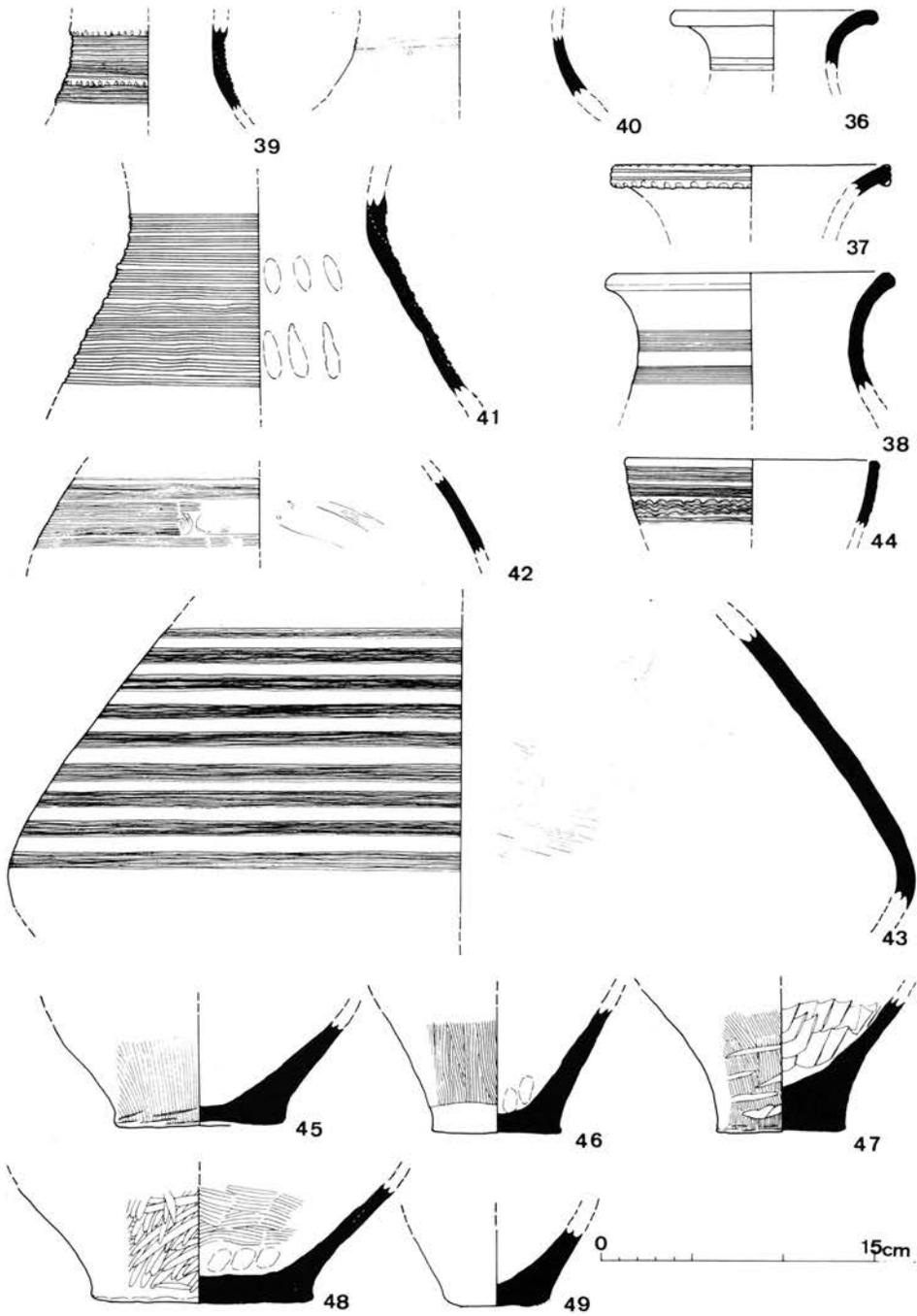
第 56 図 溝 SD 0207 出土土器 (甕口縁部・底部)



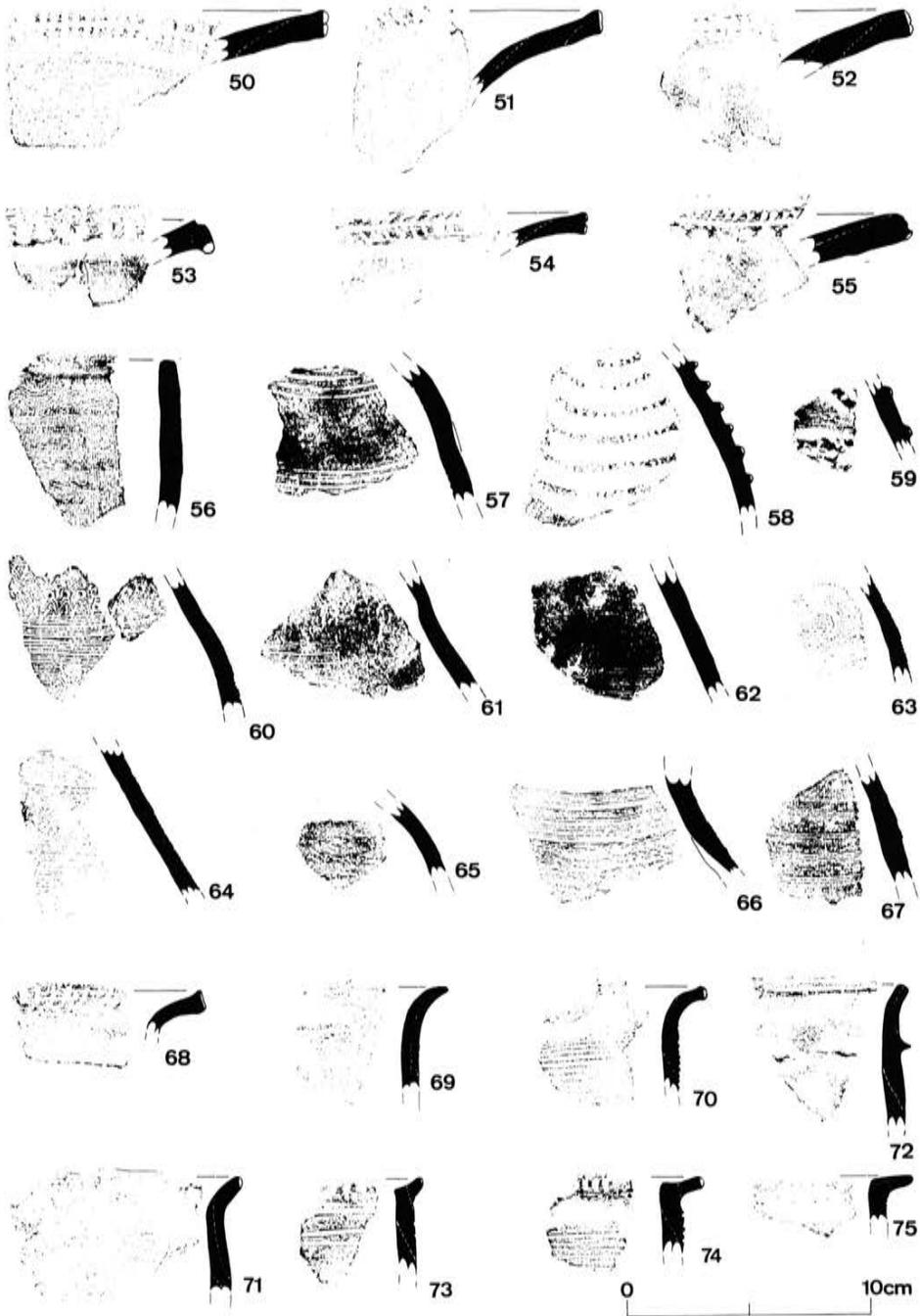
第 57 図 溝 SD 0208 出土土器 (壺口縁部・体部・底部)



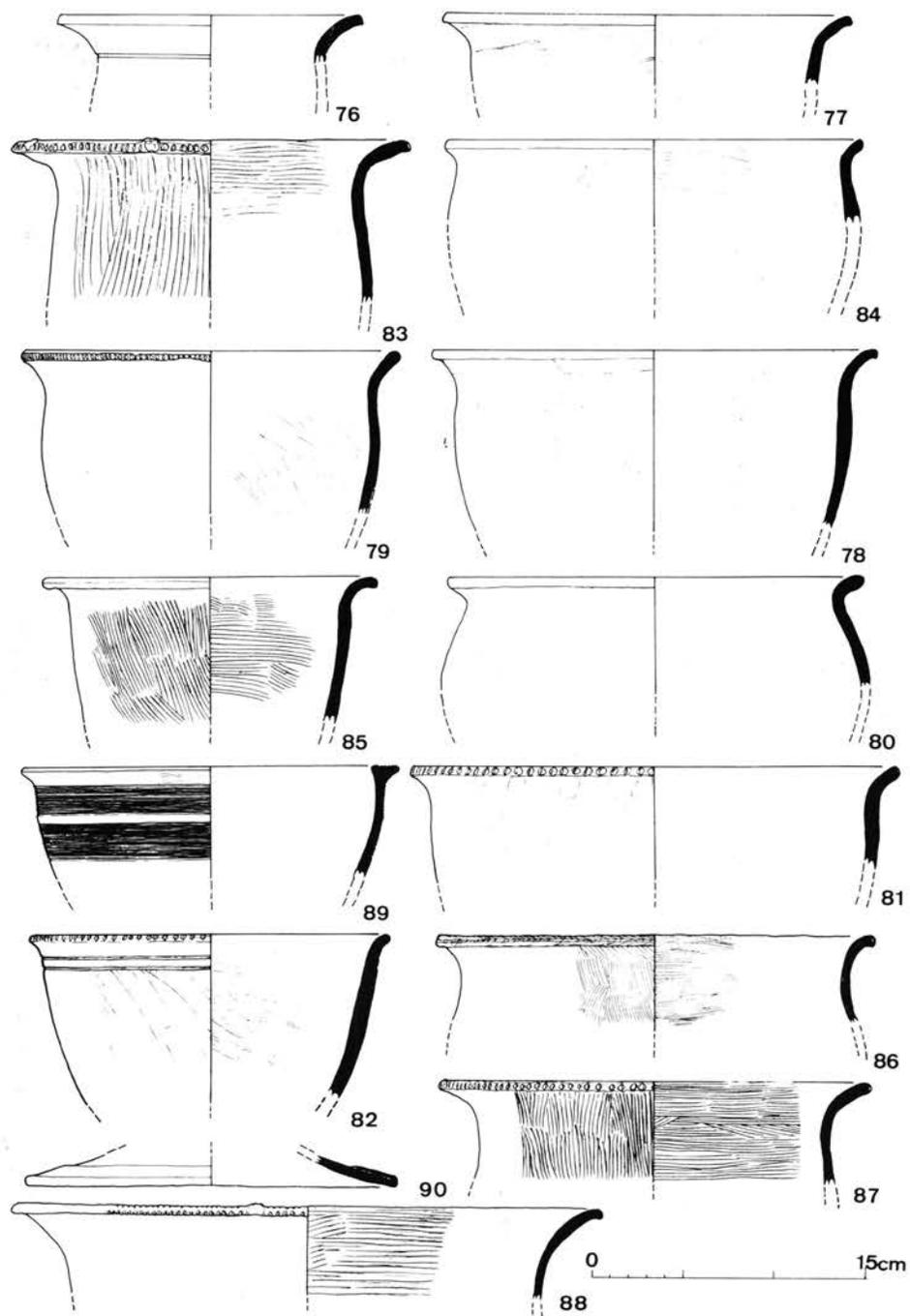
第 58 図 溝 SD 0208 出土土器 (壺口縁部・体部・底部)



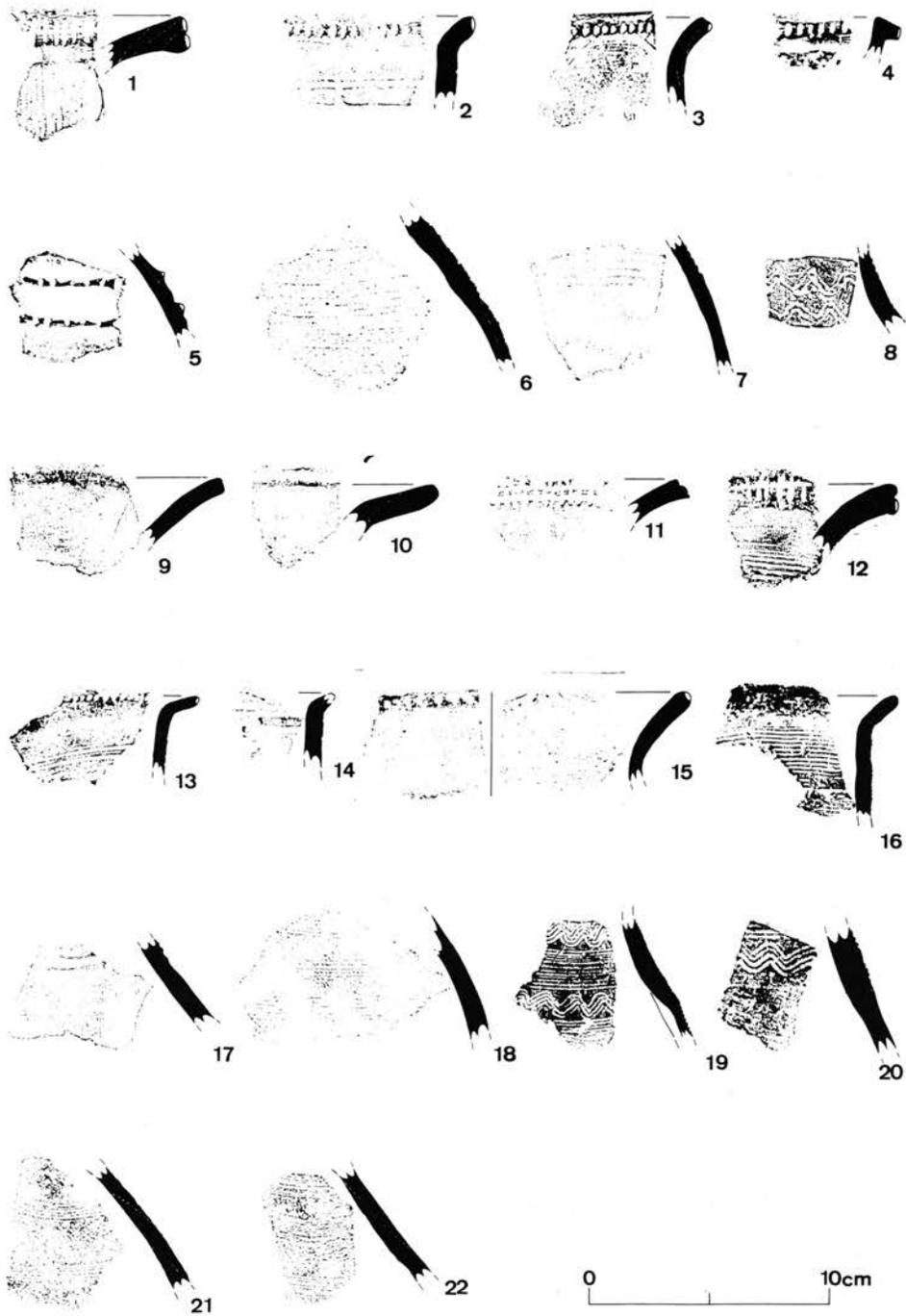
第 59 図 溝 SD 0208 出土土器 (壺口縁部・体部, 鉢口縁部・底部)



第 60 図 溝 SD 0208 出土土器拓影 (壺口縁部・体部, 甕口縁部)



第 61 図 溝 SD 0208 出土土器 (甕口縁部, 蓋)



第 62 図 溝 SD 0209・0210 出土土器拓影 (壺口縁部・体部, 甕口縁部)

を巡らせている。さらに、それに直交する刻み目が施されている。

2は、「く」の字状に外反した甕の口縁部で、口縁端部に面をもち、頸部に1条のへら描き沈線を巡らせている。3は、大きく外反した甕の口縁部である。口縁部上端は水平であり、端部には刻み目を施している。5は、壺の体部上半である。2条以上の貼付突帯文を巡らせ、突帯文上に小さな刻み目を施している。6・7は、壺の体部上半である。細かい5条一組の櫛描文を巡らせるもの(6)と、6条一組の粗い櫛描文を巡らせるもの(7)がある。8は、壺の体部から頸部にかけての部分である。半截竹管による波状文を巡らせている。

### ③遺物包含層出土の弥生土器(第63図～第75図)

遺物包含層からは、縄文時代後期から鎌倉時代までの長期に及ぶ遺物が出土した。この項では、弥生時代前期・中期畿内第I～IV様式の土器について述べる。分類では壺A(4・5・7～9・19～24・26～28・103・104・106～114)・壺B(2・10・118)・壺C(1・3・6・25・105・116)・壺D(29・30)・無頸壺A(56)・無頸壺B(117)・鉢A(165)・鉢B(147・155・158・163・164・170)・鉢C(120)・甕A(123～125・133・136・140～149・156・169・171)・甕B(126～128・130～132・134・135～139・141・143・148・150・159～162・172～180)・甕D(119・121・122・193～196)・甕E(151～153・201・202)・蓋A(215)・蓋B(212～214・216)が出土した。

4・5・7・8は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部は丸くおさめ、外面に細かいへら磨き調整を施している。9は、大きく外反した壺の口縁部である。口縁端部に面をもち中央がわずかに凹んでいる。19～21・23・24は、大きく外反した壺の口縁部である。いずれも口縁端部に面をもち、中央に1条のへら描き沈線を巡らせ、上下端にへらによる刻みを施している。22・36・37も、大きく外反した口縁部であって、端部に面をもち、やはり中央に1条のへら描き沈線を巡らせたあと縦方向の長い刻みを施している。28は大きく外反した口縁部である。口縁端部に面をもち、上端をわずかにつまみ上げている。端面には多くの櫛描直線文を巡らせ、上端に小さな刻み目を施している。103は、口縁端部に面をもち、上下2段に横方向に長い楕円形の刺突による列点文を施している。106～108は、口縁端部が垂下し、端面に1条のへら描き沈線を巡らせ、下端に大きな刻み目を施したものであり、109・110も、ともに口縁端部の器壁が厚く、わずかに垂下している。109は、端面には5条一組の櫛描による波状文を巡らせ、上下端に小さな刻み目を施している。110は、端面に多くの櫛描直線文を巡らせたあと、縦方向に細長い刻み目を施している。口縁端部には、2か所に穴を穿っている。111は、口縁端部がわずかに垂下している。端面には中央に1条の細いへら描き直線文を巡らせ、上端に小さな刻み目を、下端に大きな刻み

目を施している。113は、櫛描による斜格子文を口縁部外面に、また櫛描による波状文をその内面に巡らせている。114は、頸部が曲折し、口縁部が大きく外反し、端部がわずかに垂下した状態の壺である。口縁端部に浅く凹んだ面をもち、羽状の刻み目を施している。

2は、短く外反した壺Bの口縁部である。口縁が屈曲し、上方がわずかに立ち上がっている。10は、頸部から短く外反した大型の壺口縁部である。口縁端部は面をもっている。118は、口縁部が鼓形に張った体部から直立ぎみに小さく外反した壺である。頸部から体部にかけて5条一組の櫛描文を全体に巡らせ、体部では櫛を扇状に回転させて流水文状に仕上げている。

1は、口縁部があまり外反しない小型の壺Cの破片である。口縁部の器壁が厚く、端部に面をもっている。3は、口縁部があまり外反しない壺の口縁部である。口縁端部は、上方へわずかにつまみ上げている。25は、口縁部があまり外反しない頸部の太い壺の口縁部である。口縁端部に2条のへら描き沈線を巡らせて下端に小さな刻み目を施している。105は、口縁部があまり外反しない頸部の太い壺の口縁部である。端部は下端を指圧により下方へつまみ出すことにより垂下した状態を呈している。115は、口縁部があまり外反しない壺で、頸部には櫛描沈線を巡らせている。口縁端部は面をもち、下方へ垂下し、中央に2条のへら描き沈線を巡らせ、下端に刻みを施している。116は、完形の小型の壺である。口縁端部は面をもち、数条の細かい櫛描文を巡らせている。また、頸部と体部に、細かい櫛描文を各3帯巡らせている。

29・30は、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部にいたるほど器壁が厚くなっている壺Dの口縁部小片である。端面は上方よりわずかに外傾する。30は、端面に箱状工具によると考えられる刻み目が施されている。頸部にはへら描き沈線が巡る。56は、口縁部外面がわずかに突出した無頸壺の小片である。端部は、上部に面をもち、上端と外方につき出した端部に刻み目を施している。117は、大きく張った体部から口縁部が短く直立する無頸壺である。口縁端部は丸くおさめ、体部に8条一組の櫛描文を1帯と、口縁部に6条一組の櫛描文を2帯巡らせている。その他、壺の口縁部(36~55)が多数あるが、口縁端部に面をもちへら描き沈線と刻み目を施すもの(36~43・45・48)・櫛描文を巡らせるもの(44・46・47・52)がある。さらに口縁端部が垂下した状態で拡張したもの(52~55)がある。また、壺の体部は破片も少ないが、体部に削り出し突帯文を巡らせるもの(11)・貼付突帯文を巡らせるもの(12・14・15・34・35・58~69)・へら描き沈線を巡らせたもの(13・18・31~33・71~78)・壺の口縁内面にへら描き沈線文を施すもの(70)・櫛描沈線文を巡らせるもの(81~89)・流水文を巡らせるもの(90~102)・算盤玉状に体部ののはったもの(209)・櫛描文による山形文を施すもの(211)などがある。

165は口縁部が直立した小型の鉢Aの破片である。口縁端部はつまみ上げ、内面に指圧痕が残る。147は、口縁部が外反した鉢Bの破片である。口縁端部にはわずかに面をもっている。155・157は、わずかに張った体部から外反した口縁を呈する鉢である。口縁端部は、丸くおさめている。158・163・164は、直線状の体部から外反した口縁を呈する鉢で、120は、直線状の体部と口縁端部外面に粘土紐を貼りつけた逆L字状口縁を呈する鉢Cの破片である。口縁上部は、水平な面をなし、端部に刻み目を施している。頸部には3条のへら描き沈線を巡らせている。

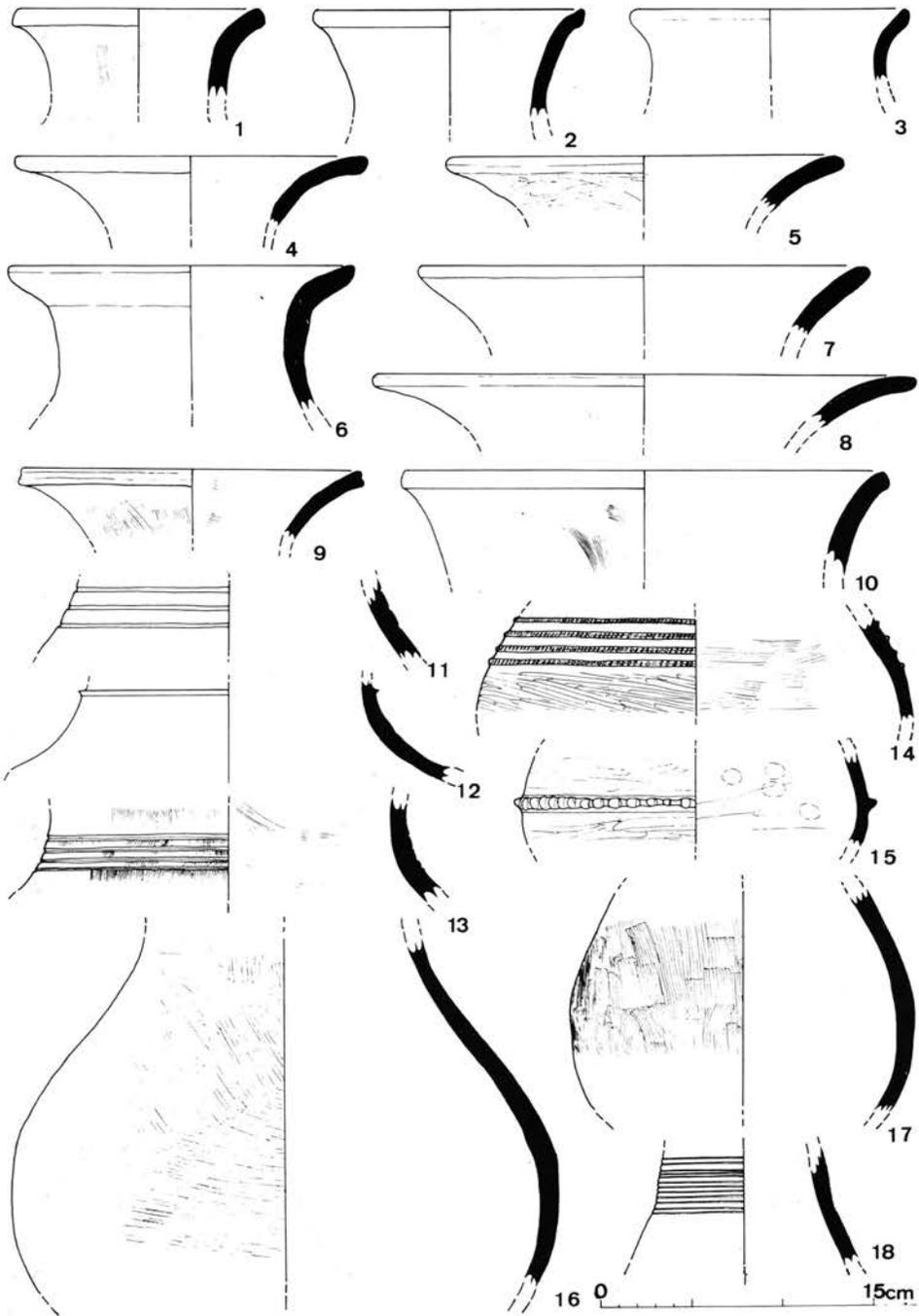
123~125は、直立した体部から外反した口縁部をもつ小型の甕である。123は、口縁端部を丸くおさめ下端に刻み目を施している。頸部にへら描き沈線を巡らせている。124は、口縁端部に面をもち、下端に刻み目を施している。頸部にへら描き沈線を巡らせている。133は、口縁部が「く」の字状に外反した甕である。頸部に10+ $\alpha$ 条のへら描き沈線を巡らせている。140・142~147は、直立した体部から外反した口縁部をもつ甕である。171は、わずかに張った体部から大きく外反した口縁部を有する甕である。口縁端部は面をもち、下端に小さな刻み目を施している。頸部には4条一組の櫛描文を数帯巡らせている。130は、わずかに張った体部から曲折した口縁部をもつ甕である。頸部に1条のへら描き沈線と口縁端部に刻み目を施している。132は、頸部に1条のへら描き沈線を巡らせ、口縁端部に刻み目を施した大型の甕である。134は、口縁端部に刻み目を施し、口縁部内面に三角形の刺突による列点文を2段に施している。135は、頸部に数条のへら描き沈線を巡らせ、口縁端部中央に1条のへら描き沈線を巡らせたあと、上下から指圧によって波状を呈している。

119・121・122・193・194・196は、頸部に数条のへら描き沈線を巡らせた甕Dの破片である。195は、口縁端部にも刻み目を施さない無文の甕であるのに対し、他の119・121・122・193・194・196は、口縁端部にも刻み目を施している。

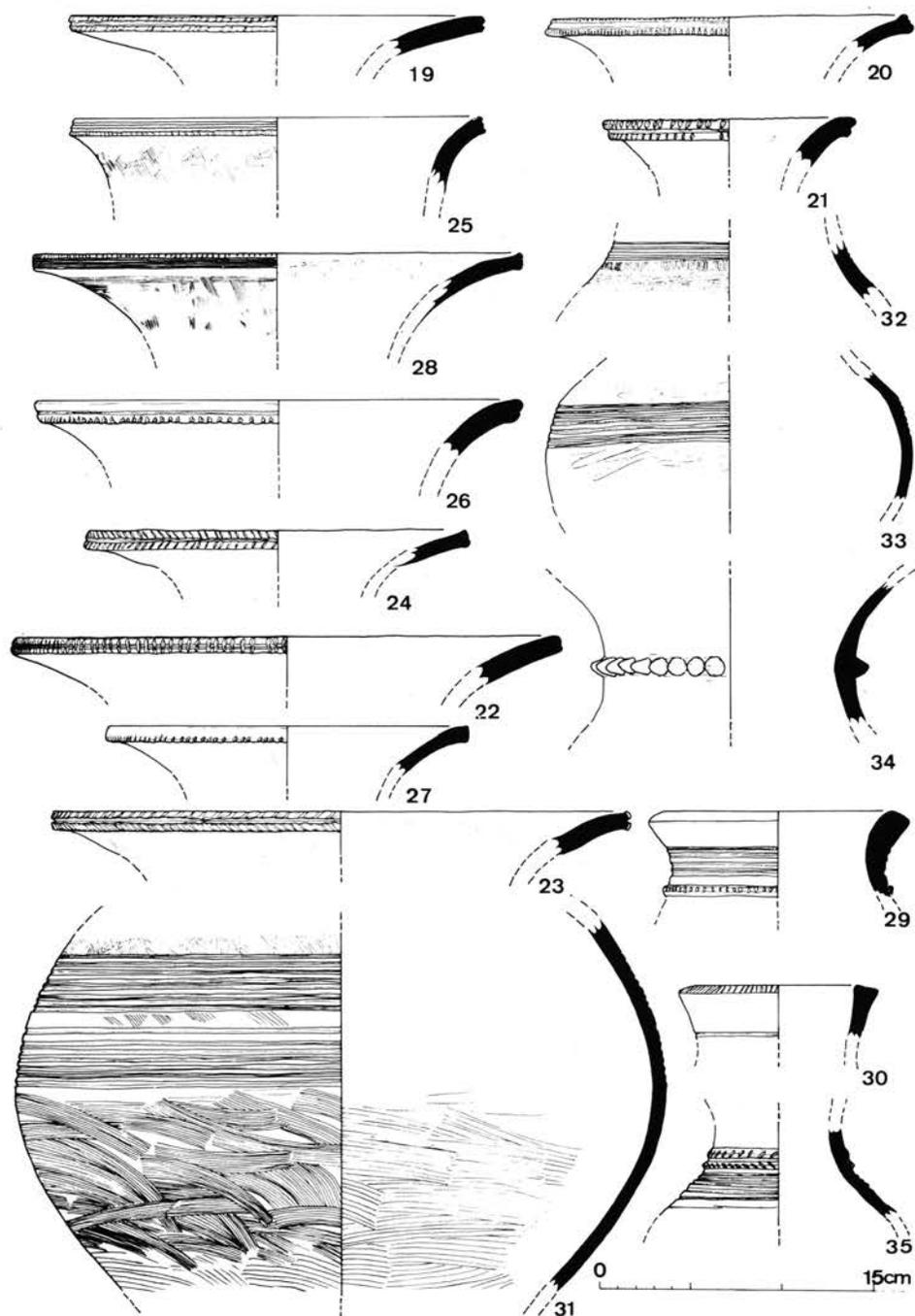
151・152・201は、口縁端部外面に太い粘土紐を貼り付けた小型の甕Eである。断面から観察すると玉球状を呈するものである。153・202は、口縁端部外面に薄い粘土紐を貼り付け、口縁端部は薄くつまみ上げているが、貼り付けてある下端には接合面が明瞭に残っている。その他の甕の口縁部には、154・189~192・197~200・203~208等があるが、頸部にへら描き沈線を巡らせるもの(189~194・197)・口縁端部に面をもち、無文のもの(154・205)・口縁端部外面に貼付突帯をもつもの(199~200・203・204)・口縁部外面に縦方向の粗いハケ、内面は横方向の粗いハケを施しているもの(206~208)などにわけられる。

### 3 古墳時代の土器

古墳時代の土器には土師器の高杯・甌・甕と須恵器の杯身・杯蓋・高杯・甕がある。出



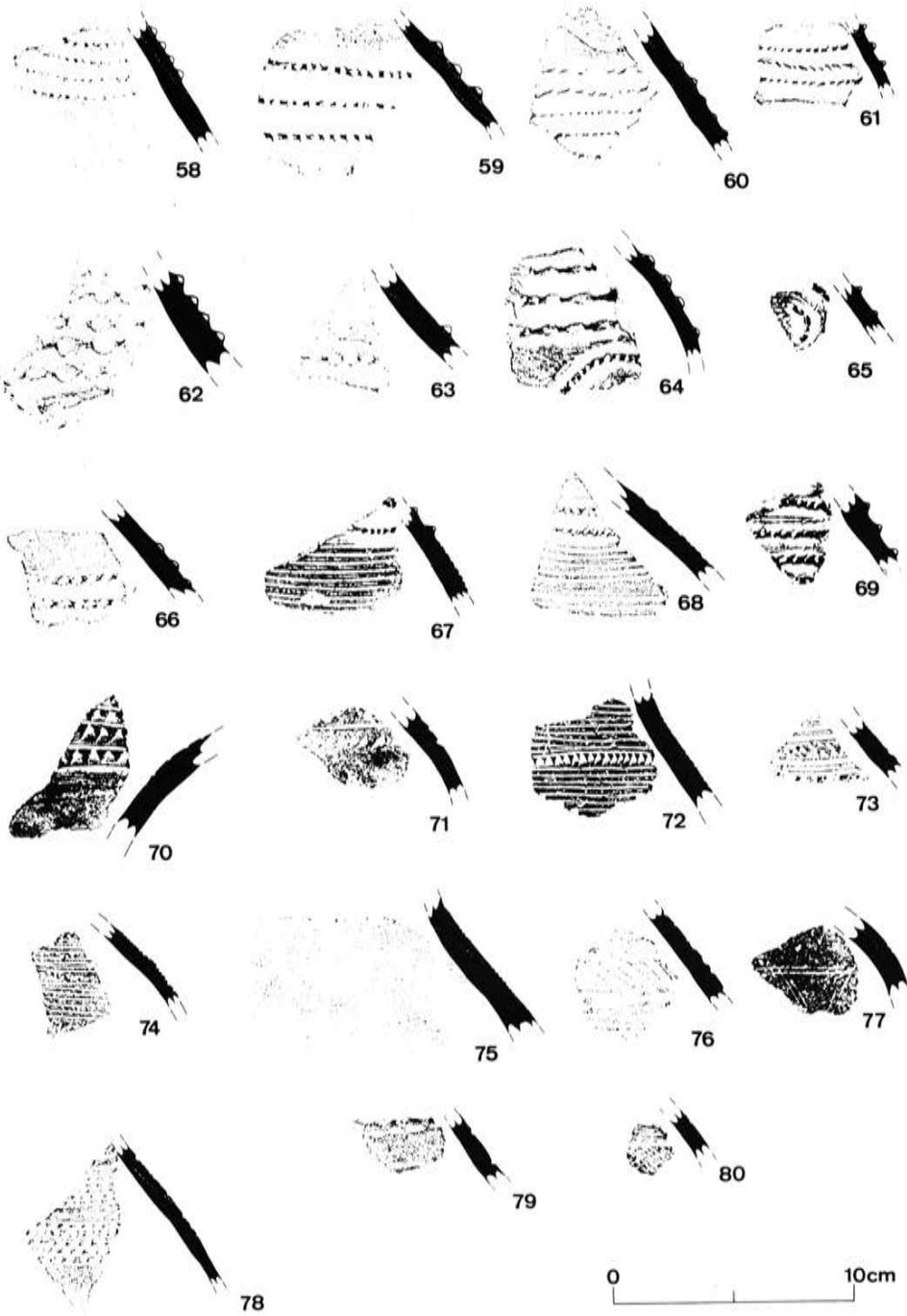
第 63 図 包含層出土土器 (壺口縁部・体部)



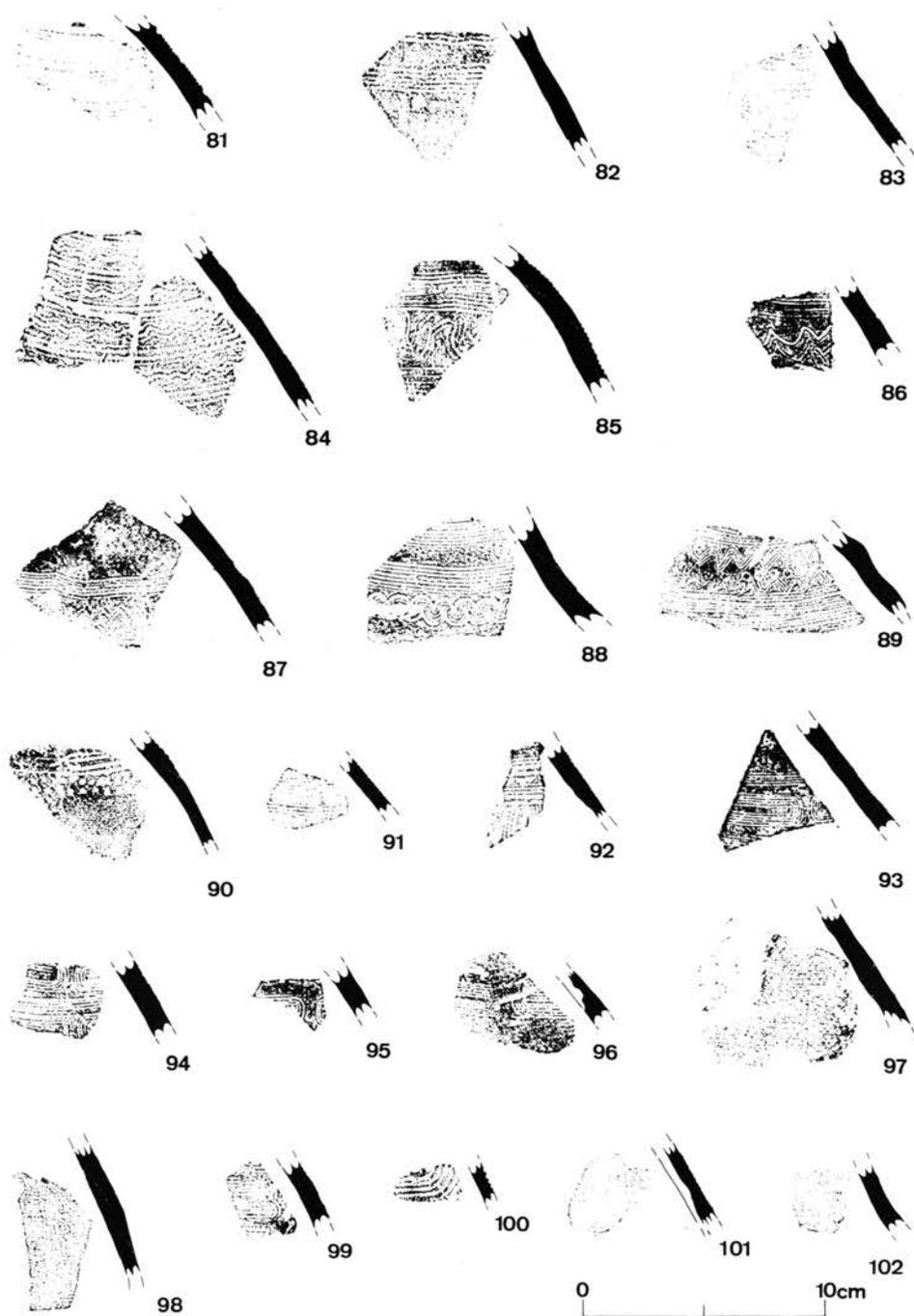
第 64 図 包含層出土土器 (壺口縁部・体部)



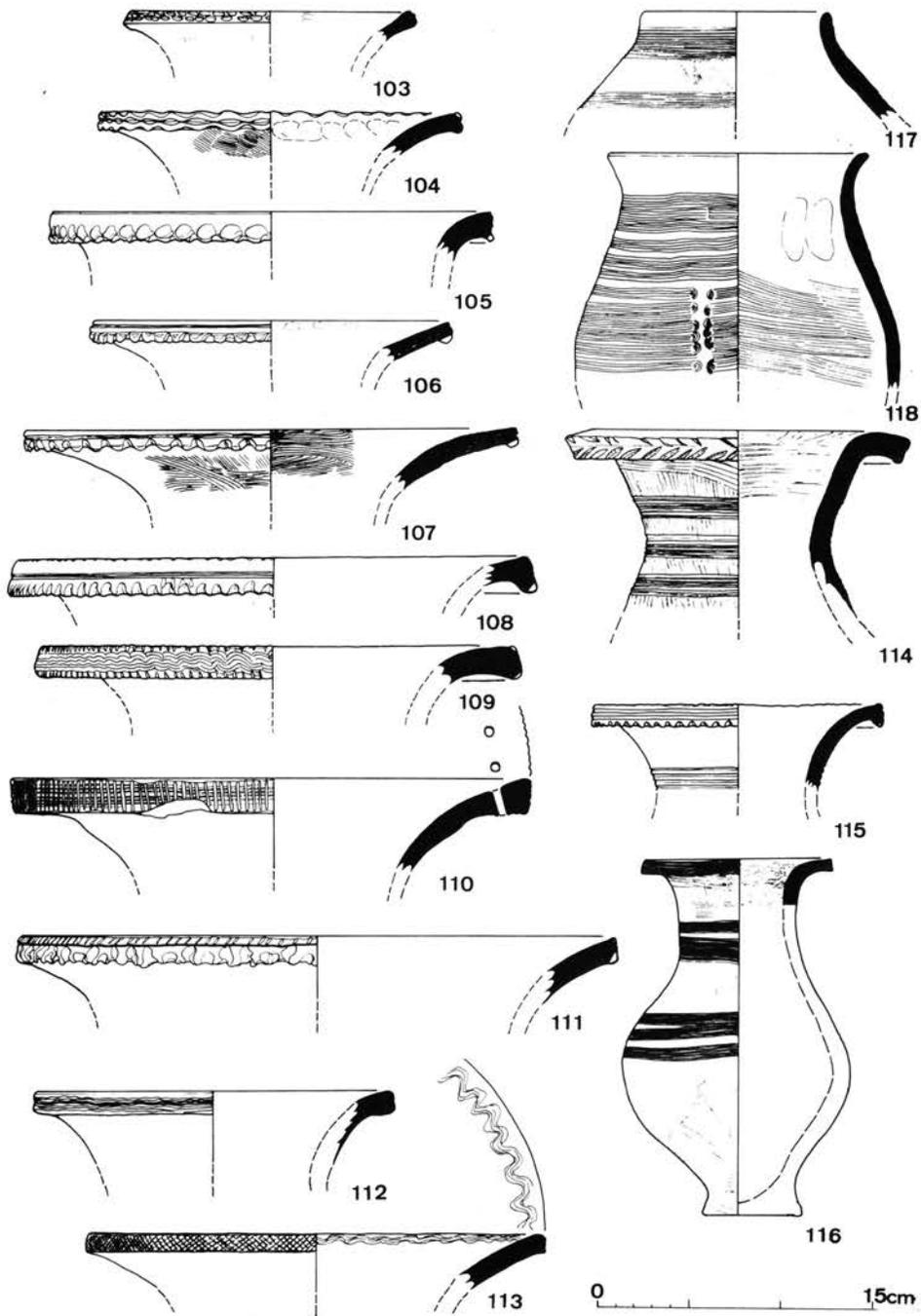
第 65 図 包含層出土土器 (壺口縁部)



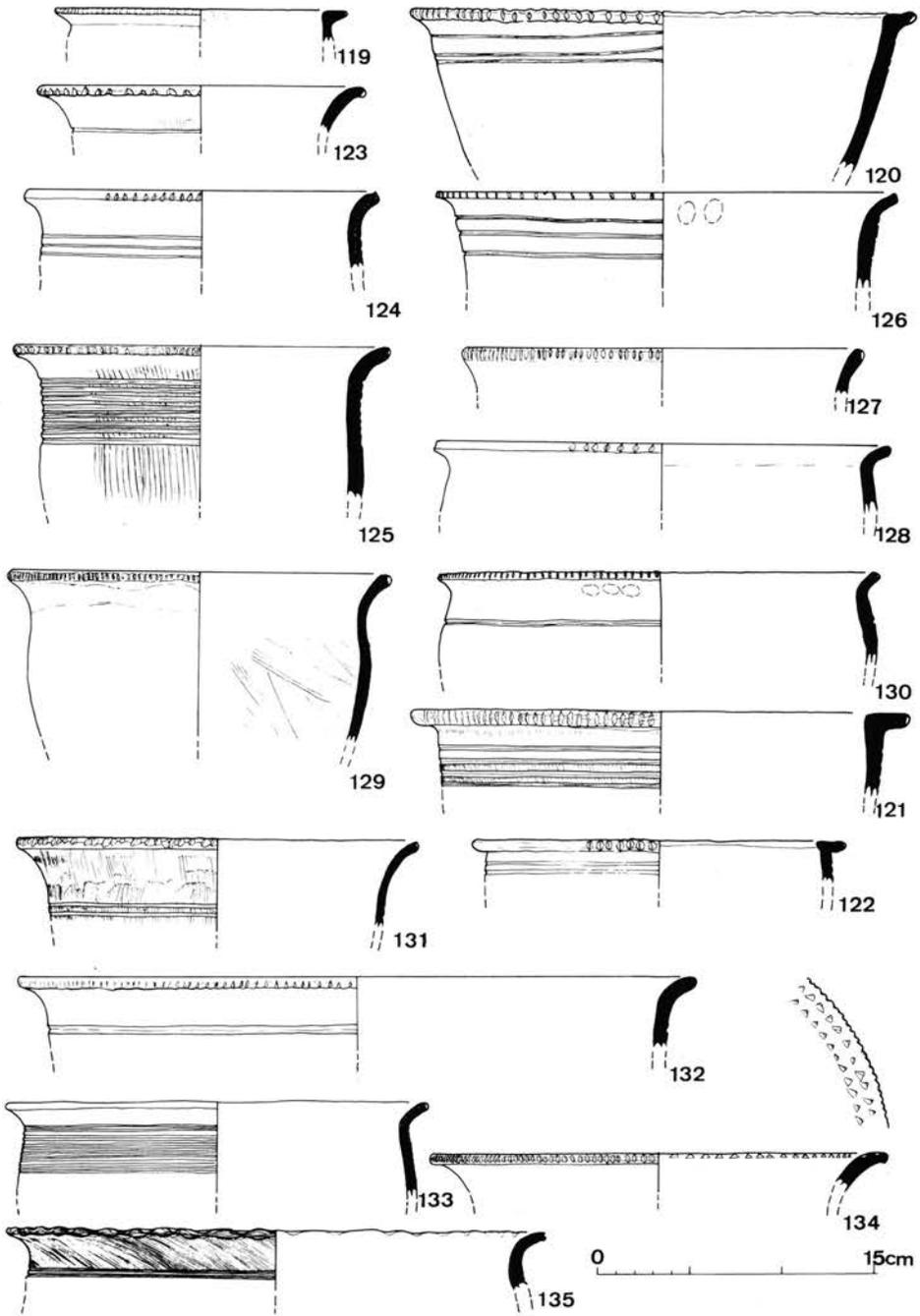
第 66 図 包含層出土土器 (壺体部)



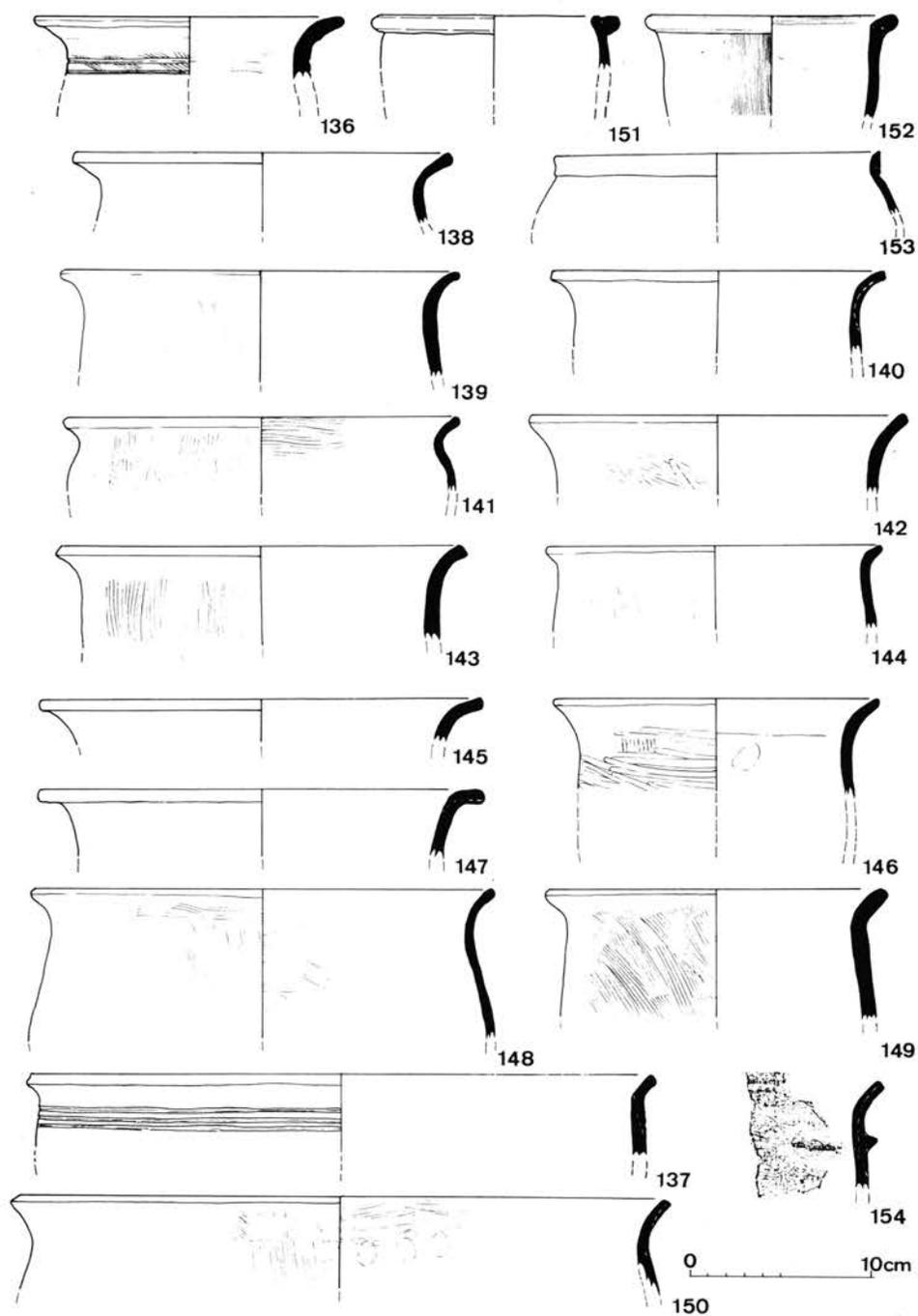
第 67 図 包含層出土土器（壺体部）



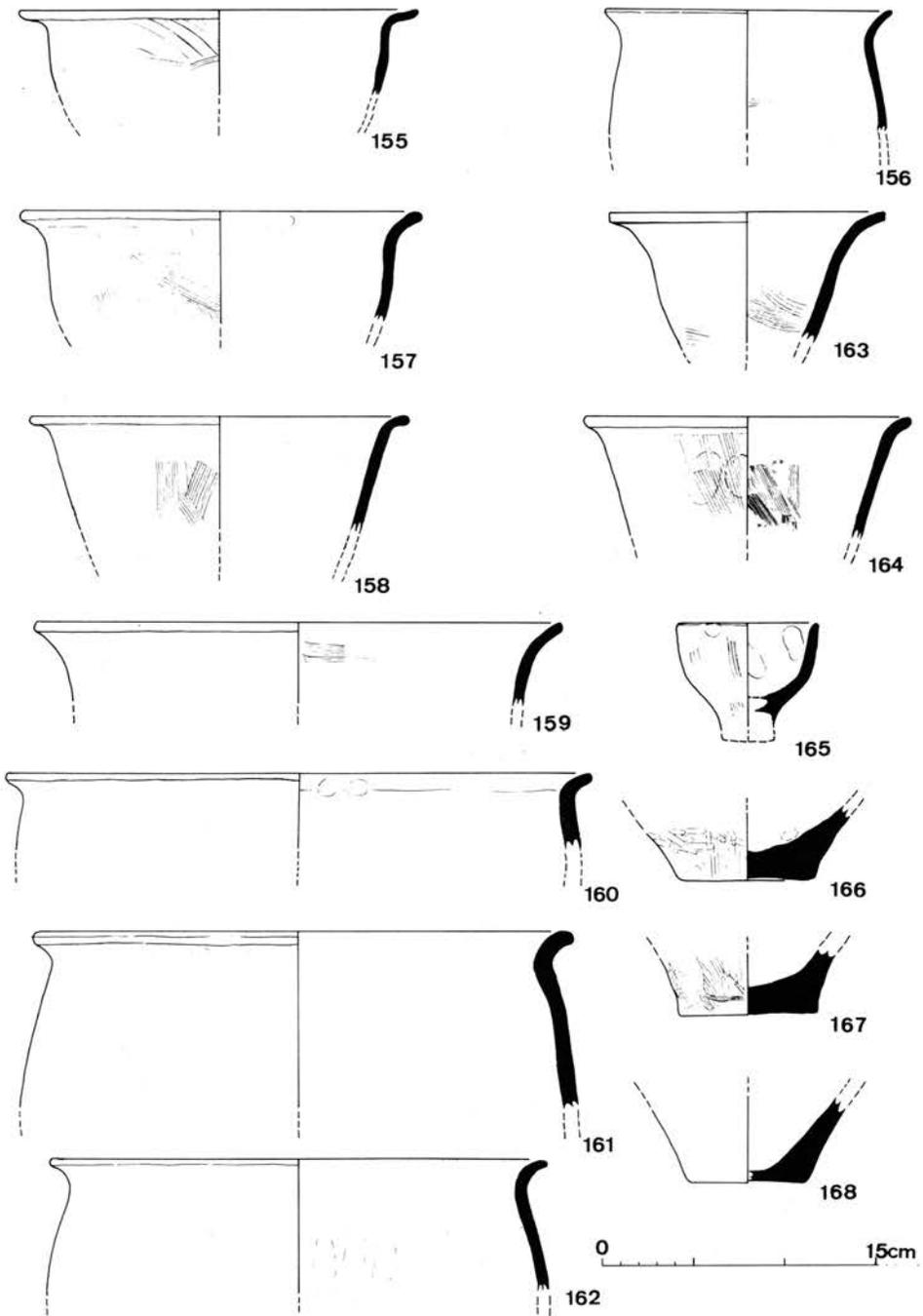
第 68 図 包含層出土土器 (壺)



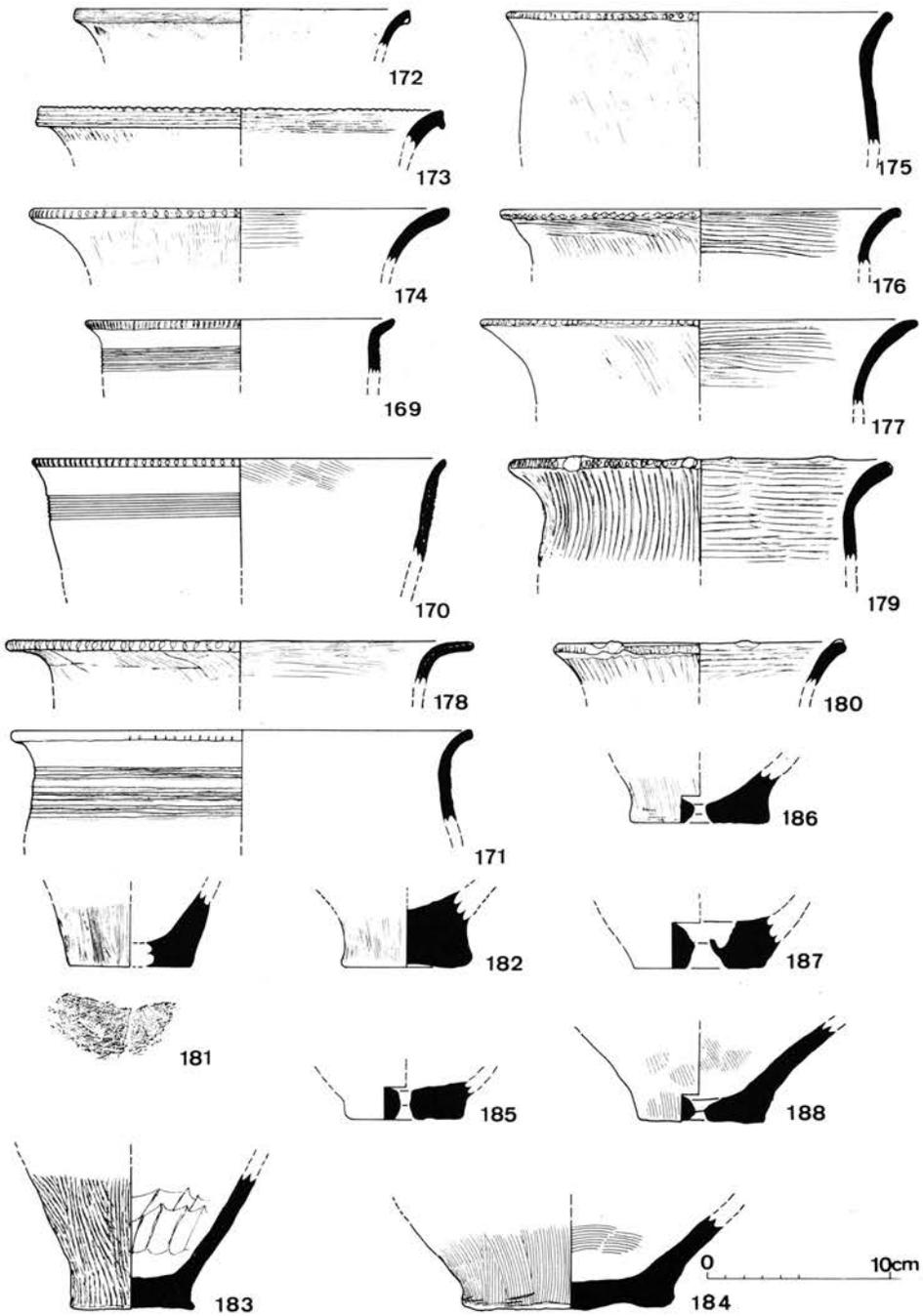
第 69 図 包含層出土土器（甕口縁部）



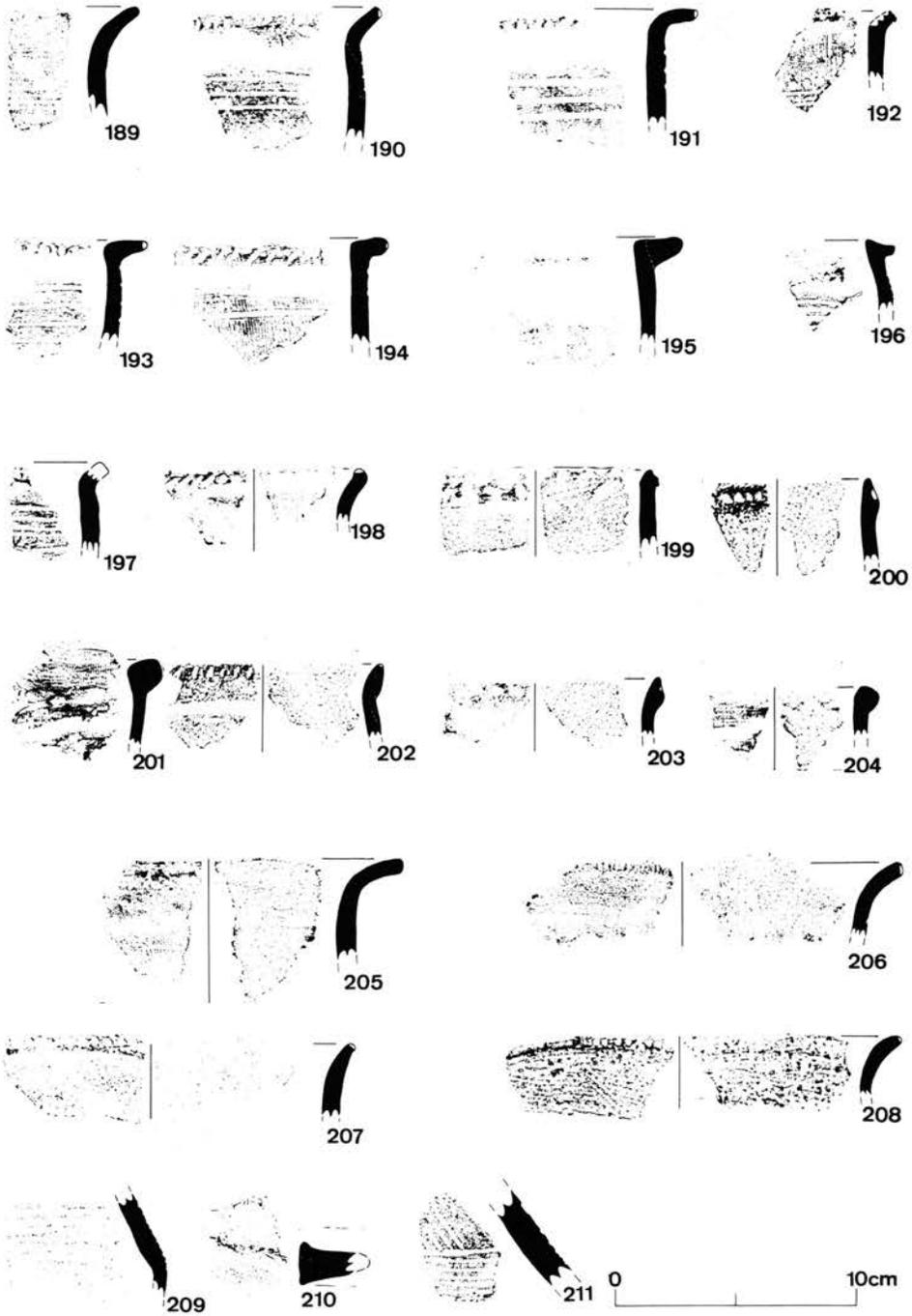
第 70 図 包含層出土土器 (甕口縁部)



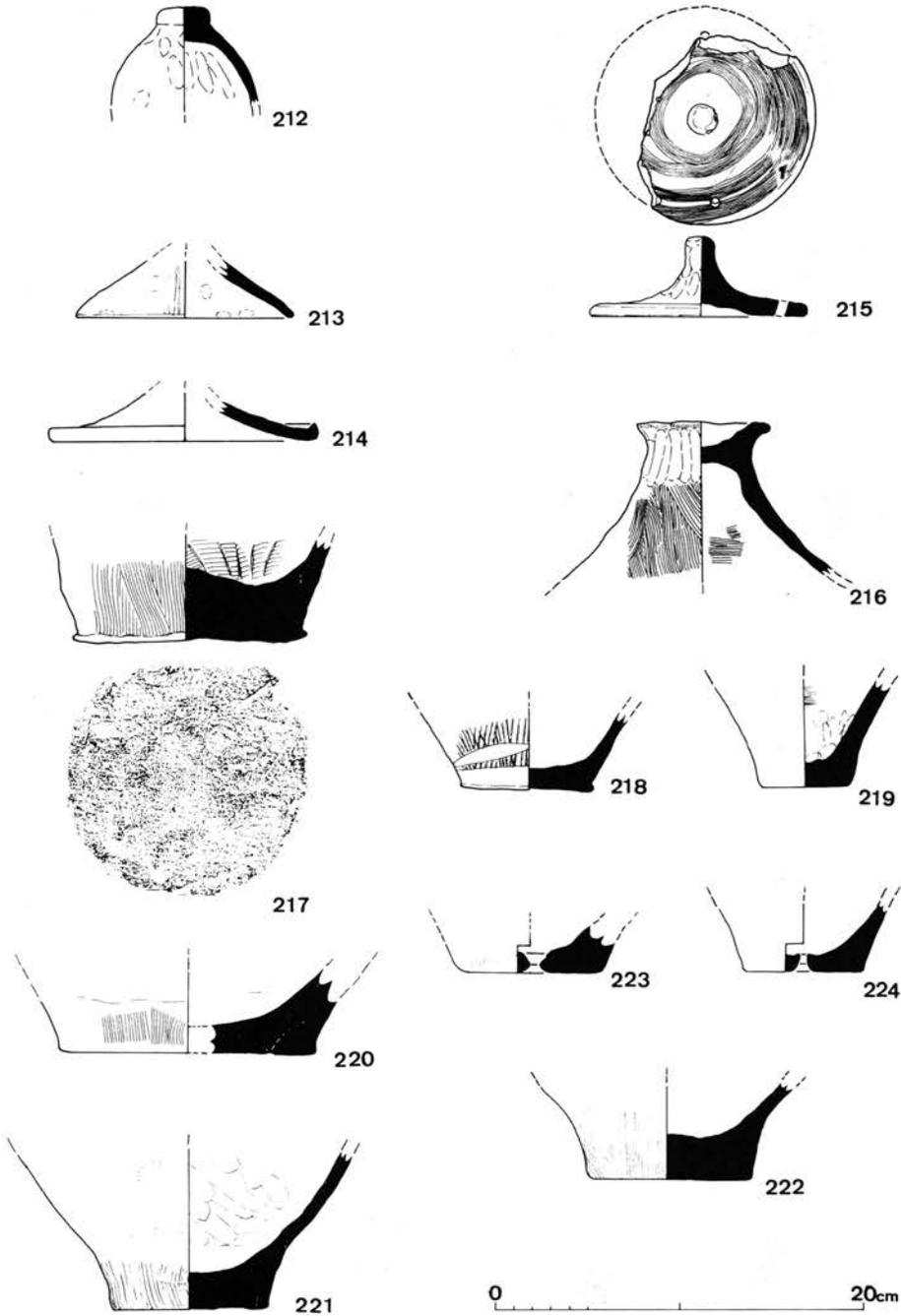
第 71 図 包含層出土土器（甕口縁部、鉢口縁部・底部）



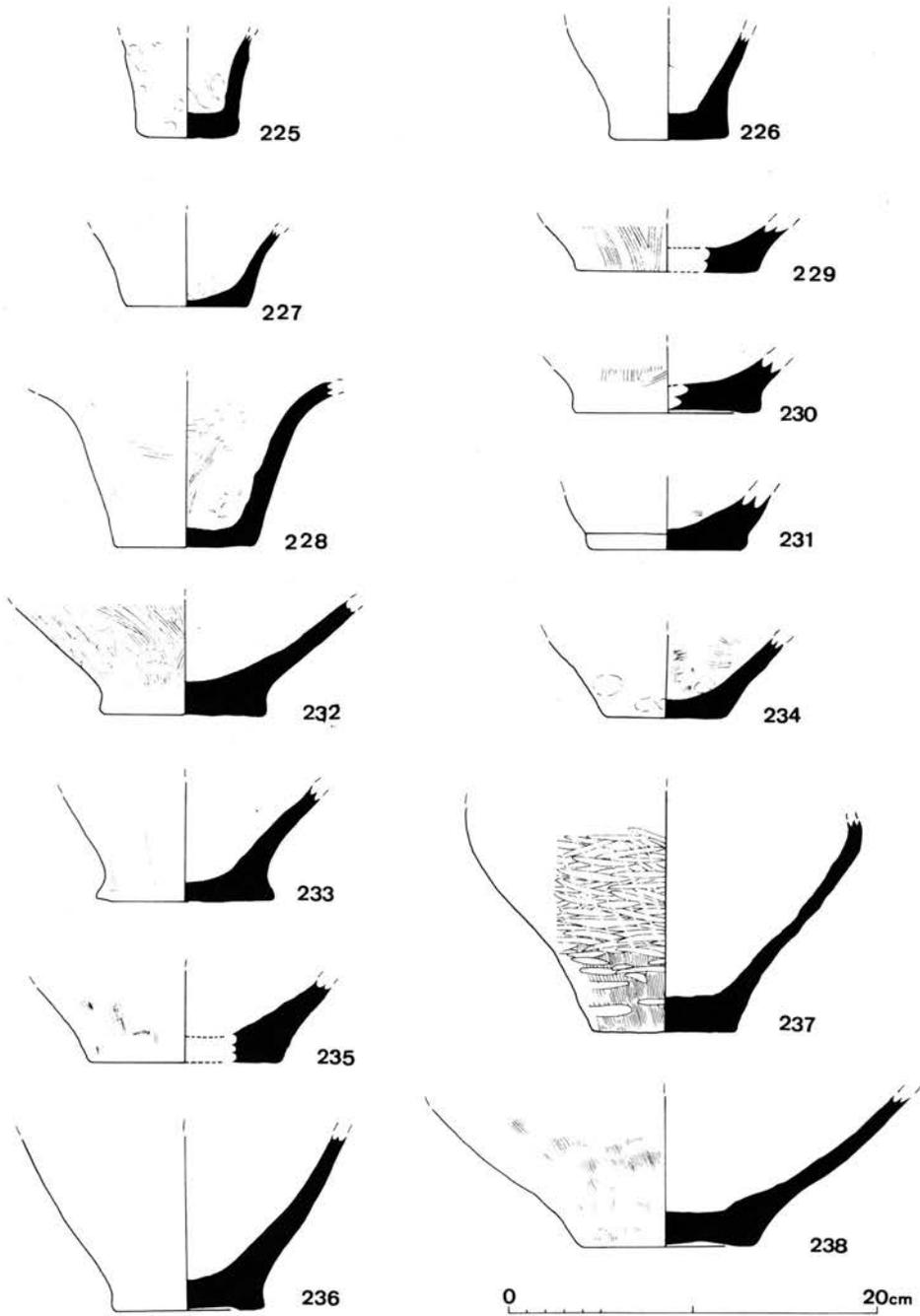
第 72 図 包含層出土土器（甕口縁部・底部）



第 73 図 包含層出土土器 (壺体部, 甕口縁部・体部・把手)



第 74 図 包含層出土土器（蓋，底部）



第 75 図 包含層出土土器 (底部)

土地点は、溝 SD 0109 内からと遺物包含層からである。庄内式の甕・布留式の甕片も少量出土したが、図化できるものはなかった。

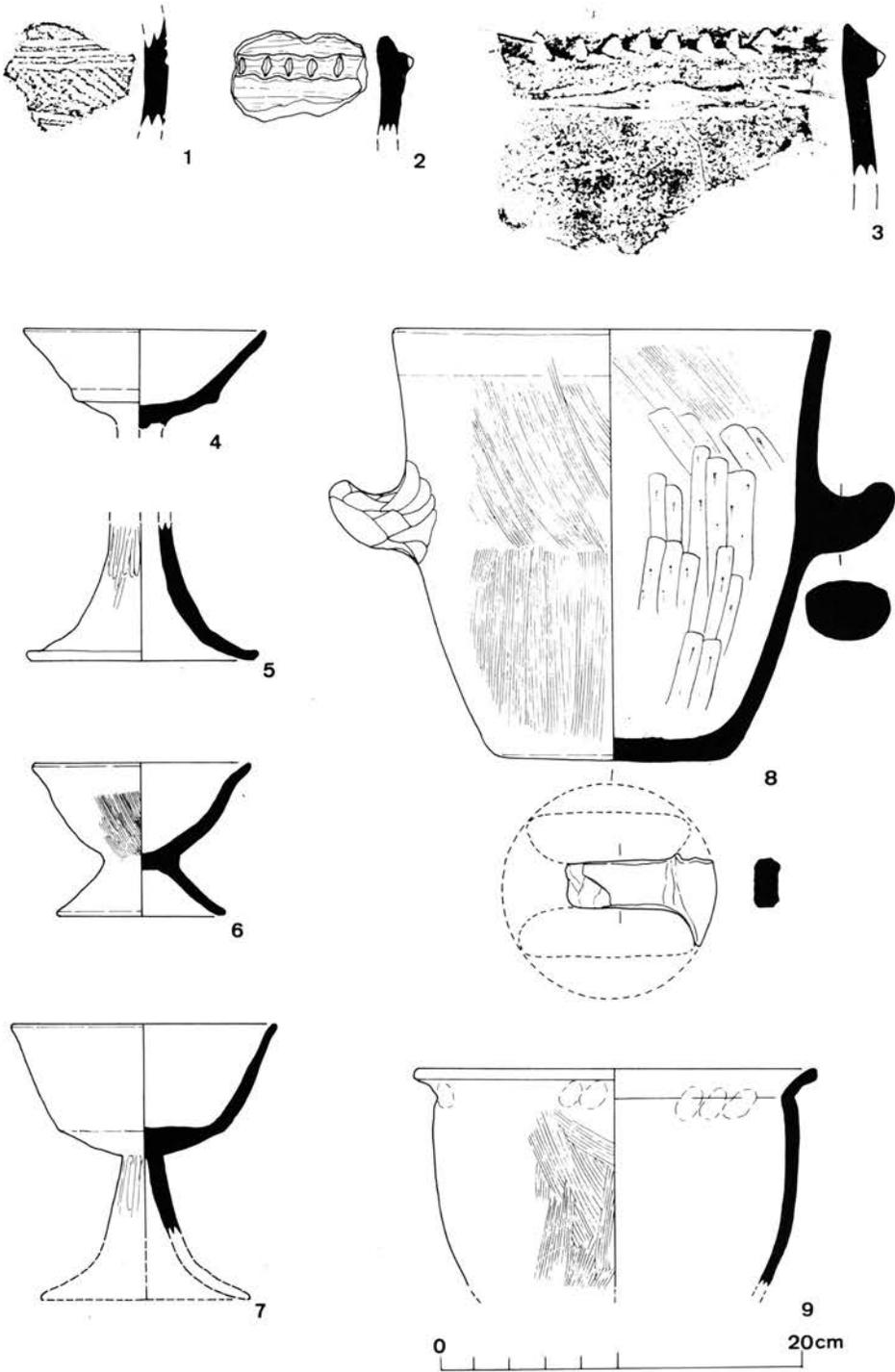
①土師器(第76図4～9)

土師器には高杯(4～7)・甌(8)・甕(9)がある。4は杯部の底から直線状に口縁部外方へのび、口縁端部は丸くおさめている。5は柱状部から下外方へ開きぎみにゆるくカーブしながら裾部が開いた高杯の脚部である。6は、丸みをもった杯部の底から外方へ開いた高杯である。口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめている。脚部は、底部から直線状に下方向に短く広く開いている。7は、平坦な底部から直線状に外上方へのびる深い杯部を有する高杯である。脚部は、下外方へ向かって柱状になっている。8は、底部から内湾しながら上外方へのび、中位の把手部から外反きみに上外方へ口縁部がのびる甌である。把手は、左右対称に貼り付けてある。底部には2つの楕円形をした孔を穿っている。9は、頸部から「く」の字状に短く外反した口縁部をもつ甕である。

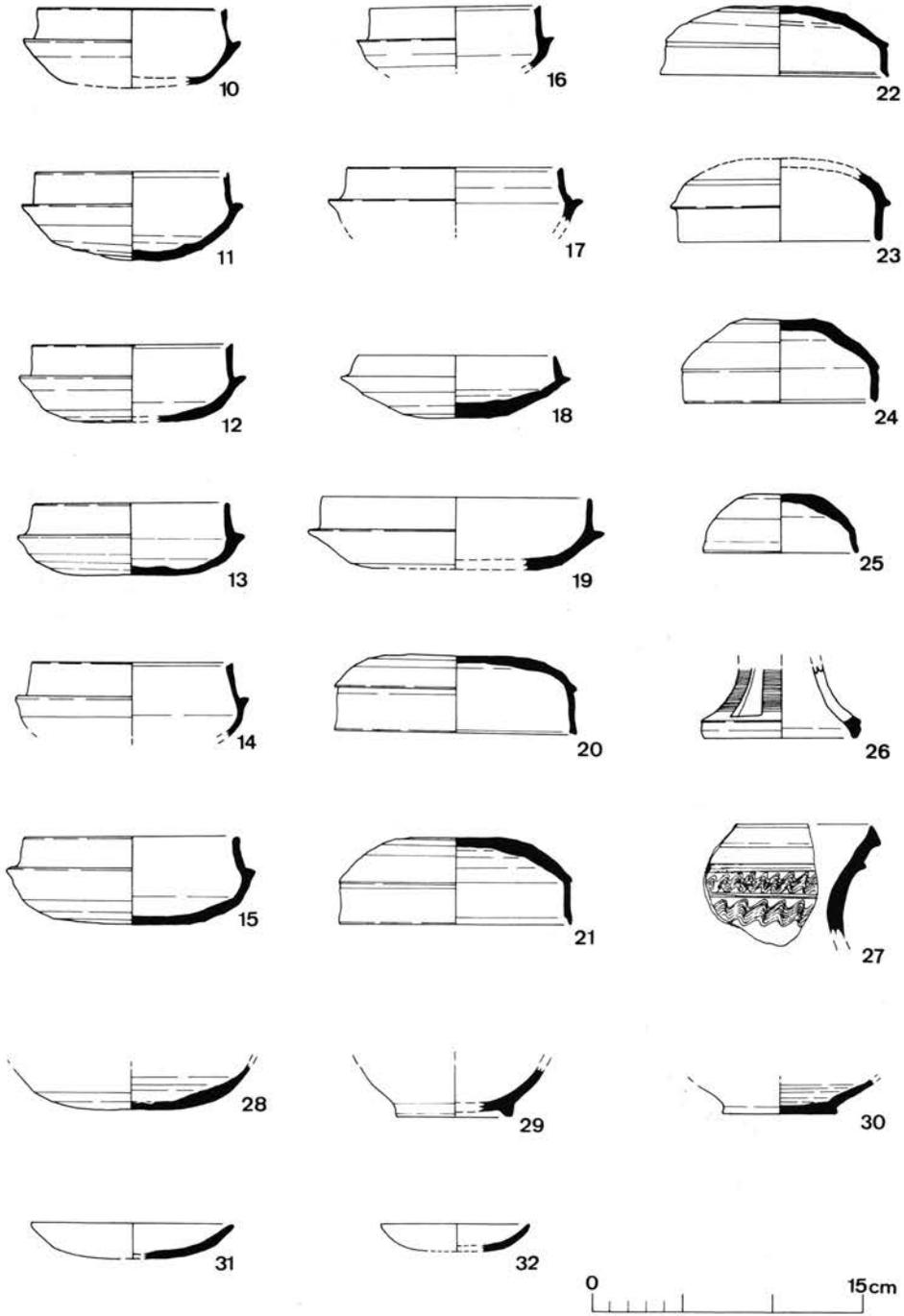
②須恵器(第77図10～28)

須恵器には杯身(10～19)・杯蓋(20～25)・高杯(26)・甕(27)がある。杯身は内傾ぎみに直立した口縁部を有し、杯部の深いもの・杯部の浅いもの・さらには短く立ちあがる口縁部と浅い杯部を有するものなどがある。さらに、口縁端部が平坦なもの・段をもつもの・丸いものなどに分けられる。杯蓋は、口縁部が垂直に下り、端部が面をもつもの・段をもつもの・丸いものがあるが、天井部が丸みをもつものと平らに近いものにも大別される。高杯は26が1点出土している。26は、ゆるやかに下内方へ屈曲し、かぎ状に曲がる高杯の脚部である。口縁端部は下方に肥厚し、面をもっている。口縁部下方には1条の凸線を巡らせている。

(村尾政人)



第 76 図 縄文土器・土師器



第 77 図 須恵器

## 第2節 石器

### 1 はじめに

当遺跡から出土した石器類には、打製石器として石鏃・石錐・石匙・削器・楔形石器およびその削片・敲石・打製石斧・石核・剥片・碎片などが、磨製石器としては、石鏃・石剣・石庖丁・大型石庖丁・石鎌・石庖丁未製品・小型柱状片刃石斧・小型扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・抉入柱状片刃石斧・太型蛤刃石斧およびその転用品・砥石・石皿状の石製品・有溝剥片・陽物状石製品などがある。今回の調査で回収し得た石器は、剥片類を含め、総数510点(+α)である。

石器類の大半は、前節で報告した弥生時代前期から中期初頭にかけての土器を包蔵する遺構の埋土および包含層から検出したものである。従って、これらの帰属時期は、伴出土器から判断して、多くは弥生時代前期末～中期初頭を中心とする範囲にあるものと推測できる。

本節では、遺物を器種別にまとめ、各々について説明していくことにする。

### 2 打製石器

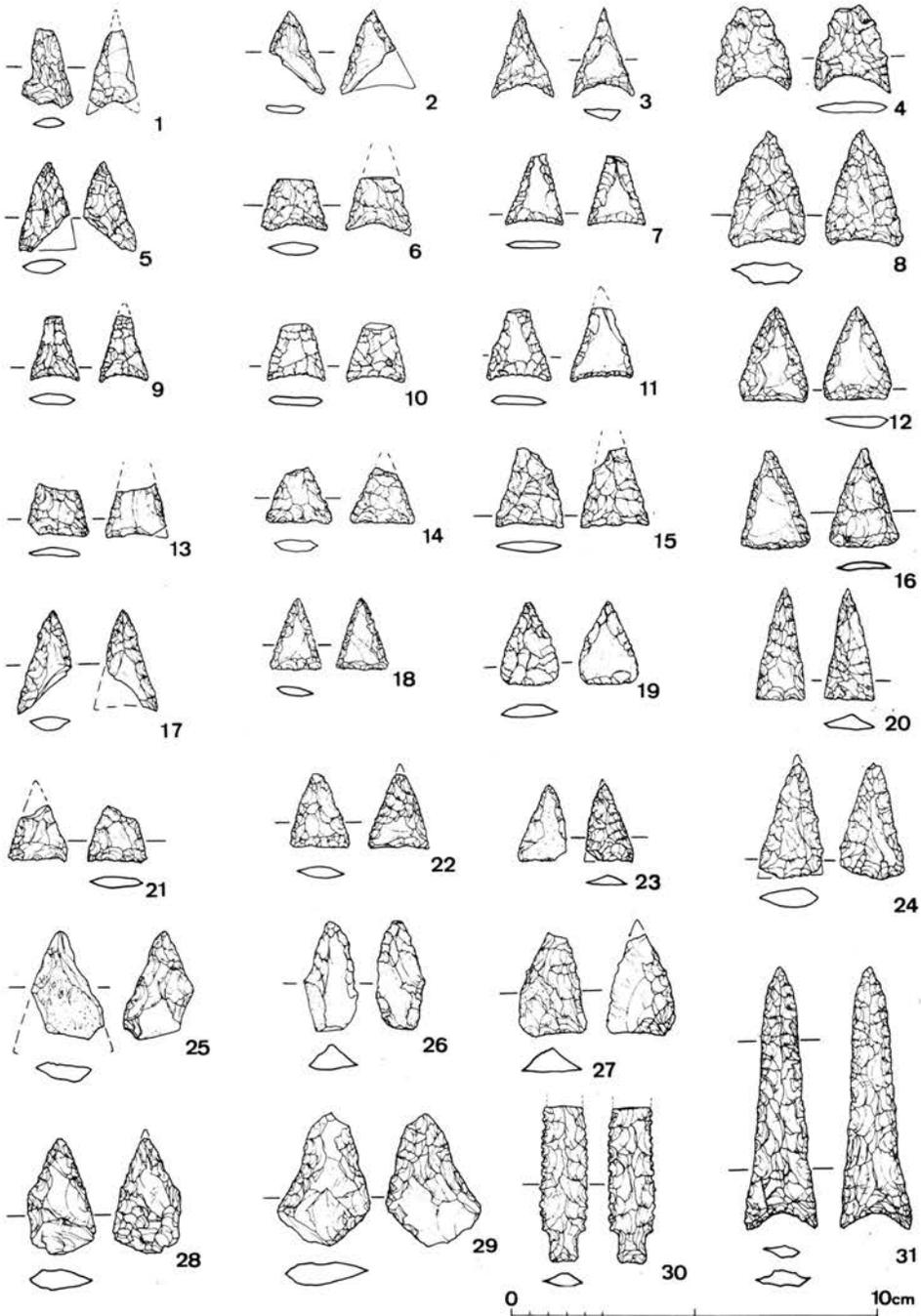
(1) 石鏃(第78図1～31)未製品・折損資料を合わせると総数31点を数える。大半のものは包含層や排土中で検出しており、遺構に伴うものは数少ない。

形態別にみると、凹基無茎式15点、平基無茎式13点、凸基無茎式3点(このうち円基式1点・尖基式2点)、凸基有茎式1点であり、凹基無茎・平基無茎式が大半を占める。凸基有茎・凸基無茎の占める割合は全体の一割強に満たない。

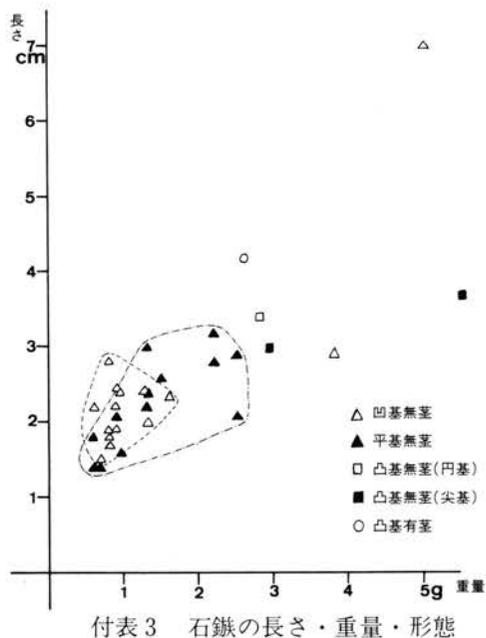
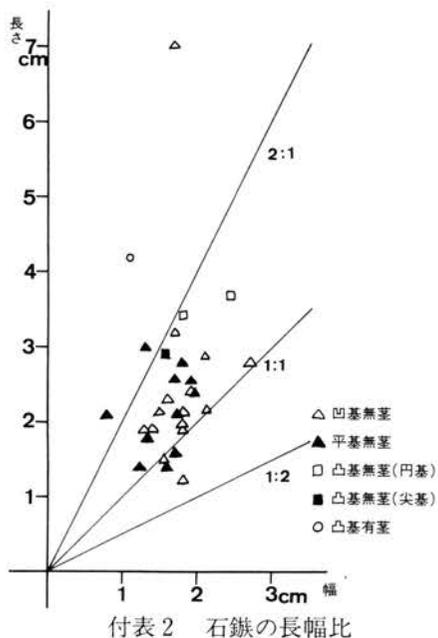
これらの石鏃は、長幅比が1:1から2:1の間に分布の中心がみられ、1:1に近接する状況が観取される(付表2)。また、各形態の長さや重量の相関関係をみると、凹基無茎式は重量1.0g前後を中心に分布を示し、2gまでの小形のものや4～5gの大形のもの二つのグループがあることがわかる。平基無茎式は、凹基無茎式の小形タイプと重なりを示しながら、2.5g前後までの範囲にまとまりのある分布をなしている(付表3)。両形態が1g前後で整合して各々の分布を持つことは、この数値が製作にあたって意図されていたものとみることができる。

石鏃の製作技術については、素材となる剥片が大きく変形され、器面の大半が二次加工痕で被われるため剥片生産技術と石器製作とを有機的に言及することは困難であるとされている。当該資料についても同様であって、ここでは剥片生産段階の痕跡を持つ資料を主に取り上げて概説する。

素材剥片は、破棄された剥片資料から推して特定の形態を持つものではない。素材剥片の利用は、石鏃器表面に残る素材の主要剥離面からみて、剥片の幅を石鏃の長さとするも



第 78 図 石鏃実測図



のが多い(1・3・5・7・11・12・13・18・19・21・27)。これらは必ずしも剥片の剥離方向と石鏃の主軸が直交している訳ではなく、斜行している場合が多い。

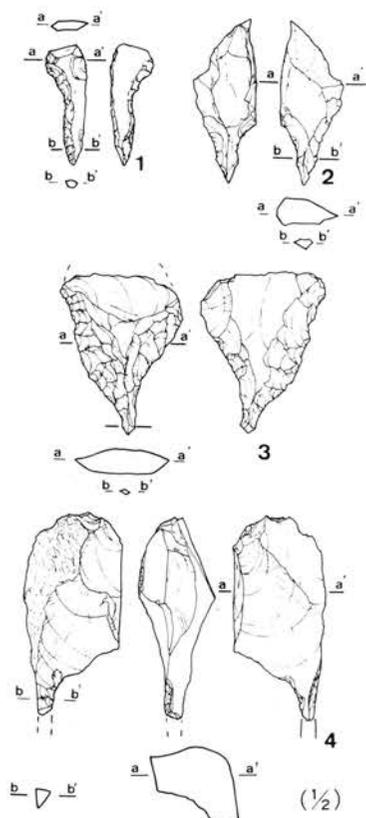
また、背面や側縁に自然礫面を残す例がある(23・25~27)。23・25は、主に主要剥離面に調整を施して成形するが、平坦な自然面をそのまま背面として用いている。27は主要剥離面を大きく残し、逆刺の一端にポジティブバルブをとどめる。これらは、素材の変形度が低く、粗製である。

19・27など、逆刺の一端にポジティブバルブが認められる例がある。これらは、石器製作に際して、バルブの肉厚な部分を起点として調整が行われる場合のあることを示している。

なお、30は当遺跡において唯一確認された凸基有茎式である。茎は台形で、鏃身両側は平行し、鋸歯状を呈している。31は大形の凹基無茎式である。小形軽量の凹基無茎式・平基無茎式が主体を占める中で、30と並んで特異な位置を占める。

石材は、8が流理構造の発達した流紋岩様石材が用いられているほかは、全てサヌキトイド製である。

(2) 石錐(第79図1~3) 6点を確認した。この内、2点は未製品である。いずれも頭部と錐部を明瞭に作り出すものであって、いわゆる棒状錐はない。丁寧に調整した頭部に細長い錐部を作り出すもの(1)と、不定形な多角形あるいは涙滴形を呈し、其の先端部を



第79図 石錐実測図

上遺跡、兵庫県伯母野山遺跡、同県三田市奈カリ与遺跡などが知られている。

(4) 削器(第80図3~8) 6点を確認した。扁平な剥片を素材として、長辺の一つに調整剥離を加え刃部を形成するタイプ(3~6・8)と、加えて右側縁にも刃部状の調整を施すタイプ(7)がある。

刃縁部の平面形態は、直線刃と凹刃があり、7の側縁部に作られた刃部は直線的でやや外湾している。刃部の調整は、主に片面側から行うもの(3・7・8)と両面から行うもの(4・5・6)とがある。

いずれも、器面ないし側縁の一部にわずかではあるが礫面を残し、器表の両面に大剥離面を大きく残している。折損して明らかでない3を除く各資料には、主要剥離面にポジティブバルブがほとんど未調整のまま残っている。そのうち、4は、表裏にバルブをもち、7は、ツインバルブ状を呈している。

これらの剥離面を観察すると、打点が約40°~50°の角度をもって転移していることがわかり、素材の剥片生産のあり方を示唆している。

(5) 楔形石器(第81図1~18) 33点を確認した。方形台状を呈した小形の両面加工石器

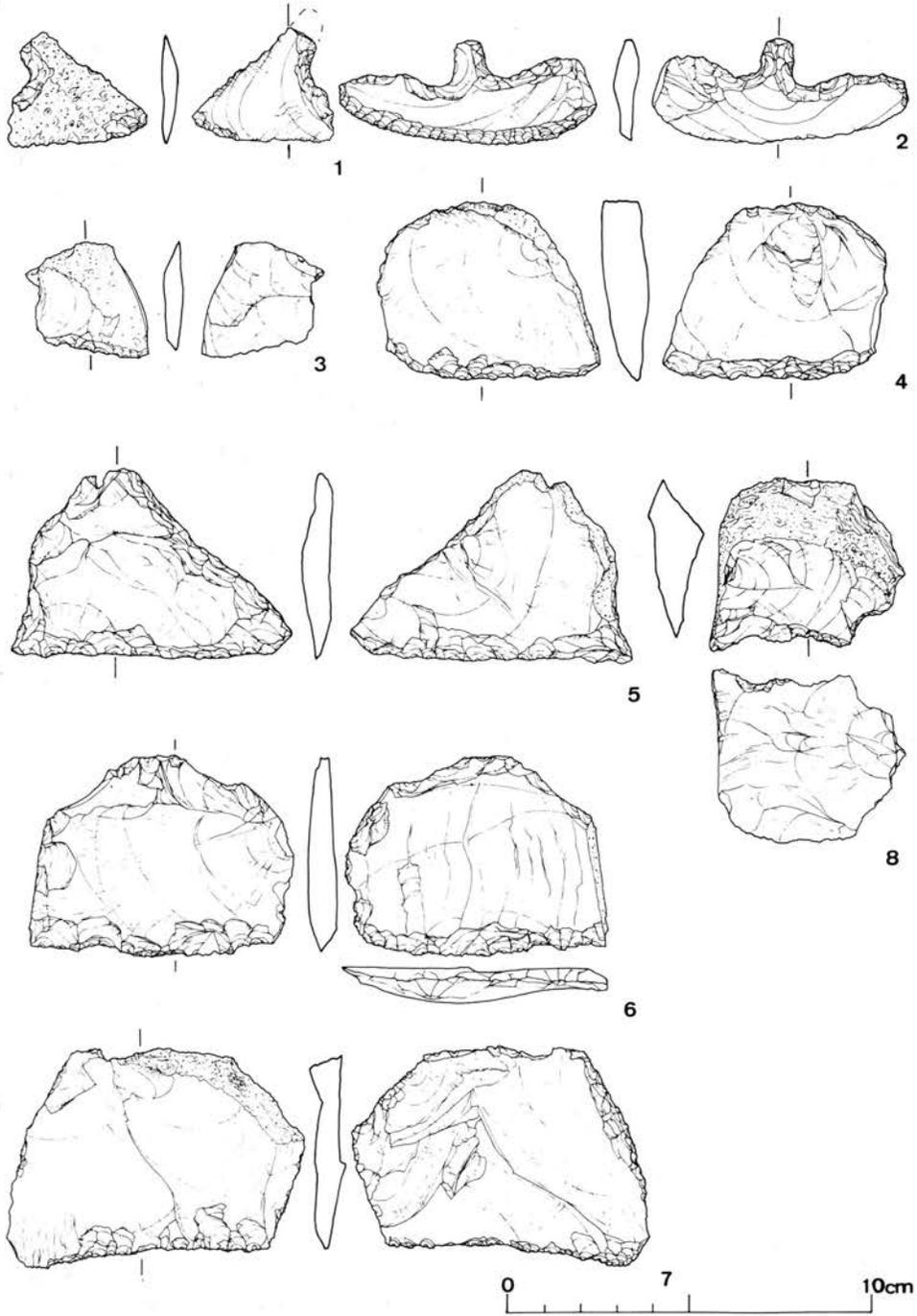
調整して錐として利用するもの(2・3・4)とがある。図示していないが、未製品もこれに含まれる。

使用痕(回転摩減痕)の認められるものはない。

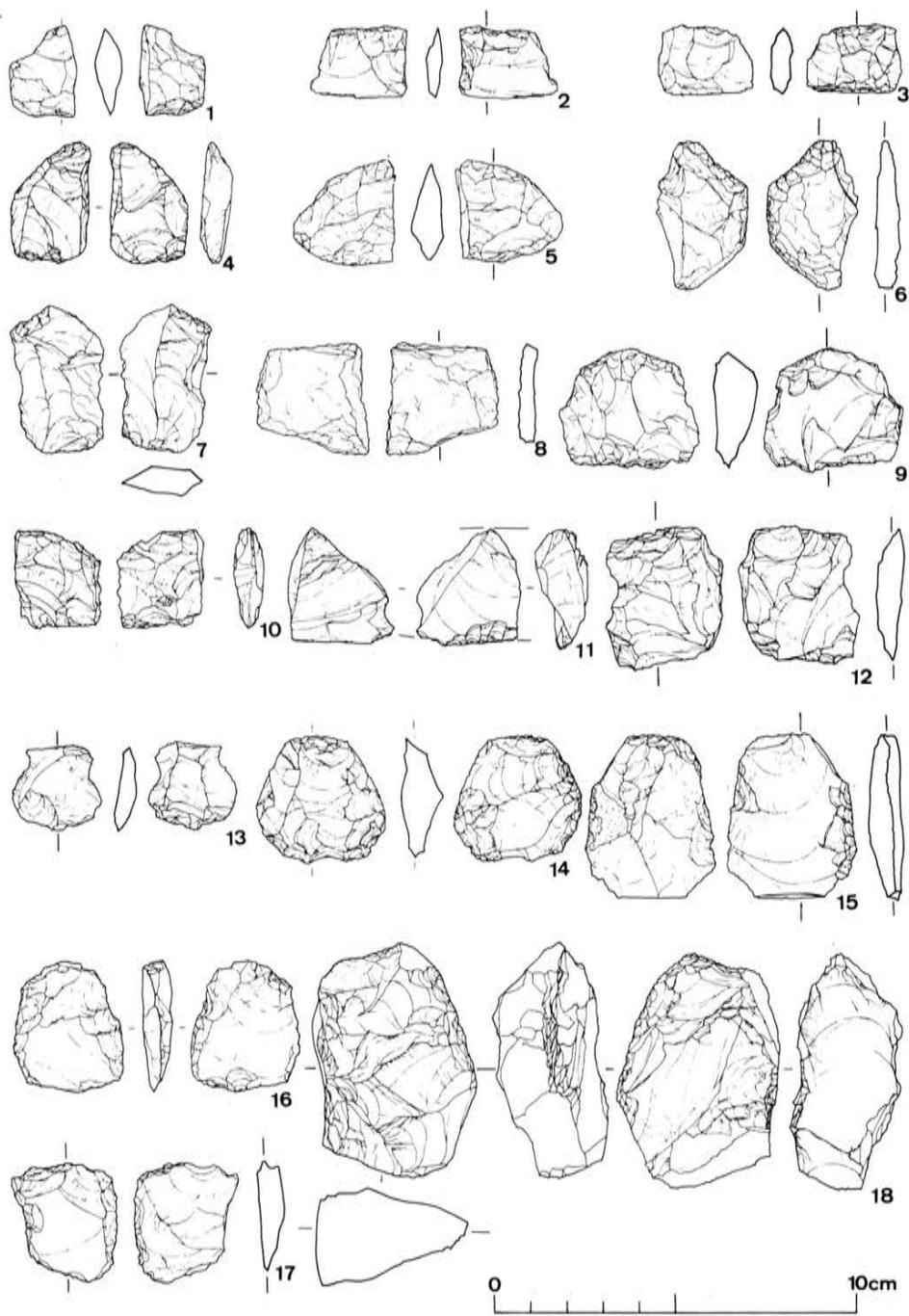
(3) 石匙(第80図) 2点を確認した。いずれも直線的な刃部に明瞭なつまみ部を作り出している。1はつまみ部と刃部にあたる一辺にわずかに調整を施すのみで、器体の表裏に自然の礫面・主要剥離面を大きく留めている。素材の変形度が低く粗製であり、これを未製品あるいは調整ある剥片として理解することも可能である。サヌキトイド製である。

2は、横長の剥片を素材としたものである。主要剥離面に残るバルブ付近の肉厚な部分を、つまみ部として用いている。調整剥離は、周縁部を中心に丁寧に行い、刃部に及ぶ。刃部の調整は、主に一方向から行い、片刃の鋭利な刃縁を形成する。器体には両面に大剥離面を残している。青灰色の良質のチャート素材とする。

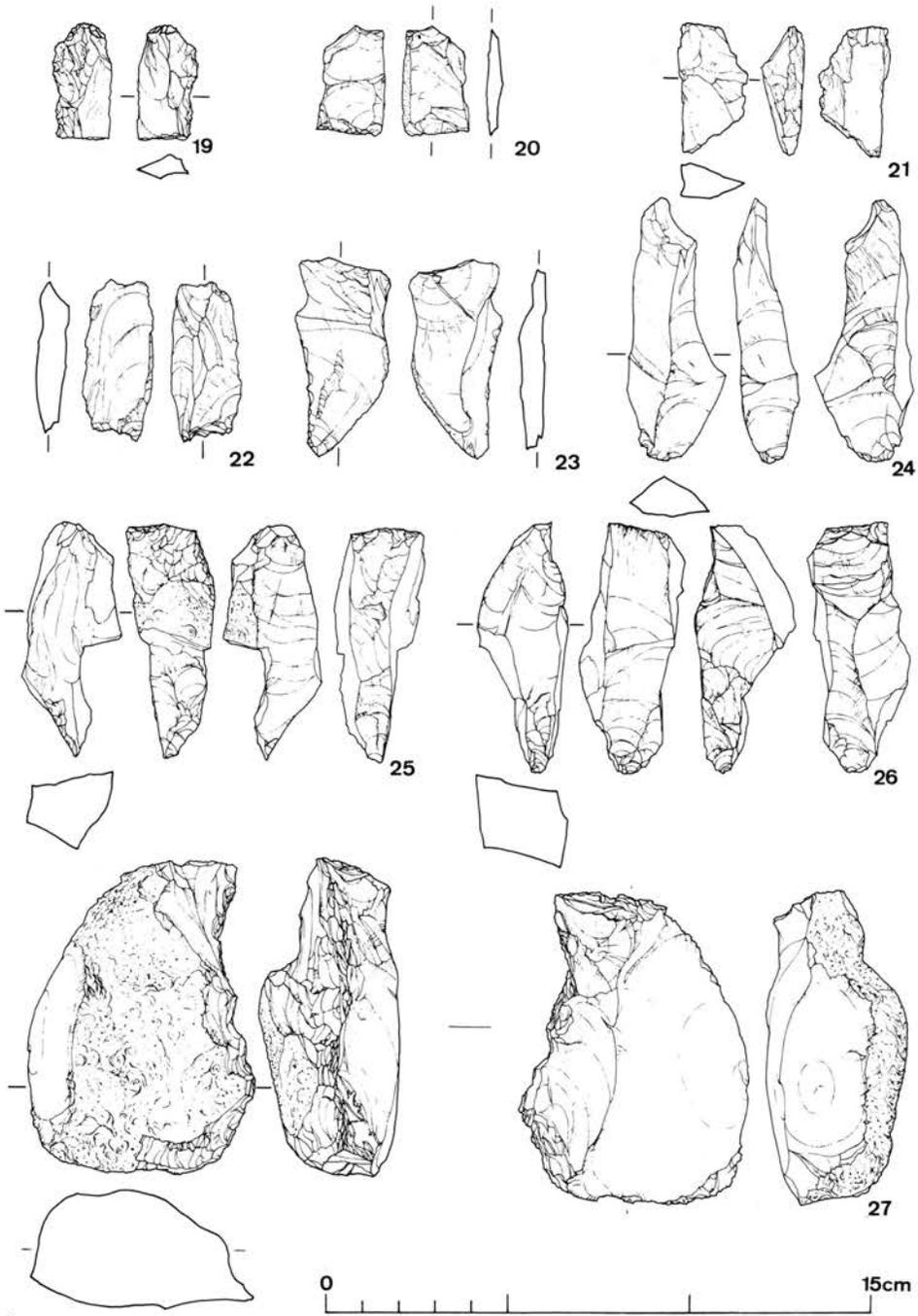
弥生時代の遺跡での石匙の類例として、大阪府池



第 80 図 石匙・削器実測図



第 81 図 楔形石器実測図



第 82 図 楔形石器の削片他実測図

である。礫核を素材としたもの(18)と剥片を利用したもの(1~17)との2種類がある。上下両縁辺または両尖端からほぼ平行に剥離痕が入り、両端には細かい碎屑の剥落した痕跡が連続して残されている。上下両端の縁辺には階段状の著しい調整剥離痕が連続しており、押し潰されたような上面観を呈する特徴を持つ。断面は凹レンズ状を呈するものが多い。截断面の観取される例(1・4・7・10・14)がある。既に指摘されているように、当該器種は、形態的にも製作手法の上でも削器とは明瞭に分離し得るものである。

楔形石器は24点出土しており、当遺跡の打製石製品の中では、石鏃とともに主要な位置を占める。長幅分布は、ほぼ1:1である。

(6) 楔形石器の剥片ほか(第82図19~26)67点+ $\alpha$ を確認した。

19~26は、上下端に密接する階段状の剥離痕をとどめ、両尖端からほぼ平行に剥離痕が入るものである。

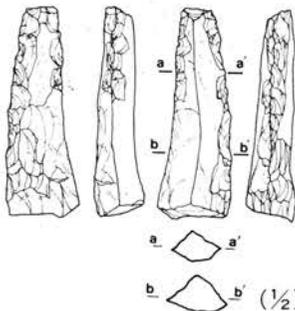
19~23は、不定形ながら一辺あるいは二辺に楔形石器同様の特徴を備えている。楔形石器の製作過程で生じた削片と考えられる。22~26は、上下両端にのみ階段状の剥離がみられ、両端にバルブを持つものである。石核状の石材を両極打法によって加工する際に生じた削片であろう。

27は石核状を呈するものである。側縁の一方に著しい階段状剥離が連続して観察でき、対応する面には大きな鍋蓋状の剥離がみられる。両極打法による痕跡の一例として、掲げておく。

(7) 未製品(第83図)大形の打製石製品(石槍状のもの)の折損したもの、あるいは製作途上の失敗品を再利用しようとし、製作途中で放棄したものであろう。大剥離面が既存の調整面に侵入し、更にもうその上から調整剥離を施した跡が認められる。

(8) 敲石類(第84図1~6, 第85図1~4)10点を確認した。玢岩・砂岩・チャートなどの転礫を素材としている。握り拳大までのものが多い。

玢岩製のものは、敲石として用いられるほか、磨石や台石として利用されることが多か



第83図 未製品実測図

ったとみられ、器表面に線状痕状の使用痕が認められるもの(第84図2・第85図3)や顕著なあばた痕が認められるもの(第84図2, 第85図2・3・4)などがある。チャート製のものは、もっぱら敲石として用いられ、縁辺には顕著な使用痕が認められる(第84図4・5・6)。

第84図1は、チャート製の碎片である。端部の状況から、使用時に敲石母体から外れたものであろう。第

82 図 1 は砂岩製である。先端に微弱な使用痕がある。

(9) 石核(第 86 図 1~3) 確認された石核は、わずかに 3 点を数えるにすぎない。いずれもサヌキトイド製で亜角礫化した転礫を素材としている。調整打面を設けずに、礫面を直接加撃して剥離作業を実施するものである。

1 は、拳大のもので、器表の 1/3 以上を自然面が覆い、一端に大きな裁断面がある。作



第 84 図 敲石類実測図



第 85 図 敲石・陽物状石製品実測図

業構成面は一面であり、40°~50°の角度をもって加撃点を転位している。礫の搬入・使用の実情を物語る資料である。

2・3は小形であり、石核の最終形態を示す残核であろうか。

(10) 剥片類(第87図) 剥片類は、打製の剥片石器生産において生じたもの(サヌキトイド)約120点、磨製の剥片石器製作にあたって敲打成形の際に生じたもの約100点がある。ここでは、サヌキトイド製の剥片のうち主なものを取り上げて説明することにしたい。説明にあたっては、実測図をもとにして作成した概念図を用いる。

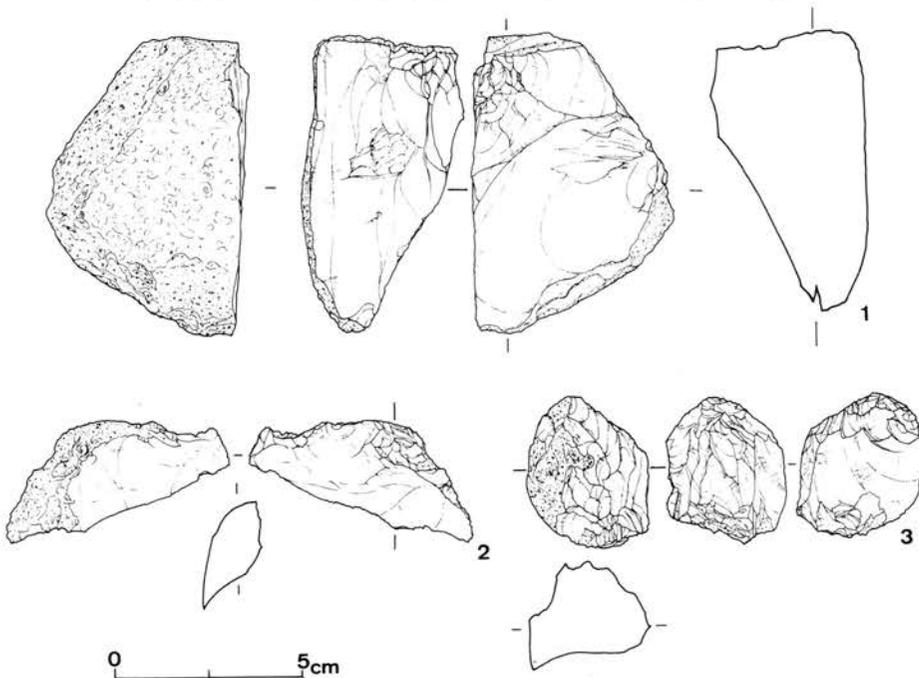
サヌキトイド製の剥片には、自然面を顕著に残すもの(5・6)と剥離面で覆われ、自然面が全くみられないもの(1・2・3・4・7・8・10)とがあり、9のように一部にだけ自然面がみられる中間のものもわずかながら認めることができる。

これらは、剥片剥取の際、調整打面を設定するか(I類)しないか(II類)によって、大きく2つのグループにわけることができる。

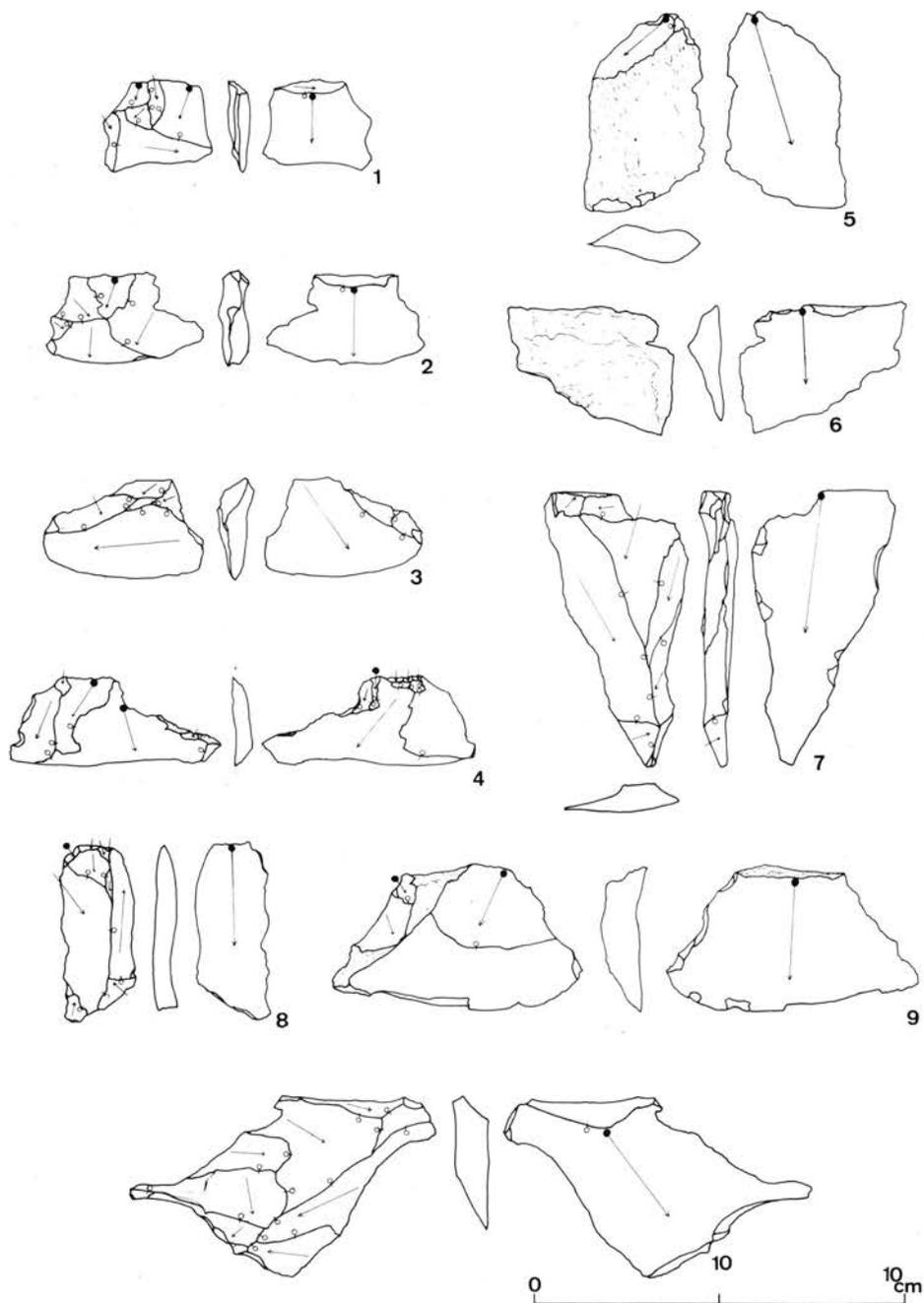
I類—調整打面を設定するもの(1・2・5・10)。

II類—調整打面を設定せず、礫面を直接加撃することにより、剥片剥取をおこなっているもの(6・7・9)。

3・4・8は、打面に二次的な調整を施すもので、I・IIのどちらに属するかは明確で



第86図 石核実測図



第 87 図 剥片類

はない。

当遺跡の剥片生産は、石核や削器の大剥離面、剥片の背面に残存する剥片剥離作業構成面の在り方から次のようにまとめることができる。

拳大ほどの転礫(サヌキトイド)を集落内に搬入し、石核として用いる。作業にあたって調整打面を設定するものと、未調整のまま礫面を加撃するものがあり、加撃はフリーフレッキングによって行う。時計回りに作業を進行するのを原則とし、打点は45°~50°前後で転移するが多い。剥離は任意に行い、目的剥片は定形的な剥離パターンにではなくて製作物の大きさに規定される傾向が強い。

### 3 磨製石器

(1) 磨製石鏃(第11図1) 1点のみ確認した。有茎式である。柳葉形の端正な鏃身を持っており、刃部は鋭利である。鏃は先端に認められるだけで明瞭には作らず、身部は扁平な形状を呈している。茎は短く、断面が四角形で、末端は矩形を呈する。関にあたる部分は、両面から研磨して角を落とす。素材は、硬質な珪質頁岩である。全長6.9cm・幅2.2cm・厚さ0.3cmを測る。茎の長さは約1cmである。

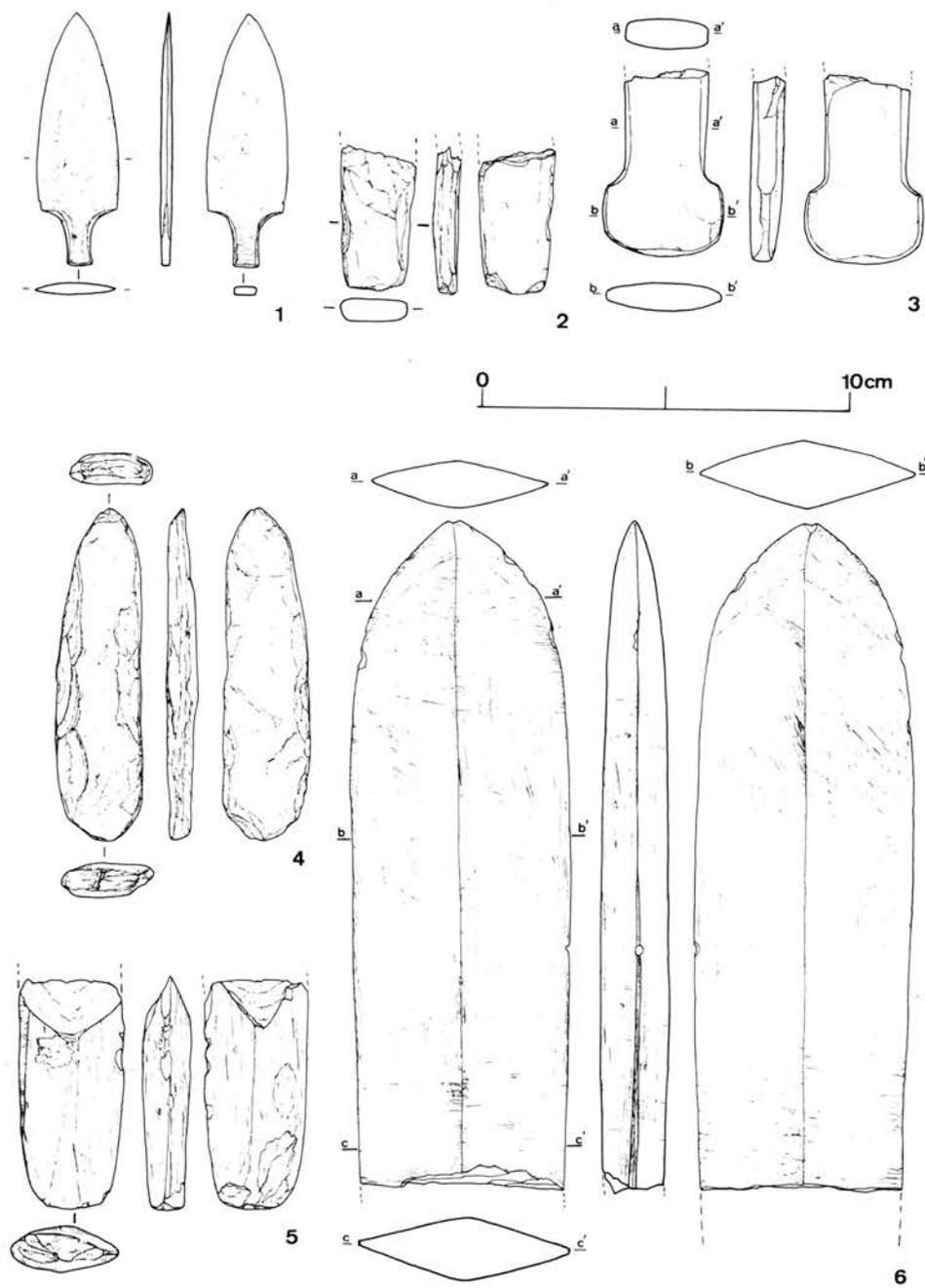
(2) 磨製石剣(第88図2~6) 5点を確認した。この中には、鏃がなく断面の形が菱型を呈しないもの(2・4)を含む。これらは、磨製石槍状の石器、ないしは短剣として分離し得る可能性があるが、ここでは一括して石剣類に含めて報告することにした。

2は上端部を欠損している。扁平な長方形を呈するもので、側縁、下端に面を作る点から、茎にあたる部分と考えられる。器表は粗い研磨痕によって覆われ、側縁および下端部にも葉理に直交する粗い研磨が認められる。側縁には整形時の階段状剥離が顕著に残っており、粗製品である。4と同様の形状を呈するものと思われる。

3は、石剣の基部にあたる部分である。末端部がT字状に広がり、把状を呈する。側縁および下端部に丁寧な面取りを行う精巧な作りのものである。残存長5.1cm・基端部最大幅3.3cm・最大厚0.9cmを測る。硬質の珪質頁岩を素材としている。

4は、2と同様に不定形な形態を持つ遺物で、小形の粗製品である。側縁に整形の際の階段状剥離痕を顕著にとどめ、部分的に葉理に直交する粗研磨によって面をなす。鏃はなく、両面とも平坦である。身部には斜行する粗い研磨が顕著であり、最終調整に至っていない。また、刃縁が先端を除いては十分に作り出されておらず、未製品と考えることができる。全長9.1cm・幅2.3cmを測る。

5は、鉄剣形石剣の基部である。両面ともに鏃が明瞭に作りだされており、断面形は菱形を呈する。側縁と基端部には粗い研磨による面が認められる。残存長6.3cm・最大幅2.9cm・最大厚1.5cmを測る。器表には整形剥離痕を残し、調整も粗い研磨のみで終わってい



第 88 図 磨製石鏃・磨製石劍実測図

る。最終調整に至らずに折損したため廃棄したものと思われる。

6は精巧な作りの大型製品である。剣身は、側縁がほぼ平行し、中央にしっかりとした鎬が作られている。刃部は鋭利である。現存剣身の半ばほどから基部側へむかって面を形成し、刃潰して刃部との区別を明瞭に行っている。峰部は、身に対して急な角度をもって作られている。この部分の鎬は、身部ほどの強さを失って不規則な弱い稜となるが、これは欠損部分を再加工したために生じたものと考えられる。下端部は欠損しているため、形状は明らかでない。現存長18.0cm・最大幅6.0cm・最大厚1.9cmを測る。重量は285g、頁岩ないし粘板岩製である。

(3) 石庖丁(第89・90・91図) 石庖丁は、44点を確認した。当遺跡から出土した石器の中で不定形石器に次いで数多い。未製品とその折損資料が17点あり、これを含めると合計61点となる。完形品は少なく、3点を数えるにすぎなかった。検出資料は全て図に示した。

素材は、明瞭でないもの1点を除き、全て、頁岩ないし粘板岩、あるいはそのホルンフェルス化したものである。これらは、丹波帯内に産するものばかりで、一見して搬入品とわかる資料はない。

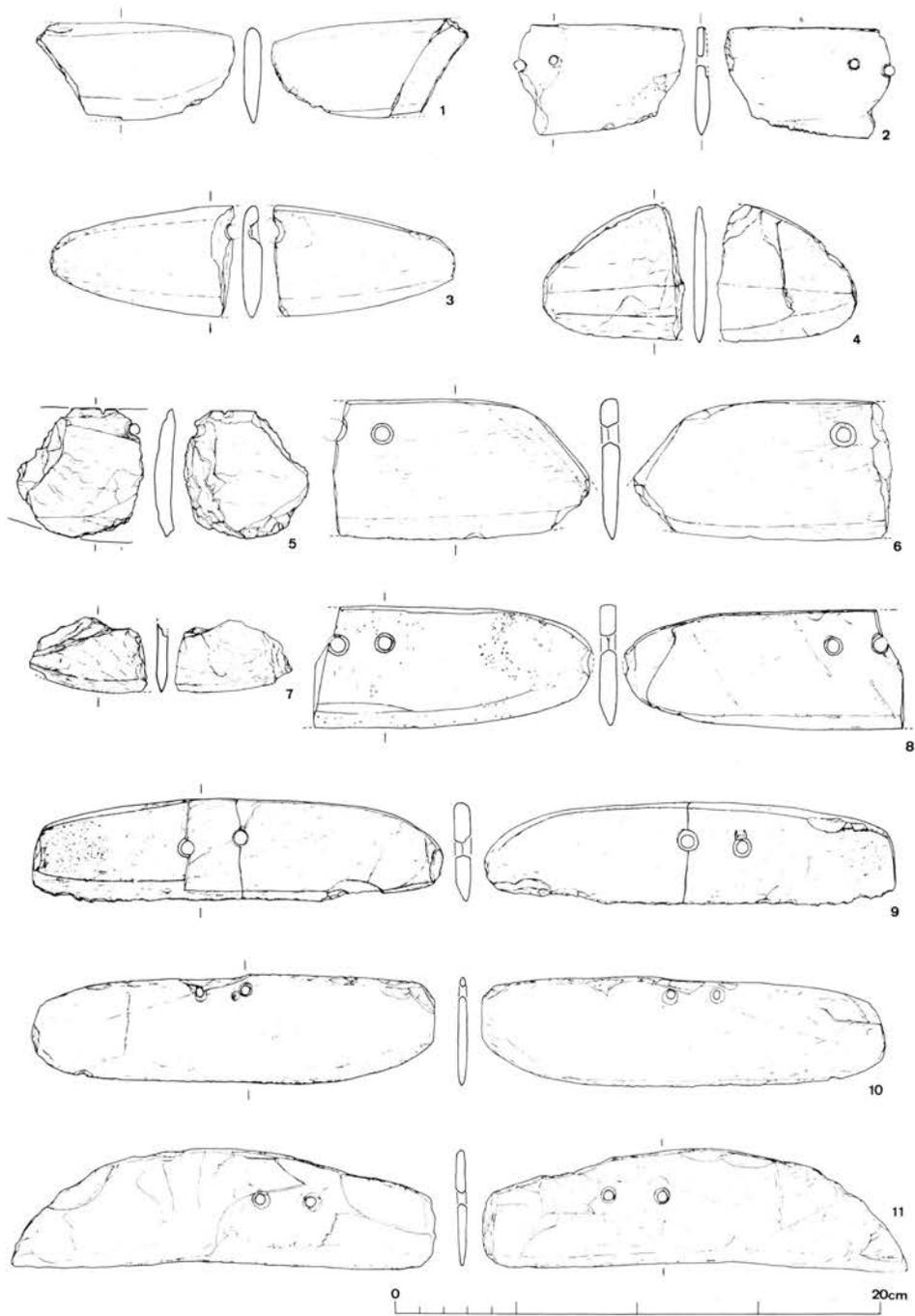
形態は、外湾刃と直線の背縁をもつ形態のもの(半月形外湾刃—A型)、外湾刃と外湾する背縁をもつ形態のもの(いわゆる杏仁形—B型)、横長で長方形を呈し直線刃をもつ形態のもの(長方形直線刃—C<sub>1</sub>型)・外湾刃をもつ形態のもの(C<sub>2</sub>型)・内湾刃状を呈するもの(C<sub>3</sub>型)、直線刃と外湾する背縁をもつ形態のもの(半月形直線刃—D型)、内湾する刃部と外湾する背をもつもの(半月形内湾刃—E型)などに分類できる。この他に、形態的にはないが、大型石庖丁として分類可能な一群がある。

検出資料のうち、分類が可能な26点について内訳を見ると、A型2点(1・2)、B型2点(3・4)、C<sub>1</sub>型2点(6・9)、C<sub>2</sub>型2点(8・10)、C<sub>3</sub>型1点(11)、D型11点(5・15~18・24~28・57)、E型3点(20・21・41)・大型石庖丁3点(42・44・46)である。D型は、全体の約42%弱を占め、主体をなす。

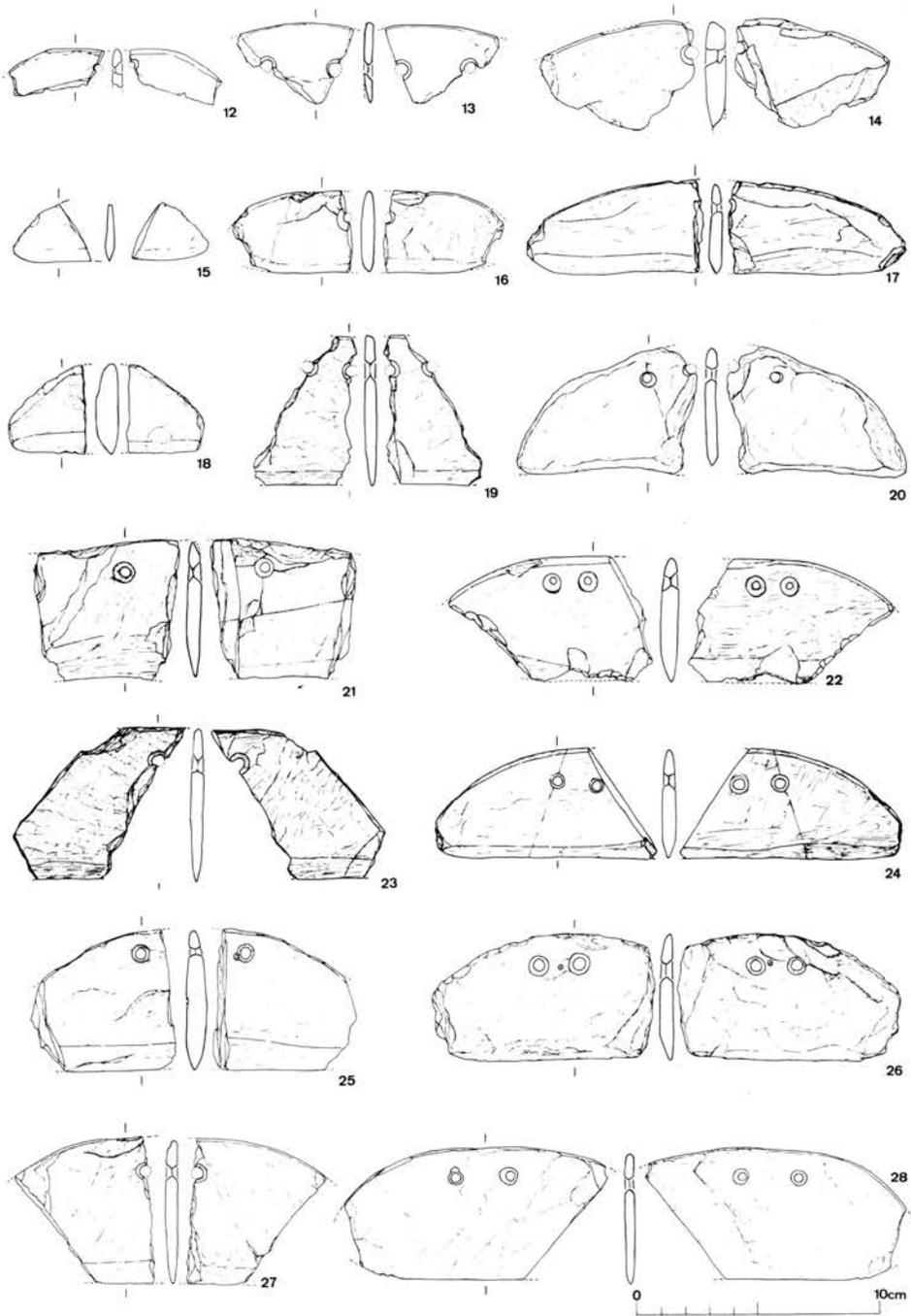
細片化して形態のわからないものが18点ある。刃部・背縁の形態のいずれかで分類すると、直線刃8点(19・23・29・31・33・35・39・40)、外湾刃1点(7)、背縁の外湾するもの7点(12・13・14・30・32・37・38)、不明のもの2点(34・36)である。刃部と背縁の相互関係は明確ではないと言うものの、これらは、D型—半月形直線刃形態の比率の高さを物語っている。

次に特徴のあるものについて個々に取り上げ、気づいた点を記すことにする。

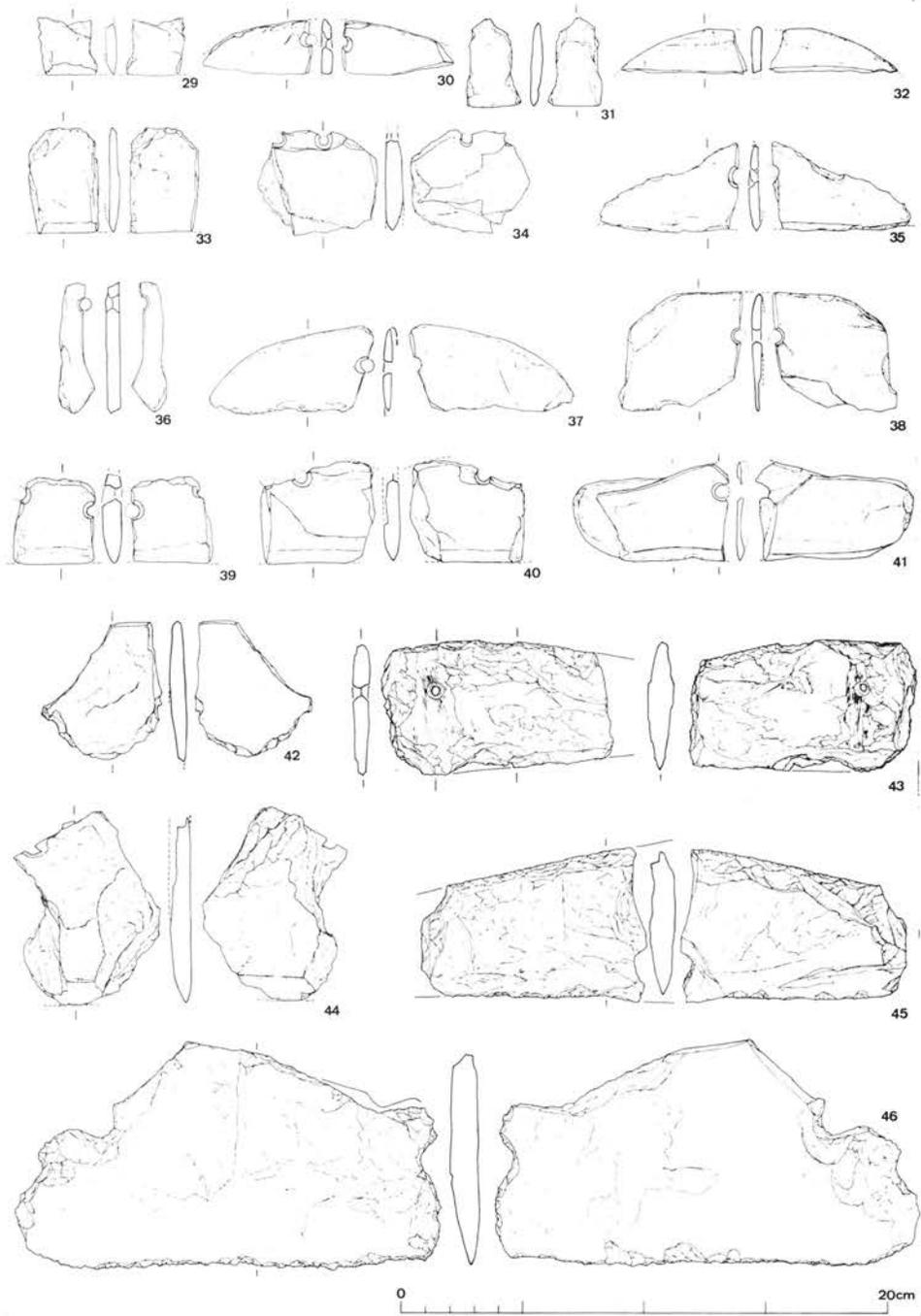
1・2は、半月形外湾刃形態をとる。いずれも中央付近で欠損し、刃縁の側縁寄りの場



第 89 図 石庖丁実測図(1)



第 90 図 石庖丁実測図(2)



第 91 図 石庖丁・大型石庖丁・石鎌実測図

所に、鋸歯状の使用痕を認めることができる。1は、器体の過半が残存しているが、紐孔が無い。極端に片寄って穿孔されたか、未穿孔のまま用いられたのかのいずれかである。

3は、一方の孔の周辺に敲打痕と思われる痕跡が認められる。穿孔に際して準備したものであるかどうかは、残存状況が良くないために判断し難いが、当該遺跡では唯一の例であるので注意しておく。

9は、全長16.8cm・幅4.3cm・最大厚0.7cm・重量70.0gを測る。B面の右孔上縁に紐擦れ痕が残る。中央部で欠損しており、器表の一部に二次的な剝離がみられる。刃縁には、使用痕が顕著に残っている。使用痕は、中央部に比べて側縁寄りの部位に著しく、両端に認められる。1・2でも同様であって、刃部端の使用頻度の高さをうかがうことのできる資料である。

10・11は、横長の大型品である。これらは、溝(SD 0208)底で検出したものであるが、出土時には紐穴を重ね、折り重なるような状況を呈していた。(図版第9-(2))

10は、全長16.6cm・幅4.5cm・最大厚0.4cm・重量は72gを測る。長方形状を呈し、やや外湾しながら直線に移行する刃部を持つものである。背縁の一部に整形段階の敲打痕がみられるほかは、全体的にみて丁寧な作りである。一方の面に穿孔途中の凹みがある。刃部は、成形に際しての研磨が広くゆるやかであるため、鑄にあたる稜がない。体部からゆるやかに刃縁へ移行する。片刃である。

11は、全長17.5cm・幅4.8cm・最大厚0.4cm・重量70gを測る。形態は基本的にみて10と同様のものであるが、当例では、側縁の一方を方形に整形せずに素材剥片の一端を残しており、石鎌状を呈している点に特徴が求められる。

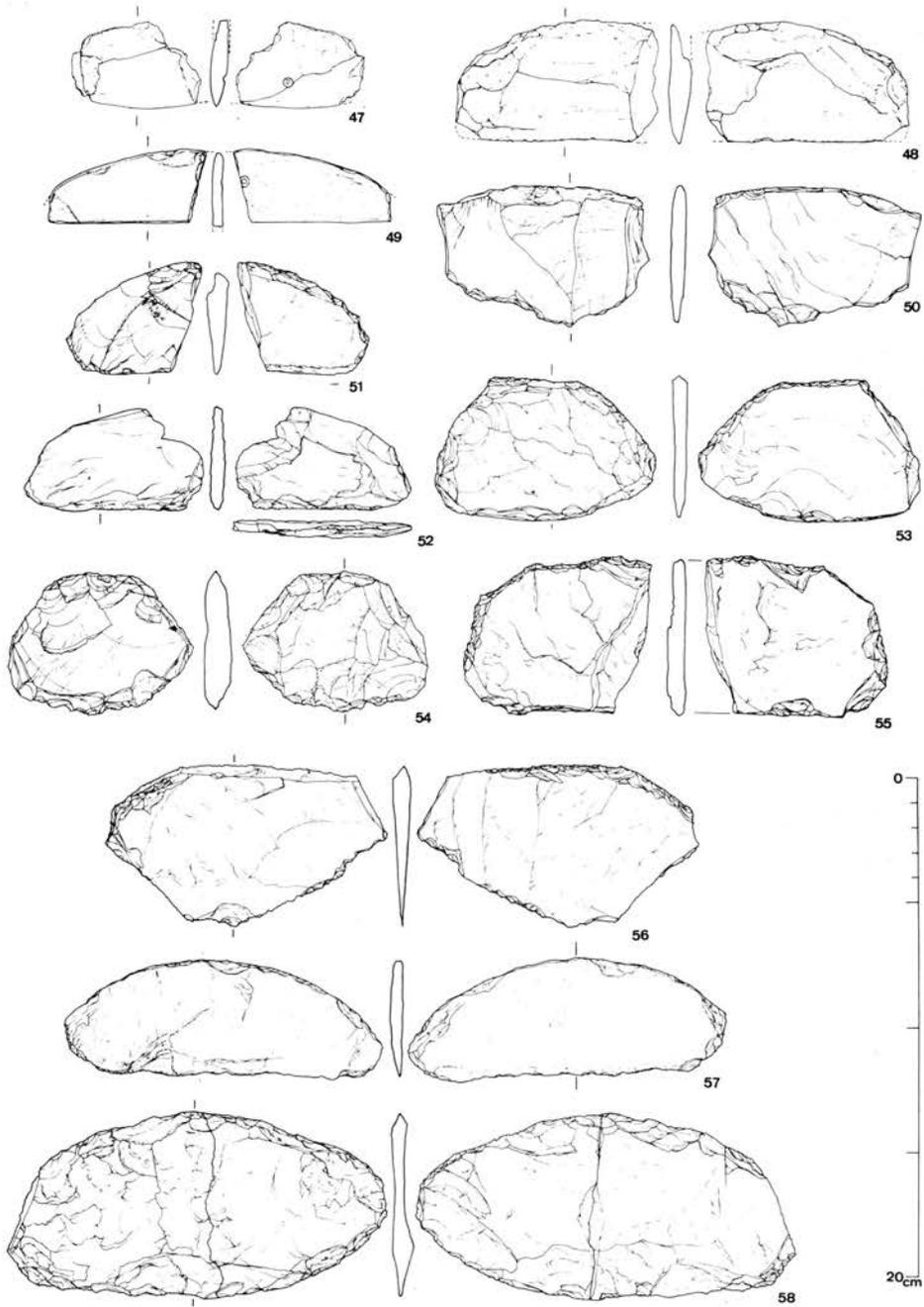
12・15・16・17・18は、小型製品である。12は、背縁から孔上端までが5mmしかなく、孔が器体の上縁に片寄っている。16・17は、製作時の敲打痕を顕著に残す粗製品である。17は無孔である。

20・36は軟質であり、風化が著しい。器面が剝落し、器表の状況が判別できない。

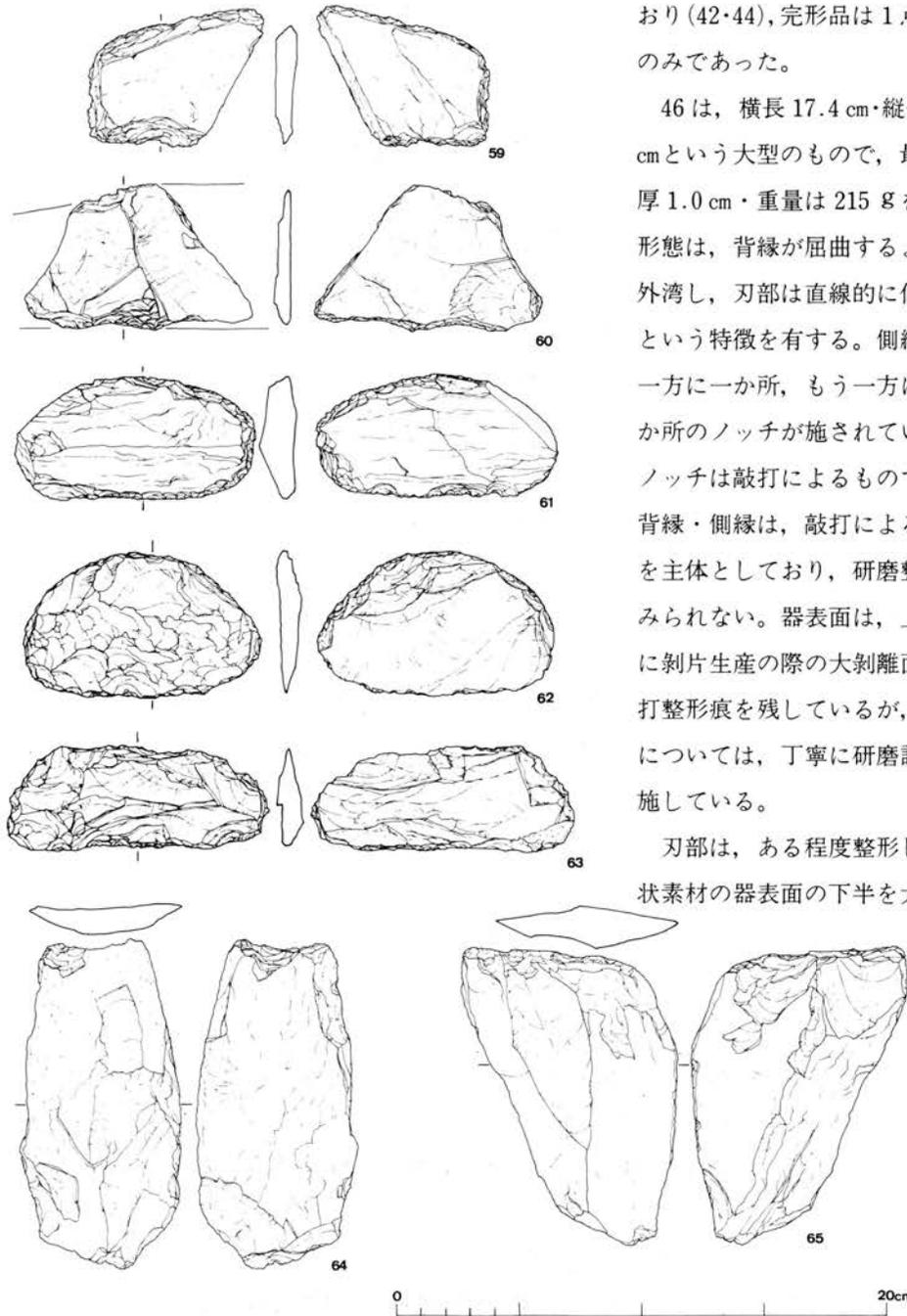
21・25・26・28の器面には、穿孔途中の回転擦痕のある凹みが認められる。26では、凹みが紐孔間のほぼ器体の中軸上にあり、表裏相對している。穿孔途中の凹みは未製品にも認められているが、これらの痕跡は、穿孔にあたってドリルを用い、器面に対して直接作業を行ったことを示すものである。

39は、砂岩製品である。肉眼による鑑定の範囲で搬入製品の可能性のあるものを指摘するとすれば、当資料が唯一の候補資料である。側縁・背縁は欠失し、刃部と体部の一部だけが残っている。

(4) 大型石庖丁(第91図42・44・46) 3点を確認した。うち2点は破損して細片化して



第 92 図 石庖丁未製品実測図(1)



おり(42・44), 完形品は1点(46)のみであった。

46は、横長17.4cm・縦長9.1cmという大型のもので、最大器厚1.0cm・重量は215gを測る。形態は、背縁が屈曲するように外湾し、刃部は直線的に伸びるという特徴を有する。側縁には、一方に1か所、もう一方には2か所のノッチが施されている。ノッチは敲打によるものである。背縁・側縁は、敲打による整形を主体としており、研磨整形はみられない。器表面は、上半部に剥片生産の際の大剥離面や敲打整形痕を残しているが、下半については、丁寧に研磨調整を施している。

刃部は、ある程度整形した板状素材の器表面の下半を大きく

第93図 石庖丁未製品実測図(2)

研磨して形作り、その後、刃縁を再度研磨して仕上げる。刃縁には小剥離が連続して認められるが、これは、調整剥離ではなく、使用痕である。使用痕は、一方の面に顕著である。

42は背縁、44は刃部の一部だけが残ったものである。42は厚さ約6mmを測り、器表面が丁寧に研磨されている。44は、両刃の直線刃形態をとるものと思われる。刃の幅は約1.0cmを測る。大型品である。

(5) 石鎌(第91図43・45) 43は、残存長9.1cm・幅5.3cm・最大厚0.9cmを測る。器体の片側寄りの部分を、刃部に直交して施溝し、一孔を穿っている。溝は、浅く幅広いもので、表裏相對し、背縁から刃部に及ぶ。孔は両面穿孔手法である。柄に装着するための加工と考えられる。刃部は、両面から研ぎ出して整形している。側縁・背縁には、階段状剥離が著しく、研磨調整はしていない。器表面もあまり調整されておらず、粗製である。先端部分を欠いているため、全体は明らかでない。

45は、43同様に整形段階の剥離痕が顕著であり、粗製である。器面は、敲打整形後、厚さを整える程度の研磨痕が施されるにすぎず、もっぱら刃部成形に力点が置かれている。残存長9.3cm・幅6.4cm・最大厚1.0cm・重量は90gである。基部と先端を欠く。43・45は、ともに、敲打整形した素材を局部的に研磨しただけのものである。幅に対して刃部が長く、厚みがあって重いという共通性がみられる。刃縁には、使用痕が顕著である。

(6) 石庖丁未製品(第92・93図47~63) 石庖丁の未製品と考えることのできるものは、剥片の一部を加工しているだけのものを含めると、17点ある。全点を図示しておいた。

これらは、いずれも頁岩ないし粘板岩、そのホルンフェルス化した石材を用いており、利用素材は完成品と同じものに限られる。

未製品には、以下に記すように、製作の段階を示す種々のものがある。素材剥片の周縁に調整剥離が認められるだけのもの—A(53・54・55・56・59・60・63)、調整剥離がほぼ全周に及んで形態的に整っているもの—B(58・61・62)、Bの一部に粗研磨を施しているもの—C(48・50・51・52)、全面に研磨が及んでいるもの—D(57)、穿孔途中のもの—E(47・49)などが認められた。

47・49は、器表の一方に回転貫孔痕をとどめる資料である。貫孔に先立って敲打を行った痕跡はない。ドリルを用い、器表面から直接に貫孔したようである。貫孔対象部と折損部位が一致している。貫孔時の折損状況を示すものであろうか。

48・50・51・52は、敲打成形の後、粗研磨を施し始めた段階の資料である。52は、下端部に節理に直交する研磨が施されている。いずれも、中央付近で折損している。

53・54・55・56・59・60・63は、板状の素材剥片の周縁に敲打整形痕が認められる資料である。56は、剥片の一部をわずかに調整しただけのもので、素材剥片を敲打整形する過

程のうち、最も初期段階に位置するものである。59・60は、敲打がほぼ全周に及び始めている。53や54は、この段階の折損資料の転用を図ったものと考えられ、61・62・63などの小型未製品は、このような折損資料が前提となって成立するものとみることができる。

58は、杏仁形を呈する。調整剥離が全周に及び、形態的に良く整っている。大型の横長剥片を素材としている。中央で割れているが、完存しており、廃棄時の状況を良く保っている。

57は、最終的な研磨調整の段階のもので、孔を除いては、石庖丁としての形態を完全に保っている。半月形直線刃形態をとる。主要面は粗い研磨の後、やや細かい目の研磨が施されているようである。背縁は、敲打整形の後に、葉理に直交して粗い研磨調整を施す。

刃部は、主に一方の面側から研ぎ出している。刃縁には、わずかではあるが、一方向へ向かう小剥離を連続して認めることができる。これが使用痕であるとする、当資料は、製作過程で廃棄されたり、転用された未製品ではなく、当初から目的物として製作されたものとも考えることもできる。小形石庖丁の使用形態を示す一例として捉えることもでき、興味深い資料である。

64・65は、頁岩ないし粘板岩を素材とする剥片資料である。当遺跡内での石庖丁生産を考える際に参考になると思われるので、ここで取り上げておく。いずれも縦長剥片である。

64は、全長13.3cm・幅6.5cm・最大厚1.0cm・重量118gを測る。下端に若干の調整剥離がみられる程度で、未調整に近い。器表に風化の進行した自然面を大きく残している。

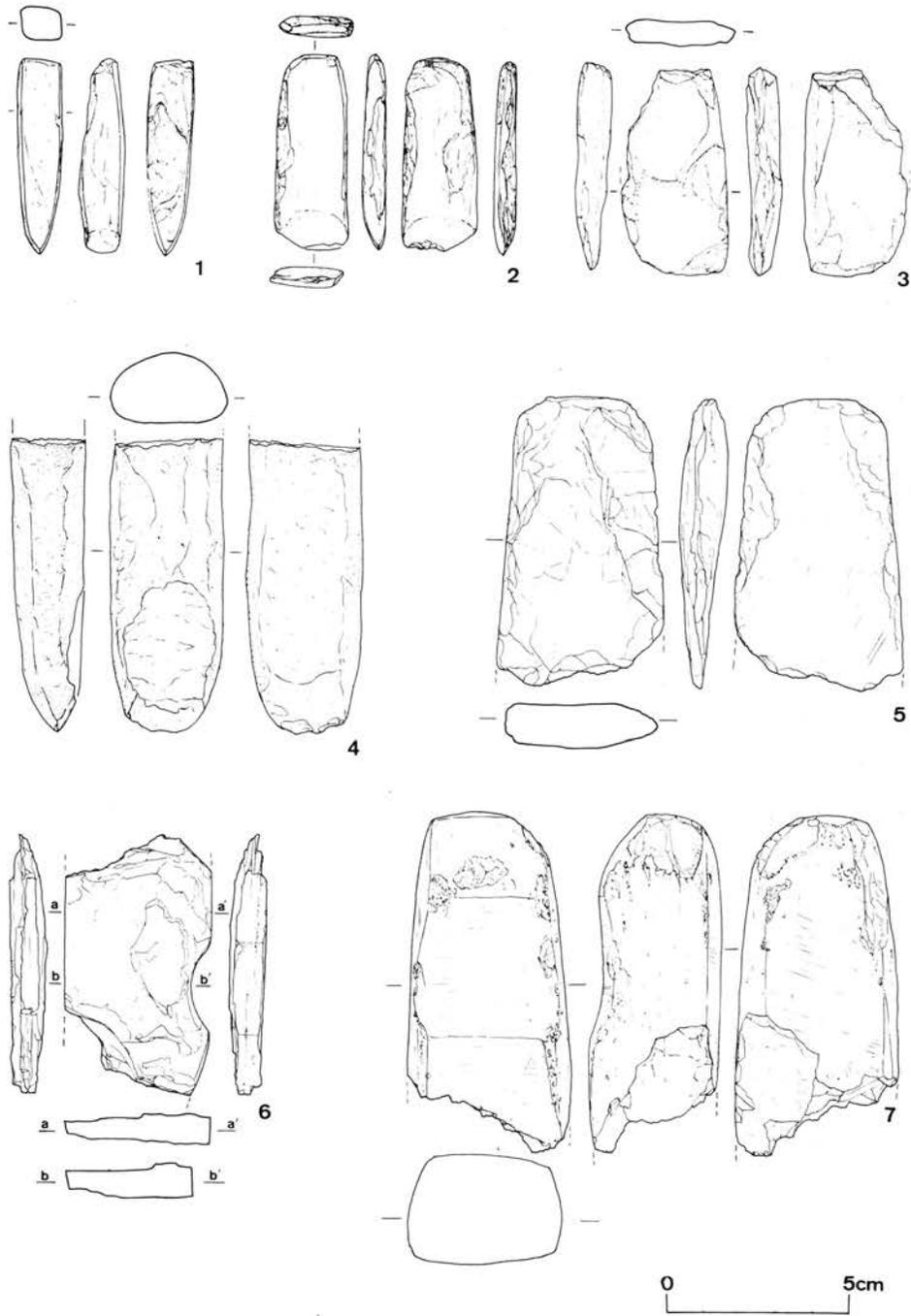
65は、風化があまり進んでいない石材を母岩としており、剥離面が新鮮である。上縁を中心に若干の調整剥離を行うが、周縁については未調整のまま作業を中断している。長さ12.0cm・幅7.7cm・最大厚1.7cm・重量160gを測る。

母岩は検出できないが石皿状石製品に同一石材のものがあり、搬入時の母岩の形態を知る手掛りになる。64などの風化の著しい自然面を持つ剥片の存在から考えて、露頭付近の転礫や河床礫などを搬入したものと思われる。

#### (7) 石斧類

石斧類には、小型柱状片刃石斧・小型扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・挟入柱状片刃石斧・太形蛤刃石斧・打製石斧などがある。その外に、未製品、太形蛤刃石斧の転用品がみられた。この項では、主に磨製石斧類について取り上げるが、打製石斧・転用品もあわせて報告する。

①小型柱状片刃石斧(第94図1) 完形である。頭部および左側縁は素材の劈開性に影響され、成形時に一部欠損している。刃部は両面から研ぎ出して成形する。先端付近には、微細な線状痕が認められる。研磨は身部にはほぼ平行に、刃部に直交して施されている。



第 94 図 小型柱状片刃石斧・小型扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・挟入柱状片刃石斧・未製品実測図

断面形は四角形を呈する。

②小型扁平片刃石斧(第94図2・3) 2点を確認した。2は平面形が長方形、断面形が扁平な長方形を呈し、基部に向かって薄くなる。側縁・頭部は面をなす。器表は、丁寧な調整によって平滑に仕上げるが、側縁には整形の際の剝離痕が顕著である。刃部は、主に片面から研ぎ出して成形する。縁辺には、使用痕とみられる小剝離を認めることができる。

3は、頭部と側縁の一部を欠失している。器表の一部には自然礫面がある。転礫から剝取した板状剝片を用いて周縁を階段状剝離によって整形し、研磨調整のち刃部を研ぎ出しただけの粗製品である。刃縁には使用によると考えられる微弱な剝離痕が認められる。

③柱状両刃石斧(第94図4) 断面形が楕円形を呈する柱状の両刃石斧である。刃部の形状は、側縁からみると蛤刃状を呈し、刃先はやや外湾する。棒柱状の転礫(亜円礫)を素材とし、その表面をわずかに研磨して器体とする。頭部は欠損している。

④挟入柱状片刃石斧(第94図6・7) 2点を確認したが、いずれも破損している。

6は、挟入部分のみが葉理に沿って板状に割れ、残存したものである。挟りは凹レンズ状を呈する。

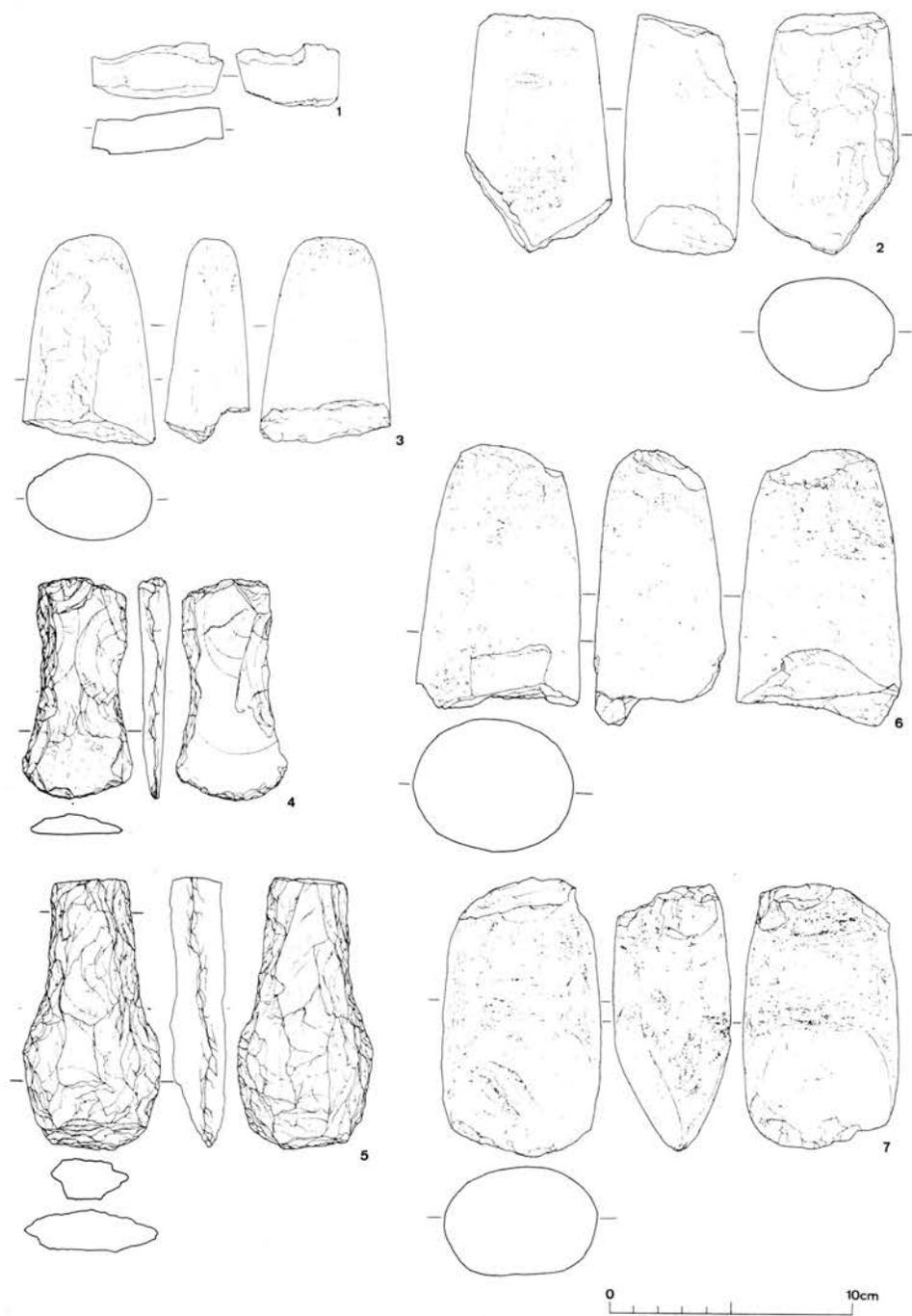
7は、刃部を欠損しているが、頭部や挟入部は旧状をよくとどめている。頭部と側縁の一部には整形時の敲打痕を残すが、全体に丁寧な調整が施されている。断面は逆台形状を呈する。当該器種は、器厚に対して幅が狭いのが一般的であるが、当例は器厚に対して幅が広く、特徴的である。

⑤未製品(第94図5) 扁平片刃石斧の未製品であろうか。扁平な自然礫を素材として、周縁を整形剝離した後、主要面を部分的に研磨している。整形段階で放棄したものであろう。

⑥太型蛤刃石斧およびその転用石器(第95~99図) 回収し得た太型蛤刃石斧は、いずれも折損しており、完形品は認められない。折損資料には、そのまま廃棄されたもの(1・2・3・6・7・8・10・11・12・13・14・15・32~34)と敲打器や台石などとして転用されたもの(9・16・17・18・19・31・35)があり、中には類別が困難なものも含まれている。ここでは、これらの資料を太型蛤刃石斧およびその転用石器として一括して扱い、報告することにする。総数38点を確認した。

転用の認められない折損資料には、基部だけが残ったもの(3・6・8・11・28)、刃部だけが残ったもの(7・12・13・14・15)、柱状の器体の一部だけが残ったもの(1・2・10・32~34)などがある。

転用の認められるものは、概して大形品が多く、器体側縁の一部に著しい敲打痕をとどめるもの(21・22・24)、器表の一方あるいは両方に敲打痕状の凹みが認められるもの(9・



第 95 図 太型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(1) (4・5は打製石斧)



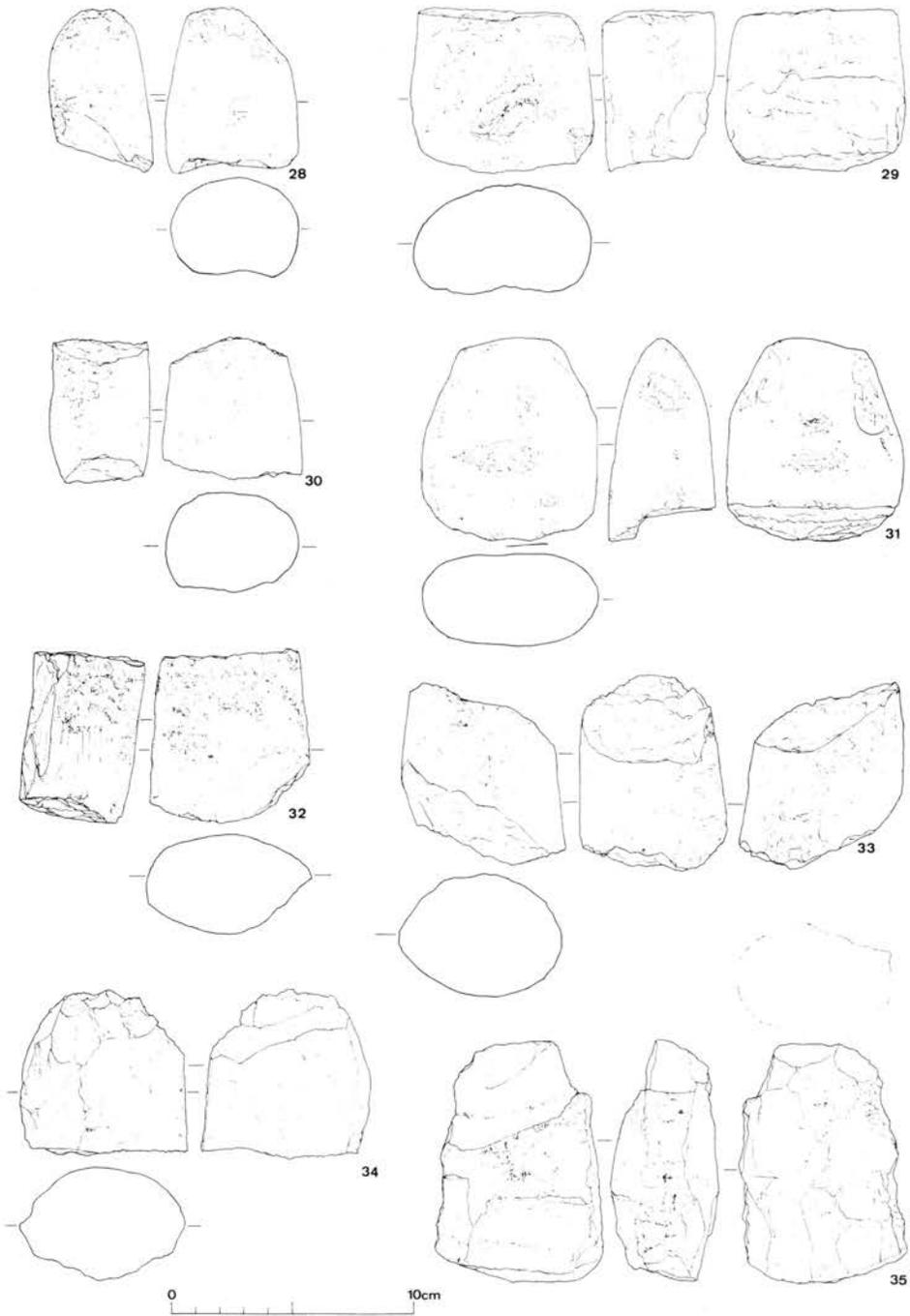
第 96 図 大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(2)



第 97 図 大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(3)



第 98 図 大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(4)



第 99 図 大型蛤刃石斧およびその転用石器実測図(5)

16・17・19・20・23・25・26・27・29・31・35)などがある。21・22・24は後者の特徴をあわせ持つ。敲打状の凹みは、2個が一对で施される例が多い(17・19・20・21・24・25・26・27)。

9・10・27・31は未製品であろうか。利用石材は、重くて衝撃力に強い珩岩・砂岩が主体を占め、加工し易い泥質ホルンフェルスなどもわずかであるが認めることができる。いずれの石材も丹波帯内に転礫として存在し、容易に入手することができる。

⑦打製石斧(第95図4・5)2点を確認した。分銅形のもの(4)と撥状のもの(5)とがある。4は、大形の横長の剥片素材の周縁を整形しただけの薄いもので、主要剥離面を大きく残している。下端は、刃部としての機能を有していたと考えられるが、そこには小剥離痕が連続して観察できる。未調整面を残す粗製品である。

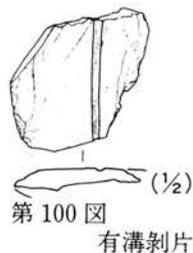
5は、断面形が楕円状を呈する柱状の基部を持つもので、有肩石斧に似た形態をとる。全面を整形痕と調整痕が覆い、周縁には階段状の小剥離痕が密接して残る。先端には使用痕とみられる剥離が顕著である。

(8)砥石(第103図1～3・5)4点を確認した。立方体のもの(1・2・5)と扁平で石皿状を呈するもの(3)とがある。これらは、風化の進んだアプライトを用いた軟らかくてきめの細かいもの(1)、やや粗めの砂岩製のもの(5)、粗いもの(2・3)とに分けることができ、それぞれ仕上げ砥・中砥・荒砥に対応するものと思われる。大きさでみると、1・2は小型で軽量、3・5は大型で重い。使用の過程、使用対象・部位によって使い分けされていたと考えることができる。あるいは、携帯用と非携帯用の違いを示すものかも知れない。

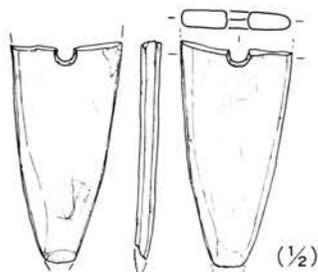
砥石は、石器や鉄器の研磨に利用されたと考えられるが、その対応関係は明らかでない。砥面が幅広くゆるやかに凹んでおり、石皿状を呈する3などは、磨製石斧製作に際して粗研磨段階で用いられたものであろう。第104図4は石皿状の石器製品と考えると、砥石とすることをひかえたが、3と同様のものである可能性が高い。

2は、有溝砥石である。方柱状の4面を砥面として用い、それぞれの中央にU字状の溝が形成されている。溝は、中央に向かって深くなり、連続するものとしもないものがある。幅は約5～9mm、深さは約2～5mmを測る。研磨対象は玉類が想起されるが、定かではない。

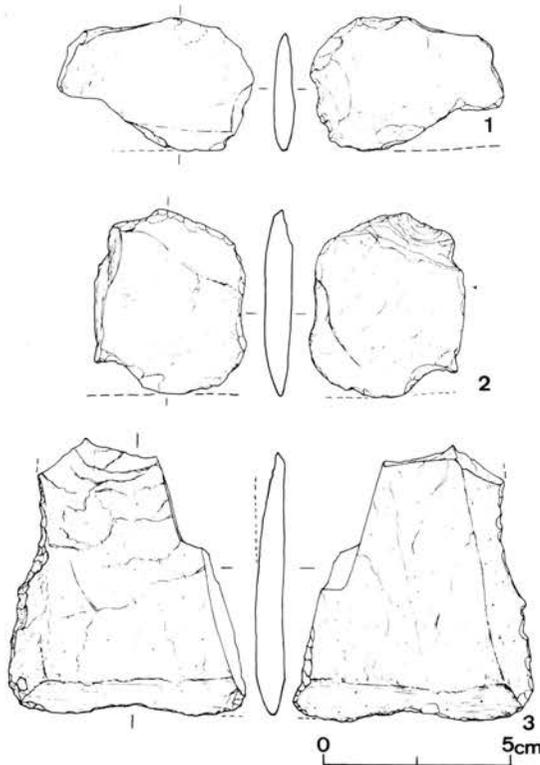
(9)その他の石器 その他の石器としては、有溝剥片・転用石器・不定形な刃器・石皿状石製品・陽物状石製品



第100図  
有溝剥片



第101図  
転用石器



第102図 不定形な刃器

面からの回転貫孔である。両側縁はわずかに面をなし、一方には新しい研磨痕がある。下端部には、両面から研磨した跡があって、末端に小使用痕とみられる剥離がある。刃部として機能していたと考えられる。最大幅約3cm・長さ約6.2cm・幅約0.5cmを測る。粘板岩製である。折れて使えなくなった石庖丁の側端を整形し直して、扁平な小形石斧として利用したものと考えられる。

③不定形な刃器(第102図) 図に掲げたもののほかに数点を確認している。いずれも頁岩ないし粘板岩、ホルンフェルスなど板状に剥離する石材を素材としている。形態は種々あって統一性をみないが、一辺ないし二辺に両刃の刃部があり、残りの幾辺かに未調整部分や破損面を持つ点で共通している。

石庖丁等の製作に際して生じた板状剥片や失敗品を利用したものだろう。

④石皿状石製品(第103図4・6, 第104図1~5, 第105図6~9) ここで一括して報告する資料は、不定形な大形の磨製石製品である。器体をあまり整えず、器表の一部に研磨を主体とした作業面を一・二面設定する点に共通性がみられるものである。いずれも欠損しており、全形を知り得るものではない。

と、先に紹介した石製紡錘車・磨製不明円盤・管玉などがある。

①有溝剥片(第100図) 葉理に沿って剥取した剥片を研磨し、磨り切る途上のものである。主要面をやや粗いめに研磨した後、幅0.2cm・深さ0.1cmの溝を施す。側縁には調整とみられる剥離痕がある。裏面は欠損しているため明らかでない。薄い板状を呈する。黒色の粘板岩を素材とする。比較的大きな剥片を擦り切って、目的とする素材を得ようとしたものであろう。

②転用石器(第101図) 一見すると、小形の石庖丁が中央部分で破損したような形態を持つ。上端部に孔があり、その部分で欠損している。孔は、石庖丁と同様に両

第103図4・第104図1・第105図6は、作業面が凹んでおり、細かな擦痕がある。特に、後者は、器面が平滑で丁寧である。

第100図6・第101図2・3・4・5・第102図7・8は、作業面が直線的で、擦痕もわずかにしか認められない。転用石斧に顕著にみられたものと同様のあばた痕の認められるもの(第104図3)がある。作業台のような用途を持つものであろうか。

第102図9は、検出資料中で最も大きなものである。中央部分で割れている。底面は平坦に整形され、細かい研磨の跡が認められる。器表・側縁には敲打整形痕が顕著で、調整はあまり丁寧でない。

⑤陽物状石製品(第85図5)棒柱状を呈するもので、頭部と基部側に、ほぼ全周する浅い溝を施している。器表には未調整面と整形段階の敲打痕が著しく残っており、一部に磨製石斧の転用品や敲石に見られるあばた状の凹みがある。施溝前の粗い研磨がわずかに観察できる。石斧製作途上で破損した未製品を転用したものであろう。全長約14cm・幅約6cmを測る。玢岩製である。

#### 4 小結

以上、今回の調査で回収し得た石器を各器種別に取り上げて報告した。器種の明らかな石器については、筆者の認識不足から視点が十分に及ばなかった楔形石器の削片や剥片類を除き、大部分のものについて図示し得たつもりである。しかし、器種・形態が明らかでないものや多数の「搬入<sup>(注1)</sup>」などに関してはほとんど触れることができず、遺物の出土傾向や個別的分析などについても同様であり、多くの問題を積み残している。

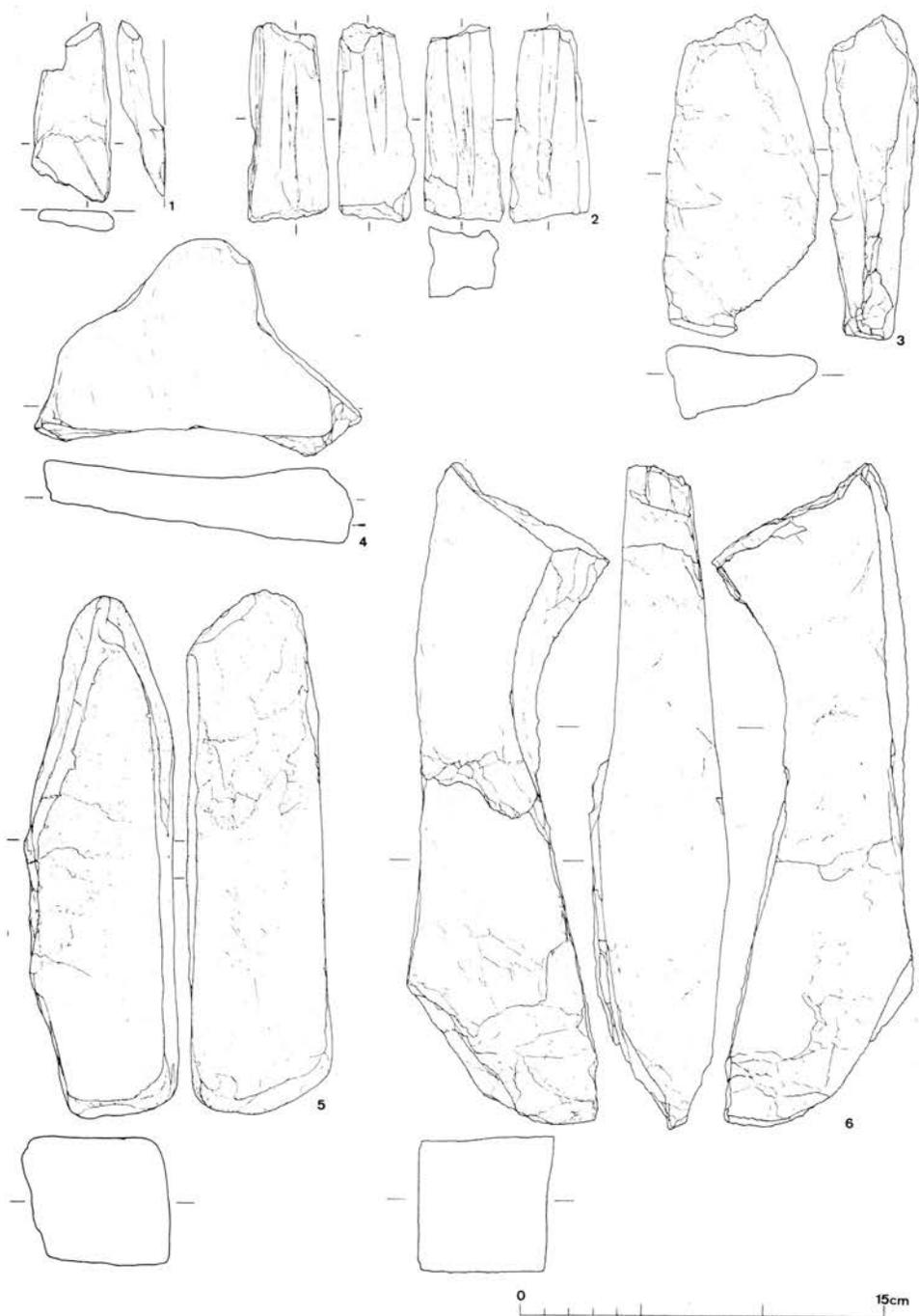
そこで、この項では、これらを補足する意味で、問題点を項目別に整理し、気付いた事柄等を記すことにする。

##### (1) 器種構成について

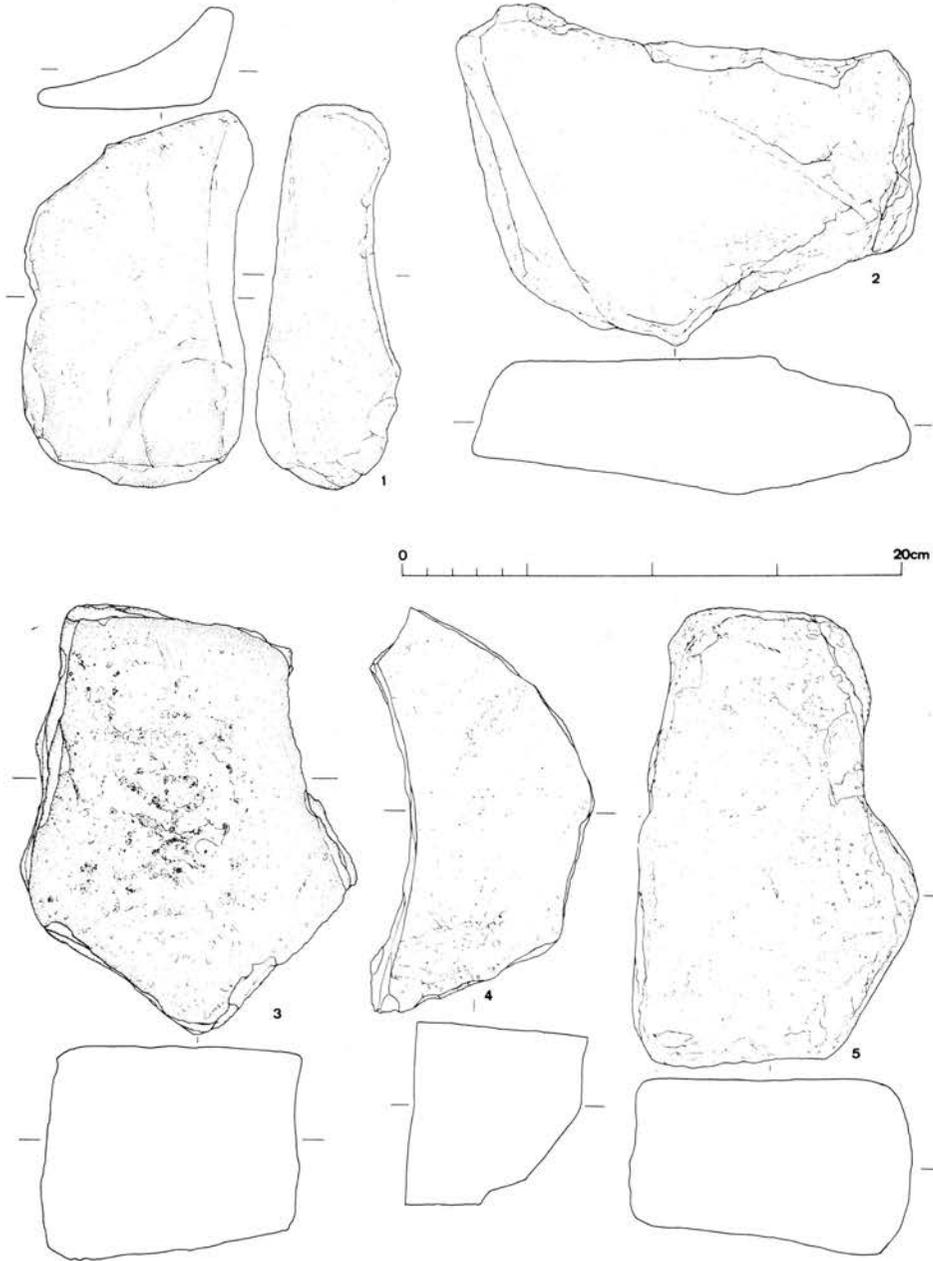
本節の冒頭に記した通りであるが、再度記しておくことにする。

当遺跡から出土した石器類には、打製石器として石鏃・石錐・石匙・削器・楔形石器およびその削片・敲石・打製石斧・石核・剥片・破片などが、磨製石器としては、磨製石鏃・磨製石剣・石庖丁・大型石庖丁・石鎌・石庖丁未製品・小型柱状片刃石斧・小型扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・挟入柱状片刃石斧・大型蛤刃石斧およびその転用品・砥石・石皿状の石製品・有溝剥片・陽物状石製品などがある。尖頭器・石小刀・環状石斧などは認められなかった。

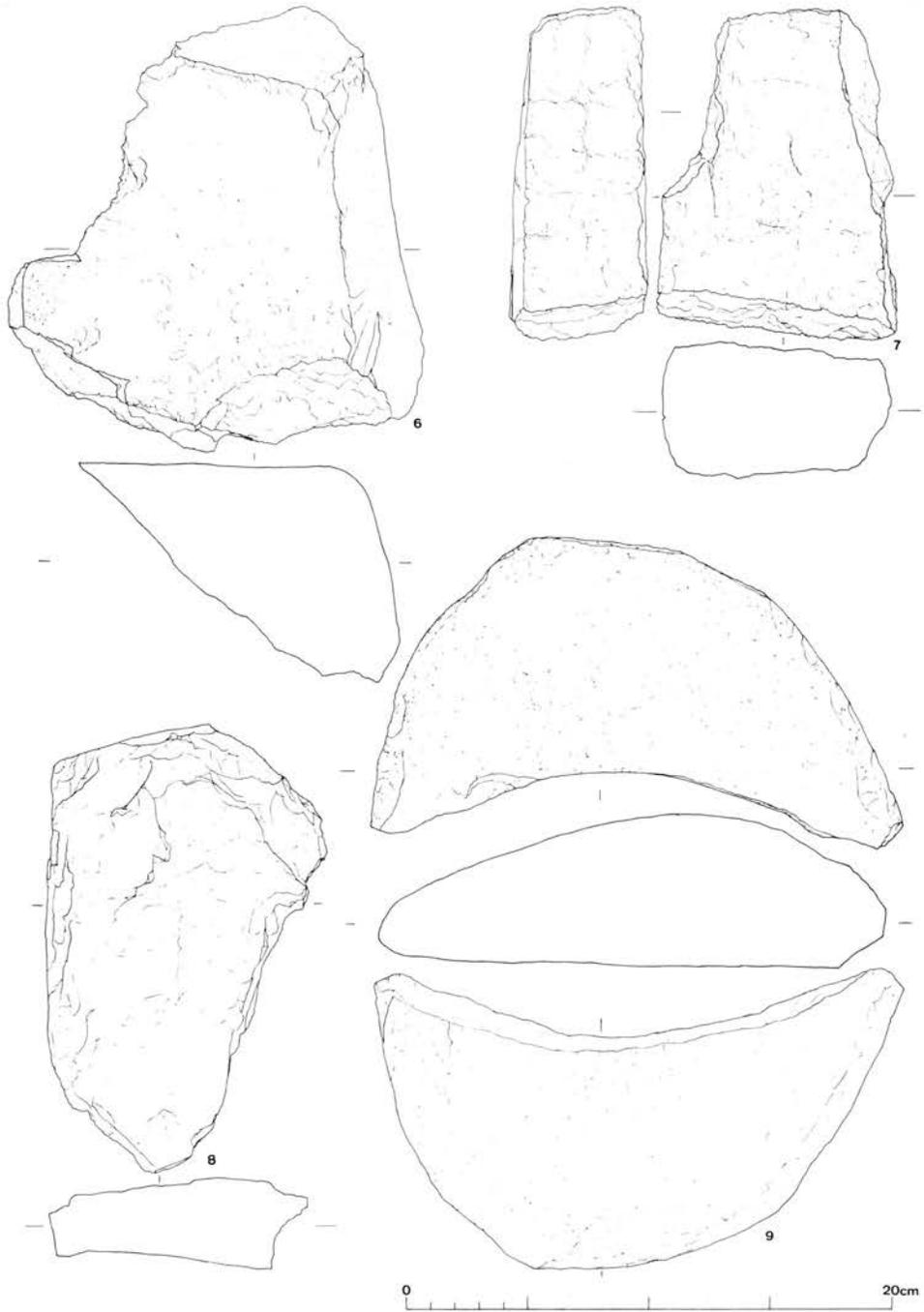
今回の発掘調査地点は、環濠集落の縁辺部にあたることなどから、石器の回収率に片寄りがあると思われる。今後、集落の中心部に調査が及ぶとすれば、器種構成に若干の変化があらわれることも考えられる。



第103図 砥石・石皿状石製品実測図(1)



第 104 図 石皿状石製品実測図(2)



第105図 石皿状石製品実測図(3)

これらの遺物は、土坑・溝の埋土あるいは包含層から出土したものであるため、直ちに同時期のものとすることはできない。この点に器種構成を考える上での問題点を残しているが、武器類に対して、農耕具・工具類が卓越する傾向を指摘することができる。

## (2) 利用石材について

当遺跡出土石器に利用されている石材は別表に示した通りである。全て肉眼観察によるものである。<sup>(注2)</sup>

当遺跡では、打製石器の大半を占める剥片石器(石核・剥片を含む)には2点を除く全てにサヌキトイドが用いられ、敲石や打製石斧には、チャート・玢岩・ホルンフェルスなど、磨製石斧と同種の岩石が用いられている。磨製石器には、頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルス・砂岩・玢岩などが多く用いられている。石庖丁・石剣・石鏃には頁岩ないし粘板岩、石斧類のうち太型蛤刃石斧には玢岩・砂岩が結びつく傾向がある。

これらの岩石は、不明品1点と搬入品であるサヌキトイドを除くと、<sup>(注3)</sup>肉眼での観察による限りすべて丹波帯に露頭あるいは転礫として存在し、表採活動によって直接入手できるものに限られる。<sup>(注4)</sup>

## (3) 当遺跡の石器生産体制

当遺跡では、利用石材の項で記したように、打製の剥片石器に用いられるサヌキトイドを除くと、すべて地元で容易に入手し得る石材を用いている。これを、石材の入手方法と消費のあり方を目安とした石器生産体制の分類案に従って<sup>(注5)</sup>換言すると、

(ア) 当遺跡の打製の剥片石器生産体制はII型に属する。すなわち、大半の石材を直接入手し、集落内で製作して自己消費する類型である。

(イ) 同様に、剥片石器を除く打製石器とすべての磨製石器は、石材を直接入手し、集落内で製作して自己消費する類型-Iに属している。

となる。

以上のことから、石器生産に関する限り、極めて自己消費的な生産体制のもとにあったということが出来る。

## (4) 石庖丁生産について

### ① 製作工程の復元

さきに解説した未製品資料をもとに、当遺跡の石庖丁の製作工程を大まかに復元して<sup>(注6)</sup>みることにしたい。

第1工程—素材を直接入手する。(丹波帯内も露頭付近から転礫=亜角礫を採集する。同種石材を用いた石皿状石製品の搬入状況を見ると、露頭付近の1kg前後の転礫を選んで持ち帰っている。また、粘板岩製の板状剥片の中には表面がかなり風化している例があるこ

となどがこれを裏付けている。採集地で岩盤や母岩から割り取る例については関連資料がないため明らかでない。）

第2工程—目的剥片の生産。(礫状の搬入素材に対して剥片剥離作業を行い、目的剥片を得る。)

第3工程—目的剥片を敲打整形し、大体の大きさに加工する。

第4工程—周囲を敲打し、目的とする形態へと近づける作業を行う。

第5工程—更に細かく調整剥離を行い、一部あるいは全部を粗研磨。

第6工程—錐を用いて穿孔し、紐穴を作る。(敲打による凹みを作らず、ただちに穿孔するのが当遺跡の特徴であるようだ。これは素材として頁岩ないし粘板岩を一元的に用いていることと関係がある。粘板岩は層状剥離を特徴とし、葉理に対して垂直に行われる敲打はなじまない。)

この後の刃付近や仕上げの工程については資料が無いので、どの段階で施されるのか明らかではない。

## ②太田遺跡における石庖丁生産

今回の調査では、石庖丁とその未製品を多数得ることができた。これらは、前期末から中期初頭にかけての石庖丁生産の一端を明らかにしたと言う点ばかりでなく、丹波帯内において初めて石庖丁生産の実態を具体的に示した点でも意義深い。

上述した諸点から当遺跡の石庖丁生産について次のようにまとめることができる。

当遺跡の石庖丁生産は、遺跡の周辺に分布している露頭から石材を直接入手し、自己消費を目的として集落内で生産・加工するタイプに属している。石材の選択は一元的であり、他地域生産石庖丁に対して排他的傾向を示すのが特徴的である。

丹波層群に産する頁岩ないし粘板岩を素材とする石庖丁は、紀ノ川南岸産の結晶片岩製石庖丁とならんで弥生時代中期に畿内地域中央部において広く分布することが知られている。三島地域にある安満遺跡などがこの粘板岩製石庖丁を用いるタイプサイトとして概念的に位置づけられ、同種石庖丁流通に際して仲介的役割を担った主要な遺跡の一つとして理解されている。<sup>(注7)</sup>太田遺跡は、使用石材に関してみる限り安満遺跡同様、丹波地帯産粘板岩製石庖丁利用の典型的な遺跡であると言うことができる。また、当遺跡は畿内とは丹波山地で隔てられてはいるものの、地理的にみて西摂・三島・乙訓各地域に連なり、土器の文様・器種構成の上でも相互に密接な関係があることを認めることができる。これらの事から、石材供給についても一定の社会的役割を果たしていたことは想像に難くない。

今後、地域間交流を具体的に検討していく上での課題である。

## (5) 擦切手法

有溝剥片は、当遺跡の磨製石器製作の過程において擦切手法が存在したことを示す貴重な資料である。この手法は、朝鮮半島の技法を引くもので、薄身の磨製石器の製作にあたって石材の裁断や成形などに用いられるものと考えられている<sup>(注8)</sup>。当遺跡からは、有茎の石鏃が一点確認されているが、有溝剥片はこのような製品と密接な関連があるものと思われる。

(田代 弘)

注1 『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980

注2 京都府立山城郷土資料館技師橋本清一氏に鑑定をお願いした。

注3 サヌキトイドの具体的な産出地点、搬入経路などについては明らかではない。断面が漆黒色を呈する良質なものと、流理構造が発達した粗質のものが認められる点に注意したい。

注4 丹波層群は古生層であり、頁岩ないし粘板岩、チャート・輝緑凝灰岩、砂岩などが含まれている。また、当遺跡のある台地に隣接する行者山は、中世代に生成した花崗岩が古生層の中に貫入してできたもので、周辺古生層は直接熱変成作用を強くうけてホルンフェルス化しており、最も入手しやすい石材の一つである。

玢岩は直接熱変成作用を受けた火成岩で、花崗岩地帯に多くみられると言う。当遺跡周辺では保津川の河床に転礫として集積している。

注5 下条信行「石器の生産」(『弥生文化の研究 5 道具と技術 I』雄山閣)1985

注6 酒井龍一「磨製石庖丁」(『弥生文化の研究 5 道具と技術 I』雄山閣)1985

注7 酒井龍一「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」(『考古学研究』第21巻第2号)1974

注8 注5と同じ

## 参考文献

『亀井遺跡II』大阪文化財センター 1984

『北摂ニュータウン内遺跡調査報告II』兵庫県教育委員会 1983

『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964

『勝部遺跡』豊中市教育委員会 1972

『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1982

蜂屋晴美「終末期石器の性格とその社会」(『藤沢一夫先生古希記念 古代文化論叢』古代を考える会)1980

下条信行「石器の製作と技術」(『古代史発掘4 稲作の始まり』講談社)1975

『弥生文化の研究 5 道具と技術 I』雄山閣 1985 など

付表4 石器観察表

石 鏃

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第78図 1	J地区	黒色土上層	1.9	1.3	0.4	0.9	サヌキト イド	新		
2	K地区	排土	2.2	2.1	0.2	0.6	"	"		
3	S K149	埋土	2.2	1.7	0.3	0.9	"	"		
4	J地区	黒色土上層	2.4	1.9	0.3	1.5	"	"		
5	K V25	砂層	2.8	2.7	0.4	0.8	"	"		
6	J地区	排土	1.4	1.8	0.4	0.9	"	"		
7	J地区	排土	2.0	1.8	0.3	1.8	"	"		
8	J地区	排土	2.9	2.1	0.7	3.8	流文岩様	弱	漂白化、 流理が みられる	
9	J地区	排土	1.8	1.4	0.5	0.8	サヌキト イド	新		
10	J地区	排土	1.5	1.6	0.2	0.7	"	"		
11	S D0208	埋土	1.9	1.6	0.3	0.8	"	"		
12	K Y30~31	黒色土	2.4	1.9	0.2	1.3	"	"		
13	J地区	排土	1.4	1.5	0.2	0.7	"	"		
14	J地区	排土	1.6	1.7	0.3	0.9	"	"		
15	J K・ J L35~36	黒色土	2.3	1.6	0.4	1.6	"	"		
16	J地区	黒色土	2.6	1.9	0.3	1.5	"	"		
17	J V28	排土	2.4	1.5	0.4	0.9	"	"		
18	J地区	排土	1.8	1.3	0.2	0.6	"	"		
19	J地区	黒色土	2.3	1.7	0.3	1.3	"	"		
20	J地区	排土	3.0	1.3	0.4	1.3	"	"		
21	J地区	排土	1.4	1.6	0.3	0.8	"	"		
22	J P30	黒色土	2.1	1.7	0.3	0.9	"	"		
23	J地区	黒色土	2.1	1.2	0.3	0.6	"	"		自然面付着
24	J H27	黒色土	3.2	1.7	0.5	2.2	"	"		
25	J地区	黒色土	3.0	1.8	0.4	2.0	"	"		自然面付着
26	J地区	黒色土	2.9	1.4	0.6	2.0	"	"		自然面付着 未製品
27	K Y33	黒色土	2.9	1.9	0.6	2.5	"	"		自然面付着
28	K V34	黒色土	3.4	1.8	0.7	2.8	"	"		未製品
29	J地区	排土	3.6	2.5	0.5	3.0	"	"		未製品
30	J地区	排土	4.2	1.1	0.38	2.6	"	"		鋸歯状縁辺
31	J地区	排土	7.0	1.7	0.5	5.0	"	"		中央部で折損

## 石 錘

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第79図 1	KX・KV30	黄褐色砂質土	3.2	1.1	0.3	0.9	サヌキト イド	新		
2	SK149	埋土	4.4	1.2	0.7	4.5	"	"		自然面付着
3	SK149	埋土	4.2	3.1	0.7	7.5	"	"		
4	KY36	黒色土	5.4	2.5	2.0	2.0	"	"		自然面付着

## 石匙・削器

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第80図 1	SD0208	埋土	3.0	4.8	0.4	5.0	サヌキト イド	新		自然面付着
2	SD0208	"	2.8	7.0	0.7	20.0	チャート	"		
3	J地区	排土	3.0	3.0	0.5	10.0	サヌキト イド	"		自然面付着
4	JE33	黒色土	5.3	5.8	1.2	37.0	"	"		自然面付着
5	SK149	埋土	5.2	7.6	0.8	35.0	"	"		
6	JD30~33	黒色土	5.4	6.9	0.8	42.0	"	"		
7	KU33	"	4.7	7.6	0.8	62.0	"	"		自然面付着, ツインバルブ
8	KV27	"	4.4	5.0	1.3	35.0	"	"		自然面付着

## 楔形石器

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第81図 1	KW33	黒色土上層	2.5	1.9	0.7	3.7	サヌキト イド	新		
2	KV37	黒色土上層	1.9	2.6	0.4	2.8	"	"		
3	SD0208	埋土	1.8	2.6	0.6	3.5	"	"		
4	KT37	黒色土	3.4	2.2	0.8	6.5	"	"		
5	JL~ JT35	黒色土上層	2.7	2.8	0.8	5.5	"	"		
6	KY33	黒色土上層	4.1	2.5	0.5	8.4	"	"		自然面付着
7	SD0207	埋土	4.0	2.2	0.6	9.6	"	"		
8	SD0207	埋土	2.9	3.0	0.4	7.3	"	"		
9	K地区	排土	3.2	3.6	1.2	13.7	"	"		
10	SD0208	埋土	2.6	2.3	0.8	5.5	"	"		
11	SD0208	埋土	3.1	3.0	1.2	10.0	"	"		
12	SD0208	埋土	3.8	3.1	0.8	10.6	"	"		
13	JL34	黒色土	2.2	2.4	0.5	3.0	"	"		
14	SD0207	埋土	3.5	3.5	1.2	16.5	"	"		
15	J地区	排土	4.4	3.4	0.9	15.8	"	"		自然面付着
16	KU36	黒色土上層	3.6	3.0	0.8	11.0	"	"		
17	KT~ P26~33	茶褐色土砂層	3.3	2.9	0.7	8.1	"	"		
18	JP25	黒色土上層	6.4	4.2	2.4	93.0	"	"		

京都府遺跡調査報告書 第6冊

楔形石器の削片他

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第82図 19	J E31~32	黒色土上層	3.2	1.6	0.6	2.3	サヌキト イド	新		自然面付着
20	S D0207	埋土	2.9	1.6	0.4	3.4	"	"		
21	K T~ P26~33	黒色土	3.6	1.8	1.1	7.6	"	"		
22	K S~ K X32	黒色土	5.2	1.8	0.8	7.3	"	"		
23	S D0208	埋土	5.4	2.4	0.6	11.5	"	"		自然面付着
24	S D0208	埋土	7.1	2.6	1.5	19.7	"	"		
25	K地区	黒色土	6.4	2.5	1.8	30.5	"	"		自然面付着
26	S D0207	埋土	6.8	2.5	1.8	22.3	"	"		
27	J B25	黒色土	8.5	6.2	3.2	240.0	"	"		自然面付着

未製品

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第83図	K地区	排土	5.7	1.2	1.0		サヌキト イド	新		石棺未製品の転用品か

敲石類

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第84図 1	J P31	黒色土層	5.2	1.9	1.2	8.3	チャート	新		
2	S D0208	埋土	10.7	7.5	7.2	345.0	砂岩	弱		細粒砂
3	S D0207	埋土	7.0	5.7	4.0	210.0	チャート	新		
4	S K134	埋土	7.6	6.6	5.2	370.0	"	"		漂白化
5	J D34	黒色土	11.0	8.0	6.0	690.0	"	"		
6	S D0205	埋土	10.2	8.2	3.6	460.0	"	"		
第85図 1	J地区	黒色土	7.1	2.8	2.0	50.5	砂岩	弱~中		細粒砂
2	S D0207	埋土	7.1	8.7	4.5	380.0	玢岩	弱		1-6mm 2-3mm 毎100gに1個以上
3	S D0207	埋土	9.9	8.1	6.2	700.0	玢岩	弱		2-5mm 1-3mm 毎100gに1個以上
4	S D0207	埋土	8.2	7.0	3.9	700.0	玢岩	中		1-3mm 有袋・2-4mm 以上

石 核

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第86図 1	J G25	黒色土	7.3	6.0	4.2	195.0	サヌキト イド	新		自然面付着
2	J地区	黒色土	4.0	3.1	2.5	28.0	"	"		自然面付着
3	J地区	黒色土	4.1	3.3	3.1	40.0	"	"		自然面付着

## 磨製石鏃

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第88図	J 027	黒色土	6.9	2.2	0.3	3.0	珪質頁岩	新		

## 磨製石剣

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第88図 2	S K 149	埋土	3.9	2.1	0.7	9.2	頁岩 ～粘板岩	新	やや珪質	
3	S D 0208	埋土	5.1	3.3	0.9	21.1	"	"	極細粒 砂～シルト	
4	S D 0208	埋土	9.1	2.3	0.9	25.0	"	"	やや熱変成	
5	J D 24～ J F 25	黒色土	6.3	2.9	1.5	29.0	"	"		
6	S D 0208	埋土	18.0	6.1	1.9	285.0	"	弱～中		

## 石庖丁・大型石庖丁・石鎌

図番号	出土地点	出土層位	横長 (cm)	縦長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第89図 1	J 地区	黒色土	8.2	4.0	0.7	28.0	珪質頁岩	新		紐穴が認められない
2	S K 132	埋土	6.7	4.5	0.5	25.0	頁岩 ～粘板岩	新	0.5mm以下 の斑点	使用痕顕著
3	K Y 36	黒色土	7.4	4.6	0.8	38.0	"	弱	やや砂質 やや凝灰質	
4	S D 0208	埋土	5.9	5.5	0.6	26.4	"	新		
5	J R～J S 29～26	黒色土	5.1	5.2	0.6	25.0	"	新		
6	K S 30～34	黒色土	10.6	5.8	0.75	70.0	泥質砂岩	新	かなり泥質 で極細粒砂	
7	K Y～K W 27～28	黒色土	4.8	2.9	0.4	8.0	頁岩 ～粘板岩	新～弱	やや珪質	
8	S D 0205	埋土	11.5	5.0	0.8	70.0	"	弱	細かなオルタ ネーション	
9	K Y 30～31	黒色土	16.8	4.3	0.7	70.0	珪質頁岩	新	0.2～0.1 mmの斑点	紐擦れ痕・使用痕顕著 未穿孔痕あり
10	S D 0208	埋土	16.6	4.5	0.4	72.0	"	"	"	10・11は一括出土 未穿孔痕あり
11	S D 0208	埋土	17.5	5.0	0.4	70.0	"	"	"	石鎌状
第90図 12	J 地区	黒色土	3.8	1.8	0.4	7.0	頁岩ない し粘板岩	"		
13	K V 33	黒色土	4.2	3.3	0.4	5.0	"	"		
14	S D 0207	埋土	6.4	4.5	0.8	23.0	泥質ホルン フェルス	弱		
15	S D 0207	埋土	3.2	2.3	0.4	3.0	頁岩 ～粘板岩	新		
16	K 地区	黒色土	4.9	3.3	0.5	13.0	珪質頁岩	"		
17	J D 30	黒色土	7.3	3.8	5.5	24.0	頁岩ない し粘板岩	"		粗製
18	K X・K W 31	黒色土	3.1	3.6	0.9	10.0	"	弱		
19	S D 0208	埋土	3.7	6.1	0.4	10.0	"	珪質な部 分が多い		
20	J O 24	黒色土	7.0	5.2	0.4	28.0	"	弱		風化が著しい
21	K Y 25	暗灰色砂質土	5.8	5.8	0.6	28.0	珪質頁岩	弱		未穿孔痕あり
22	J Q 30	黒色土	8.4	5.1	0.7	45.0	泥質砂岩	新	かなり泥質 極細粒砂質	
23	S D 0208	埋土	4.6	6.2	0.6	22.0	頁岩 ～粘板岩	新	0.2mmの 斑点	

京都府遺跡調査報告書 第6冊

図番号	出土地点	出土層位	横長 (cm)	縦長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
24	S D0205	埋土	9.1	4.5	0.6	32.0	珪質頁岩	新		紐擦れ痕あり
25	K R29	黒色土層	5.8	5.3	0.8	38.0	頁岩 ～粘板岩	新	やや極細 粒砂質	未穿孔痕あり
26	K X24	黒色土	9.0	5.2	0.7	48.0	"	新～弱		敲打整形痕顕著 未穿孔痕あり
27	S D0208	埋土	6.1	5.5	0.5	35.0	"	新		
28	S D0209	埋土	10.7	5.4	0.4	40.0	珪質頁岩	"		未穿孔痕あり
第91図 29	K地区	排土	2.4	0.2	0.4	3.0	"	"		
30	J A31	黒色土	4.7	2.1	0.4	4.0	頁岩 ～粘板岩	"	やや熱変 成	
31			3.6	2.0	0.5		"	"		
32	K W24		5.2	1.7	0.3	8.0	"	"	かなり珪質 0.1～0.2mm の斑点多い	
33	K X24		2.7	4.3	0.3	8.0	珪質頁岩	"		
34	S K132	埋土	5.0	3.9	0.7	20.0	頁岩 ～粘板岩	新～弱		
35	K V30		5.6	3.7	0.4	8.0	"	"	やや珪質	
36	K V33		1.4	5.2	0.6	4.0	珪質頁岩	弱	漂白化	風化著しい
37	K O30		6.8	3.5	0.4	13.0	頁岩 ～粘板岩	新	かなり珪質 0.2mm斑点 多い	
38	K Y30～31		4.8	5.0	0.4	14.0	頁岩 ～粘板岩	"	かなり珪質 0.2mm斑点 多い	
39	J地区	黒色土	3.4	3.3	0.8	18.0	砂岩	弱	淡緑色オルタ ネーション	
40	S D0207	埋土	4.8	4.2	0.6	18.0	頁岩 ～粘板岩	新		
41	J A26～34	黒色土	6.3	4.2	0.4	18.0	頁岩 ～粘板岩	"		粗製
42	J B29～30	黒色土	4.9	8.6	0.7	18.0	"	"	やや熱変 成	大型石庖丁
43	J A地区	黒色土	9.1	5.3	0.9	68.0	"	"	"	石鎌 使用痕顕著
44	S D0207	埋土	7.6	5.0	0.8	35.0	"	弱～中		大型石庖丁
45	S D0208	埋土	9.3	6.4	1.0	90.0	砂質ホルン フェルス	新		石鎌使用痕顕著
46	J I 36	黒色土	17.4	9.1	1.0	215.0	頁岩 ～粘板岩	"		大型石庖丁 使用痕顕著

石庖丁未製品

図番号	出土地点	出土層位	横長 (cm)	縦長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第92図 47	J M～J 30～33	黒色土	5.1	3.5	0.7	18.0	頁岩 ～粘板岩	弱～中		未穿孔痕あり
48	K地区	黒色土	8.3	4.9	0.9	45.0	"	中		器体下半にのみ研磨痕
49	K地区	排土	6.0	3.0	0.4	14.0	珪質頁岩	新		未穿孔痕あり
50	S D0207	埋土	8.4	5.6	0.6	40.0	"	"	0.2mmの 斑点多い	上縁研磨
51	S D0207	埋土	5.2	4.6	0.8	20.0	泥質ホルン フェルス	"	やや熱変 成	上縁・下縁に研磨痕
52	J P23	黒色土	7.3	4.1	0.6	18.0	頁岩 ～粘板岩	弱～中	"	下縁研磨(葉理直交)
53	S D0207	埋土	8.8	5.7	0.6	45.0	"	新～弱		
54	J地区	排土	7.4	5.6	1.0	25.0	"	"		
55	J L～i 35	黒色土	7.1	6.1	0.8	53.0	"	新	やや珪質	

図番号	出土地点	出土層位	横長 (cm)	縦長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
56	S D0207	埋土	11.3	6.4	0.7	52.0	頁岩 ～粘板岩	新	かなり珪質	
57	S D0208	埋土	13.0	4.5	0.5	43.0	珪質頁岩	〃	0.2mmの 斑点多い	使用痕あり
58	S K204	埋土	15.3	7.5	0.9	125.0	泥質ホルン フェルス	新～弱	極細粒砂	中央部で折損
第93図 59	S D0207	埋土	6.9	5.6	0.8	52.0	珪質頁岩	新	0.2mmの 斑点多い	
60	J 地区	排土	9.2	5.7	0.7		頁岩 ～粘板岩	〃		
61	K U～V29 ～32	茶褐色土	9.8	5.0	1.4	92.0	泥質ホルン フェルス	新～弱	極細粒砂	
62	S D0205	埋土	9.5	5.7	0.9	65.0	〃	新		
63	J B29～30	黒色土	18.6	4.0	1.2		頁岩 ～粘板岩	中～弱		
64	J 地区	排土	6.3	9.5	1.2		〃	〃		剥片 自然面付着
65	J 地区	排土	7.5	12.1	1.6	160.0	〃	〃		剥片

## 小型柱状片刃石斧

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第94図 1	J Y～T 27～29	黒色土	5.4	1.2	1.2	13.0	頁岩 ～粘板岩	弱	極細粒砂と のオルクネ ーション	

## 小型扁平片刃石斧

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第94図 2	J B29～30	黒色土	5.4	2.0	0.7	11.8	頁岩 ～粘板岩	新	やや熱変 成	
3	S D0208	埋土	5.7	2.9	1.0	17.8	〃	〃		

## 柱状両刃石斧

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第94図 4	J E25	黒色土	8.0	3.1	2.1	85.0	珩岩	新	1～3mmの 斑晶	

## 挟入柱状片刃石斧

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第94図 6	K X～W31	黒色土	7.0	4.0	1.1	34.5	頁岩 ～粘板岩	弱～中	漂白化	
7	K T36	黒色土	8.4	5.5	3.5	23.9	砂岩	新	淡緑色 極細粒砂	

## 未製品（扁平片刃石斧か）

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第94図 5	J N29	黄白色砂	8.0	4.5	1.3	50.8	泥質ホルン フェルス	弱～中		

## 太型蛤刃およびその転用石器

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第95図 1			2.3	5.4	1.5					
2	S D0205	埋土	9.8	5.8	4.8	420.0	珩岩	新	1～3mmの 長石斑晶	
3	S D0207	埋土	8.6	5.4	3.5	210.0	砂岩	〃	淡緑色	
6	T L34	黒色土下層	10.5	6.6	5.5	610.0	砂岩	〃	細～ 中粒砂	
7	J P29	黄白色砂層	10.5	6.3	4.8	510.0	珩岩	弱		

京都府遺跡調査報告書 第6冊

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第96図 8	KY25	黒色土	2.7	5.6	4.2	90.0	砂岩	弱～中	細～ 中粒砂	
9			7.5	6.1	4.8					
10	SD0207	埋土	3.5	5.4	4.5	100.0	砂岩	弱	細粒砂	
11	KT～KR 29～31	黒色土	6.2	6.0	4.2	190.0	玢岩	弱～中	1mm石英 長石斑晶	
12	K地区	黒色土	4.2	3.8	3.7	60.0	〃	新	1～2mmの 長石斑晶 安山岩	
13	SD0208	埋土	4.9	4.6	3.9	90.0	〃	〃	2mm石英 1～2mm長石 斑晶砂質	
14	KP29	黒色土	6.5	6.4	4.5	190.0	〃	新～弱	やや砂質	
15	SD0205	埋土	4.0	5.5	3.7	80.0	泥質ホルン フェルス	弱～中	やや 熱変成	
第97図 16	SD0208	埋土	8.5	6.2	2.8	210.0	玢岩	弱	2～3mm 角閃石斑晶	
17	SD0201	埋土	12.0	6.0	4.6	495.0	〃	新	1～5mm 長石斑晶	
18	JL28	黒色土	8.5	7.2	4.1	380.0	砂岩	〃	細～極 細粒砂	
19	SD0207	埋土	11.9	6.8	4.5	635.0	玢岩	弱～中		
20	SD0205	埋土	12.3	7.3	4.5	570.0	〃	〃	1～3mm 石英斑晶	
21	KX33	黒色土	9.8	7.1	4.8	510.0	〃	新～弱	1～3mm 長石斑晶	
第98図 22	SD0205	埋土	9.9	5.8	3.6	410.0	砂岩	新	緑色 0.5mm 白色斑晶	
23	SD0207	埋土	10.7	7.3	3.2	410.0	〃	新～弱	細粒砂	
24	KV31	黒色土	10.5	6.9	4.3	420.0	〃	弱～中	細～ 中粒砂	
25	SK149	埋土	11.5	7.3	4.9	730.0	玢岩	〃	1～2mm 石英斑晶	
26	SD0205	埋土	12.4	6.5	4.1	520.0	〃	新～弱	1～4mm 長石斑晶	
27	KV35	黒色土	13.3	8.5	6.6	1150.0	〃	弱		
第99図 28	SD0207	埋土	6.5	5.5	4.0	210.0	砂岩	〃	細～極細 粒砂	
29	SD0207	埋土	6.7	7.5	4.6	390.0	玢岩	新	2～3mmの 長石斑晶 閃緑岩	
30	SD0209	埋土	5.8	5.6	4.1	220.0	〃	〃	〃	
31	JO・JM 33～32	黒色土	8.5	7.2	4.3	350.0	砂岩	新～弱	細～ 中粒砂	
32	J地区	黒色土	6.9	6.8	4.6	340.0	玢岩	〃	2～3mmの 長石斑晶	
33	J地区	埋土	7.7	6.5	6.0	330.0	〃	弱	角閃石 斑晶	
34	JN25	黒色土	6.5	6.7	4.7	320.0	砂岩	〃	細粒砂	
35	SD0207	埋土	10.0	6.8	4.4	370.0	〃	新	細粒砂	

打製石斧

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第95図 4	J地区	排土	9.1	4.5	1.0	50.0	頁岩 ～粘板岩	新～弱	珪質	
5	KV29～30	黒色土	10.8	5.5	1.8	150.0	泥質ホルン フェルス	弱	董青石	

## 砥石

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第100図 1	J 地区	排土	7.5	3.3	0.6		砂岩	新～弱		
2	J L28	黒色土	8.0	3.3	2.8	105.0	〃	中		
3	S D0205	埋土	13.4	6.3	3.0	235.0	〃	〃		
5	S D0208	埋土	21.5	6.1	5.2	1305.0	〃	〃		

## 有溝剥片

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第100図	K 地区	黒色土	3.3	3.3	0.5	8.0	頁岩ないし粘板岩	中		

## 転用石器

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第100図	J K31	黒色土	5.9	2.9	0.5	11.0	頁岩ないし粘板岩	新	やや珪質	

## 不定形な刃器

図番号	出土地点	出土層位	縦長 (cm)	横長 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第100図 1	J I 36	黒色土	3.5	5.2	0.6	18.0	泥質ホルンフェルス	新～弱		
2	J 地区	排土	4.8	3.9	0.7	18.0	頁岩ないし粘板岩	中～弱		
3	S D0208	排土	7.3	6.3	0.8	55.0	〃	新	1～2mmの斑晶	

## 石皿状石製品

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第100図 4	J N31	黒色土	7.8	13.5	3.0	360.0	砂質ホルンフェルス	弱		
6	S D0207	埋土	27.0	7.5	5.5	1405.0		新	中粒砂	
第104図 1	J I 36	黒色土上層	14.2	8.7	3.3	490.0	砂岩	中	細粒砂	
2	J 地区	黒色土	12.2	17.0	5.4	1600.0	砂質ホルンフェルス	弱		
3	S D0208	埋土	16.2	13.3	8.5		珩岩	〃	1～9mm長石斑晶	
4	S D0207	埋土	16.0	6.2	7.3	1500.0	〃	新	1～5mm長石斑晶	
5	K X24	黒色土	18.3	11.2	6.8		アブライト	〃	花崗岩アブライト漂白化	
第106図 6	S D0208	埋土	17.5	17.0	8.5	73.0	泥質ホルンフェルス	〃	堇青石	
7	S D0209	埋土	13.5	9.7	5.4	1100.0	珩岩	弱～中	1～3mm長石斑晶	
8	S D0207	埋土	18.0	11.5	3.6	900.0	泥質ホルンフェルス	新	やや熱変成	
9	K V24	黒色土	10.0	21.0	6.1	1290.0	砂質ホルンフェルス	〃		

## 陽物状石製品

図番号	出土地点	出土層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材			備 考
							岩石名	風化度	備 考	
第85図 5	S D0208	溝底	13.5	5.7	5.4	750.0	珩岩	新		

### 第3節 木器

今回の調査で出土した木器は、総数にして約3,000点を数える。中には加工が施されていない木材も数多く含まれている。しかし、木器の中で、使用目的の推定できるものは農具・工具・建築材など少数である。時期はほとんどのものが弥生時代中期前半に属するものと考えられる。これらの大部分は、特に溝SD 0207・0208内から出土したが、溝SD 0201・SD 0205・SD 0209からも若干出土した。

#### (1) 農具

農具は鋏6点・杵4点が出土した。鋏は、広鋏と狭鋏の2種類がある。杵は完形のものはない。

広鋏は、2点あるが(第106図3・第107図4)、そのうち3は、頭部先端がわずかに外湾し、刃縁部が直線状を呈する。側縁は、上半が浅い弧状に挟られている。舟型突起は、紡錘形を呈する短いもので、頭部のいくぶん下から作り出され下端の刃部まで及ばない。厚みは刃部に及ぶにしたがって薄くなっている。前面には舟型突起の上半部の位置に段をつくり出している。池上遺跡の報告書による分類では、第II型式に位置するものである。出土地点は溝SD 0207のJK 23地区である。4は、広鋏の頭部片側先端であるが、小さな破片のため詳しくはわからないものの、頭部先端に円弧状の挟りを施している。出土地点は、溝SD 0208のJP 24地区である。

狭鋏は、合計3点(第106図1・2、第107図6)がある。1は、中央に柄孔から縦方向に割れている。頭部は、中央が突出している。舟型突起は、明瞭なものをもたない。出土地点は、溝SD 0208のKB 23地区である。2は、頭部中央が突出している。舟型突起はもたず、全体に薄い。出土地点は、溝SD 0208のJK 29地区である。6は、頭部先端と側縁ともにややふくらみがある。刃部の形状は細長く、V字形を呈する。舟型突起は、明瞭なものをもたず、わずかにふくらみがある。出土地点は、溝SD 0208のJK 31地区である。

その他に、鋏の一部と考えられるもの(第107図5)がある。出土地点は、溝SD 0209のKB地区である。

杵は握部(第108図10~12)が3点、搗部は(第108図13)1点出土した。10~12は、握部と搗部の境界が明瞭でないものである。搗部から握部へ徐々に細くなり、握部の中央が細身の段をつくり出している。握部の上半には手擦れ痕がある。出土地点は10が溝SD 0208のKQ 31地区、11が溝SD 0208のKQ 27地区、12が溝SD 0207のJP 27地区である。13は他の杵より太身の搗部である。先端部は丸く、摩滅痕がある。出土地点は溝SD 0208のJP 24地区である。

#### (2) 工具

工具は、石斧の柄(第 107 図 7)が 1 点出土した。斧の柄は、石斧を着装する孔部分と、その上半の台部で、他は残存していない。この斧の柄は台部の形状と太型蛤刃石斧を明らかに着装したことがわかる着装孔から縦斧の柄であることが判明した。頭部は丸く楕円形を呈する。出土地点は溝 SD 0208 の 23 地区である。

### (3) 建築材

建築材と推定されるものの中には、方形の頭部に四角い孔を穿ったもの(第 107 図 8)と円孔を穿ったもの(第 107 図 9)がある。8 は、前面に加工を施し、中央に方形に孔を穿ったものである。板材は厚く、組み合わせて使用される建築材と考えられる。出土地点は溝 SD 0208 の JP 26 地区である。9 は「T字型」を呈する厚い板材である。全体に丁寧に加工している。突出部中央のまるい孔は棒状のものを組み合わせて使用したものであろう。出土地点は溝 SD 0208 の JP 26 地区である。

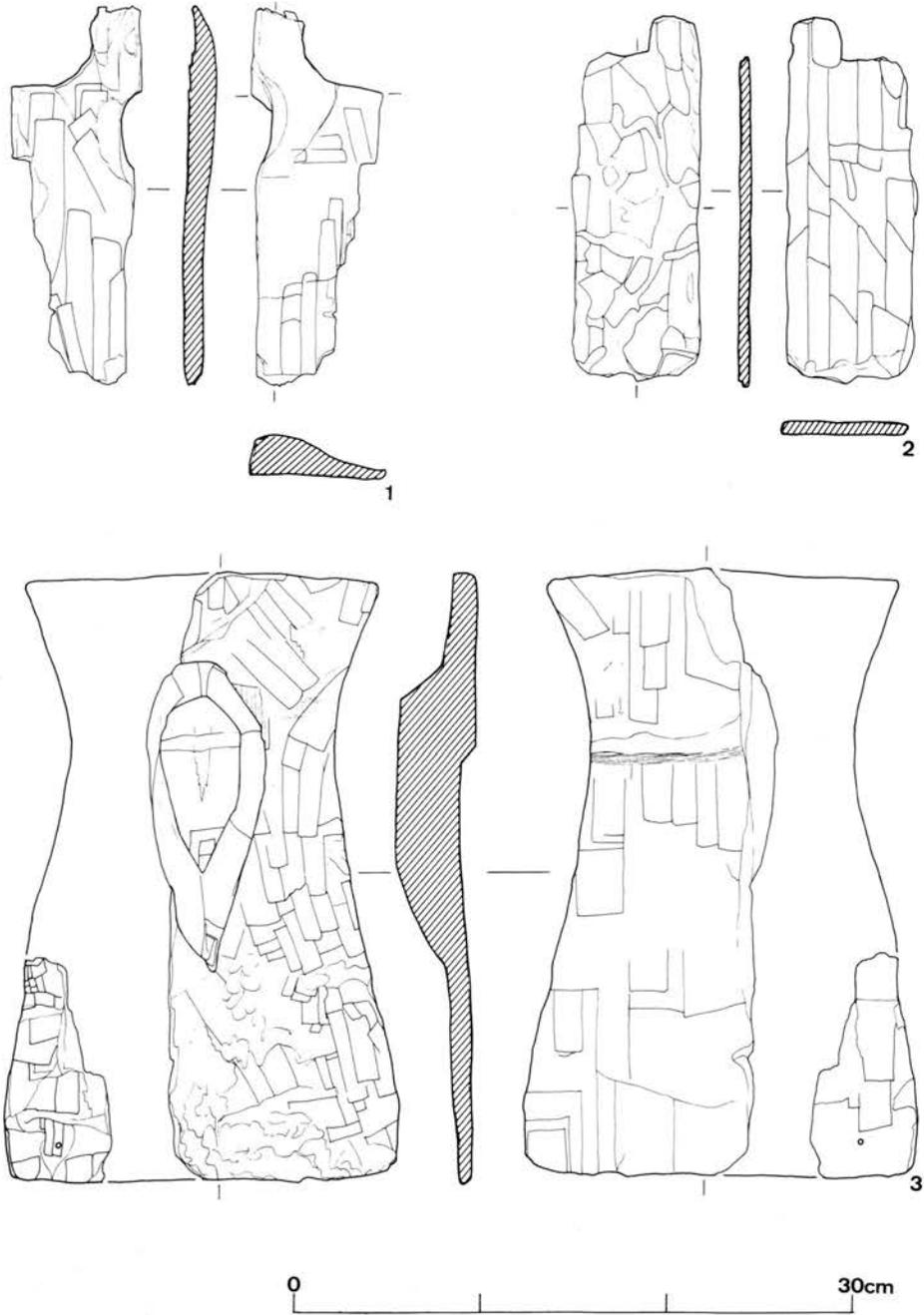
### (4) 容器

容器は、全部で約 15 点出土した。椀状のもの(第 109 図 21・22・28・29)と杓子状のもの(第 109 図 23~27)である。21・22 は椀状容器の口縁部である。器壁は厚く、外面には丁寧な加工痕がある。23~27 は杓子状の柄がつくり出されている。柄の部分はすべて容器の体部に付設したもののばかりである。柄は細長いと考えられるが、断面が三角形を呈するものである。出土地点はすべて溝 SD 0208 の JP 地区である。

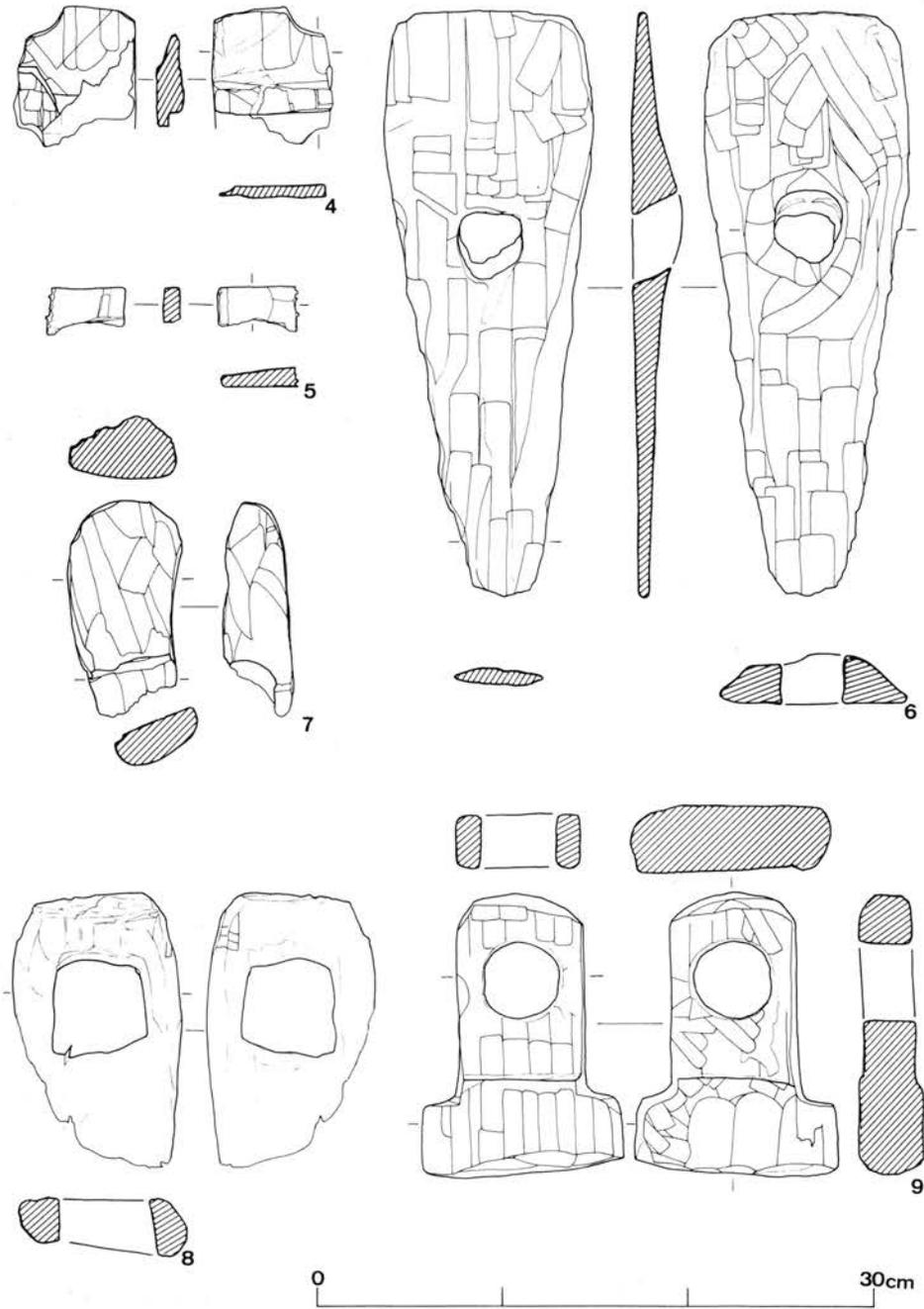
### (5) 用途不明木製品

木製品には建築材・祭祀具・織機らしきものも含まれるが、ここでは用途不明木製品として扱った。これらの木製品は大きく分類すると棒状を呈するもの(第 109 図 14~20・第 110 図 30~34・第 111 図 35~37)と、板状を呈するもの(第 111 図 38・39・第 112 図 40~44・第 113 図 45~50・第 114 図 51~53)がある。14 は、細い小枝を利用した棒状のもので、先端を尖がらせている。途中で折れているため、全長は不明である。先端の尖がっている部分以外は自然面を残している。溝 SD 0208 から出土した。15 は、細長い棒状の一端を面取り、丸く削りあげている。途中で折れているため不明である。一端の面取り以外は未調整である。出土地点は溝 SD 0208 の BA 26 地区である。16 は、太い棒状の一端である先端を尖がらせて側面も面取りの加工を行っている。出土地点は溝 SD 0207 の JK 23 地区である。17~20 は全長が約 20 cm を測る棒状木製品である。一端を尖がらせて、他方をやや丸く削っている。側面も面取りを行っている。出土地点は 17 が溝 SD 0208 の JP 32 地区、18 が溝 SD 0207 の JA 32 地区、19 が溝 SD 0208 の BA 28 地区、20 が溝 SD 0209 の JK 32 地区である。30~33 は、先端を尖がらせ、他方の端に丸く削り出された突起をもつ棒状木製品である。30~31 は類例が池上遺跡にある。30 は全体に薄く、断面が長方形を呈する平たい

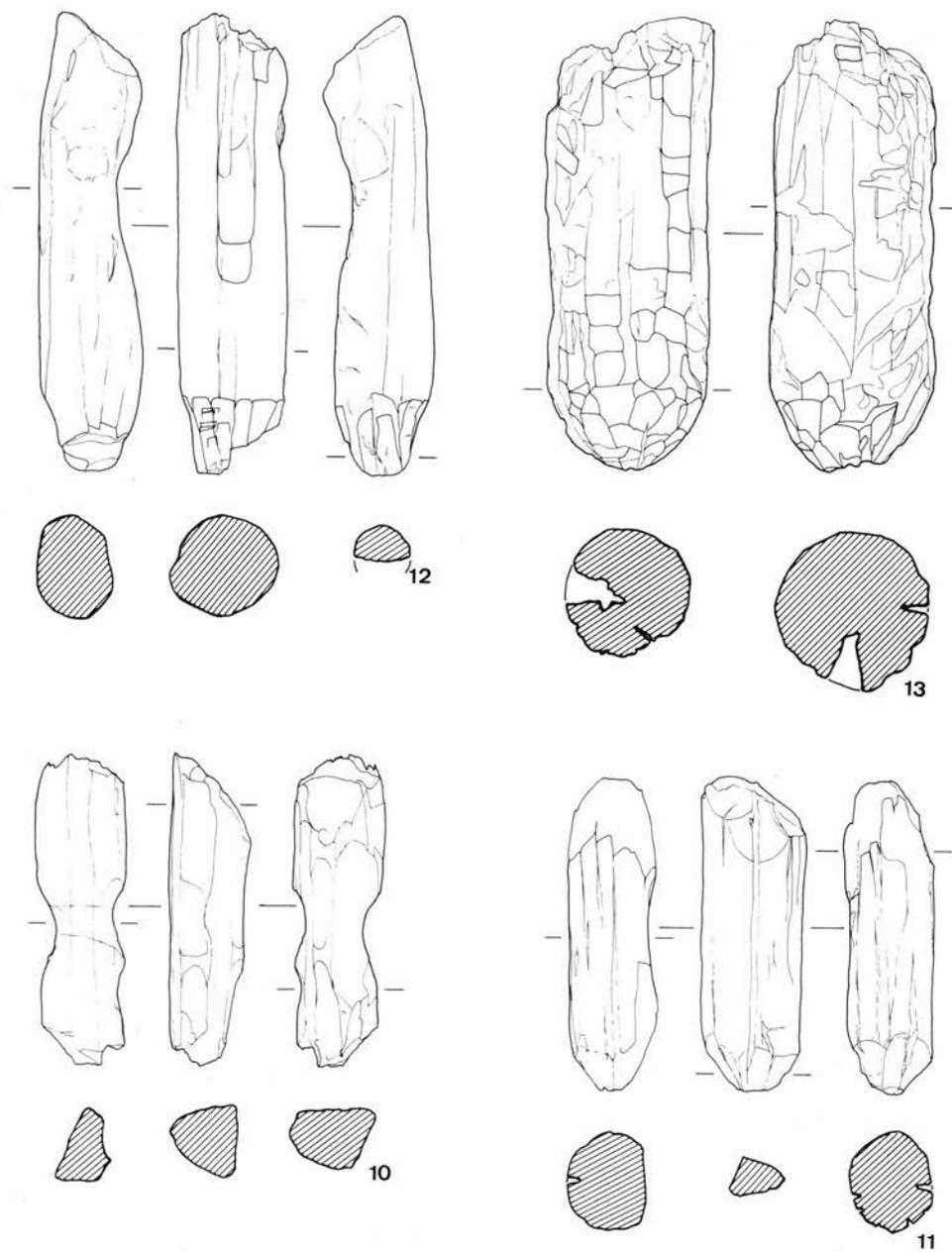
棒状木製品である。全面が削られている。突起状の頭部は丸く、削り出されている。出土地点は溝 SD 0207 の JM 32 地区である。31 は、突起状の頭部と尖がらせた先端以外は自然面を残している。尖がらせた先端は、一方向から斜めに加工されている。頭部は丸く削り出されている。出土地点は溝 SD 0208 の JP 32 地区である。32 は尖がらせている先端が一部小さな鈎状を呈する。頭部は明瞭な段をもたず端部を丸く削っている。全体を削り、断面が三角形及び方形を呈する。出土地点は溝 SD 0208 の JP 32 地区である。33 も、棒状のものであるが、30・31 のように、一端が尖がっているものの、もう一方の端は、方形の頭部を有するが段はもたない。全体を削り、断面はほぼ円形を呈する。出土地点は溝 SD 0208 の JK 地区である。34 は、板状の薄い棒状木製品である。先端を尖がらせ、頭部は丸く削っている。頭部中央には一孔が穿たれている。全体に削られている。出土地点は溝 SD 0208 の JL 32 地区である。35・36 は、板状の薄い棒状木製品である。一端を尖がらせて他方を面取りしている。中央に段及び他の木製品を装置し組み合わせたと考えられる溝状の痕跡が残っている。断面は長方形を呈する。出土地点は 35 が溝 SD 0207 の JK 32 地区、36 が溝 SD 0208 の JP 23 地区である。37 は細長い棒状木製品である。断面がほぼ正方形を呈し、全体に面取りを施している。出土地点は溝 SD 0209 の MK 32 地区である。38 は板状の木製品である。両側面に面取りし、両端中央に長方形の孔を穿っている。両端中央部が欠損している。出土地点は溝 SD 0207 の KY 24 地区である。39 は厚い板状木製品である。下端と側面に面取りを施している。出土地点は溝 SD 0207 の BY 24 地区である。40 は、細長い板状木製品である。上端、側面、両面は平坦に削り、下端は斜めに削られている。出土地点は溝 SD 0208 の KQ 30 地区である。41・43 は、細長い板状木製品である。両端面以外は丁寧に面取りしている。両端面は粗い面取り加工を施している。出土地点は、41 が溝 SD 0208 の KY 21 地区、42 が溝 SD 0207 の KY 16 地区、43 が溝 SD 0208 の JY 18 地区である。44 は大きな板状木製品である。ほぼ中央に円形の孔を穿っている。両端面以外は面取りを施している。出土地点は溝 SD 0207 の KY 21 地区である。45・47 はほぼ正方形を呈する板状木製品である。全体に厚く、両側面と両面は平坦に削られているが、両端はあまり加工していない。出土地点は 45 が溝 SD 0207 の KY 26 地区、46 が溝 SD 0207 の KY 16 地区、47 が溝 SD 0209 の KT 17 地区である。48～50 は長方形を呈する薄い板状木製品である。すべて両端に小さな孔を穿っている。48 は両端の各角に小さな穴を 1 孔計 4 孔穿っている。両面・両側面は、面取りしている。中位より上半に斜め方向の幅約 2 cm の溝がある。出土地点は溝 SD 0207 の KB 24 地区である。同様の穿孔された板の例は巨摩・瓜生堂遺跡から出土している。49 は細長い板状木製品である。上端中央に縦方向に 2 個の小さな孔を、下端中央に斜方向の小さな孔を 2 個それぞれ穿っている。全面を丁寧に削っている。出土地点



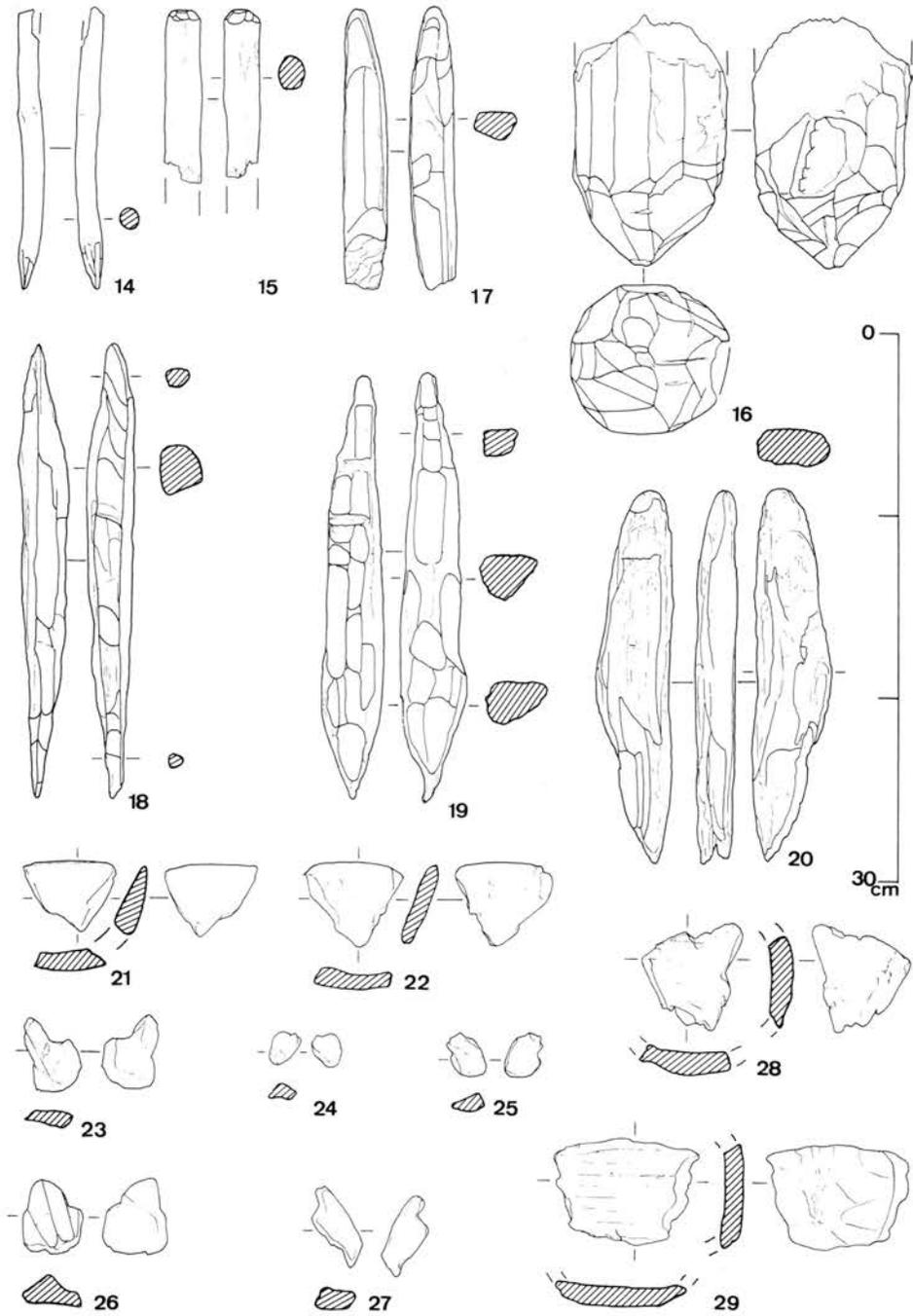
第106図 木器（鋏）



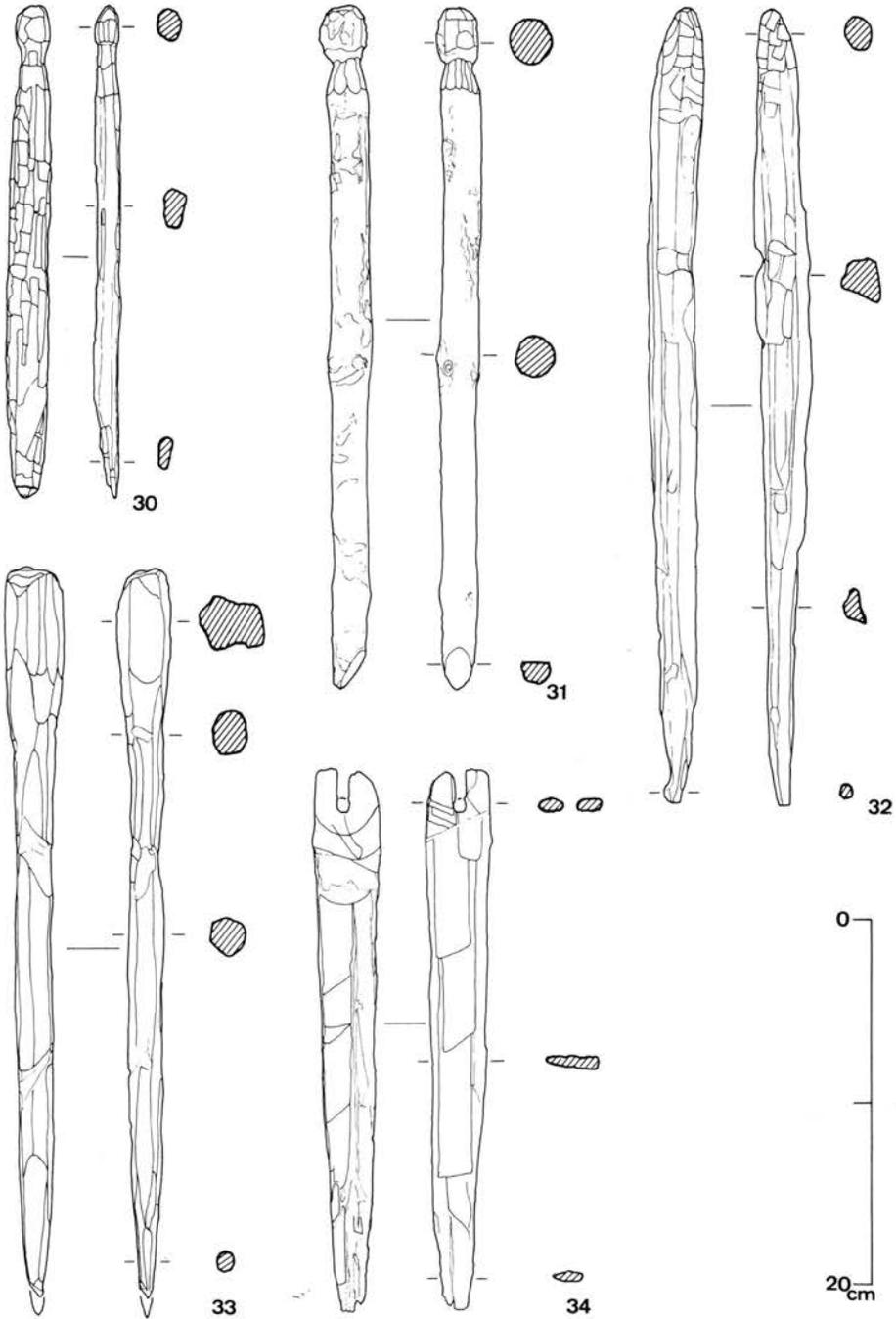
第107図 木器（鋏・石斧用柄・用途不明木製品）



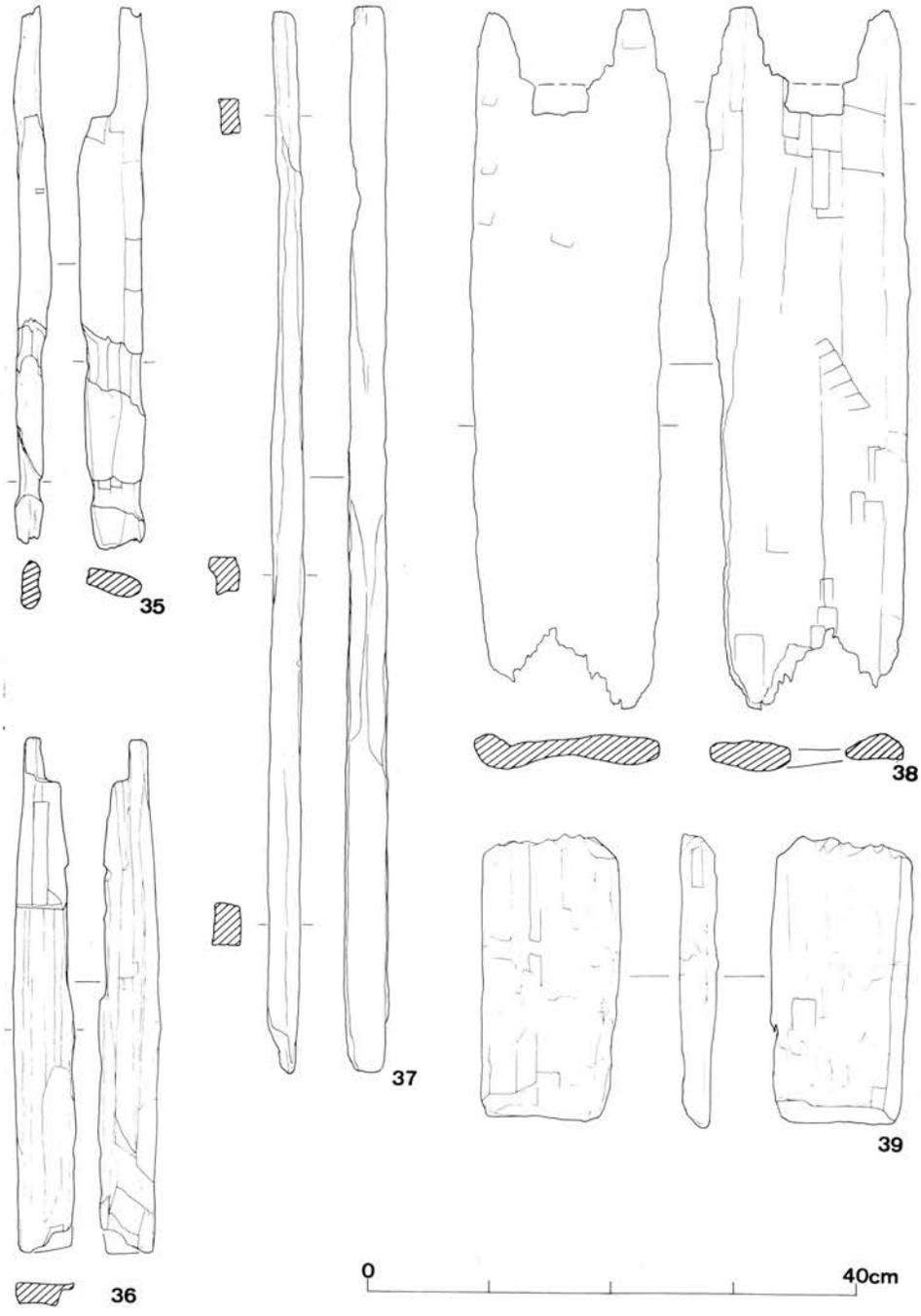
第108図 木器(杵)



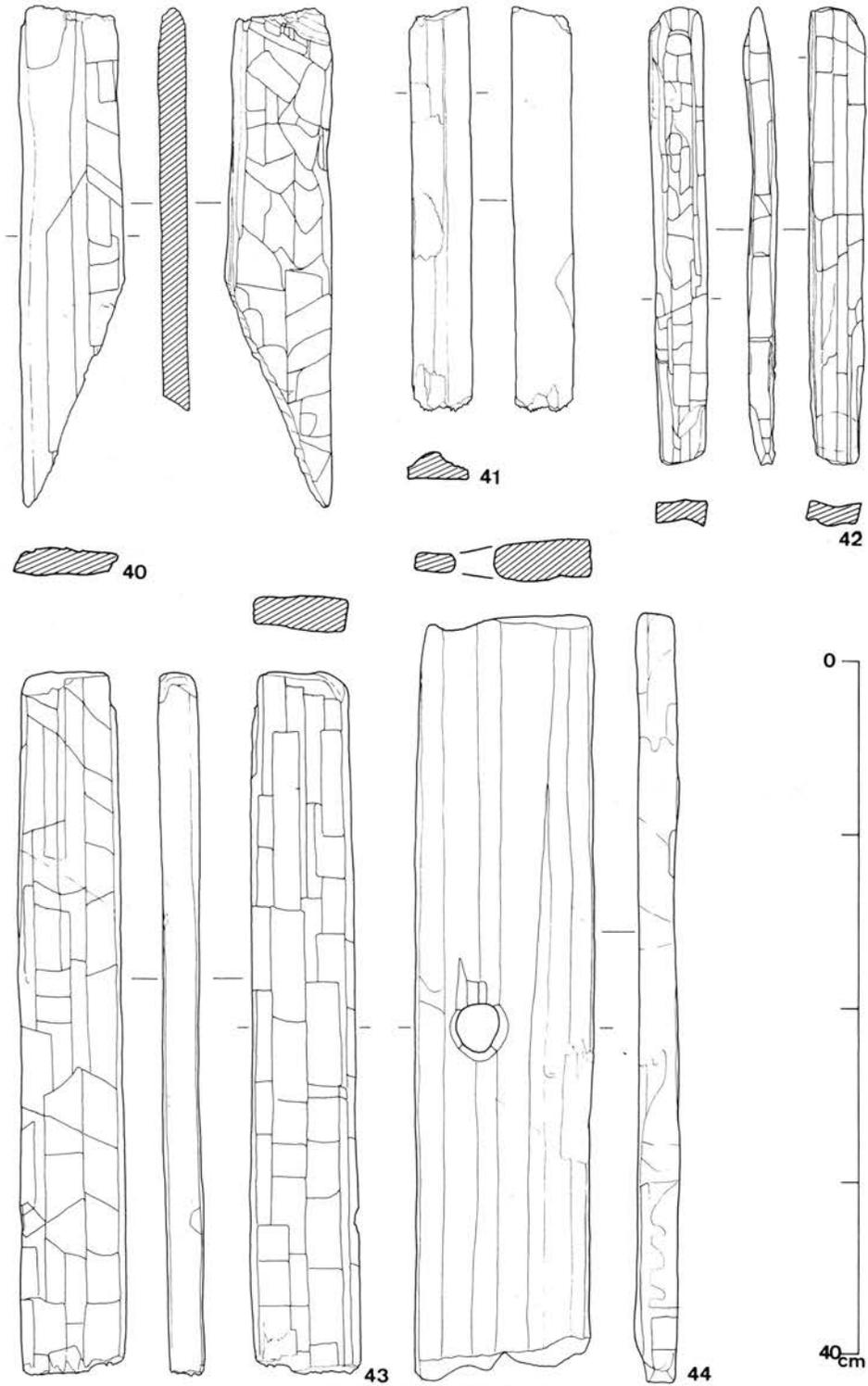
第109図 木器（容器・棒状木製品）



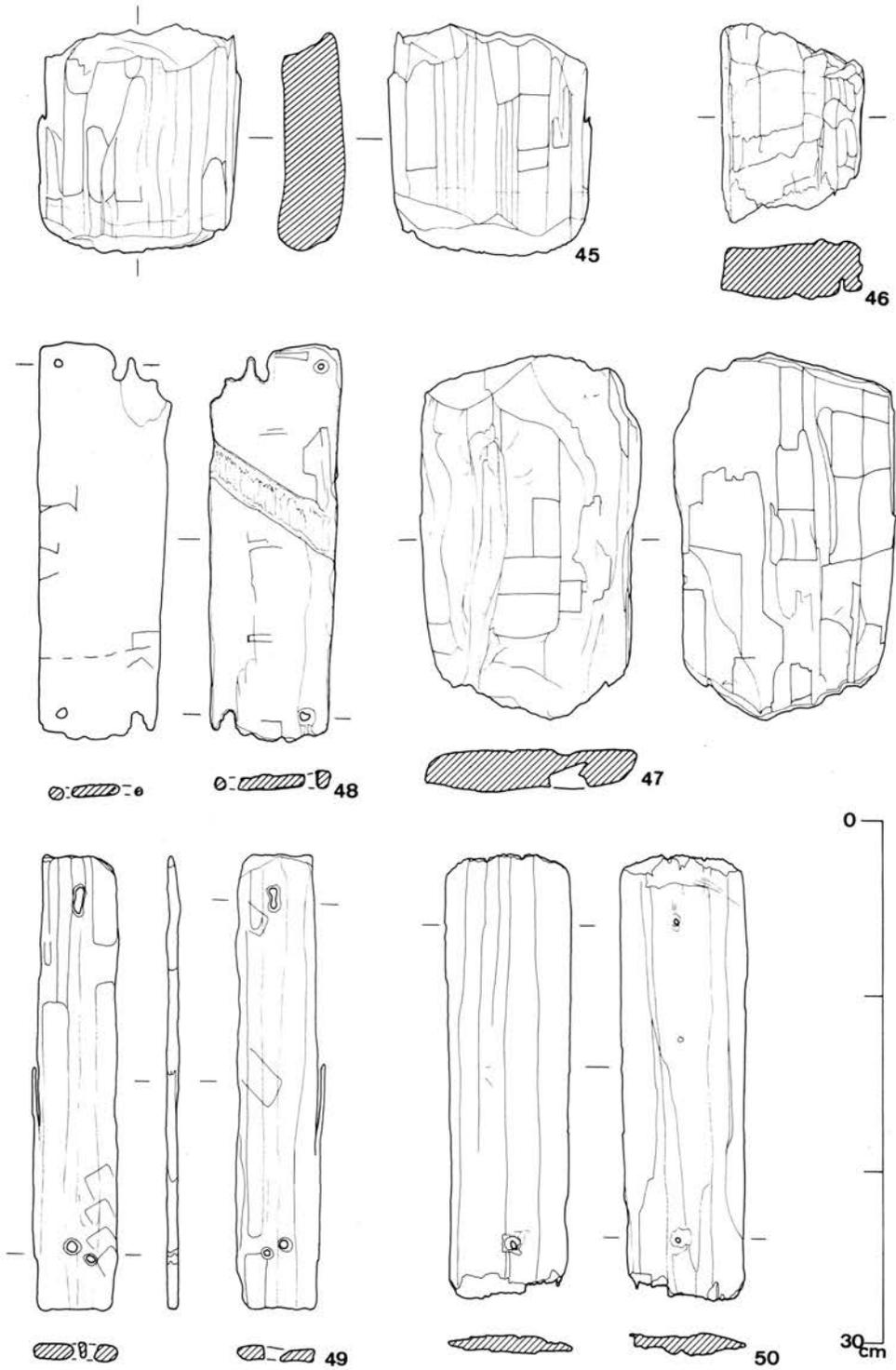
第 110 図 棒状木製品



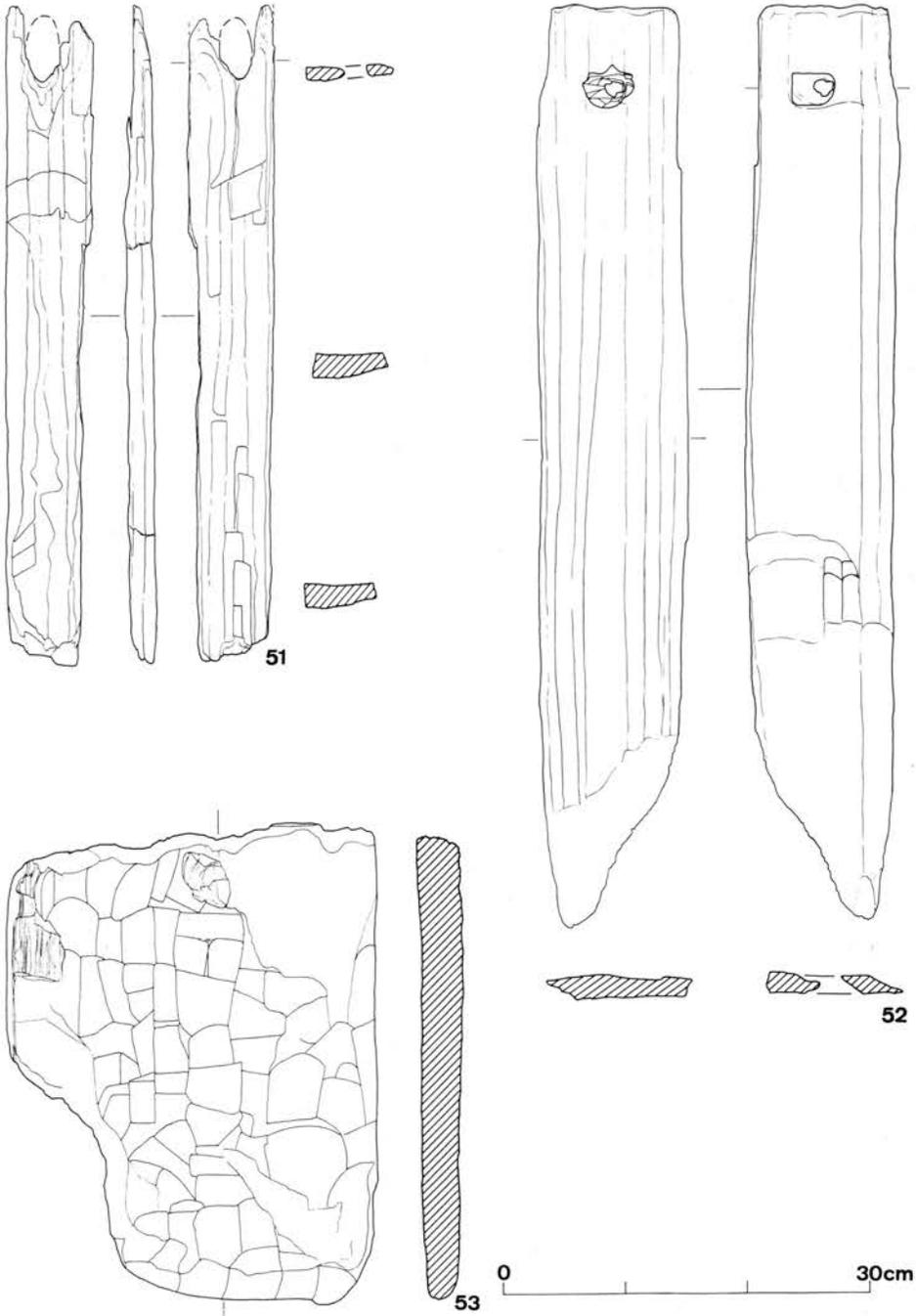
第111図 棒状・板状木製品



第112図 板状木製品



第113図 板状木器



第114図 板状木製品

は溝 SD 0207 の JK 16 地区である。50 は、薄い板状木製品である。上下端中央に小さな孔を1個穿っている。両面は粗く削り、他の面は粗雑な作りである。出土地点は溝 SD 0208 の JP 32 地区である。51～53 は大型の板状木製品である。すべて上端の中央に、1孔を穿っている。51 は細長い板状木製品である。上端中央に大きなまるい孔を穿っている。全体が削られているが粗雑である。出土地点は溝 SD 0208 の KP 29 地区である。52 は細長い板状木製品である。上端の中央に孔を穿っている。全体に面取りしているが、下端は焼けて欠損している。出土地点は溝 SD 0209 の JP 29 地区である。53 は方形に近い板状木製品である。上端中央に途中まで一方から孔を穿っている。両面に大きな削りを施している。側面は粗い加工を施している。下端の一部が欠損している。全体に焼けている。(村尾政人)

#### 第4節 その他の遺物

##### (1) 編物

溝 SD 0207 から出土したものが1点ある(第115図2)。残存状態が悪く、全体の原形を推定できないが、籠の一種と考えられる。現存幅は約8cm・横幅約7cm・厚さ約0.2cmを測る。経条が1本ずつにして1本超え、1本潜り、1本送りに編んでいる。編み方からみて籠の体部よりもわずかに上方の口縁部に近い部位と考えられる。経条は幅が約1cm・緯条はそれより細く約0.6cmを測る。材料は竹を薄く裂いたものと考えられる。

##### (2) 櫛

土壇から出土したものが1点ある(第115図2)。形態は上部の両端が角状に2か所突き出している櫛櫛である。櫛先は約39本を数えるが欠損している。現存刃は縦幅約6cm・横幅約5.4cm・厚さ約0.5cmを測る。材料は竹を薄く加工したものである。

##### (3) 玉類

玉類は、溝 SD 0208 から出土した管玉(第115図3)と遺物包含層内から出土した勾玉(第116図4)がある。管玉は、縦半分が欠損している。大きさは長さ約2.4cm・径約0.8cm・孔径約0.2cmを測る。材料は、青灰色のやわらかい碧玉である。4は、古墳時代後期に属すると考えられる滑石製の勾玉である。大きさは、長さ約3cm・幅2cm・厚さ0.4cmを測る。

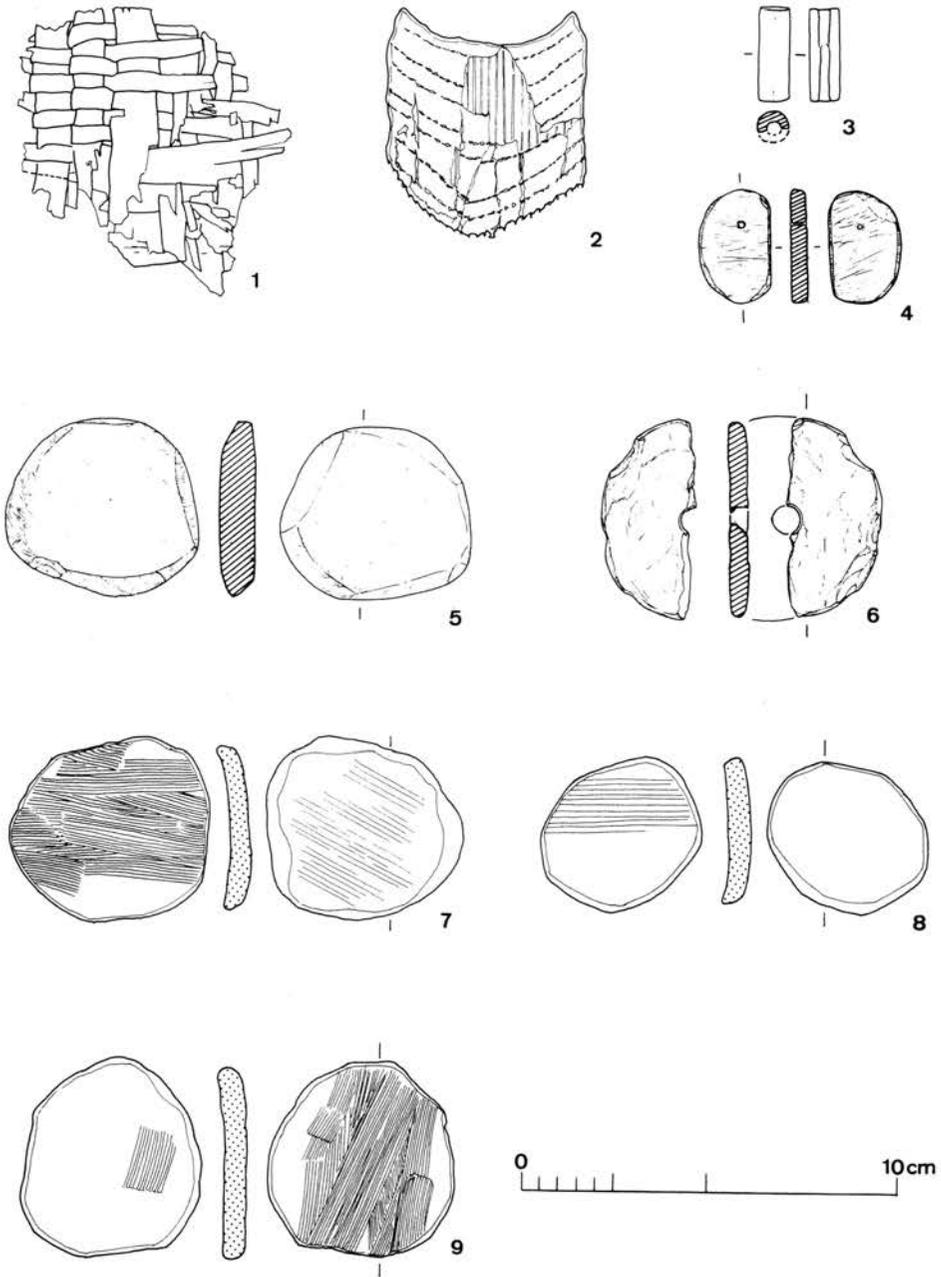
##### (4) 紡錘車・円板

紡錘車・円板等は石製・土製の2種類がある。石製紡錘車は1点(第115図6)が出土しているが、土製のものは出土していない。

石製円板は1点(第115図5)が、土製円板3点(第116図7～9)がそれぞれ出土している。6は、平面形が円形を呈するものであろうと考えられるが半分が欠損している。中央

部片面穿孔による孔が1つ穿たれている。全面に研磨が施されている。大きさは、直径5.4 cm・厚さ0.5 cm・孔径0.7 cmを測る。5は平面形がほぼ円形を呈するものである。全面を研磨しているが側面は大きく分けると約5面の研磨面がある。大きさは直径約5.2 cm・厚さ約1 cmを測る。7～9はほぼ円形を呈するものである。土器の体部を再利用したものである。破片の周縁を打ち欠いたのち、側面を粗く研磨している。大きさは7が直径約5.1 cm・厚さ約0.6 cmで、8は直径約4.4 cm・厚さ約0.6 cm、9は直径約5.2 cm・厚さ約0.6 cmを測る。

(村尾政人)



第115図 その他の遺物（編物・櫛・玉類等）

## 第4章 むすび

### (1) 土壇(SK)について

今回の調査により検出した土壇は46基を数える。土壇は、円形・楕円形・長方形の3形態があり、もっとも多いのは楕円形を呈するものである(28基)。次いで円形を呈するもの(16基)、長方形のもの(2基)がある。

各土壇の性格としてはSK 203・SK 204・SK 145・SK 148などや他の楕円形土壇の形態、さらに出土遺物には壺・鉢・甕・丹塗りの壺・合口状の壺・甕・丹塗りの櫛・骨片等があることから、そのほとんどが土壇墓と考えられる。

土壇は、長方形、楕円形を呈するものが主体をしめる。分布状況からみていくつかのグループが形成されているようである。

当遺跡では、50基の土壇墓が群集しているが、分布状況から大きく分けると北西部、北中央部、北東部、南東部、南中央部の5群になる。その中で各土壇の状態、主軸等の方向等から細分すると7分類することが可能である。

#### 第1グループ

JM・JQ 23～25地区の土壇SK 122～124・129～131である。このグループには楕円形土壇が集中し、長軸が北西から南東方向を示すものが多い。特に土壇SK 122・123・130は一直線上に並んでいる。

#### 第2グループ

JO・JP 29～30地区にある土壇SK 35～38の4基である。このグループも平面形態が楕円形で、断面形が舟底状を呈する。主軸の方向は東西を示す。

#### 第3グループ

JK・JL 28・29地区にある土壇SK 203・204である。当遺跡内では最も深い土壇で、両者とも同様の楕円形・舟底状を呈する。東西方向に一直線上に並ぶ独立した群である。

#### 第4グループ

JK・JL 36地区の土壇SK 145・148である。数少ない長方形を呈する土壇である。両者とも形態から木棺墓と考えられる。土壇SK 148からは、南端より枕に転用したと思われる前期末の広口壺口縁部が出土した。

#### 第5グループ

JH 34・35地区の土壇SK 136・138・139である。楕円形土壇であるが土壇SK 138は、小型である。

土壇 SK 136・138 は、主軸が東西方向であるが、土壇 SK 139 は南北方向である。近接した一群をなしている。

#### 第6グループ

JC・JD 31～35 地区の土壇 SK 02・04～09 である。楕円形土壇であるが、全体に細長いものが多い。土壇 SK 04～06・08 は主軸を北北西方向にとり整然と並ぶ。

#### 第7グループ

KU・KT 35・36 地区の土壇 SK 149・150・153・157・160 がある。いずれも楕円形を呈し、集中して一群をなしている。土壇の方向が不統一で、多くが切り合って群集しているのが特徴である。

時期差を示す良好な資料がみられないことから、前期中段階から新段階にかけての短期間に営まれた土壇墓群である。また、全体に北北西方向に主軸をもつものが多く、楕円形土壇と円形土壇のいずれも格差をそれほど意識しないが、長方形土壇については、特別の群をなし、なんらかの格差を示すものである。

以上の土壇墓のほか、溝によって方形区画の墓域を設定したと考えられるもの SD 0211～0213 がある。それは、調査地の北西方向の JS～JK 27～28 地区にあって、溝内からは、出土遺物がないことから時期は不明であるが、環濠集落にともなう方形周溝墓の可能性はある。

#### (2) 環濠について

縄文時代から弥生時代になると、集落の形態は大きく変化し、集落をとり囲む形で環濠を有するものが出現する。

環濠は、弥生時代から始まり、現在にまで至っている。その時代の流れの中で、その機能や性格は各時代によって様々に変化したものと思われるが、集落を区画する点においては同じである。

弥生時代の環濠の規模は深さ 2 m・幅 3 m のものが普通である。環濠のなかには、防衛的な目的以外に排水・灌漑用に構築されたものもあると考えられ、その機能については非常に多岐にわたるものであろう。大規模な環濠としては、幅 3～4 m・深さ約 3 m 以上に及ぶものもあり、それらに土塁があれば、深さ約 5 m・幅約 6 m 近くになる。また、周囲にめぐらされた土塁以外にも、柵や逆茂木を設けた形跡のあるものもあり、集落を囲み、防御する点では大きな効果があると考えられる。

農業生産力の向上と並行して、それにとともなう反乱が起き、無防備であった集落も一転し、環濠に護られた集落が営まれるようになるのであろう。しかし、弥生時代の集落は、すべてが環濠に囲まれているのではなく、やはり特定の拠点集落に限り環濠を有するよう

である。

環濠の性格を推定してみると、次のようなことが考えられる。

- ①墓域・住居・集落の区画をするための溝
- ②外敵から守るための防御的な溝
- ③排水溝、灌漑施設、水田等の水路

これらの中では、集落と生産の場、集落と墓地を区画するものが最も多いと考えられるが、一方、防御的な環濠については、都出比呂志氏のいわゆるマリオ族の砦復元図がある。これによれば、土塁上には、木造構造物があり、集落の出入口には門のような建物があった、その上部に鳥型木製品が飾られていることなどは環濠を考える上で参考にならう。環濠の種類には、濠が集落を全周するものと、全周せずに途切れているものがある。また、立地からみると丘陵の尾根上に位置するものは、高地性集落として扱われるものが多い。

環濠集落の立地条件は、平地・微高地・低丘陵などの低地と丘陵上に大別できる。低地における環濠集落は、濠が全周することではじめてその役目が果たせる。それに対して、丘陵上においては必ずしも全周する必要はなく、濠にかわって土塁・柵等が設けられていた可能性があり、その場合、防御的な役目が課せられたのであろう。

当遺跡の環濠は、前期末から中期初頭まで機能した集落と考えられ、廃絶型に分類されるものである。中期初頭以後は、廃村となる一時期の集落である。これらのことから、前期終末から中期にかけて村の規模が増大し、今回調査した環濠集落へと拡大・発展していったのであろう。

### (3) 遺物—弥生時代前・中期の地域色—

当遺跡から出土した弥生土器は、畿内第Ⅰ様式中・新段階から第Ⅱ様式までのもので、その前期と中期の土器の量は、ほぼ同量であって、更に瀬戸内、西摂津地方及び山城地方の土器の影響を受けたものが多い。

いずれにしても、これらの経路については、淀川水系を経て亀岡盆地に至る経路と、播磨、西摂地方から北上して丹波・丹後・若狭地方へ至る経路が考えられる。

播磨と近江地方は、距離的にも直接的な関連性は少ないと考えがちであるが、両地方の共通した特色がある。播磨地方に成立したと考えられる半截竹管による平行線を施す技法は、第Ⅰ様式後半から盛行する。またこの技法による波状文には、第Ⅱ様式の櫛描波状文に変化する系譜が明確に追える。さらに、第Ⅰ様式から続く竹管文・三角形列点文・貼付突帯文などや、櫛描文をもつものなどに共通性が認められる。

近江地方には、口縁端部に押捺を施すものや、内面にハケによる波状文を施すものが多い。近江型と呼称される甕Bは、口縁部外端面が直立し、その部分に横方向のハケ目を施

すもので、ほかに山形口縁、波状口縁を呈するものもある。最近の調査においては、第Ⅲ様式の中に口縁端部に面をもち、横方向の荒いハケを施すものや、その祖形と考えられる端部に面をもたないが部分的に横方向の荒いハケを施すものがある。

なお、これらの土器の中には数片の朝鮮系無文土器の破片と思われるものがある。特に、朝鮮系無文土器は、海岸線上に立地する遺跡から出土するものが多く、その搬入経路として海上交通が考えられる。その例として、島根県原山遺跡、鳥取県長瀬高浜遺跡などがあげられるが、太田遺跡については内陸部の亀岡盆地に立地していることが注目される。

朝鮮半島の無文土器文化と日本における弥生文化については、両者に未だ不明な点が多いことや、その出土した無文土器の多くが甕形土器に限られる点など、今後の詳細な検討を必要とするものである。

#### (4) まとめ

太田遺跡一帯は、現在、水田の広がる低湿地であるが、縄文時代後期から鎌倉時代まで遺物が出土することから、長期にわたる人間の営みのあったことが窺われる。今回、特に重要な弥生時代前期の土坑群、前・中期の三重の環濠など多数の良好な遺構と多量の遺物を検出したことは、丹波地方はもちろんのこと、近畿地方の弥生時代を考える上で、貴重な資料を得たと言える。

環濠は、直径が約160mを越える大規模なものと考えられ、背後の行者山より放射状に発した小河川間の微高地上に位置するため、環濠の形態は東西方向にわずかに長い楕円形を呈するものであったろう。今回の調査では、環濠の西側約1/3を対象としたもので、全域をとらえられることができていないため、今後に残す問題は多い。まず、環濠の内域において、多数の土坑墓を検出したが、その墓域と環濠の範囲の確認が必要である。また、環濠の内域においては、多数の柱穴群を検出したが、明確な竪穴住居を確認することができなかった。環濠は、2～3重の溝で構成されている点や柵列状柱穴、土塁等の存在から、防御的な集落と判断したいが、戦闘用と考えられる大型の石鏃等の武器がほとんど出土しないため、性格を判断することは困難である。

当集落は、出土遺物から、中期初頭までしか継続してないが、溝等の遺構には多量の砂層が堆積していることから、短期間に埋没したことが窺われる。

当遺跡の出土遺物は、弥生土器・石器・木器等が多量に及ぶが、土器の特色から、瀬戸内、西摂地方の影響が摂丹街道を経由して伝わり、また、山城盆地を媒介として、近江地方の影響が考えられる。さらに特徴的なものとしては、甕形土器に朝鮮系無文土器に類似するものがある。この土器は、縄文土器や弥生土器とは明らかに異質なものであることから、南朝鮮における無文土器の系譜を強く引くものと解釈したい。最近の調査により、こ

れらに類する土器の出土が、各地の拠点集落で知られるようになり、弥生時代に大陸との関係が強かったことを物語るものとして注目される。  
(村尾政人)

## 参考文献

- 『埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ 愛知県教育サービスセンター 1984
- 『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982
- 石神 治 「池上弥生ムラの変遷」(『考古学研究』23-4)1977
- 石野博信 「畿内」(『三世紀の考古学』下巻)1983
- 『東山遺跡』(『大阪府文化財調査報告書』大阪府教育委員会)1979
- 『山賀(その2)』(財)大阪文化財センター 1983
- 太田三喜 「大和における高地性集落の一例」(『天理大学学報第145輯』) 1985
- 小野忠熙 「壘・濠遺構を有する一古代村落址の研究—山口県光市岡原遺跡発掘調査・研究報告」 山口大学教育学部記念論文集 1956
- 小野忠熙 「弥生式集落の垂直的遷移現象に関する若干の問題」(『人文地理』)1958
- 『高地性集落と倭国大乱』(小野忠熙博士退官記念出版事業会編 雄山閣)1984
- 鏡山 猛 「環溝住居址小論(一)~(四)」(『史淵』67・68・71・78)1957・1958・1959
- 金関 恕・佐原 真編 「弥生集落」(『弥生文化の研究7』 雄山閣)1986
- 久野邦雄・寺沢 薫 『昭和52年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』 田原本町教育委員会 1978
- 九州大学文学部考古学研究室 『福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書2)1968
- 港北ニュータウン埋蔵文化調査団 「大塚遺跡発掘調査概報」(『調査研究集録』)1976
- 下関市教育委員会 『綾羅木郷遺跡』(発掘調査報告1)1981
- 都出比呂志 「環濠集落の成立と解体」(『考古学研究』31-3)1983
- 中島直幸 「弥生時代の環濠について」(『千塔山遺跡』)1978
- 三渡俊一郎 「名古屋市見晴台遺跡と付近の弥生時代濠状遺構」(『古代人40』)1982
- 村尾政人 「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊(助京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983
- 村尾政人 「亀岡市太田遺跡」(『丹波史談』第18号)1985
- 森貞次郎・岡崎 敬 「福岡市板付遺跡」(『日本農耕文化の生成』)1961
- 後藤 直 「西朝鮮の「無文土器」について」(『考古学研究』68)1971
- 後藤 直 「西朝鮮の「無文土器」」(『考古学研究』75)1973

- 後藤 直 「朝鮮系無文土器」(『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』)1979
- 後藤 直 「朝鮮南部の丹塗研磨土器」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』)1980
- 藤口健二 「朝鮮・コマ形土器の再検討」(『森貞次郎博士古稀記念文化論集』)1982
- 森貞次郎 「弥生文化の地域性(九州)」(『日本の考古学III』)1966
- 森貞次郎 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』)1980

## 第5章 花粉分析

### 1 はじめに

太田遺跡は、集落と土塚墓の周囲に環濠をめぐらせた、弥生時代前期から中期にかけての環濠集落遺跡と考えられている。もし、環濠内側に集落が存在し、弥生人の生活が営まれていたとすれば、遺跡周辺の自然環境は、人為的な影響を少なからずうけていることが予想される。本報告は、環濠に堆積した堆積物に含まれる花粉から、遺跡周辺の自然環境を復元しようとしたものである。今回の調査によって亀岡盆地の弥生時代の様相が少しでも把握できれば幸いである。

今回の分析に供した試料は、下記のとおりである。

試料採取地区	層位・層相(備考)
JQ 31 地区	地山直上 黒墨火山灰層
JQ 28 地区	黒墨火山灰層の直上 黒色粘質土層
KX 23 地区	地山から上位2層目 黒褐色粘質土層(弥生前期の土器を包含する)
KX 23 地区	地山から上位3層目 黒色粘質土層
溝SD 0207のKS 30地区	地山直上の第1層～5層
溝SD 0207の東壁	地山直上の第1層 青灰色シルト層
	第2層 黒色粘質土層(弥生前期の土器を包含する)
	第3層 黒色粘質土
	第4層～7層
KU 地区拡張部の西壁	地山直上の黒墨土層
KU 地区拡張部の南壁	地山直上の黒墨土層
	第2層～9層

### 2 花粉分析の方法

トレンチから採取した試料は、次の過程で処理し、花粉分析を実施した。

- ① 試料約 200 g をビーカーに入れ、ピロリン酸ナトリウムの飽和溶液に一昼夜浸し、泥化する。
- ② 泥化が完了した資料を大型のガラスビンに入れ、傾斜沈殿法により水洗を繰り返す。
- ③ 水洗が完了した試料に塩化亜鉛の飽和溶液を加え、毎分 500 回転で 60 分間遠心分離し、浮いた花粉を集める。

- ④ 氷酢酸を十分に加え、遠心分離し、塩化亜鉛を除く。
- ⑤ 濃硫酸1：無水酢酸9の溶液を十分に加え、80℃で1分間湯煎する(アセトリシス処理)。
- ⑥ 水洗を十分おこない、集めた花粉をグリセリン・ゼリーで封入する。
- ⑦ 検鏡は、倍率400倍でおこなった。
- ⑧ 同定は、識別可能な花粉についてすべておこなった。
- ⑨ 計数は、できうる限り多くの花粉を数えるようにした。
- ⑩ 分析結果は、100分率で表し、0.1%未満のものについては+記号で表示した。
- ⑪ 顕微鏡写真は、花粉粒径の1000倍ないし500倍になるように焼き付けた。

### 3 花粉分析の結果

本調査は、26試料分析し、すべての試料で花粉が検出された。次に各試料の採取地区ごとに分析結果を述べる(付表5・図版第29～32)。

#### ① JQ 31 地区

丹波黒墨といわれる火山灰層より採取。胞子が多く、花粉の残留状態は良くない。

樹木花粉では、アカシ亜属・コナラ亜属等のコナラ類が特に出現率が高く、次いで、針葉樹のコウヤマキ属・ツガ属・モミ属・二葉マツ属・スギ属等がみられた。草本花粉では、小型のイネ科花粉が草本種の59.8%をしめ、次いでヨモギ属・キク亜科・小型イネ科・タンポポ亜科等がみられる他、栽培種のソバ花粉も2粒検出した。

#### ② JQ 28 地区

花粉の残留状態は、調査した試料の中で、一番少なかった。樹木花粉では、コウヤマキ属が特に多く、アカガシ亜属・モミ属・コナラ亜属・トネリコ属・ツガ属・二葉マツ亜属などが見られた。草本種では、荒地を好みキク亜科・ヨモギ属が多い反面、栽培種のソバ・大型イネ科もみられた。

#### ③ KX 23 地区

樹木花粉では、②・③の試料に比べ、モミ属・スギ属・二葉マツ亜属の増加が著しく、コウヤマキ属・アカシア亜属・コナアラ亜属が減少する。その他、クリ属は、花粉全体の比率からみれば多くないが、この属の出現率としては高い。草本花粉では、栽培種を含む大型イネ科や水田雑草としてみられるタデ属に増加がみられた。

#### ④ 溝SD 0207のKS 30 地区

第1層から第5層までは、弥生時代前期から中期にかけての堆積物と考えられている。

この地区の試料は、花粉残留状態が良好であった。花粉の出現傾向は、第1層から第3層にかけて類似性が認められる。この3つの層では、樹木花粉として、アカガシ亜属・ス

ギ属・モミ属が多い。草本花粉では、大型イネ科が草保温種の中で30%以上の出現率を示す他、クズ属が多い。第4層では、アカガシ亜属が急減する反面、モミ属の増加が著しい。草本花粉では、大型イネ科が増加し、クズ属が減少する。第5層になると、樹木花粉では、アカガシ亜属が再び増加し、モミ属は半減する。

#### ⑤ 溝SD 0207の東壁

第1層から第5層までの試料は、樹木花粉では、スギ属・モミ属・コウヤマキ属・ツガ属等の針葉樹、アカシア亜属・コナラ亜属・ブナ属等の“どんぐり”をつける広葉樹が連続的に多く出現する。一方、草本花粉では、大型イネ科が下位層から上位層に向かって出現率を増す。第6層・第7層では、アカマツと思われる二葉マツ亜属が急増する。スギ属・アカガシ属・コナラ亜属が減少し、人為的影響の強まりを示す。

#### ⑥ KU地区拡張部の西壁

黒墨層の1試料を分析したのみである。JQ 31地区の黒墨土層に比べ、大型イネ科の出現率が草本花粉の68.6%ときわめて高い。

#### ⑦ KU地区拡張部の南壁

樹木花粉では、黒墨土層から第7層まで連続的な出現傾向を示し、試料の堆積時期が比較的接近していることをうかがわせる。第8層と第9層では、二葉マツ亜属が増加し、アカガシ亜属・コナラ亜属に減少傾向がみられる。草本花粉では、大型イネ科が全試料で高率でみられるが、第7層より上位層での増加が著しい。

### 4 考察

環濠内の堆積物からは、弥生時代前期から中期にかけての遺物が多く検出されている。この弥生時代前期から中期に相当する堆積物から遺跡周辺の植生を復元すると、周辺の山林には、モミ属・コウヤマキ属・スギ属等の針葉樹に、照葉樹のアカガシ亜属・落葉広葉樹のコナラ亜属などが混生する森林が形成されていたことが推定される。次に草本花粉からみた太田遺跡の特色は、弥生時代前期の各地区最下層の堆積物から栽培種と思われる大型イネ科が高率で出現することである。筆者がこれまでに京都府内において、おこなった調査結果と著しく異なる(他の調査では、出現してからゆるやかに増加する)。また、検出された大型イネ科花粉も、花粉の形態からみて異常なものが多数みられた。イネ科花粉(栽培イネを含む)の形態は、ほぼ球形であり、花粉孔(花粉が発芽したとき花粉管が伸長するための孔)が一か所と報告されている。ところが太田遺跡から検出した大型イネ科花粉の中にはかなりの数(1%以下である)の花粉孔2か所のものが確認された。太田遺跡以外から、そのような花粉を著者は、まだ検出していない。つまり、太田遺跡で栽培されたイネは、京都盆地や日本海方面から伝えられたものでなく、それ以外の地域からもたらされた品種

の可能性はある。上記のことと太田遺跡が大規模な環濠をもつ防御的色彩の強い集落であることから考えると、弥生時代の前期に稲作技術をもった集団の移住が想像される。イネ以外の栽培植物として、ソバは、KZ 23 地区の他全試料で検出されていることから、イネと同時に栽培されていたと思われる。

#### 5 まとめ

① 弥生時代前期・中期の亀岡盆地の森林植生は、針葉樹・照葉樹・落葉広葉樹の混交林であった。

② 太田遺跡では、環濠集落形成と同時に稲作やソバ栽培が開始されたと推定する。

(伊辻忠司)

## 付表5 花粉分析表

付表5 花粉分析表

付表5 花粉分析表

AP(樹木花粉)

OTO2 胞子が多産

TAXON	JQ31黒墨土			JQ28 SD0201			KX23畔			KX23畔		
	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP数	全体%
Podocarpus (マキ属)				1	0.6	0.2	23	0.6	0.6	23	0.5	0.5
Abies (モミ属)	18	4.5	2.0	16	9.3	3.0	1,675	45.9	41.8	1,452	33.8	29.2
Tsuga (ツガ属)	19	4.7	2.1	9	5.2	1.7	290	7.9	7.2	230	5.3	4.6
Picea (トウヒ属)							14	0.4	0.3	12	0.3	0.2
Pinus Diploxylon (二葉マツ属)	14	3.5	1.5	9	5.2	1.7	511	14.0	12.7	537	12.5	10.8
Pinus Haploxylon (五葉マツ属)							6	0.2	0.1	7	0.2	0.1
Sciadopitys (コウヤマキ属)	51	12.7	5.6	45	26.2	8.3	284	7.8	7.0	441	10.3	8.9
Cryptomeria (スギ属)	9	2.2	1.0	7	4.1	1.3	618	16.9	15.4	994	23.1	20.0
Chamaecyparis (ヒノキ属)										2	+	+
Thuja (ネズコ属)										2	+	+
Salix (ヤナギ属)	3	0.7	0.3	1	0.6	0.2				1	+	+
Myrica (ヤマモモ属)				1	0.6	0.2						
Juglans (オニグルミ属)							4	0.1	0.1	9	0.2	0.2
Carpinus (クマシテ属)	1	0.2	0.1				3	0.1	0.1	6	0.1	0.1
Corylus (ハシバミ属)	9	2.2	1.0	5	2.9	0.9	1	+	+	1	+	+
Alnus (ハンノキ属)				2	1.2	0.4				14	0.3	0.3
Fagus (ブナ属)	8	2.0	0.9				6	0.2	0.1	37	0.9	0.7
Lepidobalanus (コナラ垂属)	76	18.9	8.4	11	6.4	2.0	6	0.2	0.1	61	1.4	1.2
Cyclobalanopsis(アカガン垂属)	163	40.4	17.9	31	18.0	5.7	28	0.8	0.7	148	3.4	3.0
Castanea (クリ属)	12	3.0	1.3	6	3.5	1.1	33	0.9	0.8	115	2.7	2.3
Castanopsis (シイノキ属)	2	0.5	0.2				2	0.1	+	2	+	+
Zelkova (ケヤキ属)	7	1.7	0.8	6	3.5	1.1	3	0.1	0.1	11	0.3	0.2
Celtis (エノキ属)				1	0.6	0.2	1	+	+	2	+	+
Aphananthe (ムクノキ属)				1	0.6	0.2				1	+	+
Akebia (アケビ属)										11	0.3	0.2
Magnolia (モクレン属)							4	0.1	0.1	6	0.1	0.1
Prunus (サクラ属)	5	1.2	0.5	1	0.6	0.2	14	0.4	0.3	11	0.3	0.2
Phellodendron (キハダ属)										3	0.1	0.1
Skimmia(ミヤマシキミ属)				1	0.6	0.2	1	+	+	7	0.2	0.1
Rhus (ウルシ属)				1	0.6	0.2	15	0.4	0.4	2	+	+
Ilex (モチノキ属)	3	0.7	0.3	1	0.6	0.2	3	0.1	0.1	4	0.1	0.1
Acer (カエデ属)				1	0.6	0.2	12	0.3	0.3	42	1.0	0.8
Aesculus (トチノキ属)				1	0.6	0.2	28	0.8	0.7	32	0.7	0.6
Elaeagnus (グミ属)	1	0.2	0.1									
Fraxinus (トネリコ属)				11	6.4	2.0				3	0.1	0.1
Abelia (ツクバネウツギ属)				1	0.6	0.2	61	1.7	1.5	63	1.5	1.3
Lonicera (スイカズラ属)				1	0.6	0.2	2	0.1	+	5	0.1	0.1
Moraceae (クワ科)										1	+	+
Celastraceae (ニシキギ科)	1	0.2	0.1									
Ericaceae (ツツジ科)				1	0.6	0.2	2	0.1	+	3	0.1	0.1
AP Total	402	99.5	44.1	172	100.3	32.0	3,650	100.2	90.5	4,301	99.9	86.1

AP(樹木花粉)

OTO2

TAXON	JQ31黒墨土			JQ28 SD0201			KX23畔			KX23畔		
	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%
Fagopyrum (ソバ)	2	0.4	0.2	39	10.6	7.2						
Pertya (コウヤボウキ属)	5	1.0	0.5	2	0.5	0.4	3	0.8	0.1	2	0.3	+
Artemisia (ヨモギ属)	69	13.6	7.6	45	12.2	8.3	2	0.6	+	25	3.7	0.5
Petasites (フキ属)	6	1.2	0.7	2	0.5	0.4						
Xanthium (オナモミ属)							1	0.3	+			
Patrinia (オミナエミ属)	11	2.2	1.2	1	0.3	0.2	2	0.6	+	11	1.6	0.2
Perilla (シソ属)	1	0.2	0.1									
Halogragis (アリノトウグサ属)	1	0.2	0.1									
Euphorbia (トウダイグサ属)	1	0.2	0.1									
Geranium (フウロソウ属)	1	0.2	0.1	1	0.3	0.2						
Pueraria (クズ属)	1	0.2	0.1	1	0.3	0.2	50	13.9	1.2	161	24.1	3.2
Rumex (ギンギク属)				29	7.9	5.4	3	0.8	0.1	14	2.1	0.3
Persicaria (タデ属)	6	1.2	0.7	2	0.5	0.4	36	10.0	0.9	49	7.3	1.0
Humulus (カラハナソウ属)				1	0.3	0.2	1	0.3	+	6	0.9	0.1
Eriocaulon (ホシクサ属)				1	0.3	0.2						
Sagittaria (オモダカ属)				1	0.3	0.2	7	1.9	0.2	9	1.3	0.2
Sparganium (ミクリ属)							3	0.8	0.1			
Typha (ガマ属)	1	0.2	0.1	2	0.5	0.4				3	0.4	0.1
Cichorioideae (タンポポ科)	19	3.7	2.1							14	2.1	0.3
Carduoideae (キク科)	45	8.9	4.9	154	41.8	28.5	37	10.2	0.9	108	16.2	2.2
Campanulaceae (キキョウ科)										1	0.1	+
Cucurbitaceae (ウリ科)				1	0.3	0.2	2	0.6	+	3	0.4	0.1
Labiatae (シソ科)				7	1.9	1.3	30	8.3	0.7	11	1.6	0.2
Umbelliferae (セリ科)	4	0.8	0.4	2	0.5	0.4	4	1.1	0.1	3	0.4	0.1
Malvaceae (アオイ科)	2	0.4	0.2	8	2.2	1.5	1	0.3	+	2	0.3	+
Rosaceae (バラ科)							1	0.3	+	4	0.6	0.1
Cruciferae (アブラナ科)				2	0.5	0.4				1	0.1	+
Ranunculaceae (キンポウゲ科)							1	0.3	+			
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	3	0.6	0.3	4	1.1	0.7	1	0.3	+	5	0.7	0.1
Chenopodiaceae (アカザ科)	2	0.4	0.2							1	0.1	+
Cyperaceae (カヤツリグサ科)				3	0.8	0.6	8	2.2	0.2	6	0.9	0.1
Gramineae (イネ科45 $\mu$ 以上)	25	4.9	2.7	21	5.7	3.9	127	35.2	3.2	165	24.7	3.3
Gramineae (イネ科45 $\mu$ 以下)	303	59.8	33.3	39	10.6	7.2	41	11.4	1.0	63	9.4	1.3
NAP Total	507	100.3	55.6	368	99.9	68.4	361	100.2	8.7	667	99.4	13.4
AP+NAP Total	910		99.7	540		100.4	4,011		99.2	4,968		99.5

京都府遺跡調査報告書 第6冊

AP(樹木花粉) OTO2 KSBO SD0207

TAXON	第1層			第2層			第3層			第4層			第5層		
	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%
Podocarpus (マキ属)	14	0.3	0.2	11	0.2	0.1	21	0.4	0.3	28	1.0	0.8	28	0.9	0.6
Abies (モミ属)	627	11.6	9.4	986	15.0	11.6	448	8.8	6.4	995	34.7	29.5	488	16.4	11.3
Tsuga (ツガ属)	65	1.2	1.0	119	1.8	1.4	68	1.3	1.0	99	3.4	2.9	88	3.0	2.0
Picea (トウヒ属)	8	0.1	0.1	6	0.1	0.1	5	0.1	0.1	12	0.4	0.4	3	0.1	0.1
Pinus Diploxylon (マツ属)	116	3.1	2.5	172	2.6	2.0	143	2.8	2.0	249	8.7	7.4	123	4.1	2.8
Pinus Haploxylin (マツ属)	5	0.1	0.1	3	0.1	+	3	0.1	+	1	+	+	1	+	+
Sciadopitys (コウヤマキ属)	202	3.7	3.0	208	3.2	2.4	191	3.7	2.7	319	11.1	9.4	279	9.4	6.4
Cryptomeria (スギ属)	1,480	27.3	22.2	1,085	16.5	12.7	906	17.8	12.9	732	25.5	21.7	735	24.7	17.0
Chamaecyparis (ヒノキ属)	16	0.3	0.2	14	0.2	0.2	2	+	+	1	+	+	8	0.3	0.2
Thuja (ネズコ属)	1	+	+												
Salix (ヤナギ属)	5	0.1	0.1	21	0.3	0.2	98	1.9	1.4	25	0.9	0.7	3	0.1	0.1
Myrica (ヤマモモ属)	11	0.2	0.2	18	0.3	0.2	21	0.4	0.3				8	0.3	0.2
Juglans (オニグルミ属)	19	0.4	0.3	36	0.5	0.4	15	0.3	0.2	7	0.2	0.2	3	0.1	0.1
Pterocarya (サワグルミ属)	1	+	+												
Carpinus (クマシテ属)	12	0.2	0.2	38	0.6	0.4	29	0.6	0.4	5	0.2	0.1	18	0.6	0.4
Corylus (ハシバミ属)	18	0.3	0.3	24	0.4	0.3	16	0.3	0.2	1	+	+	8	0.3	0.2
Betula (シラカンバ属)	3	0.1	+	5	0.1	0.1	7	0.1	0.1						
Alnus (ハンノキ属)	6	0.1	0.1	6	0.1	0.1	10	0.2	0.1	1	+	+			
Fagus (ブナ属)	58	1.1	0.9	145	2.2	1.7	80	1.6	1.1	12	0.4	0.4	41	1.4	0.9
Ulmus (コナラ属)	360	6.7	5.4	508	7.7	6.0	408	8.0	5.8	76	2.6	2.3	184	6.2	4.2
Cyclobambusa (アケビ属)	1,845	34.1	27.7	2,404	36.5	28.2	1,977	38.7	28.1	149	5.2	4.4	612	20.6	14.1
Castanea (クリ属)	45	0.8	0.7	183	2.8	2.1	171	3.4	2.4	25	0.9	0.7	123	4.1	2.8
Castanopsis (シノキ属)	27	0.5	0.4	15	0.2	0.2	11	0.2	0.2	2	0.1	0.1	5	0.2	0.1
Wmusa (ニレ属)	10	0.2	0.1	23	0.3	0.3	15	0.3	0.2	3	0.1	0.1	11	0.4	0.3
Zelkova (ケヤキ属)	54	1.0	0.8	96	1.5	1.1	87	1.7	1.2	17	0.6	0.5	47	1.6	1.1
Celtis (エノキ属)	30	0.6	0.4	89	1.4	1.0	57	1.1	0.8	2	0.1	0.1	5	0.2	0.1
Aphananthe (ムクノキ属)	4	0.1	0.1	10	0.2	0.1	37	0.7	0.5				1	+	+
Akebia (アケビ属)	18	0.3	0.3	16	0.2	0.2	10	0.2	0.1				4	0.1	0.1
Magnolia (モクレン属)				2	+	+	1	+	+						
Prunus (サクラ属)	57	1.1	0.9	58	0.9	0.7	48	0.9	0.7	5	0.2	0.1	14	0.5	0.3
Phellodendron (カハク属)	10	0.2	0.1	12	0.2	0.1	12	0.2	0.2	3	0.1	0.1	3	0.1	0.1
Ekimma (ミナマシキ属)							27	0.5	0.4	1	+	+	24	0.7	0.5
Rhus (ウルシ属)	33	0.6	0.5	1	+	+	12	0.2	0.2	5	0.2	0.1	9	0.3	0.2
Ilex (モチノキ属)	5	0.1	0.1	6	0.1	0.1	3	0.1	+	1	+	+	4	0.1	0.1
Acer (カエデ属)	68	1.3	1.0	93	1.4	1.1	33	0.6	0.5	2	0.1	0.1	6	0.2	0.1
Aesculus (トチノキ属)	39	0.7	0.6	63	1.0	0.7	46	0.9	0.7	86	3.0	2.5	3	0.1	0.1
Zizyphus (ナツメ属)	1	+	+	17	0.3	0.2				3	0.1	0.1			
Ampelopsis (ノブドウ属)	1	+	+												
Tilia (シナノキ属)				1	+	+									
Elaeagnus (グミ属)							1	+	+				1	+	+
Hedera (キツタ属)	1	+	+												
Diospyros (カキ属)													1	+	+
Symplocos (ハイノキ属)	6	0.1	0.1	1	+	+	2	+	+						
Styrax (エゴイキ属)	3	0.1	+	32	0.5	0.4	51	1.0	0.7	1	+	+	20	0.7	0.5
Ligustrum (イボタノキ属)	10	0.2	0.1	9	0.1	0.1	4	0.1	0.1				8	0.3	0.2
Fraxinus (トネリコ属)	5	0.1	0.1	9	0.1	0.1	2	+	+				7	0.2	0.2
Abelia (ツクバネウツギ属)	17	0.3	0.3	13	0.2	0.2	3	0.1	+				2	0.1	+
Lonicera (スイカズラ属)	1	+	+	1	+	+	1	+	+				3	0.1	0.1
Moraceae (クワ科)	20	0.4	0.3	13	0.2	0.2	16	0.3	0.2	2	0.1	0.1	39	1.3	0.9
Celastraceae (ニシギキ科)	14	0.3	0.2				1	+	+				1	+	+
Staphyleaceae (ミヅバキ科)	4	0.1	0.1												
Theuceae (ツバキ科)				1	+	+									
Ericaceae (ツツジ科)	1	+	+	7	0.1	0.1	3	0.1	+				3	0.1	0.1
AP Total	5,406	100.1	81.1	6,580	100.1	77.1	5,102	99.7	72.2	2,870	99.9	84.8	2,975	99.9	68.5

NAP(草本花粉) OTO2 SK30 SD0207

TAXON	第 1 層			第 2 層			第 3 層			第 4 層			第 5 層		
	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%
Fagopyrum (ソバ)	1	0.1	+	5	0.3	0.1	12	0.6	0.2	7	1.4	0.2	3	0.2	0.1
Pertya (コウヤボウキ属)							5	0.3	0.1	1	0.2	+	1	0.1	+
Artemisia (ヨモギ属)	52	4.1	0.8	133	6.9	1.6	185	9.5	2.6	22	4.3	0.7	57	4.2	1.3
Petasites (フキ属)	3	0.2	+	12	0.6	0.1	8	0.4	1.1	4	0.8	0.1	6	0.4	0.1
Xanthium (オナモミ属)	3	0.2	+	32	1.6	0.4	86	4.4	1.2	1	0.2	+	23	1.7	0.5
Adenophora (ツリグネニシジミ属)													1	0.1	+
Patrinia (オミナエシ属)	5	0.4	0.1	8	0.4	0.1	3	0.2	+	3	0.6	0.1	1	0.1	+
Perilla (シソ属)	1	0.1	+	1	0.1	+	6	0.3	0.1				4	0.3	0.1
Clinopodium (トウバナ属)				1	0.1	+									
Epilobium (アカバナ属)				1	0.1	+									
Impatiens (ツリフネソウ属)							1	0.1	+						
Euphorbia (トウダイクシ属)				36	1.9	0.4	79	4.1	1.1	11	2.2	0.3	47	3.5	1.1
Geranium (フウロソウ属)				1	0.1	+	1	0.1	+						
Trifolium (シャジクソウ属)	1	0.1	+										1	0.1	+
Pueraria (クズ属)	98	7.8	1.5	242	12.5	2.8	90	4.6	1.3	4	0.8	0.1			
Thalictrum (ウラボシ属)	7	0.6	0.1	7	0.4	0.1	10	0.5	0.1	36	7.1	1.1	2	0.1	+
Nelumbo (ハス属)				13	0.7	0.2	2	0.1	+						
Nuphar (コオホネ属)	13	1.0	0.2	21	1.1	0.2	39	2.0	0.6	3	0.6	0.1			
Achyranthes (イヌコブシ属)	1	0.1	+												
Rumex (ギシギシ属)	19	1.5	0.3	30	1.5	0.4	8	0.4	0.1	4	0.8	0.1	6	0.4	0.1
Persicaria (タデ属)	11	0.9	0.2	54	2.8	0.6	42	2.2	0.6	18	3.6	0.5	32	2.4	0.7
Humulus (カラハナ属)	9	0.7	0.1	9	0.5	0.1	10	0.5	0.1				4	0.3	0.1
Ilis (アヤメ属)							1	0.1	+						
Ericaulon (ホシクサ属)				1	0.1	+	11	0.1	0.2						
Sagittaria (オモダカ属)	16	1.3	0.2	45	2.3	0.5	22	1.1	0.3	4	0.8	0.1	27	2.0	0.6
Sparganium (ミクリ属)	7	0.6	0.1				1	0.1	+	1	0.2	+	9	0.7	0.2
Typha (ガマ属)				19	1.0	0.2	3	0.2	+				6	0.4	0.1
Cichorioideae (タンポポ科)	10	0.8	0.1	36	1.9	0.4	15	0.8	0.2	28	5.5	0.8	31	2.3	0.7
Carduoideae (キク亜科)	34	2.7	0.5	28	1.4	0.3	25	1.3	0.4	13	2.6	0.4	17	1.2	0.4
Cucurbitaceae (ウリ科)	6	0.5	0.1	26	1.3	0.3	18	0.9	0.3	1	0.2	+			
Labiatae (シソ科)	31	2.5	0.5	16	0.8	0.2	10	0.5	0.1				13	0.2	0.1
Cnrolvulaceae (ヒルガオ科)				1	0.1	+	2	0.1	+						
Umbelliferae (セリ科)	41	3.3	0.6	35	1.8	0.4	14	0.7	0.2	1	0.2	+	1	0.1	+
Malvaceae (アオイ科)	1	0.1	+	4	0.3	+	2	0.1	+	3	0.6	0.1	1	0.1	+
Leguminosae (マメ科)				1	0.1	+									
Rasaceae (ハバラ科)	3	0.2	+	13	0.7	0.2	3	0.2	+	1	0.2	+	2	0.1	+
Cruciferae (アブラナ科)	7	0.6	0.1	6	0.3	0.1	6	0.3	0.1				2	0.1	+
Ranunculaceae (キンギョ科)	6	0.5	0.1	9	0.5	0.1	4	0.2	0.1				1	0.1	+
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	58	4.6	0.9	61	3.1	0.7	73	3.8	1.0	27	5.3	1.8	117	8.6	2.7
Chenopodiaceae (アカザ科)	22	1.8	0.3	35	1.8	0.4	39	2.0	0.6	4	0.8	0.1	23	1.7	0.5
Amaryllidaceae (ヒガン科)							1	0.1	+						
Cyperaceae (カヤツリ科)	20	1.6	0.3	5	0.3	0.1	7	0.4	0.1	6	1.2	0.2	2	0.1	+
Gramineae (イネ科450μ以上)	412	32.8	6.2	701	36.1	8.2	709	36.4	10.1	241	47.6	7.1	527	38.7	12.2
Gramineae (イネ科450μ以下)	357	28.4	5.4	292	15.1	3.4	393	20.2	5.6	62	12.3	1.8	404	29.7	9.3
NAP Total	1,255	100.1	18.7	1,940	100.6	22.6	1,946	100.4	28.5	506	100.1	14.7	1,361	100.0	309
AP TNAP Tital	6,661		99.8	8,520		99.7	7,048		100.7	3,376		99.5	4,436		99.4

## 京都府遺跡調査報告書 第6冊

AP(樹木花粉)

OTO2 東壁 SD0207

TAXON	第1層			第2層			第3層			第4層		
	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%
Podocarpus (マキ属)	7	0.3	0.2	13	0.8	0.5	25	0.7	0.5	12	0.6	0.4
Abies (モミ属)	312	14.1	8.6	290	17.5	10.5	718	20.2	15.4	331	15.8	10.3
Tsuga (ツガ属)	88	4.0	2.4	50	3.0	1.8	95	2.7	2.0	33	1.6	1.0
Picea (トウヒ属)	2	0.1	0.1	3	0.2	0.1	8	0.2	0.2	8	0.4	0.2
Pinus Diploxylon (二葉マツ亜属)	86	3.9	2.4	88	5.3	3.2	102	2.9	2.2	170	8.1	5.3
Pinus Haploxylon (五葉マツ亜属)				1	0.1	+	1	+	+	7	0.3	0.2
Sciadopitys (コウヤマキ属)	176	7.9	4.8	164	9.9	5.9	144	4.1	3.1	56	2.7	1.7
Cryptomeria (スギ属)	463	20.9	12.7	497	29.9	18.0	875	24.6	18.8	185	8.9	5.7
Chamaecyparis (ヒノキ属)	7	0.3	0.2	6	0.4	0.2	7	0.2	0.2	2	0.1	0.1
Thuja (ネズコ属)												
Salix (ヤナギ属)	80	3.6	2.2	15	0.9	0.5	2	0.1	+	1	+	+
Myrica (ヤマモモ属)	9	0.4	0.2	3	0.2	0.1	10	0.3	0.2	7	0.3	0.2
Juglans (オニグルミ属)	11	0.5	0.3	6	0.4	0.2	18	0.5	0.4	10	0.5	0.3
Carpinus (クマシテ属)	13	0.6	0.4	6	0.4	0.2	10	0.3	0.2	8	0.4	0.2
Corylus (ハシバミ属)	2	0.1	0.1	2	0.1	0.1	10	0.3	0.2	25	1.2	0.8
Betula (シラカンバ属)	2	0.1	0.1				2	0.1	+	1	+	+
Alnus (ハンノキ属)							3	0.1	0.1	6	0.3	0.2
Fagus (ブナ属)	91	4.1	2.5	42	2.5	1.5	35	1.0	0.8	51	2.4	1.6
Lepidobalanus (コナラ亜属)	220	9.9	6.0	128	7.7	4.6	301	8.5	6.5	436	20.8	13.5
Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)	467	21.1	12.8	197	11.9	7.1	667	18.8	14.3	597	28.4	18.5
Castanea (クリ属)	52	2.3	1.4	5	0.3	0.2	63	1.8	1.4	4	0.2	0.1
Castanopsis (シイノキ属)	1	+	+				8	0.2	0.2	4	0.2	0.1
Ulmus (ニレ属)	2	0.1	0.1	2	0.1	0.1	3	0.1	0.1	5	0.2	0.2
Zelkova (ケヤキ属)	27	1.2	0.7	26	1.6	0.9	74	2.1	1.6	45	2.1	1.4
Celtis (エノキ属)	20	0.9	0.5	15	0.9	0.5	79	2.2	1.7	14	0.7	0.4
Aphananthe (ムクノキ属)	9	0.4	0.2	6	0.4	0.2	11	0.3	0.2	20	1.0	0.6
Akebia (アケビ属)	1	+	+				1	+	+	1	+	+
Magnolia (モクレン属)	3	0.1	0.1							3	0.1	0.1
Prunus (サクラ属)	6	0.3	0.2	7	0.4	0.3	19	0.5	0.4	16	0.8	0.5
Phellodendron (キハダ属)	1	+	+				5	0.1	0.1			
Skimmia (ミヤマシキミ属)				2	0.1	0.1	2	0.1	+	4	0.2	0.1
Rhus (ウルシ属)							4	0.1	0.1	2	0.1	0.1
Ilex (モチノキ属)	11	0.5	0.3				4	0.1	0.1			
Acer (カエデ属)	4	0.2	0.1	5	0.3	0.2	58	1.6	1.2	6	0.3	0.2
Aesculus (トチノキ属)	11	0.5	0.3	25	1.5	0.9	65	1.8	1.4	3	0.1	0.1
Zizyphus (ナツメ属)				9	0.5	0.3	3	0.1	0.1	1	+	+
Tilia (シナノキ属)												
Elaeagnus (グミ属)	2	0.1	0.1									
Diospyros (カキ属)	1	+	+	1	0.1	+	3	0.1	0.1			
Symplocas (ハイノキ属)												
Styrax (エゴノキ属)	20	0.9	0.5	29	1.7	1.0	29	0.8	0.6	7	0.3	0.2
Ligustrum (イボタノキ属)				1	0.1	+	1	+	+	1	+	+
Fraxinus (トネリコ属)				6	0.4	0.2	31	0.9	0.7			
Abelia (ツクバネウツギ属)	1	+	+				11	0.3	0.2	12	0.6	0.4
Lonicera (スイカズラ属)										2	0.1	0.1
Moraceae (クワ科)	6	0.3	0.2	8	0.5	0.3	48	1.4	1.0	4	0.2	0.1
Ericaceae (ツツジ科)				2	0.1	0.1						
AP Total	2,214	99.7	60.7	1,660	100.2	59.8	3,555	100.2	76.3	2,100	100.0	64.9

第 5 層			第 6 層			第 7 層		
検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%
12	0.4	0.2	2	0.1	+	1	0.1	+
772	25.1	12.6	321	13.6	7.0	9	1.0	0.3
133	4.3	2.2	244	10.3	5.3	10	1.2	0.3
10	0.3	0.2	5	0.2	0.1			
346	11.3	5.7	992	42.1	21.6	712	82.0	19.9
10	0.3	0.2				2	0.2	+
114	3.7	1.9	96	4.1	2.1	12	1.4	0.3
454	14.8	7.4	219	9.3	4.8	14	1.6	0.4
2	0.1	+	2	0.1	+			
2	0.1	+						
1	+	+				1	0.1	+
7	0.2	0.1	7	0.3	0.2	1	0.1	+
10	0.3	0.2	6	0.3	0.1	10	1.2	0.3
8	0.3	0.1	5	0.2	0.1	1	0.1	+
24	0.8	0.4	15	0.6	0.3	3	0.3	0.1
3	0.1	+	2	0.1	+	6	0.7	0.2
46	1.5	0.8	32	1.4	0.7	11	1.3	0.3
257	8.4	4.2	91	3.9	2.0	29	3.3	0.8
729	23.7	11.9	187	7.9	4.1	11	1.3	0.3
4	0.1	0.1	3	0.1	0.1	3	0.3	0.1
2	0.1	+						
1	+	+						
56	1.8	0.9	54	2.3	1.2	7	0.8	0.2
1	+	+	1	+	+			
31	1.0	0.5	34	1.4	0.7	7	0.8	0.2
			1	+	+	3	0.3	0.1
6	0.2	0.1	7	0.3	0.2	1	0.1	+
1	+	+						
6	0.2	0.1	3	0.1	0.1	4	0.5	0.1
4	0.1	0.1	7	0.3	0.2	1	0.1	+
2	0.1	+	2	0.1	+			
1	+	+						
			9	0.4	0.2	2	0.2	0.1
1	+	+						
3	0.1	+						
5	0.2	0.1	3	0.1	+	3	0.3	0.1
7	0.2	0.1	1	+	+			
1	+	+	7	0.3	0.2	4	0.5	0.1
3,072	99.8	50.1	2,358	99.9	51.3	868	99.8	24.2

京都府遺跡調査報告書 第6冊

NAP(草本花粉)

OTO2 東壁 SD0207

TAXON	第 1 層			第 2 層			第 3 層			第 4 層		
	検出数	NAP%	全体%									
Fagopyrum (ソバ)	11	0.8	0.3	6	0.5	0.2	4	0.4	0.1	5	0.4	0.2
Pertya (コウヤボウキ属)	1	0.1	+	2	0.2	0.1	2	0.2	+	1	0.1	+
Artemisia (ヨモギ属)	329	23.1	9.0	20	1.8	0.7	34	3.1	0.7	56	5.0	1.7
Petasites (フキ属)	5	0.4	0.1	3	0.3	0.1	5	0.5	0.1	5	0.4	0.2
Xanthium (オナモミ属)	250	17.6	6.9	24	2.2	0.9	6	0.5	0.1	2	0.2	0.1
Patrinia (オミナエシ属)	2	0.1	0.1	2	0.2	0.1	5	0.5	0.1	1	0.1	+
Perilla (シソ属)				1	0.1	+				1	0.1	+
Haloragis (アリノトウグサ属)										3	0.3	0.1
Enphorbia (トウダイグサ属)	6	0.4	0.2	42	3.8	1.5	15	1.4	0.3	9	0.8	0.3
Geranium (フウロソウ属)	1	0.1	+							1	0.1	+
Pueraria (クズ属)	11	0.8	0.3	27	2.4	1.0	43	3.9	0.9			
Thalictrum (カラマツソウ属)	1	0.1	+	152	13.8	5.5				4	0.4	0.1
Nelumbo (ハス属)	1	0.1	+	2	0.2	0.1	2	0.2	+	1	0.1	+
Nymphaea (スイレン属)												
Nuphar (コオホネ属)				90	8.2	3.3	11	1.0	0.2			
Rumex (ギシギシ属)	1	0.1	+	1	0.1	+				1	0.1	+
Persicaria (タデ属)	12	0.8	0.3	15	1.4	0.5	19	1.7	0.4	25	2.2	0.8
Humulus (カラハナソウ属)	5	0.4	0.1	2	0.2	0.1	6	0.5	0.1	2	0.2	0.1
Iris (アヤメ属)				1	0.1	+						
Eriocaulon (ホシクサ属)	20	1.4	0.5	3	0.3	0.1				1	0.1	+
Sagittaria (オモダカ属)	2	0.1	0.1	2	0.2	0.1	1	0.1	+	15	1.3	0.5
Sparganium (ミクリ属)	3	0.2	+				3	0.3	0.1	8	0.7	0.2
Typha (ガマ属)	2	0.1	+	1	0.1	+	3	0.3	0.1	2	0.2	0.1
Cichorioideae (タンポポ科)	4	0.3	0.1	6	0.5	0.2	10	0.9	0.2	3	0.3	0.1
Carduoideae (キク科)	6	0.4	0.2	7	0.6	0.3	9	0.8	0.2	5	0.4	0.2
Cucurbitaceae (ウリ科)	9	0.6	0.2	3	0.3	0.1	1	0.1	+			
Labiatae (シソ科)	8	0.6	0.2	1	0.1	+	5	0.5	0.1	3	0.3	0.1
Umbelliferae (セリ科)				6	0.5	0.2				9	0.8	0.3
Malvaceae (アオイ科)	3	0.2	0.1	2	0.2	0.1	3	0.3	0.1			
Cruciferae (アブラナ科)	2	0.1	0.1	7	0.6	0.3	1	0.1	+	1	0.1	+
Renunculaceae (キンポウゲ科)	20	1.4	0.5	3	0.3	0.1	4	0.4	0.1	1	0.1	+
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	37	2.6	1.0	22	2.0	0.8	11	1.0	0.2	19	1.7	0.6
Chenopodiaceae (アカザ科)	16	1.1	0.4	8	0.7	0.3	5	0.5	0.1			
Amaryllidaceae (ヒガンバナ科)							2	0.2	+			
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	5	0.4	0.1	4	0.4	0.1	12	1.1	0.3	5	0.4	0.2
Gramineae (イネ科45μ以上)	479	33.6	13.2	471	42.7	17.0	725	65.3	15.5	802	71.2	24.9
Gramineae (イネ科45μ以下)	172	12.1	4.7	168	15.2	6.1	164	14.8	3.5	135	12.0	4.2
NAP Total	1,424	100.1	38.7	1,104	100.2	39.9	1,111	100.6	23.5	1,126	100.1	35.0
AP + NAP Total	3,638		99.4	2,764		99.7	4,666		99.8	3,226		99.9

太田遺跡

第 5 層			第 6 層			第 7 層		
検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%
6	0.2	0.1	163	7.3	3.6	156	5.7	4.4
5	0.2	0.1	1	+	+	1	+	+
60	2.0	1.0	40	1.8	0.9	3	0.1	0.1
2	0.1	+						
						1	+	+
1	+	+						
2	0.1	+	8	0.4	0.2			
6	0.2	0.1						
2	0.1	+				1	+	+
1	+	+						
			1	+	+	34	1.3	0.9
			2	0.1	+	7	0.3	0.2
3	0.1	+						
53	1.7	0.9	150	6.7	3.3	19	0.7	0.5
5	0.2	0.1	1	+	+			
61	2.0	1.0	4	0.2	0.1			
			3	0.1	0.1			
1	+	+	2	0.1	+	7	0.3	0.2
30	1.0	0.5	39	1.8	0.9	12	0.4	0.3
8	0.3	0.1	12	0.5	0.3			
1	+	+	1	+	+	2	0.1	0.1
2	0.1	+	1	+	+	1	+	+
			3	0.1	0.1	1	+	+
5	0.2	0.1						
9	0.3	0.1	2	0.1	0.1			
16	0.5	0.3	5	0.2	0.1	5	0.2	0.1
2	0.1	+				5	0.2	0.1
1	+	+						
13	0.4	0.2	29	1.3	0.6			
2,636	86.6	43.1	1,732	77.7	37.8	2,440	89.9	68.1
112	3.7	1.8	29	1.3	0.6	20	0.7	0.6
3,043	100.1	49.5	2,228	99.7	48.7	2,715	99.9	75.6
6,115		99.6	4,586		100.0	3,583		99.7

京都府遺跡調査報告書 第6冊

NAP(草本花粉)

OTO2

TAXON	黒 墨 土			黒 墨 土			第 2 層			第 3 層		
	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%
Fagopyrum (ソバ)	21	3.7	1.4	18	6.5	1.6	87	6.7	2.3	3	0.4	0.1
Pertya (コウヤボウキ属)	1	0.2	0.1				1	0.1	+			
Artemisia (ヨモギ属)	23	4.1	1.5	40	14.4	3.6	349	27.1	9.3	22	3.0	0.7
Petasites (フキ属)				2	0.7	0.2	7	0.5	0.2	5	0.7	0.2
Xanthium (オナモミ属)							11	0.9	0.3	3	0.4	0.1
Patrinia (オミナエシ属)	1	0.2	0.1				3	0.2	0.1	1	0.1	+
Perilla (シソ属)										3	0.4	0.1
Haloragis (アリノトウグサ属)	32	5.7	2.1	2	0.7	0.2						
Viola (スマレ属)												
Cayratia (ヤブガラシ属)							1	0.1	+			
Impatiens (ツリフネソウ属)												
Euphorbia (トウダイグサ属)							12	0.9	0.3			
Geranium (フウロソウ属)												
Pueraria (クズ属)							7	0.5	0.2	2	0.3	0.1
Thalictrum (カラマツソウ属)				17	6.1	1.5	4	0.3	0.1			
Ranunculus (キンボウゲ属)				1	0.4	0.1						
Nelumbo (ハス属)												
Nymphaea (スイレン属)												
Nuphar (コオホネ属)							1	0.1	+			
Rumex (ギシギシ属)				9	3.2	0.8	15	1.2	0.4	4	0.6	0.1
Persicaria (タデ属)	6	1.1	0.4	4	1.4	0.4	9	0.7	0.2	5	0.7	0.2
Humulus (カラハナソウ属)	1	0.2	0.1				2	0.2	0.1	1	0.1	+
Eriocaulon (ホシクサ属)												
Sagittaria (オモタカ属)				1	0.4	0.1	44	3.4	1.2	1	0.1	+
Sparganium (ミクリ属)	1	0.2	0.1				4	0.3	0.1	1	0.1	+
Typha (ガマ属)	1	0.2	0.1							3	0.4	0.1
Cichorioideae (タンポポ亜科)	10	1.8	0.7	5	1.8	0.4	29	2.2	0.8	3	0.4	0.1
Carduoideae (キク亜科)	4	0.7	0.3	3	1.1	0.3	7	0.5	0.2	6	0.7	0.2
Cucurbitaceae (ウリ科)							2	0.2	0.1	15	2.1	0.5
Labiatae (シソ科)				1	0.4	0.1	14	1.1	0.4	3	0.4	0.1
Convolvulaceae (ヒルガオ科)												
Umbelliferae (セリ科)	2	0.4	0.1	3	1.1	0.3	8	0.6	0.2	1	0.1	+
Malvaceae (アオイ科)							1	0.1	+			
Rosaceae (バラ科)							4	0.3	0.1	4	0.6	0.1
Cruciferae (アブラナ科)	1	0.2	0.1	3	1.1	0.3	1	0.1	+			
Ranunculaceae (キンボウゲ科)							9	0.7	0.2	2	0.3	0.1
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	8	1.4	0.5	4	1.4	0.4	36	2.8	1.0	12	1.7	0.4
Chenopodiaceae (アカザ科)							14	1.1	0.4	3	0.4	0.1
Amaryllidaceae (ヒガンバナ科)							1	0.1	+			
Liliaceae (ユリ科)										1	0.1	+
Araceae (サトイモ科)							1	0.1	+			
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	6	1.1	0.4	2	0.7	0.2	13	1.0	0.3	17	2.4	0.5
Gramineae (イネ科45μ以上)	387	68.6	25.2	93	33.5	8.4	414	32.1	11.0	424	58.6	13.6
Gramineae (イネ科45μ以下)	58	10.3	3.8	70	25.2	6.3	179	13.9	4.8	178	24.6	5.7
NAP Total	563	100.1	37.0	278	100.1	25.2	1,290	100.2	34.3	723	99.8	23.1
AP + NAP Total	1,358		100.7	1,113		100.2	3,748		99.9	3,122		99.7

太田遺跡

第4層			第5層			第6層			第7層			第8層			第9層		
検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%	検出数	NAP%	全体%									
100	6.0	2.5	337	14.3	6.6	21	2.0	0.5	2	0.1	0.1	5	0.3	0.1	108	4.9	3.5
1	0.1	+	5	0.2	0.1	4	0.4	0.1				1	0.1	+			
516	31.0	12.7	692	29.3	13.5	137	13.1	3.1	38	2.0	1.1	11	0.7	0.3			
10	0.6	0.2	12	0.5	0.2	4	0.4	0.1				1	0.1	+			
34	2.0	0.8	70	3.0	1.4	3	0.3	0.1									
1	0.1	+	4	0.2	0.1	3	0.3	0.1	1	0.1	+	1	0.1	+			
			1	+	+												
2	0.1	+	1	+	+	4	0.4	0.1	5	0.3	0.1						
									1	0.1	+						
1	0.1	+															
19	1.1	0.5	44	1.9	0.9	39	3.7	0.9	15	0.8	0.4				2	0.1	0.1
			1	+	+							2	0.1	0.1			
5	0.3	0.1	30	1.3	0.6	50	4.8	1.1									
2	0.1	+	10	0.4	0.2	3	0.3	0.1									
1	0.1	+							4	0.2	0.1	1	0.1	+			
															65	3.0	2.1
1	0.1	+	2	0.1	+	1	0.1	+	2	0.1	+				8	0.4	0.3
14	0.8	0.3	5	0.2	0.1				1	0.1	+	2	0.1	0.1			
9	0.5	0.2	32	1.4	0.6	63	6.0	1.4	30	1.6	0.9	71	4.6	1.9	44	2.0	1.4
			6	0.3	0.1	1	0.1	+	1	0.1	+	1	0.1	+			
			2	0.1	+	1	0.1	+	1	0.1	+						
28	1.7	0.7	26	1.1	0.5	6	0.6	0.1	9	0.5	0.3	10	0.6	0.3	1	+	+
2	0.1	+	4	0.2	0.1	3	0.3	0.1	9	0.5	0.3	2	0.1	0.1	5	0.2	0.2
46	2.8	1.1	13	0.6	0.3	5	0.5	0.1	3	0.2	0.1	7	0.5	0.2	3	0.1	0.1
15	0.8	0.3	9	0.4	0.2	15	1.4	0.3	8	0.4	0.2	19	1.2	0.5	3	0.1	0.1
3	0.2	0.1	3	0.1	0.1	6	0.6	0.1				1	0.1	+			
6	0.4	0.1	21	0.9	0.4	8	0.8	0.2	2	0.1	0.1				1	+	+
1	0.1	+															
14	0.8	0.3	13	0.6	0.3	17	1.6	0.4	2	0.1	0.1						
1	0.1	+	2	0.1	+										1	+	+
1	0.1	+															
1	0.1	+	1	+	+	1	0.1	+	2	0.1	0.1	1	0.1	+			
7	0.4	0.2	10	0.4	0.2	4	0.4	0.1				1	0.1	+			
40	2.4	1.0	122	5.2	2.4	29	2.8	0.7	4	0.2	0.1	12	0.8	0.3	1	+	+
13	0.8	0.3	14	0.6	0.3	2	0.2	+									
			1	+	+				1	0.1	+						
17	1.0	0.4	12	0.5	0.2	3	0.3	0.1	4	0.2	0.1	6	0.4	0.2			
597	35.8	14.7	682	28.9	13.3	456	43.7	10.4	1,683	88.7	48.7	1,301	84.4	35.5	1,953	88.7	63.0
154	9.2	3.8	168	7.1	3.3	150	14.4	3.4	68	3.6	2.0	85	5.5	2.3	5	0.2	0.2
1,667	100.2	40.4	2,359	100.1	46.1	1,044	100.2	23.7	1,897	100.4	54.9	1,542	100.2	41.9	2,201	99.7	71.0
4,074		99.1	5,123		99.4	4,397		99.5	3,456		100.0	3,669			3,102		100.1
5	0.3	0.1	4	0.2	0.1	5	0.5	0.1	1	0.1	+	1	0.1	+			

京都府遺跡調査報告書 第6冊

AP(樹木花粉)

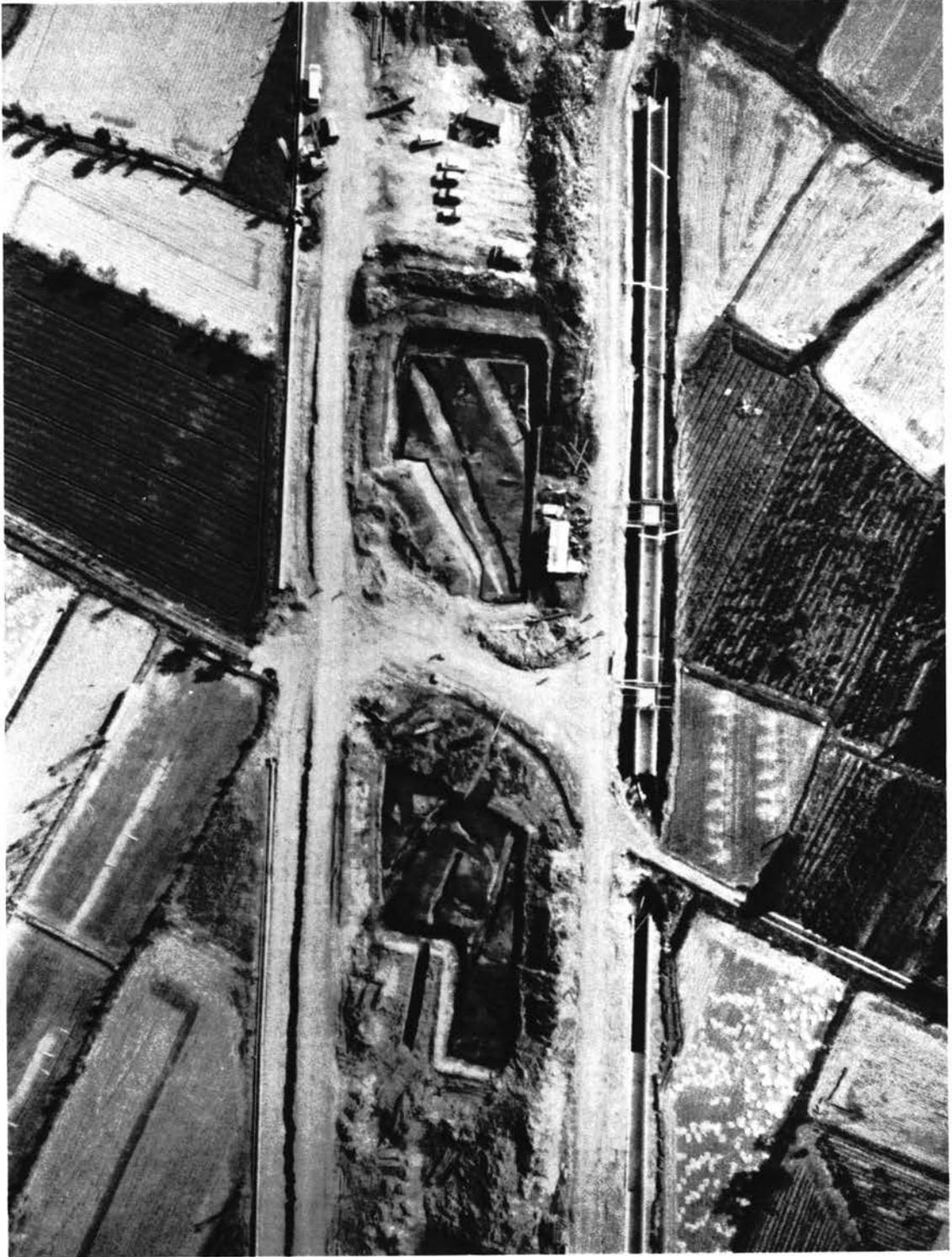
OTO2

TAXON	黒 墨 土			黒 墨 土			第 2 層			第 3 層		
	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%
Podocarpus (マキ属)	3	0.3	0.2	4	0.5	0.4	20	0.8	0.5	13	0.5	0.4
Abies (モミ属)	122	12.5	7.9	82	9.8	7.4	244	9.9	6.5	359	15.0	11.5
Tsuga (ツガ属)	30	3.1	2.0	11	1.3	1.0	49	2.0	1.3	50	2.1	1.6
Picea (トウヒ属)	1	0.1	0.1	3	0.4	0.3	3	0.1	+	7	0.3	0.2
Pinus Diploxylon (二葉マツ亜属)	213	21.9	13.8	56	6.7	5.0	76	3.1	2.2	96	4.0	3.1
Pinus Haploxylon (五葉マツ亜属)				1	0.1	0.1	2	0.1	0.1	1	+	+
Sciadopitys (コウヤマキ属)	181	18.6	11.9	31	3.7	2.8	124	5.0	3.3	170	7.1	5.4
Cryptomeria (スギ属)	114	11.7	7.4	64	7.7	5.8	300	12.2	8.0	396	16.5	12.7
Chamaecyparis (ヒノキ属)	1	0.1	0.1	1	0.1	0.1	4	0.2	0.1	4	0.2	0.1
Thuja (ネズコ属)							3	0.1	0.1	3	0.1	0.1
Salix (ヤナギ属)				3	0.4	0.3	4	0.2	0.1	2	0.1	0.1
Myrica (ヤマモモ属)	1	0.1	0.1	5	0.6	0.4	8	0.3	0.2	6	0.3	0.2
Juglans (オニグルミ属)	4	0.4	0.3	5	0.6	0.4	2	0.1	0.1	8	0.3	0.3
Carpinus (クマシテ属)				2	0.2	0.2	9	0.4	0.2	3	0.1	0.1
Corylus (ハシバミ属)	12	1.2	0.8	10	1.2	0.9	10	0.4	0.3	16	0.7	0.5
Betula (シラカンバ属)							1	+	+	1	+	+
Alnus (ハンノキ属)	1	0.1	0.1	1	0.1	0.1	7	0.3	0.2	1	+	+
Fagus (ブナ属)	9	0.9	0.6	4	0.5	0.4	21	0.9	0.6	21	0.9	0.7
Lepidobalanus (コナラ亜属)	67	6.9	4.4	108	12.9	9.7	250	10.2	6.7	293	12.2	9.4
Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)	162	16.6	10.5	384	46.0	34.5	1,007	41.0	26.9	816	34.0	26.1
Castanea (クリ属)	1	0.1	0.1	5	0.6	0.4	61	2.5	1.6	12	0.5	0.4
Costanopsis (シイノキ属)	2	0.2	0.1	5	0.6	0.4	13	0.5	0.3	2	0.1	0.1
Ulmus (ニレ属)	1	0.1	0.1	2	0.2	0.2	5	0.2	0.1	2	0.1	0.1
Zelkova (ケヤキ属)	26	2.7	1.7	6	0.7	0.5	39	1.6	1.0	36	1.5	1.2
Celtis (エノキ属)	1	0.1	0.1				30	1.2	0.8	29	1.2	0.9
Aphananthe (ムクノキ属)	5	0.5	0.3				7	0.3	0.2	4	0.2	0.1
Akebia (アケビ属)				1	0.1	0.1	3	0.1	0.1	1	+	+
Magnolia (モクレン属)							1	+	+	4	0.2	0.1
Prunus (サクラ属)				7	0.8	0.6	27	1.1	0.7	26	1.1	0.8
Phellodendron (キハダ属)	3	0.3	0.2				1	+	+	1	+	+
Skimmia (ミヤマシキミ属)				5	0.6	0.4	1	+	+			
Buxus (ツゲ属)							3	0.1	0.1			
Rhus (ウルシ属)				3	0.4	0.3						
Ilex (モチノキ属)	2	0.2	0.1	1	0.1	0.1						
Acer (カエデ属)				5	0.6	0.4	6	0.2	0.2	1	+	+
Aesculus (トチノキ属)	1	0.3	0.1	5	0.6	0.4	87	3.5	2.3	4	0.2	0.1
Zizyphus (ナツメ属)				1	0.1	0.1	4	0.2	0.1			
Tilia (シナノキ属)										1	+	+
Diospyros (カキ属)												
Symplocas (ハイノキ属)												
Styrax (エゴノキ属)	10	1.0	0.7	7	0.8	0.6	9	0.4	0.2	2	0.1	0.1
Ligustrum (イボタノキ属)	1	0.1	0.1	3	0.4	0.3	8	0.3	0.2	1	+	+
Fraxinus (トリネコ属)										1	+	+
Abelia (ツスバネウツキ属)				3	0.4	0.3	2	0.1	0.1	1	+	+
Lonicera (スイカズラ属)							2	0.1	0.1	2	0.1	0.1
Moraceae (クワ科)							5	0.2	0.1	2	0.1	0.1
Celastraceae (ニシキギ科)												
Ericaceae (ツツジ科)				1	0.1	0.1				1	+	+
AP Total	976	100.2	63.7	835	99.9	750	2,458	99.9	65.6	2,399	99.8	76.6

## 太田遺跡

第4層			第5層			第6層			第7層			第8層			第9層		
検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%	検出数	AP%	全体%									
14	0.6	0.3	16	0.6	0.3	41	1.2	0.9	7	0.4	0.1	11	0.5	0.3	1	0.1	+
246	10.2	6.0	277	10.0	5.4	496	14.8	11.3	154	9.9	4.5	626	29.4	17.1	18	2.0	0.6
47	2.0	1.2	43	1.6	0.8	57	1.7	1.3	36	2.3	1.0	139	6.5	3.8	23	2.6	0.7
			1	+	+	9	0.3	0.2	2	0.1	0.1	12	0.6	0.3	2	0.2	0.1
90	3.7	2.2	117	4.2	2.3	200	6.0	4.5	154	9.9	4.5	583	27.4	15.9	748	83.0	24.1
			2	0.1	+				2	0.1	0.1	15	0.7	0.4	1	0.1	+
101	4.2	2.5	85	3.1	1.7	54	1.6	1.2	35	2.2	1.0	72	3.4	2.0	11	1.2	0.4
305	12.7	7.5	329	11.9	6.4	216	6.4	4.9	70	4.5	2.0	240	11.3	6.5	13	1.4	0.4
5	0.2	0.1	2	0.1	+				3	0.2	0.1	1	+	+	1	0.1	+
			6	0.2	0.1	2	0.1	+	2	0.1	0.1						
7	0.3	0.2	19	0.7	0.4	4	0.1	0.1	1	0.1	+						
9	0.4	0.2	5	0.2	0.1	24	0.7	0.5	6	0.4	0.2	5	0.2	0.1			
2	0.1	+	10	0.4	0.2	19	0.6	0.4	6	0.4	0.2	10	0.5	0.3	2	0.2	0.1
9	0.4	0.2	6	0.2	0.1	6	0.2	0.1	4	0.3	0.1	2	0.1	0.1			
12	0.5	0.3	28	1.0	0.5	37	1.1	0.8	18	1.2	0.5	9	0.4	0.2	2	0.2	0.1
						1	+	+									
7	0.3	0.2	5	0.2	0.1	9	0.3	0.2	2	0.1	0.1	3	0.1	0.1			
23	1.0	0.6	43	1.6	0.8	42	1.3	1.0	53	3.4	1.5	41	1.9	1.1	12	1.3	0.4
422	17.5	10.4	468	16.9	9.1	447	13.3	10.2	391	25.1	11.3	102	4.8	2.8	14	1.6	0.5
906	37.6	22.2	1,000	36.2	19.5	1,406	41.9	32.0	456	29.2	13.2	179	8.4	4.9	11	1.2	0.4
28	1.2	0.7	39	1.4	0.8	35	1.0	0.8	1	0.1	+				9	1.0	0.3
10	0.4	0.2	16	0.6	0.3	9	0.3	0.2	1	0.1	+	4	0.2	0.1			
1	+	+	2	0.1	+	2	0.1	+	2	0.1	0.1						
41	1.7	1.0	53	1.9	1.0	77	2.3	1.8	57	3.7	1.6	24	1.1	0.7	9	1.0	0.3
27	1.1	0.7	10	0.4	0.2	30	0.9	0.7	2	0.1	0.1	4	0.2	0.1	1	0.1	+
13	0.5	0.3	16	0.6	0.3	19	0.7	0.4	40	2.6	1.2	6	0.3	0.2	8	0.9	0.3
1	+	+	4	0.1	0.1	1	+	+	2	0.1	0.1						
5	0.2	0.1	1	+	+	2	0.1	+	1	0.1	+				4	0.4	0.1
4	0.2	0.1	28	1.0	0.5	23	0.7	0.5	7	0.4	0.2	4	0.2	0.1			
2	0.1	+	6	0.2	0.1				1	0.1	+						
4	0.2	0.1	2	0.1	+												
			2	0.1	+	5	0.1	0.1	6	0.4	0.2	7	0.3	0.2	1	0.1	+
34	1.4	0.8	21	0.8	0.4	24	0.7	0.5	7	0.4	0.2	1	+	+			
18	0.7	0.4	69	2.5	1.3	6	0.2	0.1									
			2	0.1	+												
															1	0.1	+
									2	0.1	0.1						
4	0.2	0.1	6	0.2	0.1	17	0.5	0.4	5	0.3	0.1	3	0.1	0.1			
2	0.1	+	11	0.4	0.2	4	0.1	0.1	6	0.4	0.2	4	0.2	0.1	1	0.1	+
2	0.1	+	1	+	+							13	0.6	0.4			
			2	0.1	+	26	0.8	0.6	9	0.6	0.3	3	0.1	0.1			
			2	0.1	+	1	+	+	1	0.1	+	2	0.1	0.1			
4	0.2	0.1	8	0.3	0.2	1	+	+	1	0.1	+						
			1	+	+				1	0.1	+						
2	0.1	+				1	+	+	5	0.3	0.1				8	0.9	0.3
2,407	100.1	58.7	2,764	100.2	53.3	3,353	100.1	75.8	1,559	100.1	45.1	2,127	99.7	58.2	901	99.8	29.9

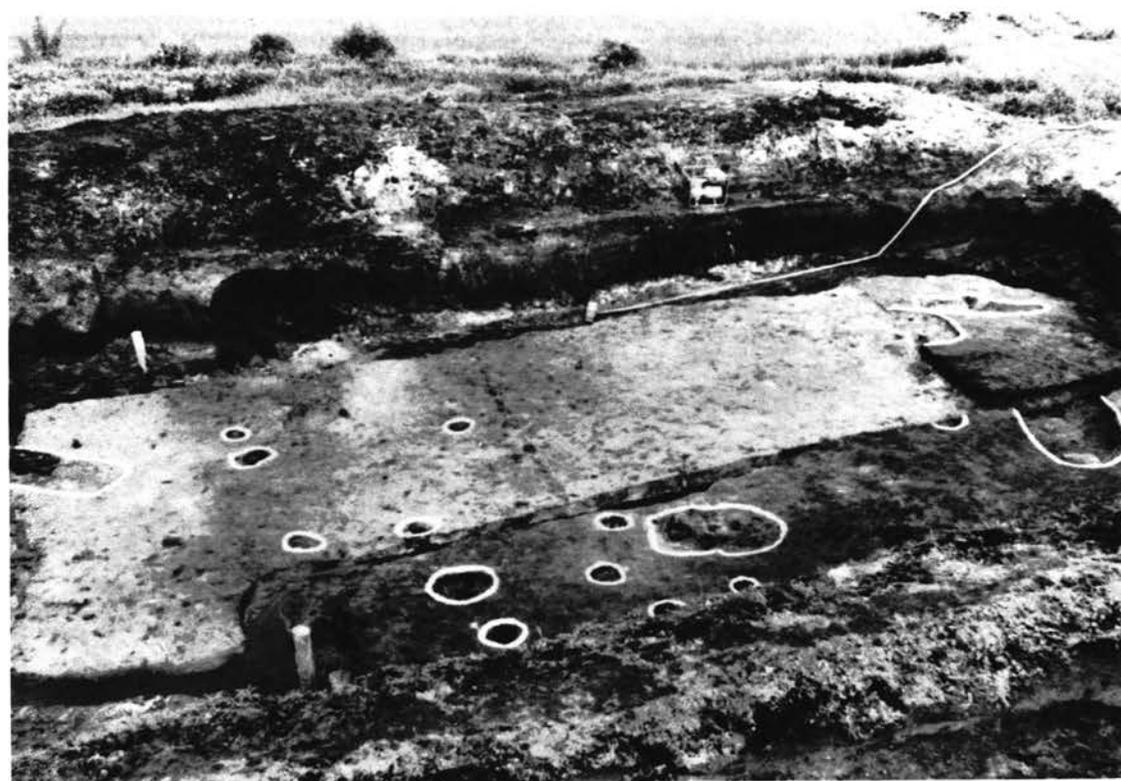
# 圖 版



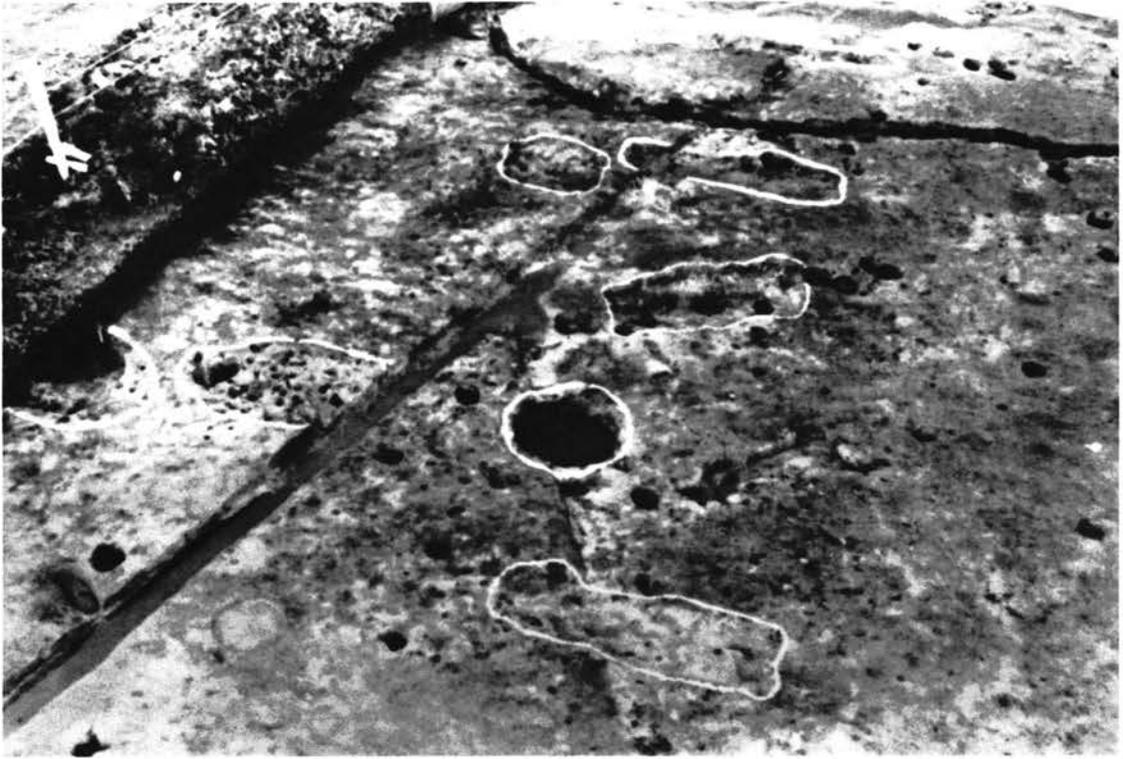
太田遺跡周辺航空写真（上が南）



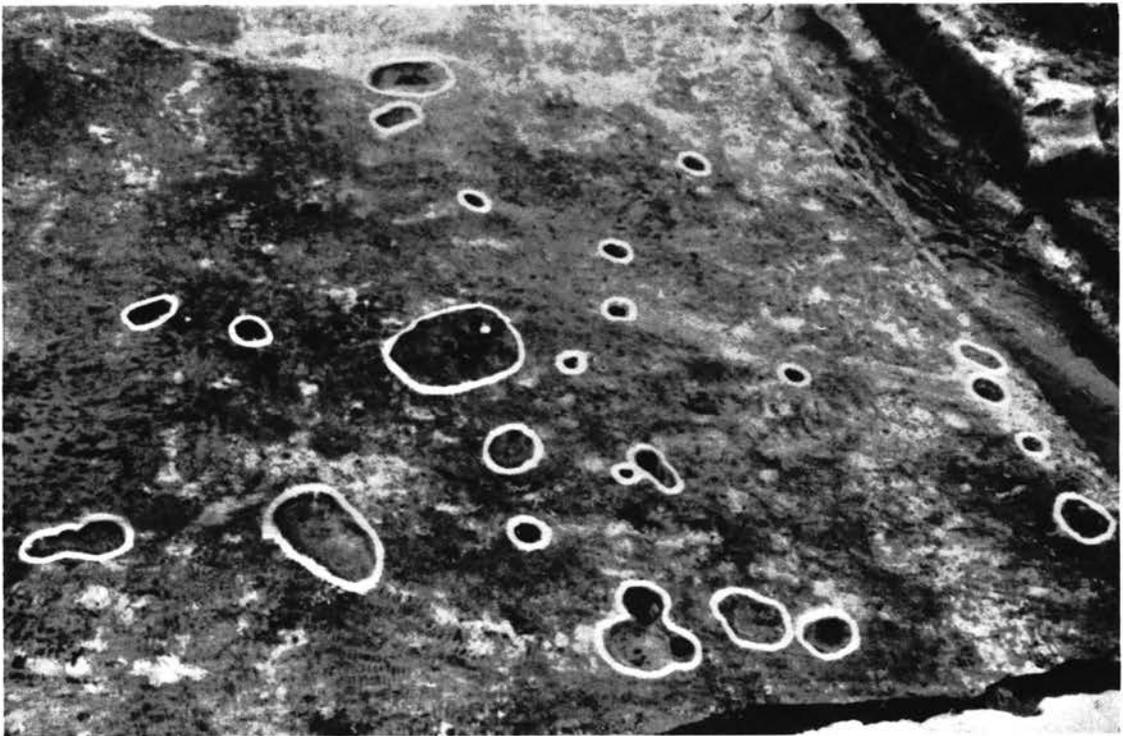
(1)土壇 SK 01~10・溝 SD 0109 全景 (南西から)



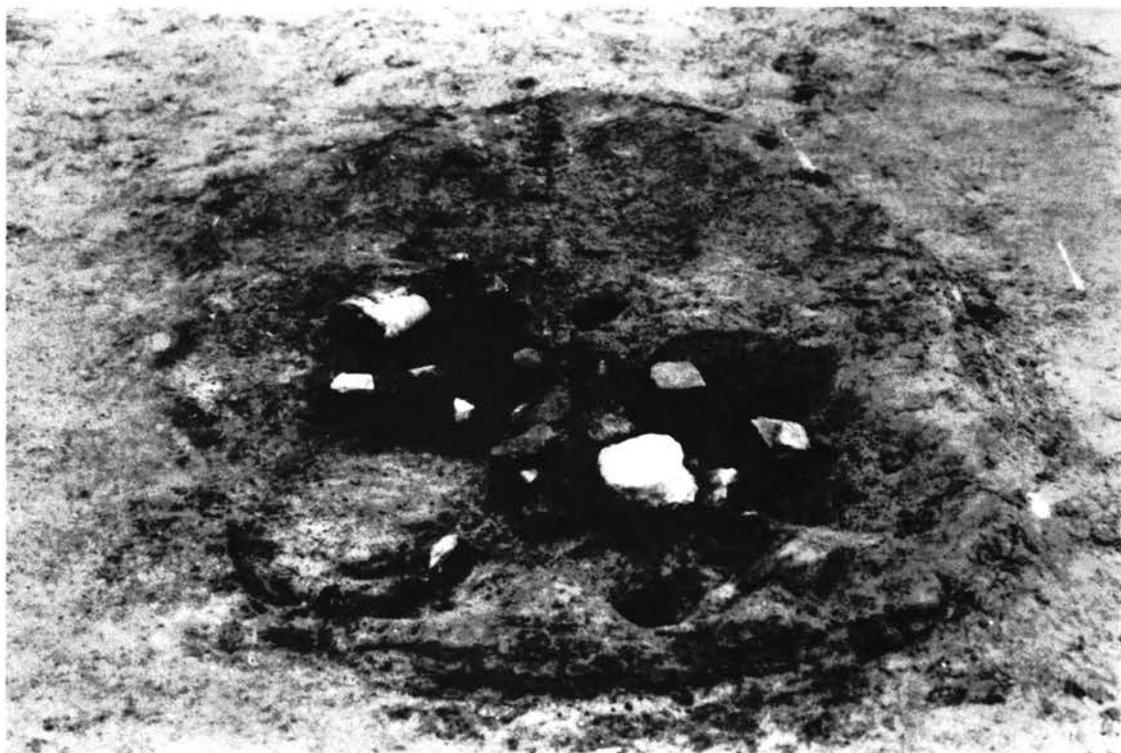
(2)土壇 SK 139~148 全景 (西から)



(1)土坑 SK 01~10 近景 (西から)



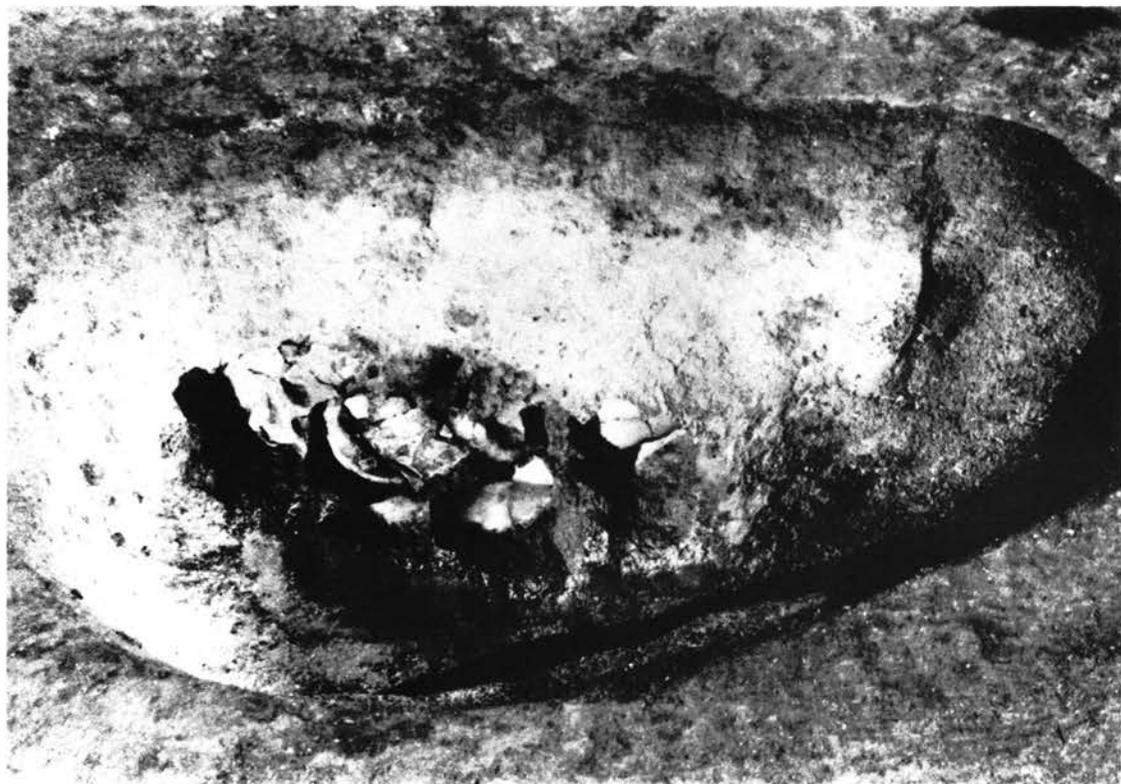
(2)土坑 SK 90・100 近景 (南から)



(1)土塚 SK 100 遺物出土状況 (南から)



(2)土塚 SK 203・204 (南から)



(1)土塚 SK 203 遺物出土状況 (南から)



(2)土塚 SK 204 (北から)



(1)溝 SD 0207・0208 全景 (南から)



(2)溝 SD 0201・0205・0209 全景 (南から)



(1)溝 SD 0208 遺物出土状況（北から）



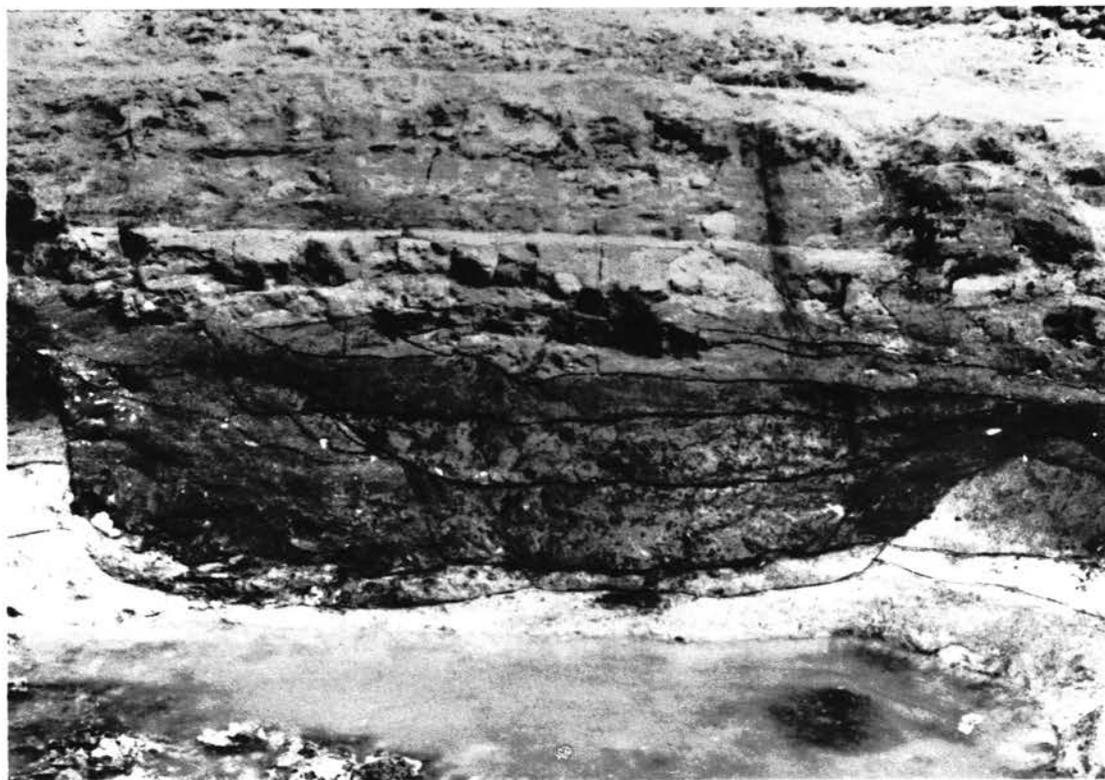
(2)溝 SD 0208 遺物出土状況（西から）



(1)溝 SD 0211・0212・0213 全景 (北西から)



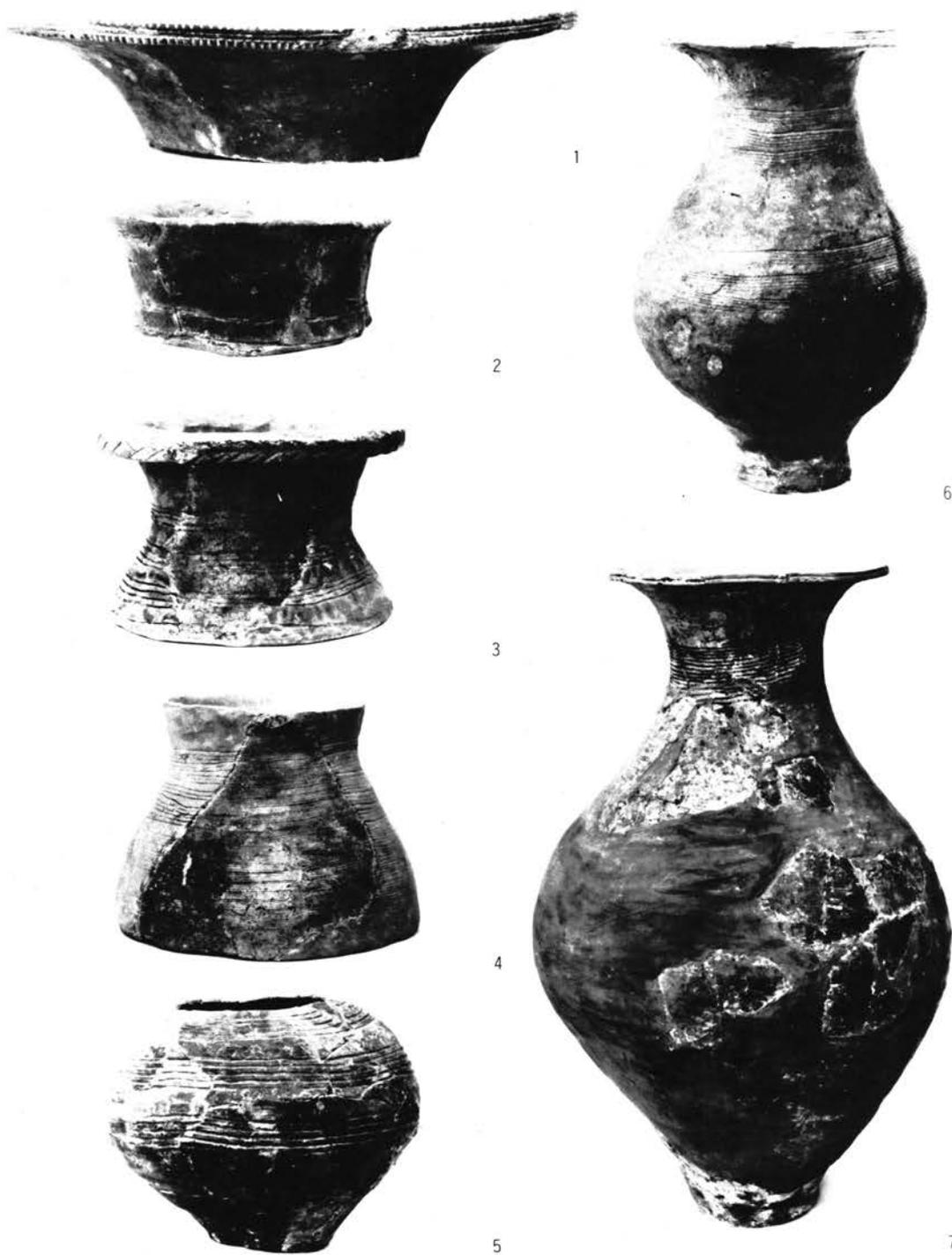
(2)足跡検出状況 (西から)



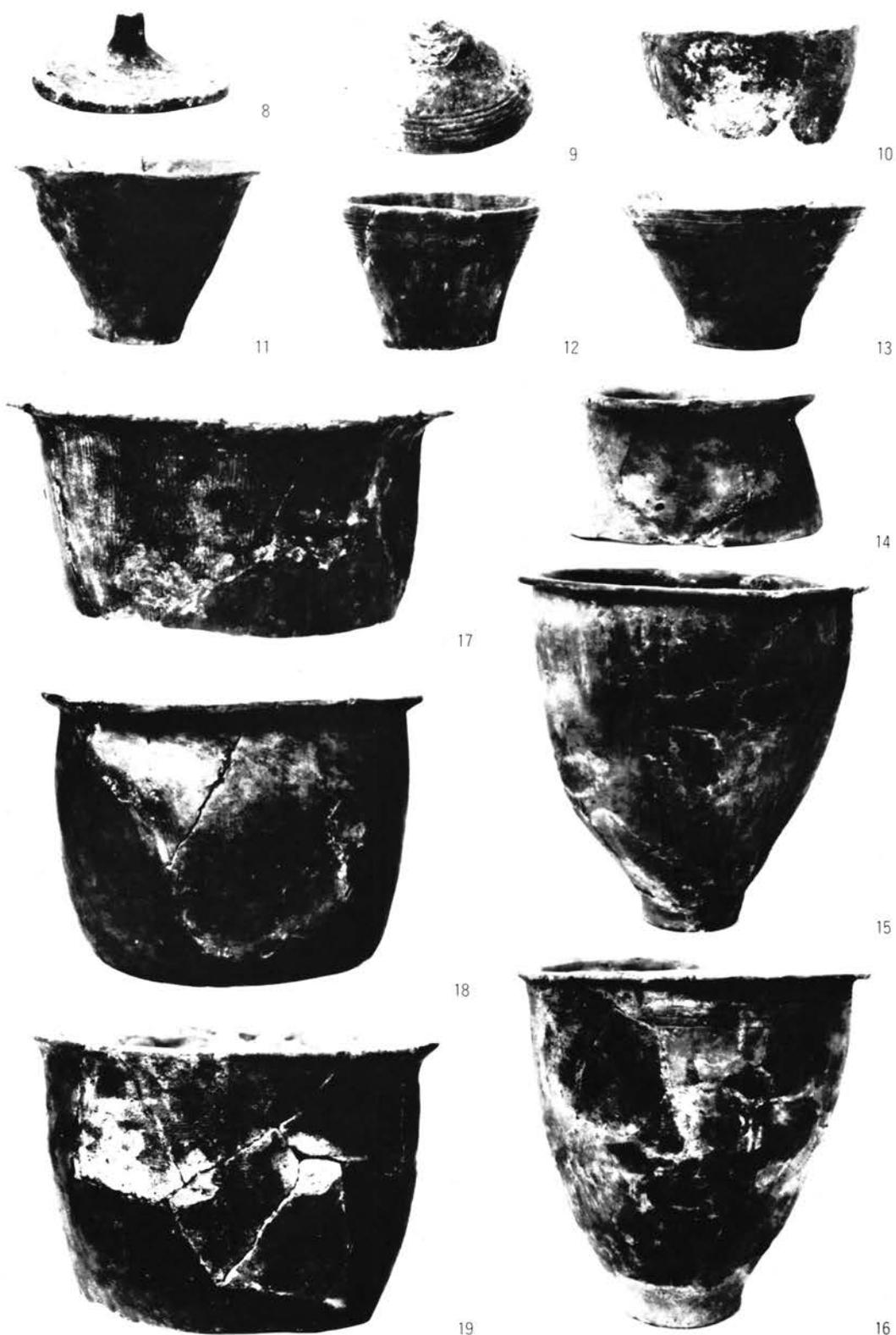
(1)溝 SD 0207 断面 (KP 地区, 西から)



(2)溝 SD 0208 内石庖丁出土状況 (北から)



弥生土器（壺形土器）



弥生土器 (蓋・甕・鉢形土器)



20



23



21



24



25

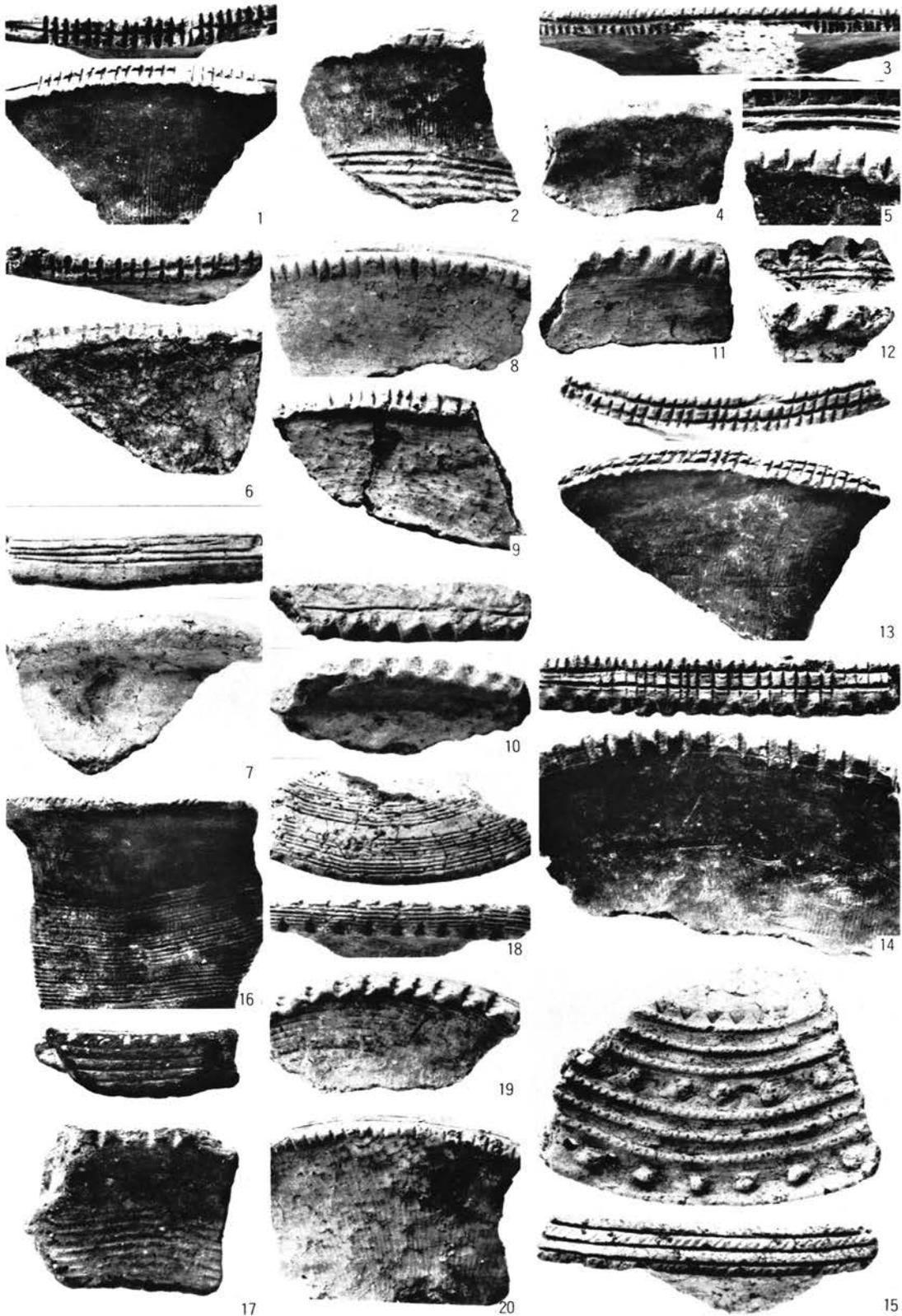


22

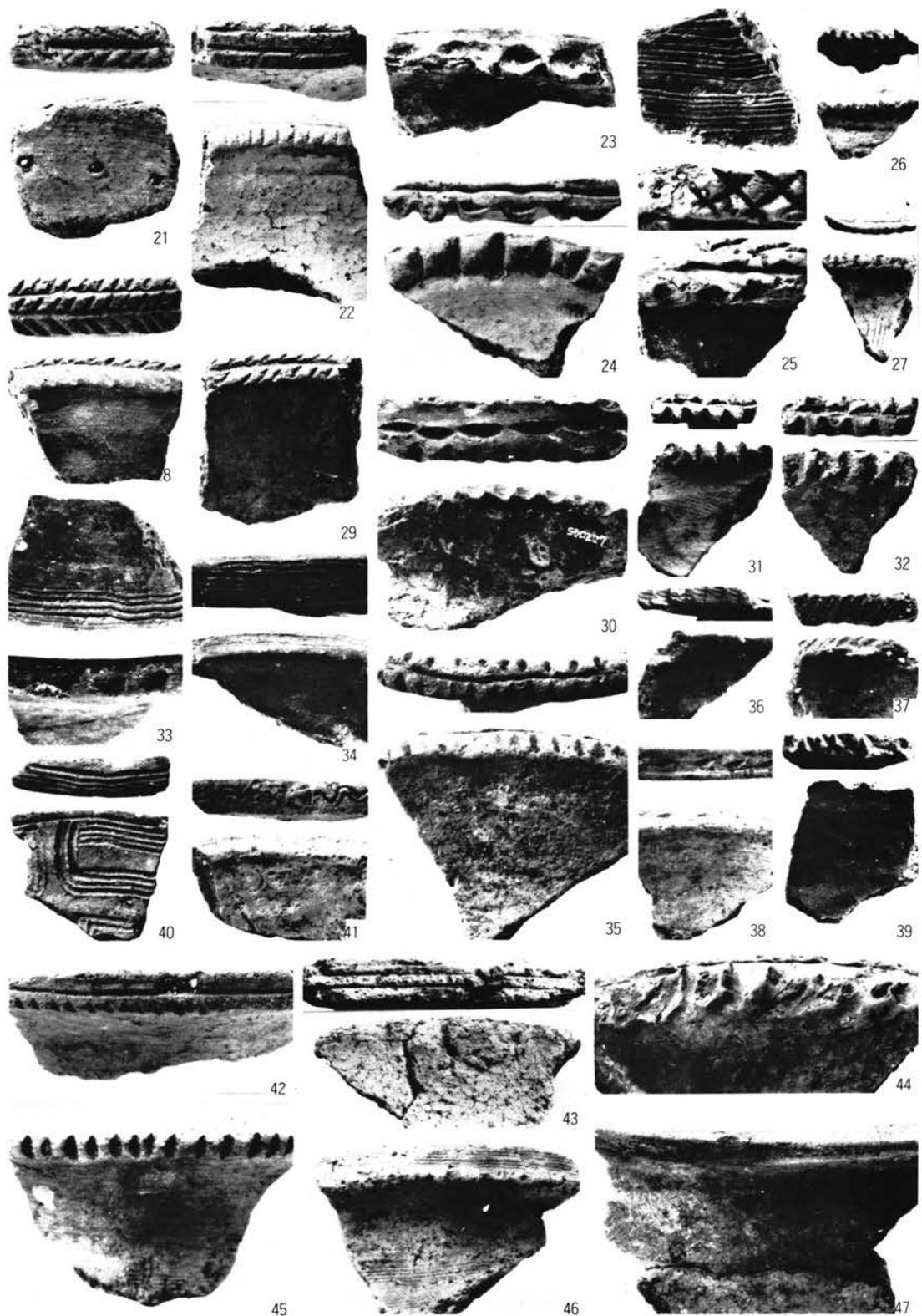


26

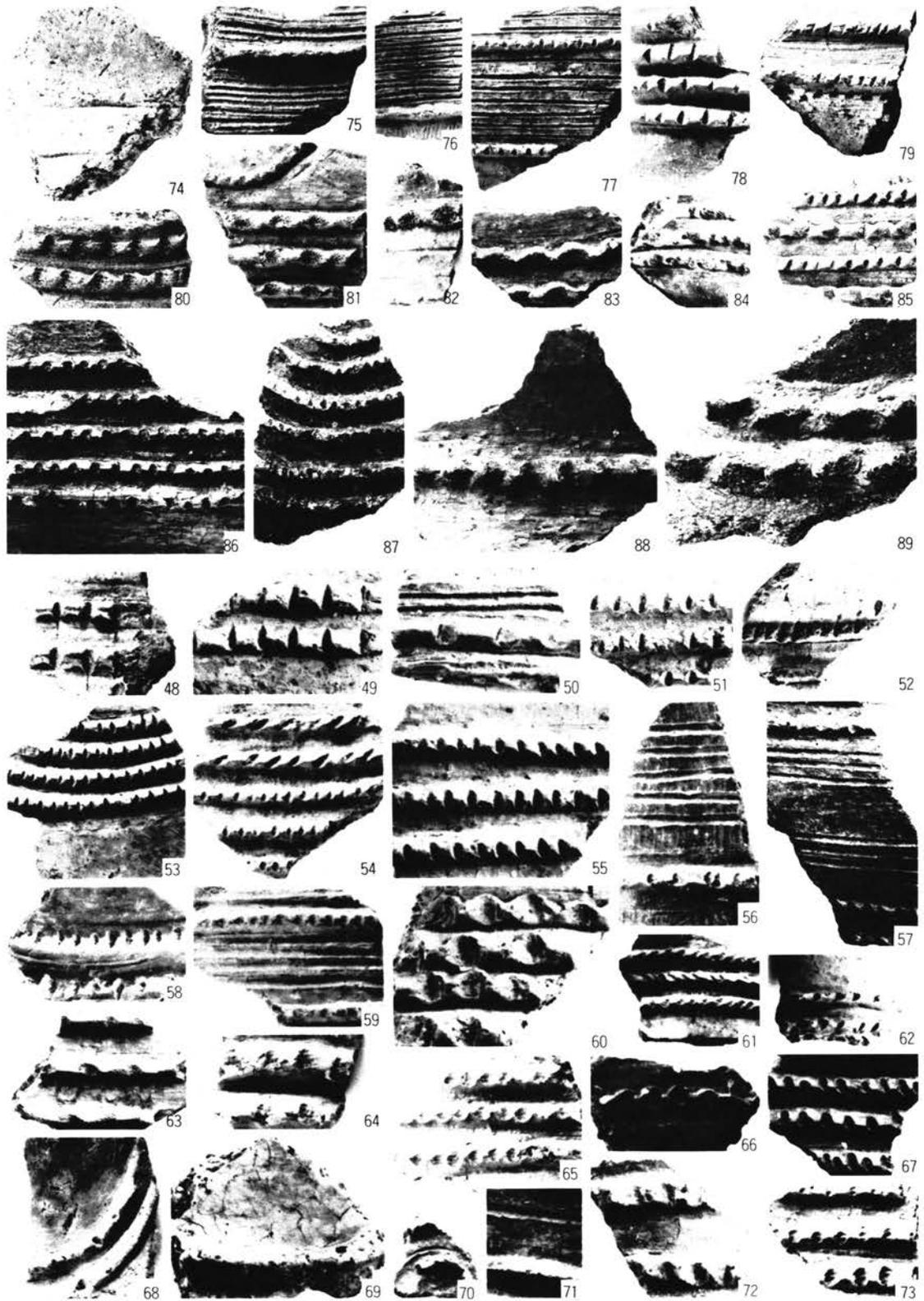
弥生土器（蓋・甕形土器）



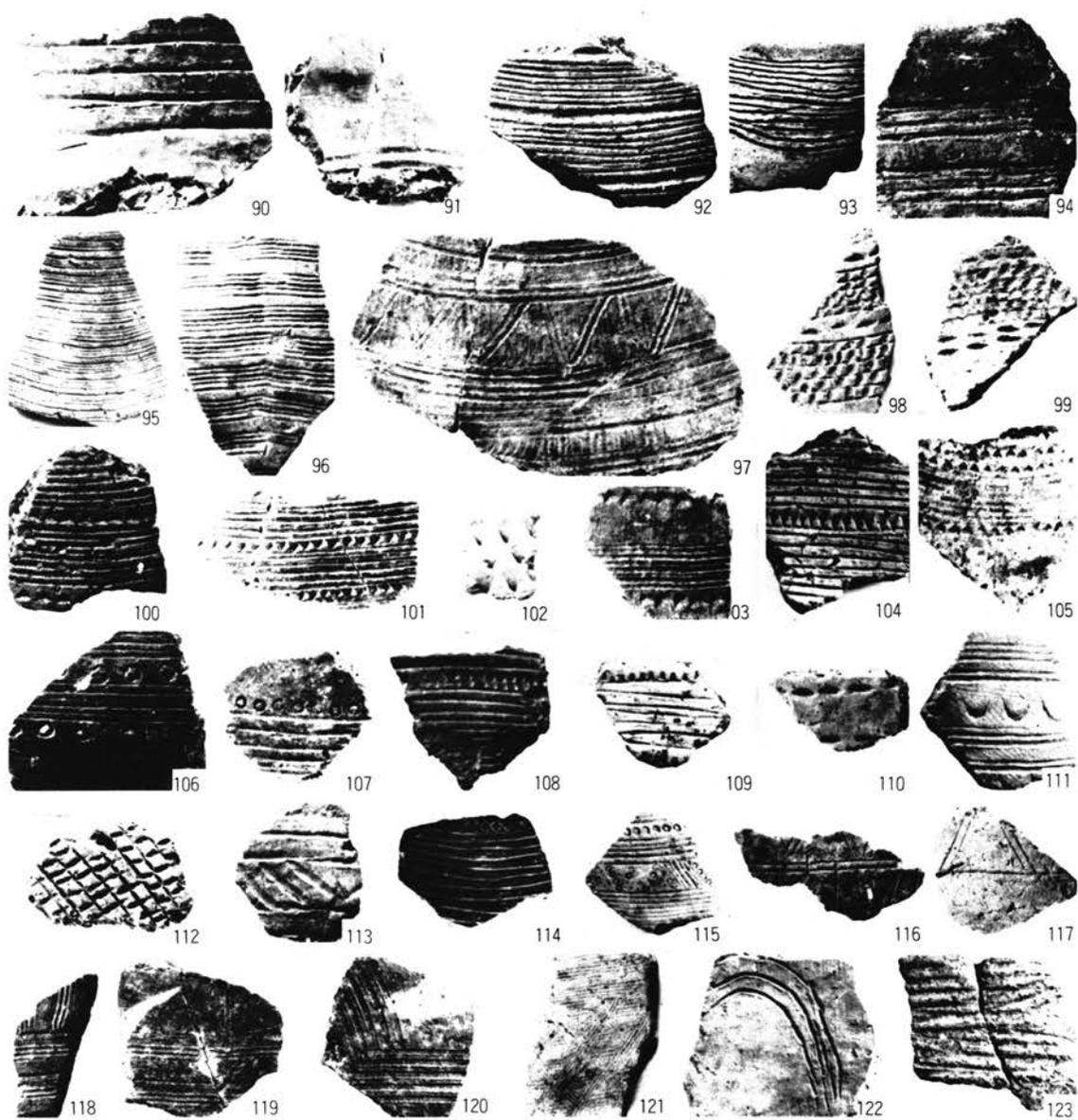
弥生土器・口縁部文様（各種）



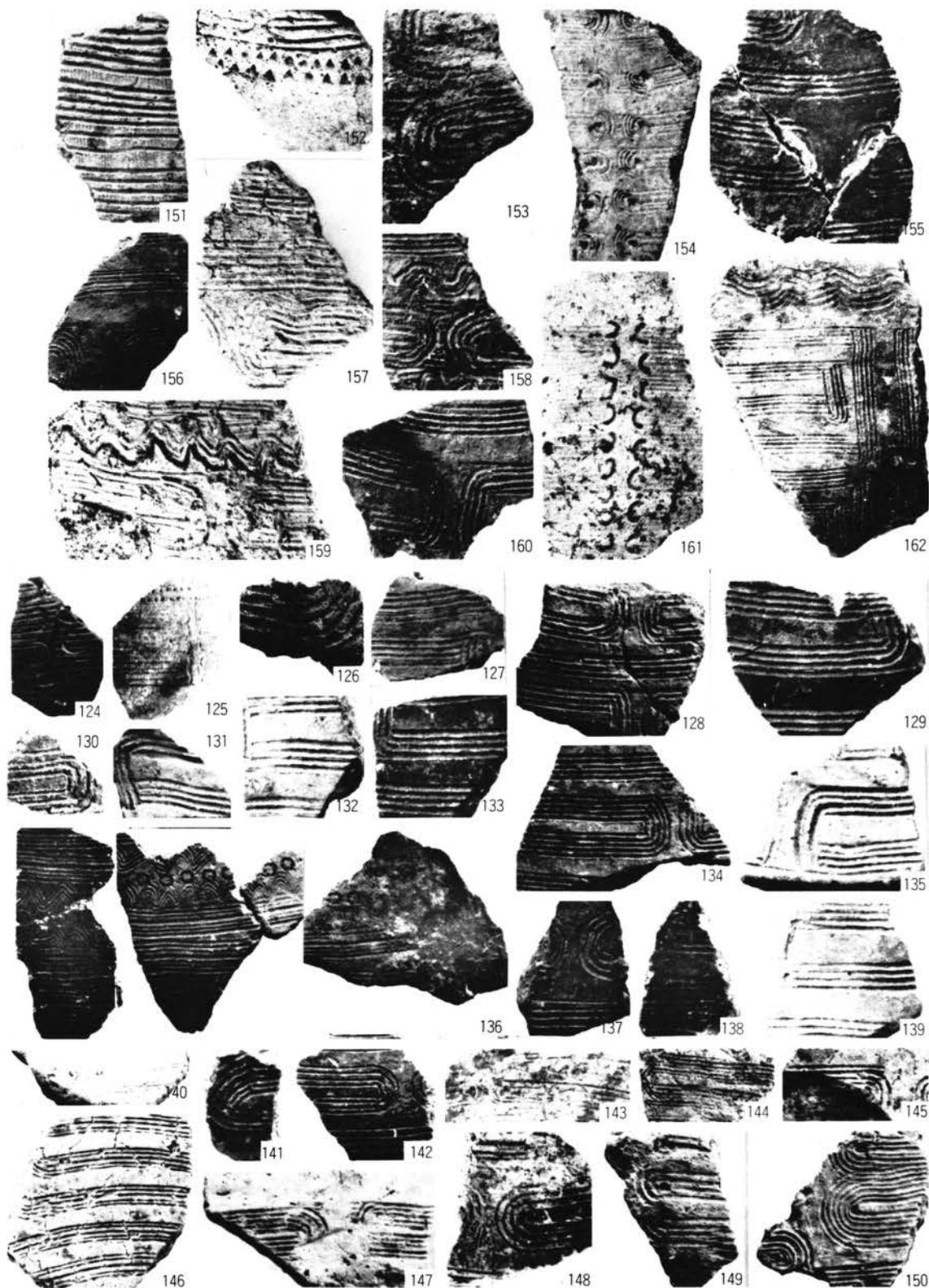
弥生土器・口縁部文様（各種）



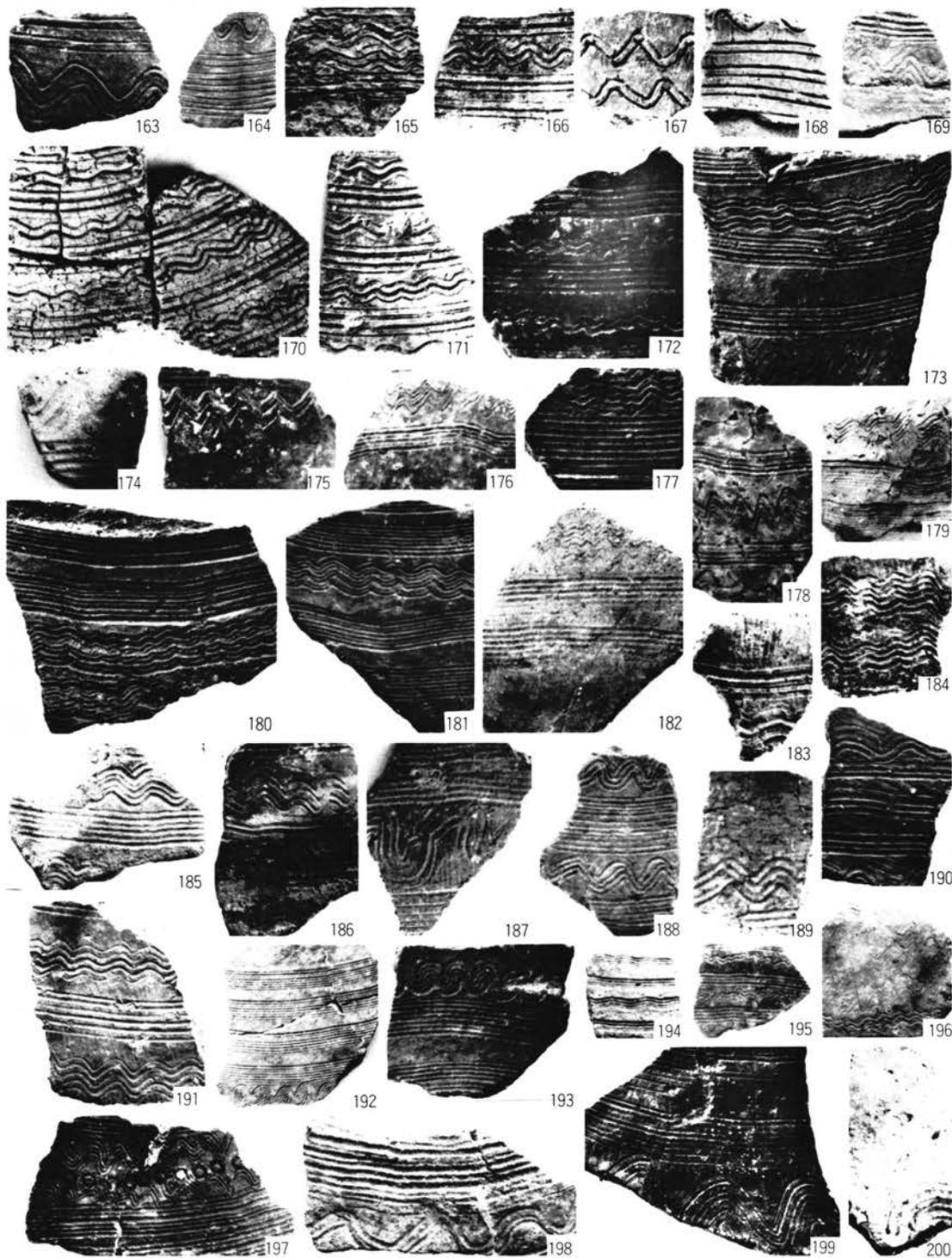
弥生土器(前期)・突帯文様(各種)



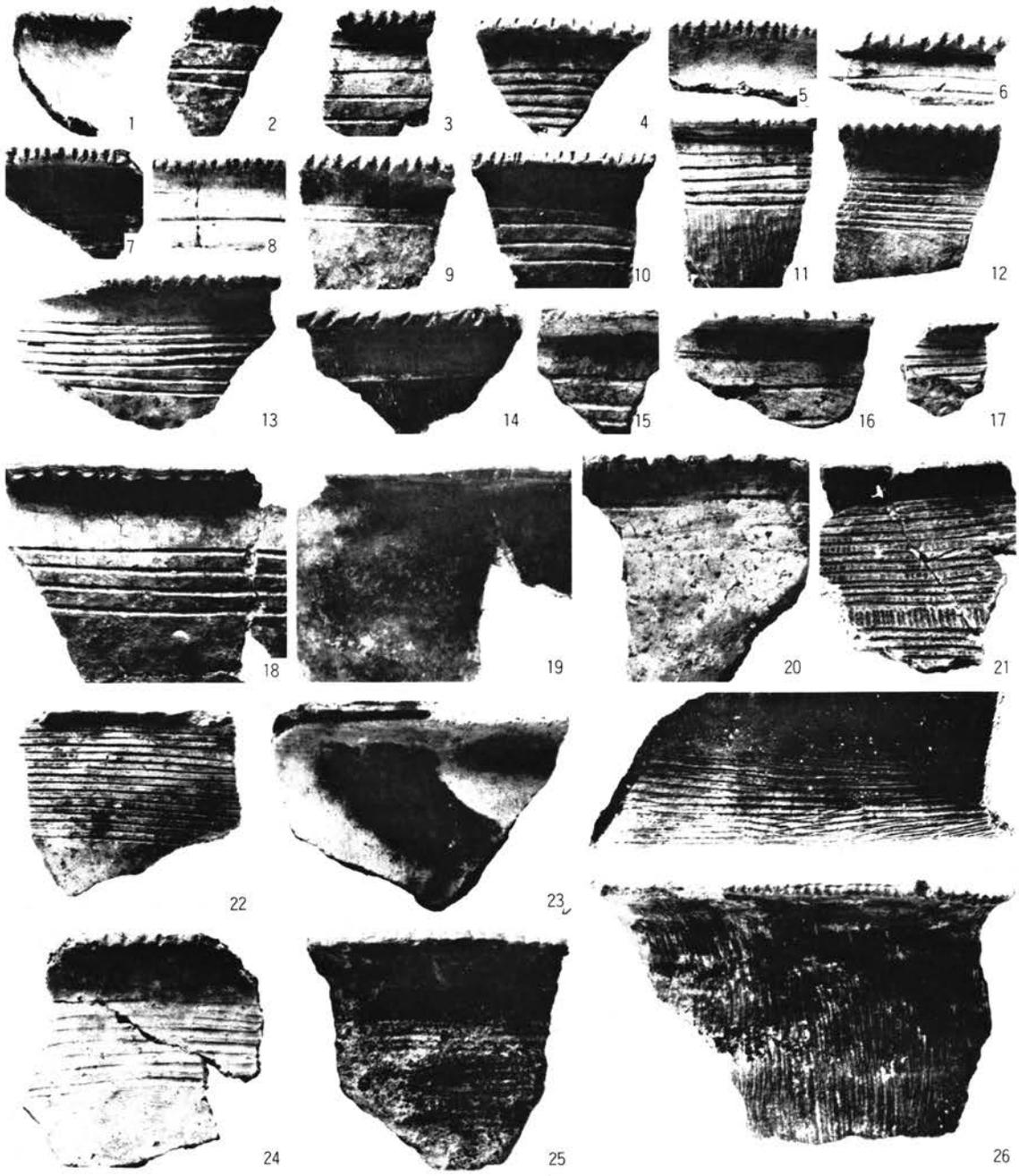
弥生土器・頸部文様（各種）



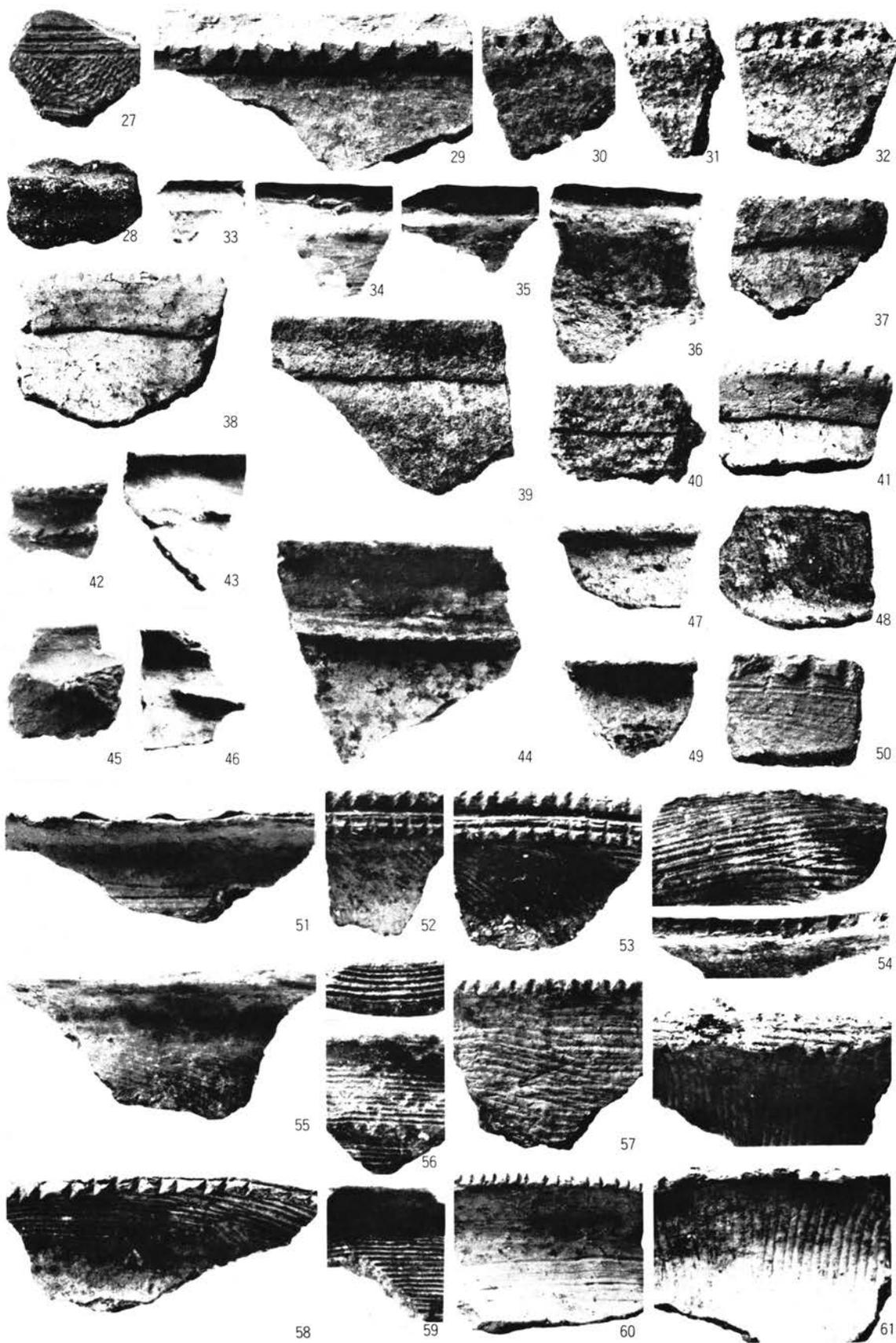
弥生土器(前期末~中期初頭)・流水文様(各種)



弥生土器(前期末~中期初頭)・櫛描文(各種)



弥生土器 (甕形土器)





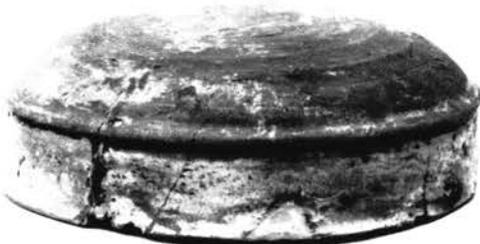
1



2



4



3



5



6



7



8

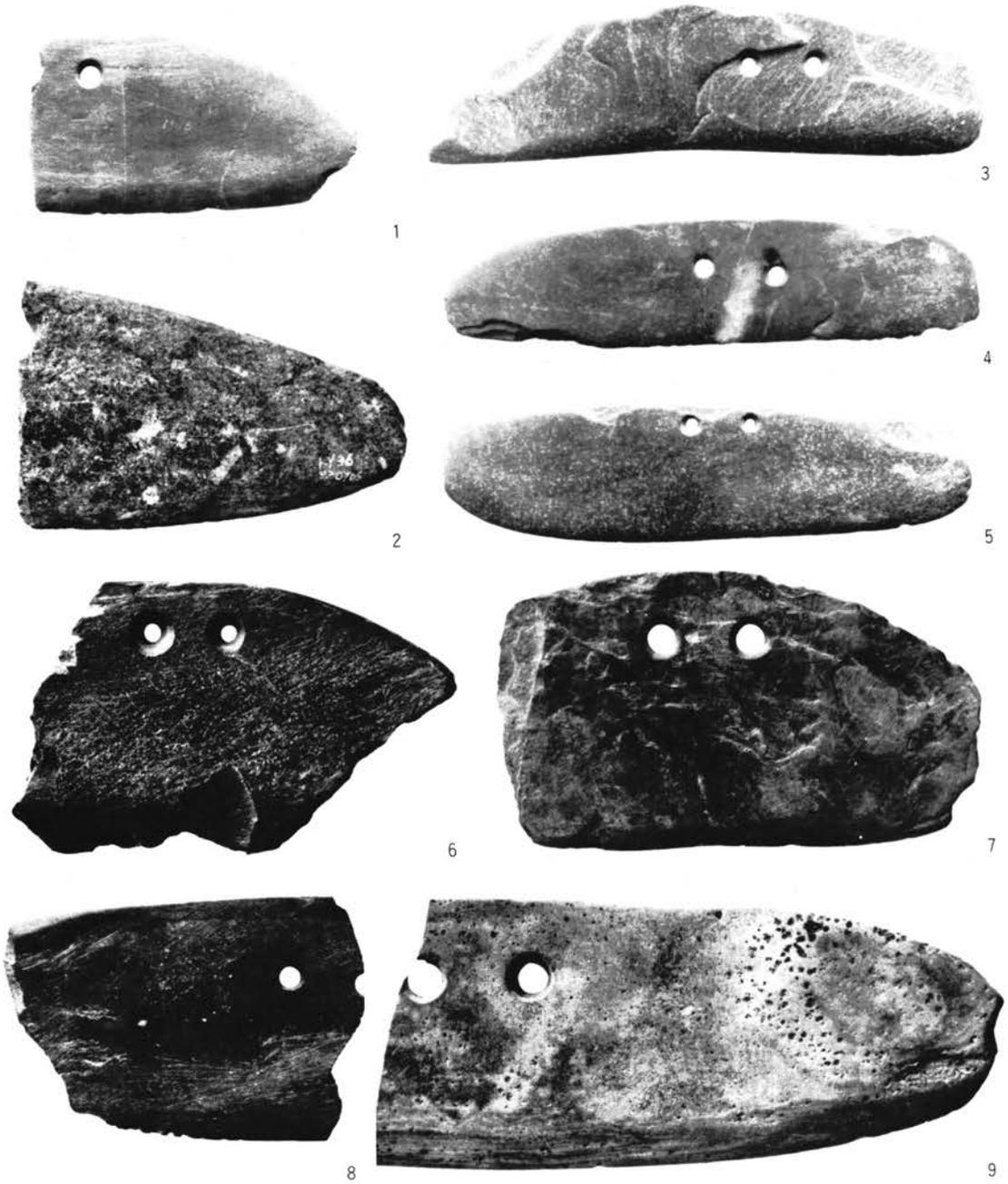


9



10

須恵器（杯身・杯蓋）



石器（石庖丁）

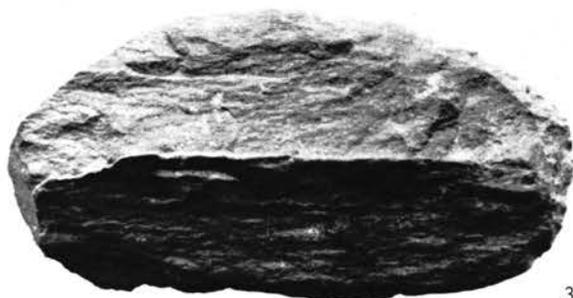
- 1 : 第89图 6    2 : 第89图 3    3 : 第89图11    4 : 第89图 9  
5 : 第89图10    6 : 第89图22    7 : 第90图26    8 : 第89图 2  
9 : 第89图 8



1



2



3



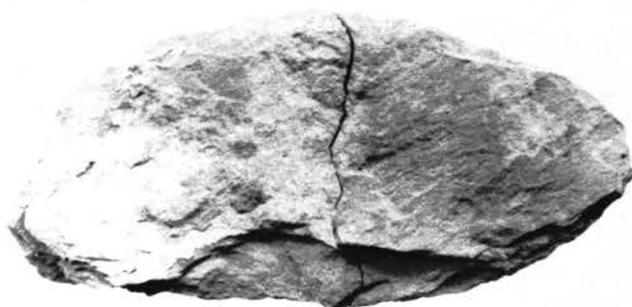
4



5



6



7



8

石器（石庖丁未製品）

- 1 : 第92図51    2 : 第92図57    3 : 第93図61    4 : 第92図48  
5 : 第93図62    6 : 第92図53    7 : 第92図58    8 : 第92図54



1

2



3

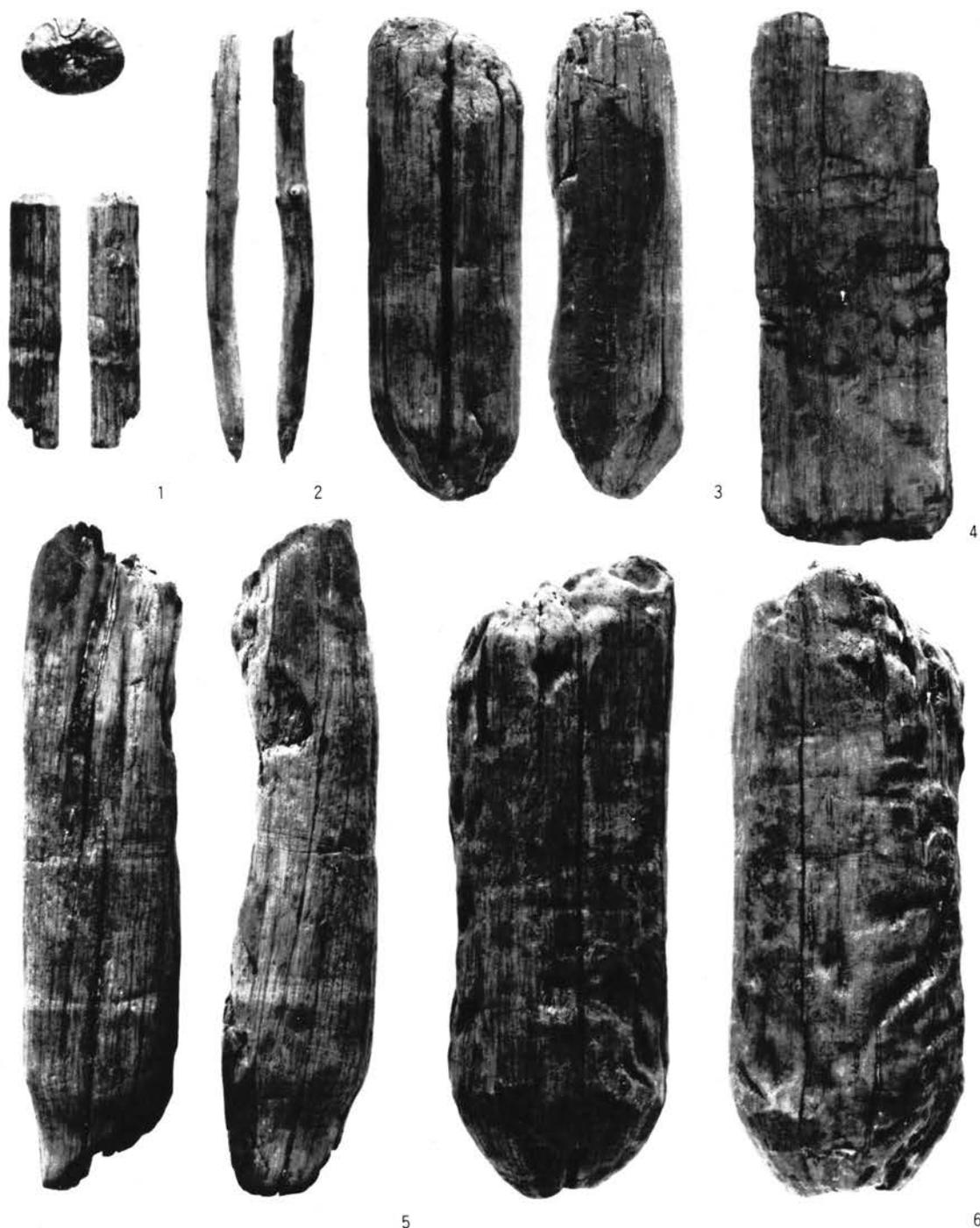
木器（鋏）

1：第107図6 2：第106図1 3：第106図3



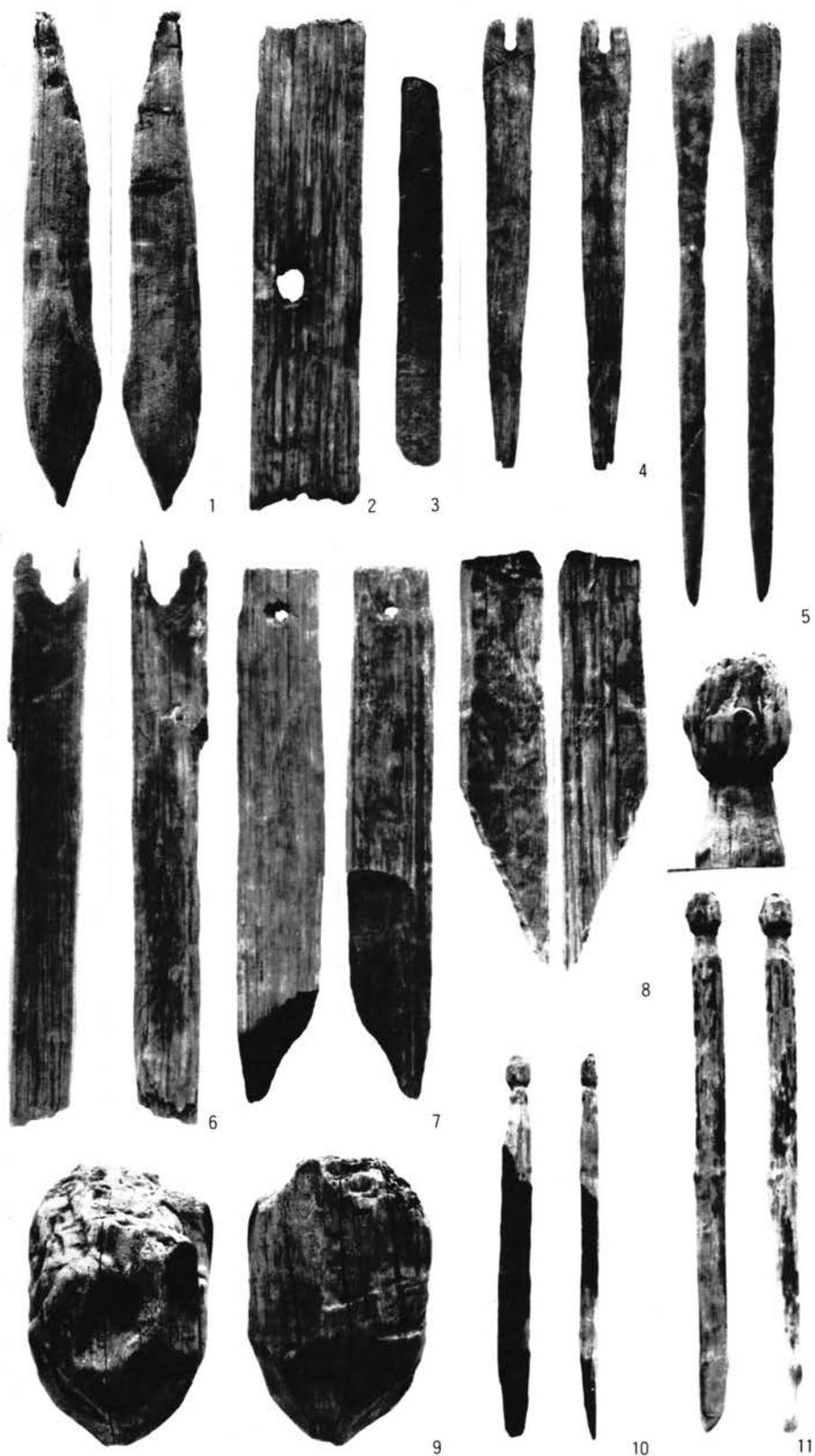
木器（椀・直柄・用途不明木製品）

- 1 : 第107図4    3 : 第109図21    4 : 第109図22    5 : 第107図5  
6 : 第109図23    7 : 第107図7    8 : 第107図8    9 : 第107図9



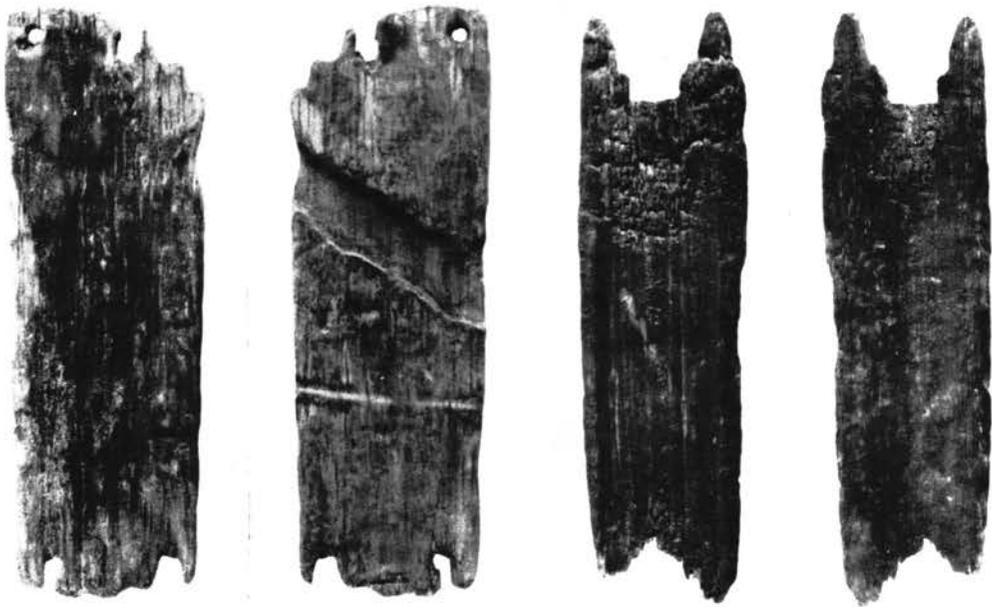
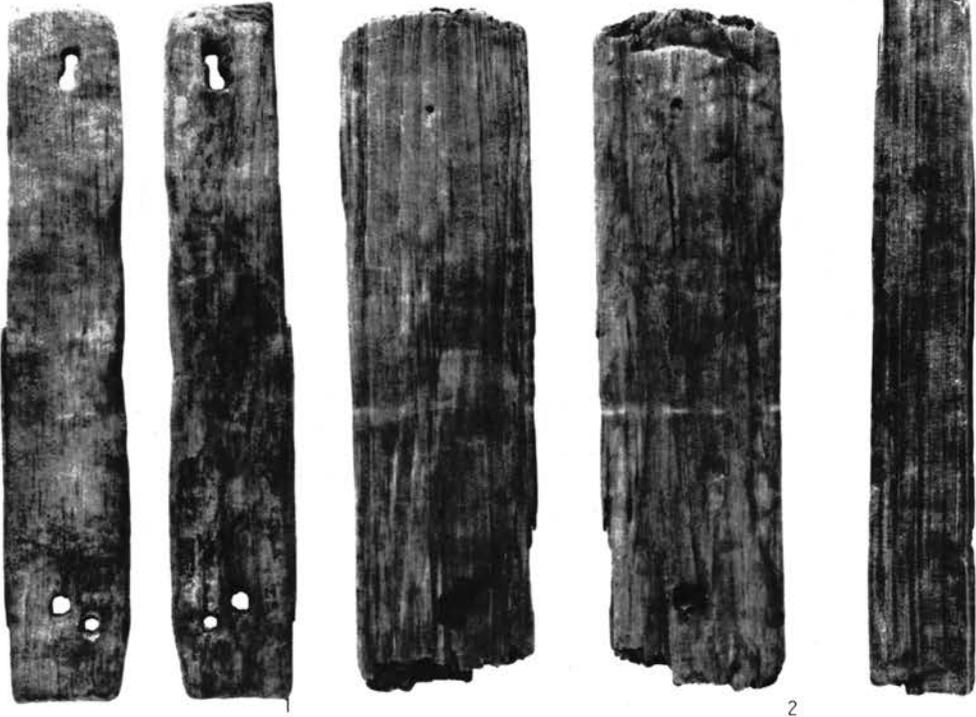
木器（杵・棒状木製品）

- 1 : 第109図15    2 : 第109図14    3 : 第108図11    4 : 第106図2  
5 : 第108図12    6 : 第108図13



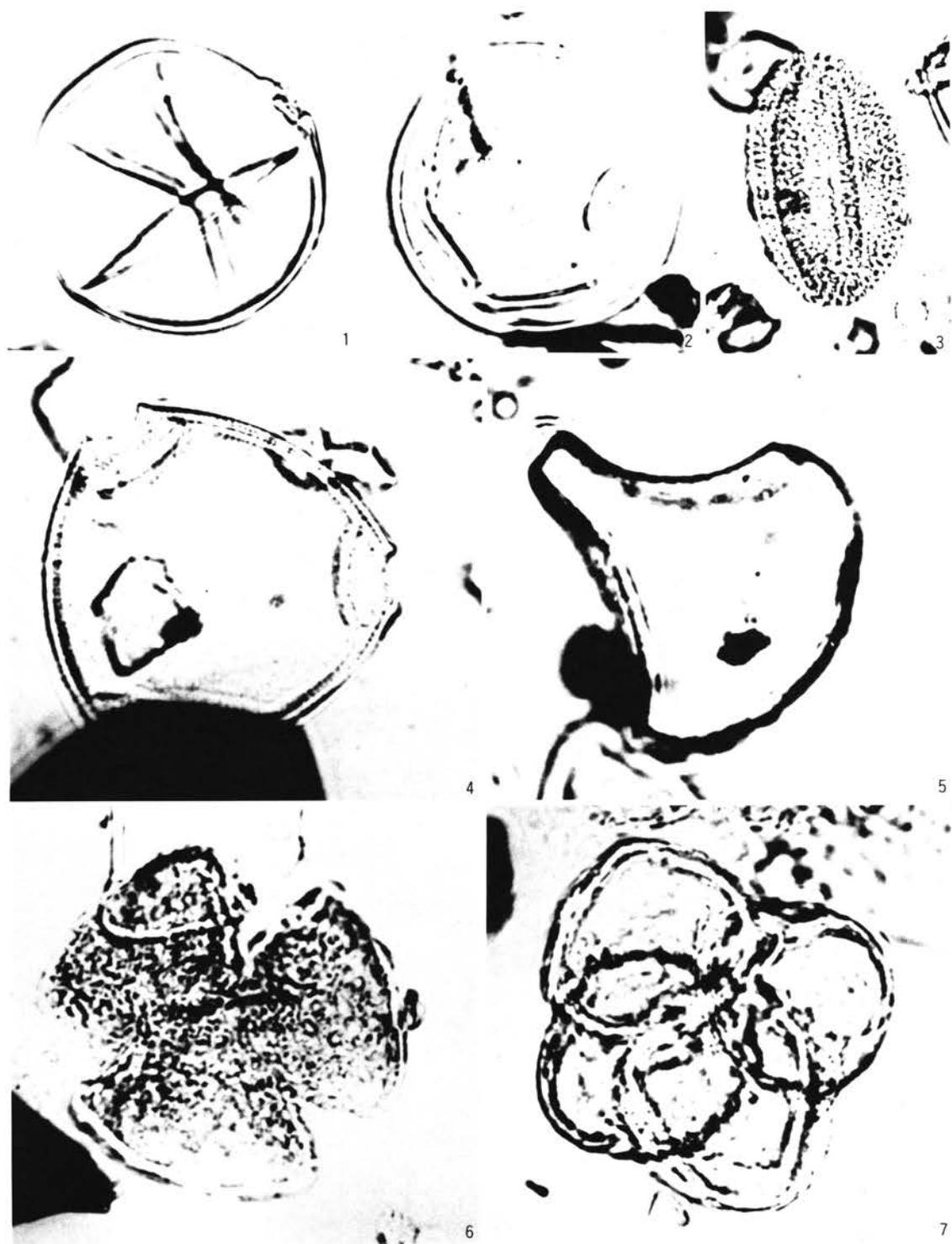
木器 (杭・棒状木製品・板状木製品・有頭棒)

- 1 : 第109図19    2 : 第112図44    3 : 第112図42    4 : 第110図34    5 : 第110図33  
 6 : 第114図51    7 : 第114図52    8 : 第112図40    9 : 第109図16    10 : 第110図30  
 11 : 第110図31



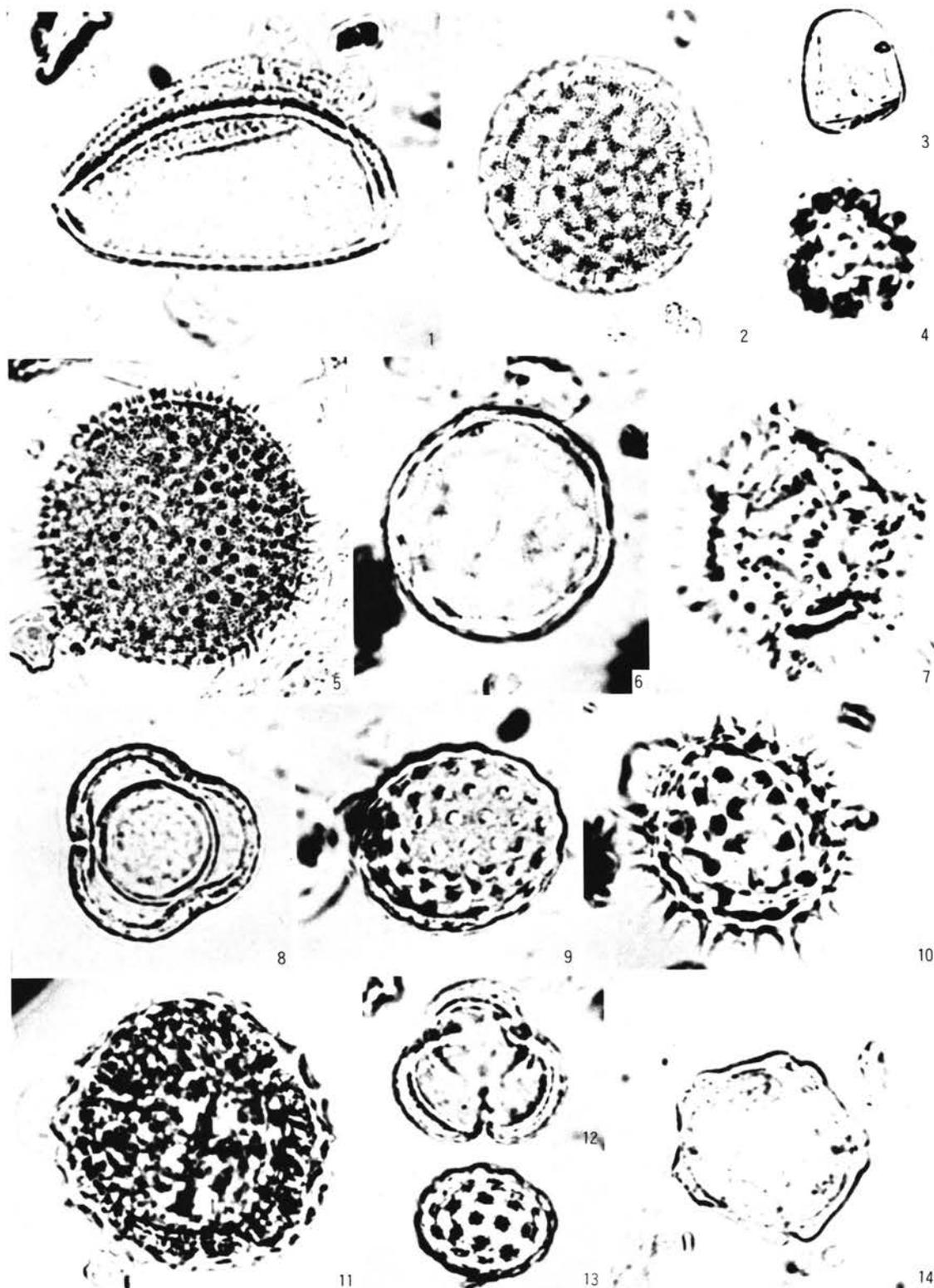
木器（板状木製品）

1：第113図49 2：第113図50 3：第112図43 4：第113図48 5：第111図38



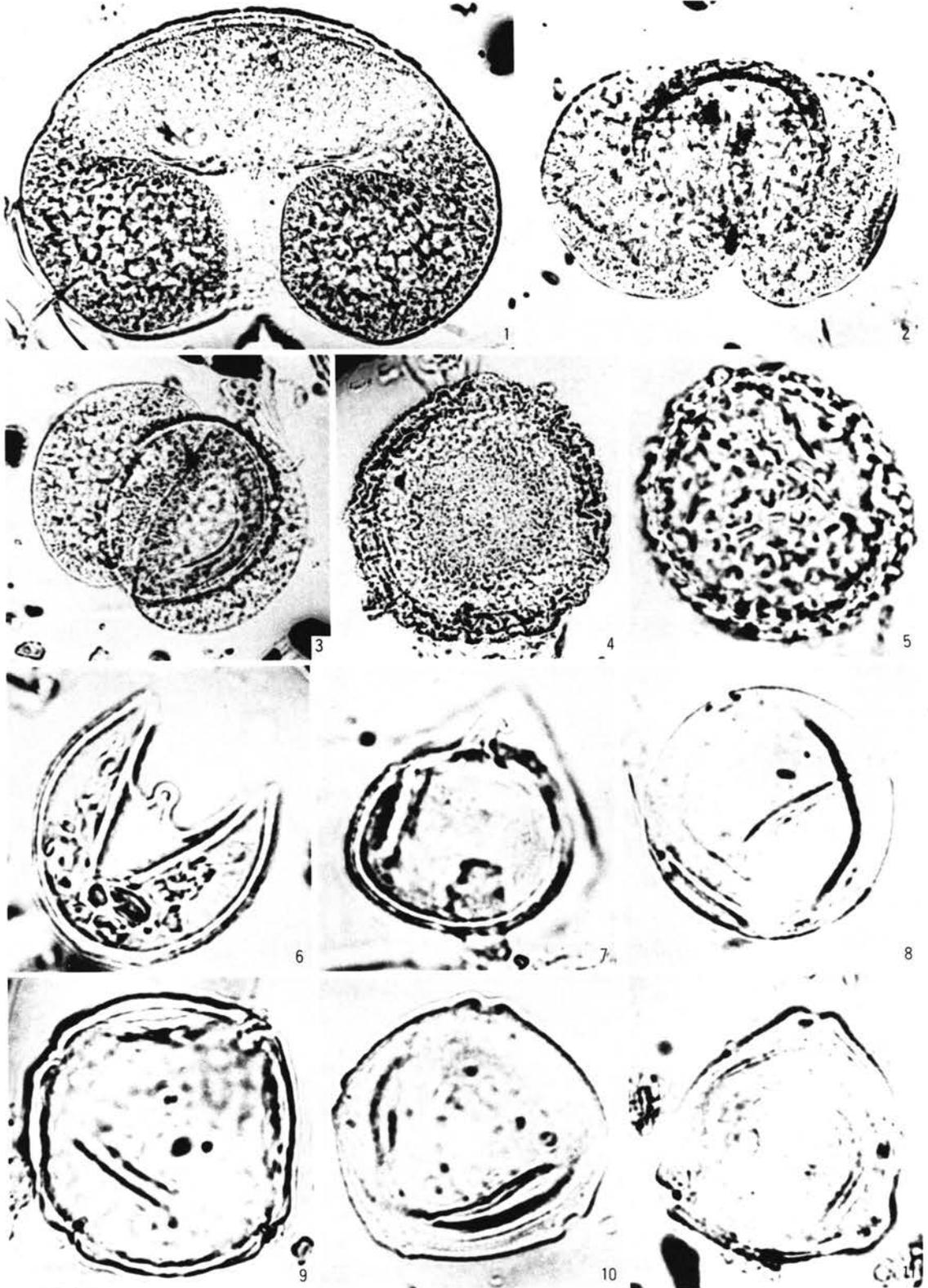
花粉の顕微鏡写真(1) (×1000, 3のみ×500)

1・2. *Oryza Sativa*(イネ), 3. *Fagopyrum*(ソバ), 4. *Cucurbitaceae*(ウリ科), 5. *Oryza Sativa*(イネのフロント・オパール), 6. *Patrinia*(オミナエシ属), 7. *Typha*(ガマ属), 2のイネ花粉には, 花粉孔が2か所ある。



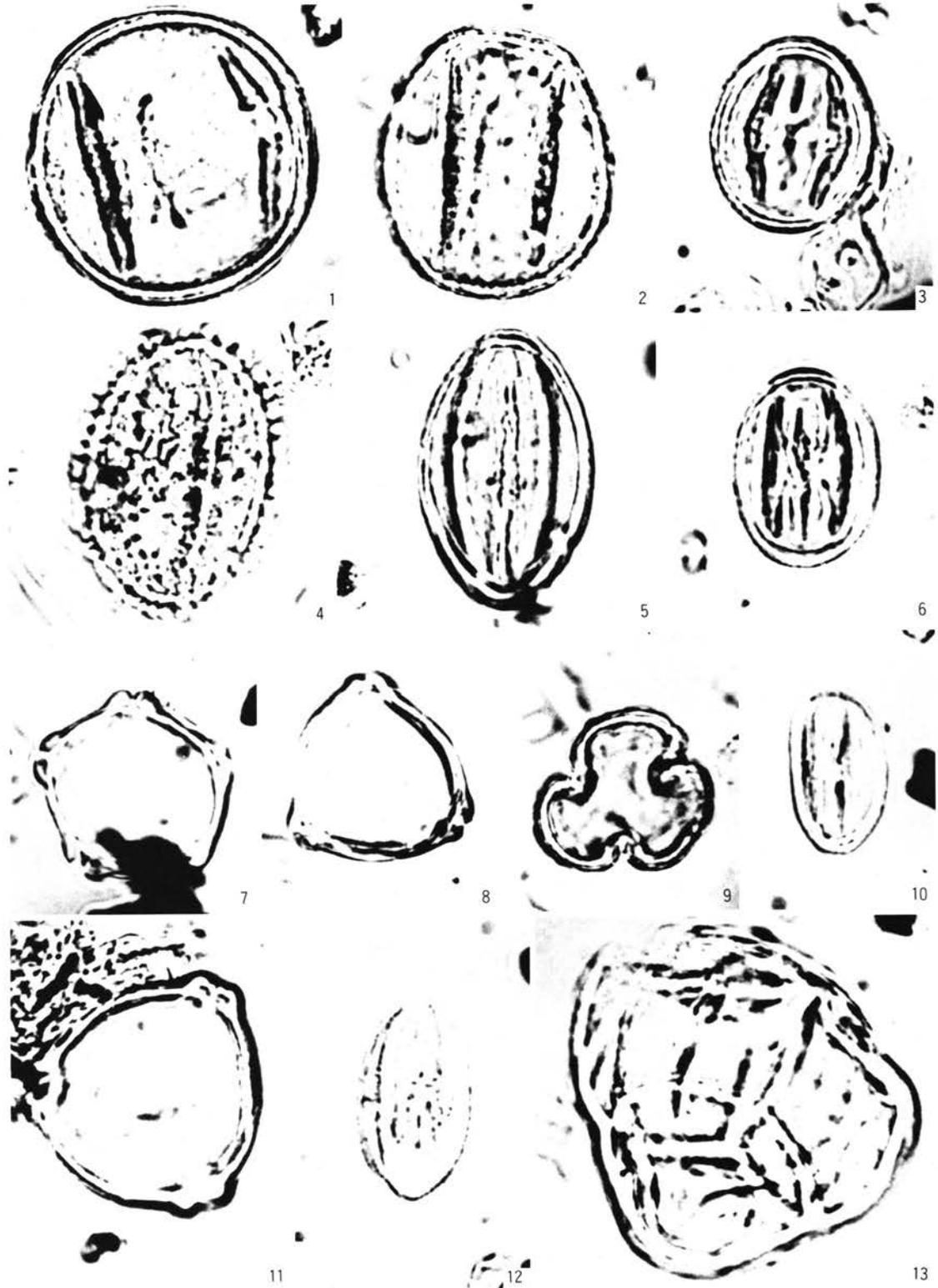
花粉の顕微鏡写真(2) (×1000, 2・3・5のみ×500)

1. Eriocaulon(ホシクサ属), 2. Persicaria(タデ属), 3. Cyperaceae(カヤツリグサ科),
4. Petasites(フキ属), 5. Malvaceae(アオイ科), 6. Caryophyllaceae(ナデシコ科),
7. Cichorioideae(タンポポ科), 8. Xanthium(オナモミ属), 9・13. Chenopodiaceae(アカサ科),
10. Carduoideae(キク亜科), 11. Pertya(コウヤボウキ属), 12. Artemisia(ヨモギ属),
14. Haloragis(アリノトウグサ属)



花粉の顕微鏡写真(3) (×1000, 1・2・4のみ×500)

1. *Abies* (モミ属), 2. *Picea* (トウヒ属), 3. *Pinus Diploxylon* (二葉マツ亜属), 4. *Tsuga* (ツガ属),  
 5. *Sciadopitys* (コウヤマキ属), 6・7. *Cryptomeria* (スギ属), 8. *Aphananthe* (ムクノキ属),  
 9. *Zelkova* (ケヤキ属), 10. *Carpinus* (クマシデ属), 11. *Corylus* (ハシバミ属)



花粉の顕微鏡写真(4) (×1000)

- 1. Fagus(ブナ属), 2. Lepidobalanus(コナラ亜属), 3・6. Cyclobalanopsis(アカガシ亜属),
- 4. Phellendendron(キハタ属), 5. Acer(カエデ属), 7. Alnus(ハンノキ属), 8. Myrica(ヤマモモ属),
- 9. Cyclobalanopsis(アカガシ亜属), 10. Castanea(クリ属), 11. Betula(シラカンバ属),
- 12. Aesculus(トチノキ属), 13. Ericaceae(ツツジ科)

## 京都府遺跡調査報告書 第6冊

昭和61年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 ヨシダ印刷株式会社

〒921 金沢市御影町19-1  
Tel (0762)41-2141 (代)

京滋営業所

〒607 京都市左京区東大路仁王門下大善ビル  
Tel (075)-752-9604